



小品集 (3)



悠空冥海

＊郭＊

「あら、もうお帰りなの？」

まだ夜も明けないうちから新藤が床を出ようとするので女が起きだした。新藤にとってこの女は、若い恋人たちが次の逢瀬への期待のために自然と口を閉ざすような甘酸っぱいものとは違って金で轡をかけただけの女だったから、もう少しあったまらましようよという艶っぽい声も無視して着物を着てしまった。そのくせ小心者である彼が変な誤解でも与えてしまったかと振り返れば、女の方は案外気にも留めないようで、すっかり折れ目のついてしまった黒髪を梳いている。そういう類のものに詳しくない新藤にも、女の使っている櫛が高価であるのは見て取れた。真紅が蠟燭の炎に揺られて深い。じいっと見つめていると、新藤にはその紅が蠟燭のものであるか櫛本来のものであるか判断つかなくなってきた。

「君、その櫛はどこで？」

「嫌だ、もらいものですよ」

土産の一つ買っていかうかという思惑はすぐさま壊れた。こういう商売の女だから、そういうものも多いのだろう。訊いても無駄であろうとは思っていたのだ。詳しい経緯は知らないが、郭の女の身の上話というものには変に真面目なところがあって、たいがい男のこさえた借金のかたに客をとるような事情だから、こういう高価なものを自分で買うほどの余裕はないだろうと新藤にも分かっていたのである。

「外も仄かに明るいな。今何時だい？」

「まだ四時前ですよ。雪が夜でも青白いんです」

冬の山間の午前四時では夜中という方がしっくりくる。

「ところで、君」

ところでも何も、さっきからてんではばらばらのことしか言っていないと自分自身わかっていたが、新藤はなぜか素直に聞くのが躊躇われて、意味のない切り返しをしてしまったのである。

「何ですか」

女は髪を纏めているまま新藤の方へ背を向けたまま答えた。女と新藤の間にぼうっと浮かんでいる蠟燭が、闇に飲まれる寸前では虹の彩りを描いている。はっきり照らされているのは蠟燭自身だけで、新藤と女の影がそれぞれ襖と障子の頭まで冒していた。まとめようとする女の髪からほろりと一筋落ちた鬢が、女の真白いであろう項を飾り立てた。事の最中にまったく見ようとしなかった女の顔は光の加減か幾分年増に見えたが、薄闇の中の項はどうして少女のように色めいた。俺はこの女を抱いたのだ。新藤は急に自分がいかにも愚かであるように思われた。

「雪はいつになったら止むんだい？」

新藤は声が上がらないのに注意しながら訊いた。

「あんた、北の出じゃないのね」

「東京だよ」

まあ、東京。女は見たこともないであろう文明開化の中心がまるで須弥山の向こうにあるものの

如く驚いてみせた。そのくせ畏敬の念は見え、恐怖とも違う憎悪めいたものが消えた言葉の響きの後にこびりついているようである。何か嫌な記憶の葉でも雪氷の下で腐らせているのかと思えば東京からの人は初めてだという。確かに方々を山に囲まれたこの町では、東京や堺などの文明花咲く匂いも強い都道は無縁の行き路であろう。

「このへんはね、四月になっても雪が根を張ったままなのよ」

「根雪が続くのかい？」

根雪どころか、毎日降るもんだから解ける暇ないのよ。女は髪を結び終えたらしく、消えかかっていた蠟燭を取り換えた。一時の闇の中で微かに音を立て、すぐさま新たな蠟燭がぼうっと強く光りだす。女の項がその僅か強い光を浴びる。消えかけの吐息のような蠟燭の灰かでは見えなかった思いのほか年の刻まれた首筋が目に入って、新藤はそっと視線を逸らした。

「冬が長くなって大変だわ」

新藤の方へ振り返ると、女が零した。良く見れば白く塗りたくった頬はそれでもやつれているのが見てとれて、女の苦労は口元や目元にはっきり刻まれていた。額には幾重かの皺が寄り、しかし新藤は不思議とそれに見とれていた。蠟燭の明かりと化粧に陰って女の年頃は推し量れない。抱いた感触は確かにそれほど年取っている感覚を覚えさせなかった。女は若いのだろうか、年増なのだろうか。それにしても見れば見るほどよく似ている。薄闇では尚のこと、柔い光を浴びてさえ、疲れた鬢を覗いてさえも似て見える。雅な声の癖までよく似ていたことを新藤は今さらながら思い出して強く意識した。彼はこの寒い中手汗をかいているのを感じた。握り拳がじとって不快だ。

「東京じゃそんなこともないんでしょうけど」

女が向こうへ向き直った。途中だった髪梳きを再び始める。女が髪に櫛を通す度に新藤は妙な焦燥に駆られた。いや違う、と誰にでもなく抗弁する。何を焦っているのか彼自身にも判別付かなかった。その原因たる女は背中を向けたままである。

「そんなことはない。この間も雪が積もって車が止まった」

「自動車ですか。あんなもの、見たいとも思いませんわ」

女の声にはどこか嫉妬じみた醜悪さがあつたので、新藤は話題を変えた。

「そうそう五年前辺り、きよという名の女が来なかったかい？」

こちらが遠藤の本懐であった。女が肩越しに目線をやった。そうと分かっているながら新藤は眼をやらなかった。

「あんた、そのきよって人を探しに来たのかい？」

そうだ、と新藤はひどく抑揚のない声で答えた。

「女一人を追ってこんな田舎まで来るなんてねえ」

「洋装をした女だよ」

歳の頃は、と女が訊いた。新藤はいくらか考えた。正確な年齢を彼は知らなかったのである。

「二十歳を超えて、たぶん二十四くらいじゃないかな」

「洋装をした行き遅れの女なんていくらだっていますよ、ここいらが田舎だってね。どっかから逃げて来る人もある」

若い頃ってのは何でもかんでも西洋かぶれになるから嫌だわ、と女が零した。新藤にはいよいよこの女の年のころが推し量れなく、そのくせいよいよきよに似ているように思われてきた。おそらくは光のせいなのだ、蝋燭が幻の背を女に重ねたのだと思いなす。耳朶の辺りや背中肉付きがいくらきよに似ているからといって、こんな女を買わなかったってよかったのだ、と新藤は今になって後悔する。最後に当てつけのつもりだったのだ、何を俺は期待して、と煩悶する。

「あんた、新藤さんって言ったっけ？」

女がまたこちらを向き直った。ああ、と新藤は生返事を返した。頭の中で新藤は、きよと目の前の女の共通点を探していた。それは懺悔めいた気分からだった。俺はお前以外の女を抱いた、しかし女が抱きたかったわけではない、本当はお前を抱きたかったのだとさえ考えた。それが無効であることは分かっていた。いくら似ているからといって、この女がきよであるわけではないのである。もしも本当にきよならば、部屋に入ってきた俺を見て平然と床をすすめることはしないだろう。確かに暗くてよく分別もつかなかったが、女の言葉にも態度にも、声色にさえも驚きすら浮かべていなかったのだから。

「こんな時間にここを出ていったいどこへいくつもりだい？」

空いているとこなんてこの郭くらいだよ、と女が付け足した。新藤は暫し逡巡した。女にわけを言うのははばかられた。しかし新藤は不思議とこの女にだけ、自分の目的を話してしまいたい衝動に駆られた。

「山かい。きよって女がそんなことでも言ったのかい？」

はっと新藤は眼を見開いた。女の言は凶星だった。まさかと新藤は逡巡する。まさかこの女がきよのわけはない。何せ声だってこんな風ではなかったはずだ。いや確かによく似ている、きよの話し方の癖はここの出だったからだろうと窺わせる。しかしと彼は反駁する。何しろそうだ、きよならば俺を見て黙って体を売るなんてことはしないはずだとさっき考えたばかりじゃないか。嫌な汗が新藤の首筋を伝った。しかし似ている。そう思うと女の形は更にきよに瓜二つであるかのように思われて来た。鼻の筋や目の切れ具合までがきよの面影と重なった。

「きよって女はなんであんたのどこを離れたんだい？」

新藤は女の目を血走った眼で射抜くように見つめた。新藤の心情は今や恨みめいていた。こんなにきよに似た女が存在することが彼には恨めしかった。彼は自分の心が女にもてあそばれているような気さえしてきた。そうだ、弄ばれているのだ。新藤は冷静になろうと努めた。この女は本当はきよとは似ても似つかぬのだ。ただ俺は疲れて妙な夢でも見ているのだ。そうでなければ錯覚だ。確かに線はきよのそれだ。腰の肉付きも鬢の具合も着物から推し量った背中骨組みもきよに似てはいる。しかしそんなことを言ったら全ての女にきよと似ている部分があることになるじゃないか。きよの骨組み、肉付きのどこかしら似ている女などこの世に幾らでもいることだろう。それがたまたま多かっただけのことだと思いつめる。

「君には関係ないことだ」

新藤は自分の声が思った以上に冷たいのに少し驚いた。むきになっているのは自覚していた。しかし新藤には自分の昂ぶりがどうにも出来なくなっていた。この女はきよとは関係ない、似ている女など幾らでもいる。この世には自分とよく似た人間が三人はいるというじゃないか。そう新

藤が己によく言い聞かせようとしても駄目であった。結果として新藤はその薄い眼をさらに皿のように薄くして、目つき悪く女を見るだけであった。

「でもね、東京からこんな山奥まで逃げてくるくらいなんだから、よほどの覚悟があったんだろうね。そうでなきゃできませんよ。逃げてきたってこう身を落としちゃね」

その言に新藤は目を見開きふっと頭を上げた。女の物言いには隠しようのない悲しみがにじみ出ていた。きよのことを抜きにして、初めて新藤はこの女自身に興味がわいてきた。

「君もそうなのかい？」

気付くと新藤はそんな質問を女にしていた。新藤は正座のままだった膝に両手を拳にして置いた。真面目な話を訊くときの新藤の癖である。今は亡き父と母に教え込まれた礼儀であった。

「何故そう思いなされるの？」

暫し黙った後で女はそう訊いた。詰問するような口調であった。いやなに、と口ごもって新藤は女から目をそらした。ぽた、と蠟が落ちる音が聞こえる。続けて女がふっと頬を崩すのが聞こえた気がした。次の女の声は異様に艶めいていた。

「私だってね、今は都会の言葉遣いも忘れてすっかり田舎の娼婦に成り下がっちゃったけど、何があったって誇りも矜持も失くしたことはないですよ。悲しいことがあってもね、辛いことがあってもね、ここで生きていくと決めたからにや」

「どこか都会にいたのかい？」

恐る恐る新藤は口にした。女の境遇に新藤は無性に興味湧いていた。それを彼自身不思議に思いながらも、つつい訊いてしまったのである。

「何年か前まで、ね」

しかし女はあっさりとした。蠟がまたぽっと垂れて、新藤ははっと驚かされた。嫌な汗が手を湿らせ、その上背中まで垂れてきた。蠟燭の燃える、今にも死にそうな羽虫のような音だけが狭い部屋の中へ微かに響く。女は大して気にする風もなく仄かに笑んでいる。新藤は急に女が恐ろしくなってきた。女の笑みが無暗に暗さを含まないのが怖くなったのである。例え言が同じだとしても、新藤が予想していたのはせいぜい恨みの籠った声であった。何か人には言えない事情を抱えて田舎の山奥で買われになるような女はそういうものだと思っていたのだ。

「何があったのか、訊いてもいいかい」

ふらっと女の瞳が揺らいだ。焦点が幾分が彷徨って、ようやく新藤のもとに落ち着いた。口が開くにはまだ幾分か要した。

「そんな大層なお話はありゃしませんよ。せいぜいよくある女の破滅、板挟みの苦痛から逃げるうちに帰るつもりも無かった郷里に辿りついてしまっただけのことですよ」

「恋慕情かい？」

「そんなものでさ。二人の男の方にね、それがもうどうしようもなくなったから」

「板挟みかい。それは辛かったろうね」

つまらない話でした、と女は眼を逸らした。新藤は膝に拳を置いた姿勢のまま固まって、いや無理に聞いてすまなかったと謝った。実のところ新藤は安堵していた。この女はきよではない。きよは二人の男の間で板挟みになどなっていなかった。やはり他人の空似なのだ。最早背中も寒

くなく、新藤は拳を膝に擦りつけて汗を拭った。そうかそうか、と意味もなく口へ出た。

それから新藤は饒舌になって色々と喋くった。その殆どはきよの話であった。女は時たま相槌を打って先を促すほかは物音も立てず聞き耳だけを立てていた。

きよとの事々を全て話し終わってしまうと、女は神妙な顔をした。おそらくは何かしら、俺の気付かぬ所で感じるものがあったのだろうと新藤は推察した。なるべく個人的な観念の類を避けて、冷静に客観的に話してみようとはしたのだが、やはりそうとはいかないものだ。想いの深さは感情の大きさとは比例しない。しはしないがやはり影と隠れているわけにもいきやしないのだ。新藤は時として語っている自分がいかに熱くなっているかを冷淡に観察した。最初はぽつぽつとした語り口が、知らぬ間にまくしたてるように、或いは泣きべそでもかいているかのようにになってしまうのを新藤はどこか動かぬ沈痛な面持ちで見つめる自分を感じていた。語り終わってから新藤は妙にいたたまれなくなってしまう。女と女に泣きつくようにして話してしまった自分を冷ややかに見ていた自分が自分を無言のうちに糾弾しているように思われたのである。

「きよってひとは、」

それはどこかしら女の発した声に緊張となって表れているような気が新藤にはした。

「なんであんたんとこ離れてったか、あんたわかるかい？」

質問は詰問めいていた。新藤は首を横にふり、すがるような思いで女をまじまじと見た。

「君には分かるのかい」

似たような境遇さね、と女は切り捨てた。それ以上の答えを教えるつもりがないと分かって、新藤は落胆した。不甲斐ない、見知らぬ女に恋慕の過ちを包みかすさず話し明かして、その上助言まで求めようとするとは。

それにね、新藤さん。女は新藤をじっと、今までよりも深く深く見つめなおした。蠟燭の仄赤い暗闇で、女の真黒い瞳はそれより深く光った。

「あんたがもしそのきよって人を見つけられたとしても、きよってひとが、私はきよです、なんて言うと思うのかい？」

新藤は微動だに出来なかった。それは考えていたことではなかった。いや、考え自体は浮かんできたのだ。しかし新藤は極力それを頭のうちから追い払い、その事だけに熱中するあまりに、それだからこそ逆説的に、こうして無我夢中で何の計画も算段もなしに千里と離れた山奥へやってきたのだ。

「私だったらね、そんなこと絶対に言わない。廊に客として恋しい男が来たとしたって。最後まで他人のふりをしてやるよ。それが覚悟だからさ。こんな風に身を落としたところに、来てほしいとも思わないね。だからきよってひとは、そんなつもりもないのに山で死ぬなんて言ったんじゃないかい？」

女は冷たく新藤の甘い期待を突き放した。

「だって、どうしろって言うんだい？ 追ってきて迫られても、一度落とした身をどうにもしようがないだろう？」

しかしそこで女はふっと笑みを零した。新藤は釘付けになった。

「でもそれでも、も一度会えたら心中だって出来ようさね」

新藤は今になって女にはっとする程の美しさを見た。それはきよの持っていなかった強さだった。魂の強靱さとも言うべき輝きだった。女は瞳に静かな覚悟を湛えていた。今まで新藤は、女が瞳に湛えられるものなど涙しかないと思っていた。いつのことかきよが啜るように涙したとき、新藤は何が悲しいのかわからなかった。しかし今や彼は感じた。彼は初めて理解した。その一滴は月の海、零れる真珠の色に似て、弱きに嘆くためではなく、強くあらんとすることを。一つ筋引く光彩を湛えたままに背けずに、女は静かに新藤を見ていた。新藤は慄き震えた。

それから新藤は、自分でも理解できない衝動がふつふつとわきあがってくるのを感じた。新藤をこそ打ちのめしたのは最後に見たきよの眼であった。何一つ欠くことなく覚えていたつもりであったのに、今や記憶は新藤に、鮮烈にその時のきよの瞳を現前させた。そうだ、あの時俺は気付かなかった。きよの眼がどのようなようであったかを、慮ることなぞ出来なかったのだ。

新藤は覚悟した。己の愚かさを責めるは無意味に等しい。悔いるよりもすべきことが、彼にはもう分かっていた。

「きよってひとは、五年も前に雪山で死んだよ」

部屋を出かかった新藤の背中へ向かって唐突に女が放った。

「そうか。教えてくれてありがとう」

言っておこうと思って新藤は、廊下へ一歩出てから振り返った。

「きよに似ているんだ、君は。会えて良かったよ」

女を見る新藤はもはや迷い無かった。すべきことは判然としていた。そうするためにここへ来たのだという覚悟を一層彼は深くした。疲労と落胆に染められていた彼の皺の影ももはや色味を失っていた。女が震えながらじっと見つめているのに新藤は気付いていた。それで尚、新藤は己を止めようと思わなかった。

「あんたもそこへ行くのかい？」

そう訊く女に、新藤は微笑で答えた。

雪山

積もった雪に一步一步足を沈めながら頂上を目指す新藤の心は昂揚してきた。稜線からは二週間ぶりのお天気だという朝日が迸ってくる。雪のおかげで乱反射してまぶしい。そのせいか新藤には遠くの方にある木々が氷できているように感じられた。まるで根を張った雪が太陽に解かされるのを待ち切れずに、天を目指して伸びたまま固まってしまっかたのようであった。金色が木の幹を透かして彼の元まで届いているような錯覚に襲われた。吐く息の白さとは裏腹に、顔は光に当てられて寒と感じない。足先だけがしびれたように冷たくて、そのまま凍ってしまうかと思うほどであったが、胸と目尻は熱いくらいで、熱病の床で夢を見ているのではないかと疑わせる。ふ、と頭に浮かんだのは、何故だか知らないがきよが最期に着ていた洋服に描かれていた青の文様が美しい名前も知らない蝶であった。あの蝶が氷の森を抜けていく様は何と幻想的なことだろう。見えない蝶を追いかけて遠藤の足は逸ったが、膝まで埋まるほどに降り積もった雪にとられて彼は倒れた。

そのまま彼はぼうっと空を見ていた。暁の茜さす、海よりも遥かに吸い込まれそうな澄んだ空を金色が後から透かしてゆく。彼の耳に木々を透かし氷に跳ねた光が何か天上の音楽のように聞

こえ始めた。きよ、お前はどこに行ったのだ。遠藤はもうきよのことしか考えられなくなっていた。俺に何にも告げもせず、あんな卑しい町へ出て、こんな淋しい山に埋もれて死ぬなんて。

しかしきよの姿を思い出そうとして新藤は愕然とした。あの女、郭で買ったあの女の姿しか思い出せなくなっていたのだ。きよと出会った時のはずの記憶で何故かあの女が笑っていた。最後にきよに会った時に何かを考え込んでいたような顔もあの女にすり替わっていた。あの強く美しい光を湛えた瞳もどちらのものか分からなかった。何が違うのか新藤には判別がつかなくなってきた。そのくせ感情はこの女はきよではないと恨みがましく告発する。輪郭は確かにきよであるのに、なぜ中身だけあの女に代わってしまったのだ。魄だけはきよのままこの世を彷徨い、あの女の魂でも入れたのか。浮世の泉は水仙の強い香の誘い、蓮は御仏の膝元にて、浮きつ沈みつする最中、一度は底まで落ち込んだ彼女の念がそうさせたとも言うのか。念は恨みか後悔か、心残すは喜びにやあらん、やはり俺の責かと囚われる。これは報いか、きよを追ってきよの生まれそして死んだ村まで辿りつき、そこで瓜二つの女が俺を待っていようとは。許せ、俺は何にも知らなかった、今でも知らぬ、だがお前を孤独なままで泣かせはしない。俺はお前のもとへ行くぞ。

誘われるようにして遠藤の瞼は落ちてゆく。だが彼の瞳にはいまだ光が焼き付いていた。離れない、闇がまだ彼を覆い尽くしてはくれない。ざく、と雪かき進む音する。それが天上の音楽のように乱舞する光と合わさって、何か自分を迎える聖者の足音のように感じられた。先程までの考えとは相変ってそれを不思議と死に神のものだとは考えなかった。足音はだんだん大きくなる。きよか、と新藤は幻に興じた。俺を迎えに来てくれたのか。とうとう新藤の傍まで足音の主が来る。顔をあげる元気は新藤に残っていなかった。もはや彼には寒ささえもが感じられていなかったのである。そこへ足音の主が抱きつくようにして倒れこんだ。背中に当たる柔らかな感触から自分に抱きついてきたのが女であることが知られた。誰であろうと新藤にはどうでもよかった。もはや彼は思いも揺らめき、魄まで揺らぎ、きよによく似た女も忘れ、ただただ彼女の後姿が暁の走馬灯と映っていただけだったのである。今や新藤には女の重さも心地よく、不思議とそれが暖かく、眠りの淵へ誘うようで、それに抱かれるままに新藤は思考を停止した。きよ、と一言彼は零した。今際に彼が訊いたのは、はい、という女の声だった。

男は何も知らぬまま、哀れに芯まで冷えてゆく。寒さは端から痺れ射す。哀しみは男の心に直に刺す。女の温もりを熱く感じるのも束の間、男は意識を失くしてゆく。だがその顔は安堵の色射し、女は冷たき頬合わせ、男の寒さを我がものと、分かち合おうと瞼を落とした。一息ついたため息が、睫毛の氷を僅か溶かした。溶けた氷は涙めき、女の頬から男へ落ちた。

樹氷を抜け蝶は行き、太陽を目指し光の束を突き進む。雪かき、命を火と燃やし、目指すは温かな木漏れ日か。

山狩りで男の死体が見つかったのはそれから三日後のことだった。そばには郭で働いていた女が、男に抱きつくようにして眠っていた。

終

貴方でなかったら（1）

ああ、貴方でなかったら、どんなに良かったことでしょう。出会うこともなしに惹かれるなんて、思ってもいませんでした。一目惚れにも程遠い、憧れと言われても仕方ありません。思い描く貴方の像は、輪郭だけの不確かな魄です。満月と夜空の境界のような美しさ。鏡の月は何も映さず、ああ何か貴方の後姿でも残してはくれませんか。月影清かな皐月の宵に貴方の影もありません。残り香の一つも辿って行けたら貴方の元へゆけるのでしょうか。これが貴方でなかったら、私はこのような胸の痛みなど覚えることもなかったでしょう。どうかお姿を。或いはお声だけでも。それを望むことはいけないのでしょうか。

貴方がいると知ったのは、ある四月の晴れた日でした。私はこの春高校へと進学しましたが、まだ友人と言う友人もおらず、一人の帰り道を歩んでいたのです。学校から駅までの道には桜もなく、あっても葉桜になってしまっていたでしょうが、何の風情も花も木も、公園さえもありませんでした。私はこの頃、この学校を選んだことを非常に後悔していました。いくら有名な女子高とはいえ、周りが灰色の住宅地に過ぎなければ、風にはなんの色もなく、趣一つありません。それに一番の問題は、この学校の図書室が粗悪なことなのです。隅の暗く湿ったその場所は、私の思い描いていた図書室とはかけ離れたものでした。それにそこにはちっとも小説がないのです。大学の案内や、難しそうな専門書ばかりが並んでいて、三島や鏡花、夏目や太宰すらその居場所を持っておりませんでした。詩など知った風もない、という有り様です。きっとお気に入りの場所になるだろうと期待に胸を膨らませた十五の乙女を簡単に裏切り、しんと静まり返ったそこは、心地よい静けさとはほど遠く、ただ寂しいだけなのです。

しかも尚、ああそれでも、傍にいる同級生たちが良い人たちであったならまだ私もどうにか過ごして行けたでしょう。しかし彼女たちの関心は私とまったく違っていました。彼女たちの幻想はテレビと雑誌の中にしか存在しないのです。どれも似たような顔をした男の人を、切り裂くような黄色い声で喚き散らし、ただただ格好良いのを消費するだけの浅ましい人たちと付き合ってゆくのは私には到底無理なことに思われました。休み時間は苦痛でした。持ってきた本を開いても、周りは五月蠅く煩わしく、さりとてほかに行き場もありません。机に伏して目を閉じてもそれらは消えてくれませんでした。現実にも空想にも、どうやら逃げ場はないようでした。

そういう風にして私は、この一ヶ月間というものの、誰とも話すこともなく、訊かれたことだけには答えるというだけで、孤独のままに過ごしていました。クラスの人たちはいつの間にか仲の良いグループに分かれていて、楽しそうにお喋りしています。しかしそれは私にはできません。手持無沙汰を慰むために、また落ち着くために髪を梳くのが癖になりました。和櫛は安物にすぎませんが、その少し冷たい感触は私の心を多少なり鎮めてくれたのです。

貴方の存在に気づいたのはそのころでした。初めて貴方に気づいたとき、私は柄にもなく喜色に笑み、私が苦手とする彼女たちと同じような黄色い声を上げてしまうころでした。それほど私は嬉しかったのです。私と貴方の感性がとてもよく似ていると知ったときには気絶する思いでした。今までに呼んできた本もほとんど同じで、危うく奇跡を信じてしまうほどでした。

一片の葉書が貴方を私に気付かせました。私のもとにある日あったその葉書は、裏面に季節は

ずれのコスモスを満開にし、表には細く綺麗な文字で私の名前が書いてありました。貴方の名前はどこを見てもありませんでしたが、私は歓喜したのです。表面の下半分には、貴方が作ったであろう詩が一篇書きつけてありました。何という繊細な感性の持ち主なのでしょう！ 貴方は男の人なのでしょう。それとも女の方なのでしょう。ああどちらでも良いのです。きっと私たちは何よりもまず一番のお友達になれることなのでしょう。もしも男の方ならば、私はきっと愛するよりも好きになり、寄り添い遂げる想いになるでしょう。しかし女の方であれ、ずっと一緒にいることは出来るのです。つまり私はもうこの時、貴方に夢中になっていたのです。お姿どころかお名前さえ、知らないままだというのに。

貴方へお返事を書きたいと思いましたが、しかしその方法が見つかりません。差出不明の絵葉書は、私の机の引き出しに大事に大事に仕舞われました。お名前だけでも知っていたら、何か私も貴方へ伝えたことなのでしょう。それから私の毎日は、貴方の空想で鮮やかに色づけされてゆきました。緑の一つ目に入らない通学路も、退屈に余らせていた休み時間も。貴方のことを思えばこそ、私は幸福だったのです。貴方の姿をいろいろと想像してみました。貴方の声を思い浮かべてみました。恥ずかしながら貴方のお顔を想い描き、しかし確かな陰影は無く、脆くも儂いものでした。想像は自由に羽ばたきます。しかし遠くへ飛べば飛ぶほど小さくなり、いつしか見失ってしまうものです。彼女たちの気持ちも少しは分かるような気がしてきました。たとえそれがテレビや雑誌の中だけに過ぎないとしても、やはり夢見がちなのは変わらないのです。その憧れが確かな姿を持っているか、そうでないかの違いに過ぎないのでしょうか。

しかしどうやら私のことを、彼女たちは不審の目で見ていたようでした。異質なものの交わりは容易ではありません。それが出来るのは男女の交わりだけなのです。私と貴方の交流はいつになったら叶うのでしょうか。彼女たちに何を言われても良いのです。それは些細なことでした。本当に美しいものを知らず、本当の清廉さも知らず、趣も侘しさも、寂しさや恋しさでさえ彼女たちは解さないのです。いいえ、彼女たちは確かにそれらの言葉を使っています。何のためらいもなく、考えることも感じることもなしに、ただ言葉だけを口に滑らせているのです。それは本当の恋しさでも何でもありません。私は最近の音楽も嫌いです。とみに、テレビによく出ている人たち、彼女たちが好きだという人たちの歌う歌を好きにはなれません。それらは同じ理由からなのです。確かに彼らの歌の歌詞には、寂しいとも恋しいとも書き連ねてあります。しかしそれでは駄目なのです。ただ言葉だけ、それは表現でも何でもありません。形骸化した、彼らの言う恋しさなど本当のそれではないのです。その不明な感情に、今まで感じたことのなかった感情かも知れませんがそれに、ただそこにあった恋しさという名前で呼んでいるだけで、本当にそうか考えることもなしに、ただそこで思考を止めて、言葉のうちに酔っているだけなのです。もう一度言います。それは表現でも何でもありません。それはただの音の羅列です。それで表わされることなど何もありません。本当の恋しさというものは、本当の感情というものは、それを直に言葉にすることなしに、文章であれば行間から、音楽であれば空白と休符から、つまりは全体から滲むようであればならないのです。恋しいと言って恋しさを理解させるのは表現者とは呼ばれません。その言葉が、ただの言葉に終わらずに、受け取る人の心に刺さってゆくためには、その言葉なぞを使わなくともその人がそれを感じるようであればなりません。彼らはそれを分かっ

ていないのです。

しかしああ、それを言うことの矛盾！ 私はそれを言うことで、どんな感情を表現したかったのでしょうか。私は自分の内にある貴方への想いを、恐らくは恋なのだと感じています。しかし自問します。それは本当に恋なのか。ただの憧れなのではないかという恐れはいつでも私を震えさせます。そうではないと信じる強い根拠を私はまだ見いだせずにはいます。ほら、私はいまこの感情を表現するために、恋だとか憧れだとか言う言葉を使ってしまいました。私もまだ表現者ではありません。一介の高校生であることはその言い訳にはなりません。ああ貴方、貴方への感情を恋と名付けることはいけないことなのではないでしょうか。私のこの感情は、どんなに揺れてどんなに煩悶したとしても、やはり恋なのだと思われるのです。貴方のお姿を思い浮かべます。私の心の臓はそこではっきりと脈動を教えます。大きく息を吸ってみても、締め付ける胸の荊は私を離してくれません。貴方でなかったら、もしも貴方でなかったら、私はこんな風な感情を覚えることなどなかったでしょう。眠れぬ夜なぞあったことでしょうか。貴方の影を追いかけて、それさえ見えないというのに、私の足は弱く震えます。どうかその影だけでも、貴方の声だけでも、その香りだけでも感じることはできないでしょうか。貴方がいるというだけでは、私はもはや我慢が出来ないのです。最初私は貴方の存在それだけに喜び、この心を宥めてやる必要がありました。それだけで十分だったのです。貴方がいる、確かにどこかに居る、そのどこかは知らなくとも、貴方がいるというだけで、私の毎日は光に満ちる気がしていたのです。それが今や何ということでしょう。私は自分の弱さを恨みます。貴方がいるというだけで、それだけでは満足してくれないこの弱さを。ああどうか、どうかお願いします。葉書一枚では足りません。どうか次を。貴方の存在を。確かに貴方がいることさえ、私の脆弱な心は疑ってしまいます。何か夢のようなことだったのではないかと怪しみます。ああでも夢であったなら、もしも夢であったとしたら、貴方に夢で逢えることもあるかもしれないのに。

あれからもう一ヶ月、五月の夜も更けて参りました。いつか貴方にしかとお会いできることを。都会の空には星の姿が少なすぎます。月も今夜はその輪郭も見せてくれません。雲は夜でも灰色です。明日は雨かも知れません。想像することを、空想で貴方を描くことをお許し下さい。そして願うことを、希うことをお許し下さい。そして私の感情を確かなものにして下さい。ああ、貴方がいる、貴方がいるというだけで、私はこんなにも震え、感情は鮮やかな色を恥ずかしげに浮かべます。どうか慈悲を。どうか会える日を。まずはもう一度葉書だけでも。待ち焦がれてばかりいて、もう私の心には火がついてしまいました。この炎を消す術を知っているのは私の他に貴方しかありません。貴方でなかったら、この炎を灯すことも、消してくれることさえ出来ないのです。次の葉書にはどうか貴方のお名前を。よろしければご住所も。貴方に返事を出せるかも知れないと思うだけで、私の胸はきつく締まるのですから。お休みなさい、秋桜の人。いつか会える日を。貴方を確かに感じられる日を。

予想通り次の日は朝から淑やかな雨が降っていました。眼が覚めて最初に覚えたのは雨の空気、その匂い。それから起きだしてカーテンを開ければ、窓の外は濡れそぼり、音無しさながらにしとすと、弱くも絶えずに雨粒の降るよう、ああもう梅雨がきたのかしらと思わせるほどであり

ました。しかしまだ月は皐月、この頃には梅雨めいた雨が降るものです。五月雨というには弱く過ぎます。暗くて湿った空気は嫌いではありません。古びた本の香りに似ています。窓の外を早くも過ぎ去る人々の、色々鮮やかな傘の花咲くのもこういう静かな雨ならではの。最近ビニール傘が増えてその趣も失われつつありますが。やはりこういう雨の日には、和傘が一番似合うと思うのですが、いかせん私はそれを持っていない、持っていたとしても使う勇氣はないでしょう。和傘がせいぜい、私の愛傘は端に紫陽花散らせた粋なもので、これでも少し差すには覚悟があるものです。目立つのは嫌いな癖に、流行には乗りたくない、しかし地味に過ぎるのも好きでない、というのだからわがままです。私は浅黄色のカーテンを閉めました。着替えようと思ってタンスまでゆく間に、ふっと机の上に目がいきました。

ああ、何と言うことでしょうか！ そこには昨日眠るまではなかった絵葉書が一枚、礼儀正しくまっすぐに置いてあるではありませんか。私はしようとしていたことも忘れ、すぐさまそれを手にとりました。今度の絵は石楠花でした。これからの花です。初夏の花です。白と淡い紅の割合は見事でした。

裏返して表側を出せば、そこには前と同じく流麗な文字で私の名前がしかと書かれていました。しかし何処にも貴方のお名前はありません。その変わりさっと書きつけたような文章が二行、端の辺りに座っておりました。それはこうです。

突然のお手紙、貴方はきっと吃驚なさるでしょう。

名前も書かぬ非礼をお許してください。ではまた。

それだけです。それだけでした。たったそれだけ、これでは貴方がどのような人なのかちっともわかりません。踊っていた先程までの心は打って変わって、鼓動は沈み喉は震えました。私は自分でも意外なほどに、貴方のお葉書を待ち焦がれていたのです。その名前の書いてあることを、貴方がどんな人なのか知れることを、どれほど心待ちにしていたか、今なら自分の心持ちがよく分かります。この締める痛み、荊の棘刺す、それを何と呼べば良いのでしょうか。罪人です。酷い人です。惨い人です。しかしどんなに詰ってさえ、私は貴方に焦がれているのです。貴方はそれを知っているのでしょうか。いいえ、きっとお知りにならない。ああそれとも、知っていて尚、このような仕打ちを為さるのですか。貴方でなかったら、もしも貴方でなかったら、他の誰が私をこうほど痛み苦しめ、ああしかしそれは甘い、親の目を盗んで頬張る果実のような、そんな感情を教えることができたでしょうか。せめて性別だけでも知りたいのです。男でも女でも構いません。どちらにせよ私はあなたを想い続けることでしょう。しかしどちらか分かったら、私の思い描く貴方のお姿は一層現実味を増してくれることでしょう。

全身が痺れるように震えました。貴方が男か女か分かったら、そう想像しただけで、私の体は喜びに満ち溢れます。ああお返事を差し上げたい。私の思いのたけを打ち明けたい、でもそれはきっと言葉にならないでしょう。何か言葉にあてはめて、名前を付けてしまったら、私の感情はきっと永遠に表わされることなどないでしょう。願わくば、どうか一度でも、貴方にお会いできるなら。貴方に会えば貴方を前に私の眼が私の唇が血潮の熱が私の想いを確かに貴方に伝えてくれ

ることでしょう。言葉にならない歓喜をわななく唇が、熱の余り朱の刺す両頬が、喜びに打ち震える全身が、貴方に全てを教えてしまうのです。

そうです。言葉などいりません。貴方にお会いできるなら、光の速さで伝わることでしょう。あでもきつと貴方は私に会おうとするのでしょうか。このまま、もしもこのまま何も知れないままだとしたら、想いをどこへ向ければよいのでしょうか。願いはやみません。心は求めることを止めません。私は留まることをしらないでしょう。なぜなら私の留まるべき場所は、暗い海の中で漂う安穩の岩石は、見つけた居場所は、あなたの傍に違いないからです。どうかお傍に。せめて私の心だけでも貴方のお傍にいさせては下さいませんか。

一通り想いを巡らせた後、私は制服に着替えました。一子女たる私は何があろうとも学校へ行かぬわけには参りません。今どき珍しいセーラー服は、他の子たちには不評らしいですが、実のところ私が高校を決めた要因でもありました。その古臭い感性、とみにその赤いスカーフに私は惹かれたのです。今日もそのスカーフを巻き、膝丈のスカートの折り目を確認し、指定の通学鞆を手に取りました。雨の日ですからタオルも入れて。そして再び貴方からの葉書に目を向けました。返事は出せません。持って行っても仕方のないことでしょう。肌身離さず持ち行きたいという欲望を抑え、私はそれを一枚目と同じ机の引出しにしまいこみました。貴方の次のお葉書はいつのことでしょうか。そのくらいのことは期待してもよいと思うのです。

私は部屋を出て階段をおり、洗面所で一通りの作業を終えてから、いつも通り無人の居間へ入りました。父親はともかく母親ももう仕事へ出てこの時間にはおりません。テーブルの上には母の用意してくれた私の分の朝食がラップに覆われて待っていてくれます。私はテレビをつけました。いつの頃からかの習慣です。今日の朝ごはんは白米とおみおつけ、それに半熟の目玉焼きです。母が加減を違えることは滅多にありません。主婦の技に感嘆しきりです。私はこのようには作れません。

食べきる頃には時間も程良く、私は歯磨きをして玄関に下りました。雨の日にローファーを履くのは好きではありませんが、ローファー自体はかなり気に入っています。その履き心地、硬さと微かな革の感触、何よりもそのスマートさ。そして歩く時の確かな反動。何もかもが心地よく、私がいまだに駅まで二十分余りも歩いていく大きな理由です。

私はお気に入りの傘を手に取りました。扉を開けて外に出れば、いつのまにか窓から見たときよりも強い雨足で襲いかかるまさに五月雨、それでもどこか嬉しげに、緑を煙し花を濡らし、庭先に咲く蜜柑の花も、白きを小さく輝かせています。傘をさして雨に入り、ドアには鍵を閉めました。いってきますと心中に零し、ぴちゃりと足を進めます。一つ向かいの大通りまで出てしまえば駅まではほぼ一本道、しかしいつにも増して今日は車の近くを通りたくありません。いつも通り徒歩で駅へ向かう人が多い裏道を行きましょう。今日は人気もまばらです。

少ないとはいえ色々な人が歩いています。同じように制服で、同じように傘をさして歩いている同じくらいの年頃の女の子。肌寒いのにワイシャツ一枚でいる男の子。折り畳み傘を持ったままささずに走り去るちょっと年上の男の人。はねっかえりを気にしながらのサラリーマン。ジャージで走っている男性。黄色い傘をくるくる回していちいち水たまりを走る小学生。しかし貴方はおりません。いたとしても私には判断がつきません。前をゆく男性陣はみなお葉書の印象とは似

つきません。そうであっても背丈はこれくらいかしら、肩幅はなどと眼をやって、いつの間にか貴方を勝手に男の人に仕立てあげてしまいました。私より少し背が高く、肌は白くも健康的で、きっと理知的な優しい瞳、頬には笑窪もできることでしょう、しゃんと伸ばした背筋で流れるように歩みになって、傘をぱっと払いこちらを見てくれたら。はしたなくも妄想は止まず、それも貴方のせいなのです。夢とは違えど映し身はきっと素敵なことでしょう。

束の間の幸福感、雨ならば許される逢瀬もありましょう、それが勝手な夢姿にすぎなくとも。駅に着きました。ロータリーは人と車とでごっちゃになって、葉を茂らせる木々からは濡、ハザードランプが忙しく会話し、水眼鏡から覗けばそれはそれで幻想的な絵画、行き交う人の波は傘の群れ、まるで海原、ほう、と一息吐けば泡のように水面まで消えてくれることでしょう。ぱ、ぱと何回か払い、階段の前で傘を畳みます。この動作はお気に入りです。どれだけ上手く美しく、高じて気高くもあればいいと思います。逆らわぬ自然な動き、一つ一つの所作に無駄を排せば美しさも人のもとへ馳せて参じるというものです。

鞆からタオルを取り出します。傘の柄から伝う雫で袖口も冷たく、スカートも少し濡れてしまいました。水滴をタオルで払って手元も拭きます。これで大丈夫でしょう。しかし肝心の靴下の方は替えを持ってくるのを忘れていたようでした。どうしようもありません。一日これで我慢しましょう。

ホームへ降りると人ばかり。あちこちで塊が出来ていてまた五月蠅く、人混みは嫌いです。ごみごみした集団をいくつかすり抜けて階段の裏手に並びました。雨は変わらず降り続けています。ホームから見えるロータリーも変わらず何か現実離れして、淡い色の点が浮きつ沈みつしながら流れてゆきます。電車の到来を告げるアナウンスが流れました。程なくして電線の前揺れ、海の上を滑るように入ってくる電車。窓ガラスは曇って滴り、幾人かの降車を待って私は電車に乗りました。

電車の中は混雑しています。隣の人と肩がぶつかってしまうくらいには。しかも雨の日となれば、蒸した車内の空気、濡れて滴る傘をみなが下げ、足元には濁った水たまり、気の滅入るのも仕方ないことでしょう。なんとなく言葉には出さずとも、どこもかしこもそれなりのイライラを抱えて、しかし無言のままイヤホンに耳を預けて外界をシャットアウトしているようです。私はこの類の機械を持っていません。イヤホンが嫌いなのです。まず私の耳は小さいのでカナル型のものでは窮屈ですし、しかしヘッドホンを人前で付けるのには抵抗があります。それで音を漏らして他の人に迷惑をかけたくもありません。それに流行りの音楽などは聞きません。たとえそれらを聞いたとしても、好きになるのはそのカップリングの曲だったりするのです。更には先に述べたことももちろん大いに関係しています。ただ言葉にしかた、ただ好きだとか切ないだとか言うだけ、そんな歌には興味がわかないのです。

ああ、心を揺さぶってくれるものの何と少ないことでしょうか。古き良き文学、或いは洗練されたクラシック、手のつけられていない自然の風景、これら以外にどうして強く迫るものがないのでしょうか。しかし貴方は、貴方だけは別なのです。塵芥の中の宝石、どうして心を揺さぶられないことなどありましょう。問題は貴方を、貴方こそをとらえたい私の感覚に、ちっとも貴方が現れてくれないことなのです。貴方にお会いしたら、一目でもまみえることがあれば、全身が感覚

器官となって貴方を捉え、残る香りの一筋さえも逃がすまいとすることでしょう。気が違っただけいいのです。いっそ狂って幻でも見えるなら、そちらの方が幸せかも知れません。どうせなら、どうせならそのようになってしまえばいいのです。

ああでも、現実はそのいきません。狂いたいと思って狂える人などいないのです。しかもああ、私は酔狂には陥っていても、本当に心の底から狂ってしまえたらなどとは思っていない、思うことなど出来ないのですから。貴方がいれば、その現実ほど素晴らしいものはないはずなのです。貴方がいれば、貴方さえいてくれたなら、どんな酷いことにでも、どんな悲惨なことにでも耐えてみせることでしょう。今はまだ絵葉書のたった二枚、それしか貴方を推し量る術がないとしても、確かにそれだけは貴方を教えてくれるのです。写真の光沢、映された景色の影と色合い、形の整った文字、それは確かな貴方の証です。

窓の外の景色は薄ぼんやりとしながら過ぎてゆきます。滲んだ現実には程良く美妙です。パレットに垂らした水彩絵の具に水をどんどん混ぜて行けばこの景色を描けるでしょうか。絵は苦手です。どうしてもうまく表現ができません。何か違う、何かが違ってしまふのです。本当に表現したいものとは。それは言葉も同じです。不器用と言ってしまうればそれまでです。伝える術はあるのでしょうか。一つあります。ああですから、

思考は堂々めぐりしてしまいます。愚かなことです。いつも同じことばかり、ちっとも進まず、まず建設的なことなど思いつかず、それでも止めてしまえないのは貴方のせいです。それとも私の弱さでしょうか。妄想だと断ち切って、色合いのない現実には埋もれればいいのでしょうか。そんなことは出来ません。

つまり私は、結局のところそこらにいる他の女子高生たちと同じ人間なのです。それを理解できていなかったのは、自分では大人びた冷静さを持っていると思っていたものが、本当はただ幼く、それでいて自分が幼いことを全く考えていなかったからなのでしょう。純粹かもしれません、無垢かもしれません、揺れ動くこともないでしょう、しかしそのような魂は、幼く無知なだけなのです。白痴と同じです。それは確かに一つの綺麗な形で在りましょう。今は違います。この渦巻く感情、会って下さらない貴方、いっそ憎悪にもなってしまいそうな思慕、こんなものは知りませんでした。制御できない、夢にも現にも、心が心ではないようで、心なんて確かなものはないようで、ただ心臓が激しく動き、焦燥に駆られ、欠けるばかり、わけもわからずに何かもわからずに、貴方のことなんてちっとも知らないのに求めてやまない、火傷の痕のむず痒さ、涙の一粒では慰めにならず、むしろ熱さを増すばかり、ともかくどうしようもないのです。何も私の自由にはなりません。私は押されてゆくだけです。流されてゆくだけです。走りだして、止まることができなくなっているのです。背中を押されてしまったのです。

実のところ、きっと私は戸惑っているのです。差出人不明の絵葉書、いつの間にか机の上であり、でもともかく私への宛名、貴方はいったい誰なのでしょう？ 教えて下さい。どうか私に、ひとつだけでも、とても大事なことを。

貴方は本当に存在するのでしょうか？

電車は目的の駅へ着きました。吐き出されるままに人に押し流され、私はホームへ降り立ちます

。雨は止む気配を知らせません。改札口へゆく階段までは少し距離があります。自動販売機、ごみ箱、向かい合った二つ五連のベンチ、あとは人ばかり、両隣の柵を越えてさえ花も木もなく、曇天そのままの灰色の街、やはり好きになれそうにありません。

ちらほらと同じ学校に通う女生徒の姿も見えます。とはいえ知り合いと呼べるほどの人はおりません。反対側にあるという男子校の生徒と思われる人もたくさんおります。こちらの方はいわずもがな、です。人ごみにまぎれているというのに、浮かぶは寂しさばかりなり、というのは如何なものでしょうか。コミュニティは大きくなれば大きくなるほど、人間味を失くしてただ一つの有機体さながらに、のたくたと這いまわるといえるのでしょ。う。人ごみは嫌いです。独りの空間の方がよっぽど好きです。そこには邪魔するものもなく（人ごみはそれ自体邪魔です！）、煩い雑音の一つもなく（人ごみはむしろその集合体です！）、妨げる何物もなければ、孤独を感じることもありません。その代わり例え失うものがあるとしても、それはほんの少しの微々たるものに思われます。しかし確かに、これは逆説的です。つまり私は、そうとはいえ、ただ孤独の浮き彫りになるのが嫌というだけで、仲の良い友人の一人もいれば、そんなことを感じずに済むのです。それを私は分かっています。失っているわけではありません。まだ得ていないのです。平気なふりをしておきながら、私はそれに耐えられないのです。

正直なところ、私は私を誇っていました。私の自意識は私をこのような存在にし、そしてそのことを高く置き、高嶺へ高嶺へ、そして自らを頂きの花へと変貌させようとしていたのです。私の外見はそれと共鳴して確かにある種の美しさを得たと思います。艶在る漆の長い黒髪、細い肢体、色白の肌、何の不満もありません。誰しも光を透かす硝子の透明を美麗と讃えることでしょう。しかしそれは弱さの裏側。私は分かっていたのです。

孤独は嫌だ！ ああ誰か、誰か（貴方！）私を見つけて！

感情が迸る瞬間に口を閉じ、叫び声は胸の中へ沈み表へ出すことはありません。こんな人ごみの中でそんな風に叫んでは、私はただの変人です。心のうちで変化など何も無かったかのように、流されるまま階段を上り、そのままに改札を抜け、通う高校のある出口へと歩みを進めます。周りは同じ学校に通っているであろう女の子、互いに知り合いを見つけては供をなし、話し笑いながら足取りも軽く、昨日のテレビの話、最近流行っている少女漫画、新しく出たファッション雑誌のことなど華を咲かせています。私は口を嚙みます。気高くあればこそ、孤高であればこそ、それが一つのファッションになって私を飾り、一つのステータスになって私を更に寂しき個性へ導くのです。ああ、その点でも私は他の女の子たちと同じです。私のこの性はたかだか私を着飾るものでしかありません。彼女達が嵌っているファッション雑誌と同じです。格好の良いテレビの中の男の人達と同じです。同じことです。何も変わりはない、良くも悪くも私はただの一人の娘、浮つき、時には沈み、流されて羽ばたくことを忘れ、温かな殻の中で眠る、それでいて本当は誰かが突いてくれるのを心待ちにしている、拒むふりをして待ち焦がれる、ただそれだけ、子供じみた天邪鬼な願望を抱えているだけなのです。なんと無様なことでしょう。何も求めずには生きてゆけないのです。空虚なままで、真白いままでいることは出来ないのです。貴方さえ、貴方さえいてくれたら、傍に来て私の名を呼び、温かな手を添えてくれたら、全てが解決されるのです。貴方は何処に居るのでしょ。う。貴方はいったい誰なのですか。貴方は本当に居るので

すか。信じたい、確たる証拠も机の引出しに、でもこの弱きは耐える力もなく、心は揺らぎ、遂には貴方の存在までもも疑いにかけてしまうのです。

どうしてこんなことを考えるようになってしまったのでしょうか。なぜこのように悩みの淵に沈んでしまうのでしょうか。思考は留まる事を知らず、そのくせ堂々めぐりばかりして、ちっとも先へ進まずに焦らすばかり、煩悶は大きく熱くなるばかりで止むそぶりもみせず、好きなはずの雨音も何か煩く、ああもうどうして、どうせ底へ沈むなら感情の波まで静まれば良いのに、さざめきはいつしか大きなうねりとなって、今のように貴方の存在までもも疑い、悩みを大きく育てるばかりです。どうすれば良いのでしょうか。いつまで耐えればいいのでしょうか。いつまで耐えられるのでしょうか。私は貴方を思い続けることができるのでしょうか。いいえ、葉書が届かなくなったら、いつしか貴方を忘れてしまうことでしょうか。焦がす熱さは雨と涙に温度を奪われてしまうことでしょうか。想いを抱き続けることが辛さと呼ぶなら、私のこの弱い心はきっと完璧に貴方を忘れてしまえるはずで。それでまた静かな水面、変わらぬ太陽と月だけを映し、眺めるだけの日々に戻るのです。それは寂しい日々、だけど平穏な日々、それは脈動のない日々、しかし安寧の日々です。貴方でなかったら、こんな風に心を揺らしたりはしません。私は揺らいだりしません。貴方のせいです。何もかも。

大通りを渡る信号へ着きました。まだ赤です。考え事をしながらも、視線は確かに外を見て、注意はしかと世界へ向けられます。もっともそうでなくては生活できません。雨がまた激しくなってきました。傘と傘がぶつかって、雫がまた滴り落ち、それが仮初の水面を揺らしています。映る姿は同心円に揺らぎ、波と波は互いに干渉して打ち消し合います。一つの音楽、しかしリズムは早く、短い音を重ね合わせて織りなす、スタッカートは跳ねる水際、いつもなら耳を澄ましているでしょう。駆けてゆく人の足音、雨ならば遠く残響、水きり走る車、金属と踊り、葉音は微かに裏へ付き添い、大好きなはずなのです。しかしそれは鏡であればこそ、私が綺麗に写し取れるからこそその美しさなのです。鏡の方が歪んでいて光を確かに返せないならどうしてそれが映ることでしょうか。どうにかしたい、でもどうにもならない、薄く小さな希望に縋った、私は与えられるのかも分からない幸福を期待するまるでコッペリア、サロメほど傲慢にもなれず、ジュリエットのような覚悟もない、無論どうして眠り姫の幸せが待っているでしょう。これから待っているのは幸福な結末、それとも残酷な悲劇なのでしょう。

信号が青に変わったのに遅れて気付きました。考え事が過ぎたようです。ビニール傘の群れが後から後から私を追いぬいていきます。そうこうしているうちに青色は点滅を始めました。後ろからバシャバシャと逸る足の音が聞こえます。私も急がなくては。そうして歩き出そうとした時でした。

「あ、あの！ ちょっと待って下さい」

後ろから肩を掴まれました。予想外の強さに私は驚き、危うくの所で傘を取り落としそうになりました。振り返れば傘もささず、ずぶ濡れの男の人が私の肩に手をやっています。きっと反対側にある男子校の生徒、ワイシャツは雨に濡れ透けてびしょびしょ、ズボンの裾は泥が跳ねて、傘をささないのだから当たり前です。それでも見上げれば平凡に整った顔立ち、しかしそこに綺麗な一對の瞳を見つけました。雨の後日がさした水たまりの純粹さ。一瞬目を奪われ、それから当

惑が私を支配し、身を縮めることで彼の手から肩を逃がします。彼もそれに気づいたようで、思ったよりも優しい動作で腕を元へ戻しました。

「その、あーえっと、ごめん急に、肩、掴んだりして」

そこで彼は大きく息をしました。はあ、ふう、とだいぶ息が上がっているようです。走ってきたのでしょうか。駅からここまで？ もちろん大した距離ではありません。ロータリーを抜けた一番最初の大通りですから。考え事をするにはなるほど結構な時間もありますが、走れば私だって一分とかからないことでしょう。しかしどうして、だからといっていったい何のために。そもそも反対側へ降りるはずだろう人が？ 当惑の次は疑念が、それからある種の不安が芽生えます。しかしともかく何か私に用があるのでしょうか。赤色に変わる信号に目をやってから、私は縮込ませていた体をしゃんと伸ばし（姿勢が正しいことは、私が自分に課したことの一つです）、背伸びして濡れ鼠へ傘を半分差し出しました。余りにも前髪から滴るので、それではうまく前を見れそうになかったのです。自分がそれを嫌なので、というただそれだけでした。それ以上の意味、小説や漫画やドラマで使われるメタファーとしての意味などありません。

「あ、ありがとう、ごめん、急いで。どうしようか迷ってる間に君、結構遠くに行っちゃったものだから」

彼は驚いたようでした。それから次の言葉を継げられないようで、あっちへ向いたりこっちへ向いたり拳動不審にし、でも偶に一瞬私の目をじっと見ました。手は所在なげに揺れ、足は重心を揺り動かして、みっともないったらありません。それに別段謝る必要も感じられません。とはいえ私はまだ緊張し続けたままでした。だってそうでしょう、いきなり肩を掴まれて、正体不明の男の人に、それで安心しろというほうが無理です。

「それで、私に何か用ですか」

ちょっと冷たい色をしていたかもしれないな、と思いながら、しかし後悔などはせずに、私は傘を持っているのは反対の手で、傘を持っている方の肩に下げた鞆をあさります。しかし変です。探しているものが何処にもありません。そんな。確かに鞆に入れたはずです。電車に乗る前に使ったのは確かです。なのに何故みつからないのでしょうか。

「あ、その、これ、多分君の落とし物、なんだけど」

そう言って彼が差し出したのは、紛れもない私のタオルでした。肌ざわりのいい桜色のタオルです。今まさに私が探していたものです。疑念と当惑は視線を彼の眼へ問いかけさせました。

「電車降りたところで落としたいんで、拾ってすぐ返そうと思ったんだけど人ごみがすごくてなかなか追いつけなくて、でも絶対君のもので、だから渡さなくちゃって、それで追いかけて」

彼は気恥ずかしそうに視線をそらしました。私よりも背の高い男の人が、私に向っていられないなんて、とどこかでちょっとだけ滑稽に思ったのを窘めて、私はちょっとだけ緊張を解きました。納得のいく理由は当惑を失くし、彼の可愛らしいほど純朴な態度は疑念を打ち消しました。ああ、こんな人もいるんだな。私は素直にそう思います。今どき珍しい、なんて私みたいな小娘が口にすることじゃないけれど。

手を出して、私はタオルを彼から受け取りました。つ、と触れたのはきっと指先。熱を帯びて思わずすぐに離してしまいました。しかし離れていた目線は再び邂逅し、女ものの小さな傘の中で

結ばれたる線分、はっと息を呑めば別世界、外は雨粒の限りなく、偶然にも人影はなく、絶えない雨音は一つの結界、不思議な瞬間でした。彼の眼に私が映っているということは、きっと私の眼には彼が、瞳は外から光を受けずとも輝くのです。そこでまたはっと気づき、タオルに目をやって、それから濡れそぼった彼に再び視線を戻しました。何のためにタオルを探していたのか。受け取ったタオルを私は彼に差し出しました。

「これ、どうぞ使って下さい。そのままでは風邪をひいてしまいます。貴方が拾ってくれたものですから、どうぞ」

「え、あ、いやでも、それ君の、困ってるんじゃないかって」

戸惑う彼の手にぎゅっと押し付け、それでも受け取ろうとしないので、せめて前髪と顔だけでもと思ってまた背伸びして彼の顔面にタオルを押しあてました。うわ、と驚く声はタオル越しにくぐもって聞こえなかったことにします。

「でもせめてお顔だけでも拭いて下さい。気にしないで」

強引に私は彼の顔を拭きました。彼はその間、お風呂嫌いな猫のように首をそ向けたり、体を変に動かしたりして逃げようとしていましたが、その全てに失敗し、私が諦める気もないと悟ったのか後はされるがままになっていました。

拭き終わって顔を見れば、私の方に特別他意はなかったのですが、彼は真っ赤に染まっていました。よくよく考えても見なくとも、恥ずかしいと思わせてしまうことだったと今更になって頭に浮かび、私は口の中だけでもごもごとごめんなさいとか何やら弄び、タオルを鞆にしまいました。

雨はまったく弱くなりません。狭い女ものの傘では二人分の体を降りしきる線分から逃がすことはできません。彼の背中はずぶ濡れ。運動靴も悲惨なことになっているのでしょう。

彼は私の方をまだ何度か見やっていました。右手に持って彼を入れた傘の真ん中には二十センチもないほどの距離があり、そのせいで私も半分は雨の中にいることになります。そうとは言ってもそれはそれ、この二十センチを縮めて例えば抱きつくように傘下に入ることは出来ません。彼とは反対側の腕が冷たさに濡れたせいか妙に熱く感じられます。

そこで彼がようやく口を開きました。訊きたいことがあるように思えたのは正しかったようです。それですぐには行けなかったのでしょう。或いは継ぎ継ぎだった息が整うまで。

「あ、その、名前教えてくださいませんか。せっかく知り合ったんで、名前くらい聞いておきたくて。だめ、ですか？」

名前くらい、確かにそうです。そうなのです。それは自然な感情で、貴方の名前を知りたいと思うのは普通のこと。それを教えないのは意地悪です。名前すら知らなかったら、名前さえ知っていれば、どんな風にだってどうにでもなるのですから。

「あ、僕は蘆谷聡太です、反対側の男子校に行ってる一年で、あ、趣味は読書と音楽鑑賞で部活は」

「いいですよ、そこまでは。冬峰杏です。そこの女子高の」

「その、えーと、電車の中とか駅とかで次も見かけたら、用事とかないんですけどまた声掛けてもいい、ですか？」

彼は右手を頭の後ろへやって掻くようにしながら顔を下へ向けながら、それでも目線だけちらりと窺わせていました。

いいですよ、と思わず笑いかけ、もちろん他意なく、そう他意などありません、たまたま落し物をした私に彼が届けてくれただけで。何が面白かったのでしょうか。嬉しかった？ そうかもしれません。男の人と話したのはいつ以来のことでしょうか。

じゃあまた、と言って彼はまた、後ろを向いて傘もささず、雨粒を弾き体を濡らして走って行ってしまいました。じっと見つめてふと私は、さっきまでは雨の冷たさの中で濡れていたのにも関わらず熱ささえ感じていた肌が、今はもう温度を失い鳥肌立っているのに気付きました。このままでは風邪をひいてしまいます。それに腕時計を見やればもはや遅刻寸前の時間です。点滅寸前の横断歩道を渡り、そこでもう一度振り返ればもはや影もなく、私はまた高校へ向かって歩き出しました。

貴方でなかったら（2）

再び独りで歩き続けます。ザーという音が耳にこびり、いつもは安らぐ傘の中もなんだか居心地悪く感じられます。左側はびしょびしょです。雨に濡れて寒い。寒いのです。私は鞆からさっきしまったばかりのタオルを取り出しました。さっきの彼を拭いたせいで濡れてはいますが、ないよりはましです。首にかけて少しでも肌の温度を取り戻します。鳥肌立っていたのは一瞬の締め付けに似た緊張を残した後、だんだんと温もりを取り戻していきました。ほう、と胸にたまっていた空気を大きく吐き出すと、急ぎ足で学校へ向かいます。残された時間は四分、遅刻はせずに済みそうです。

校門が見えてきました。下駄箱の前は傘の群れ。色とりどりにごちゃごちゃで、それがまた不思議とよいものです。私もその集団に混ざります。二人三人と喋っている人達の傍を過ぎ、上履きに履き替えようとして靴を脱げば絞れそうなほど水を含んだ靴下。やっぱり替えを持って来るべきでした。しかし仕方がありません。私はそのまま上履きを履き、自分の教室へと向かいます。誰も話す人のいないクラス。どうしてでしょう、何故か私はそれが今日は寂しく、ああさっき久しぶりに男の人とお話したせいでしょうか、慣れたつもりでいて、いいえ慣れていたはずですが、誰か教えて下さい、これはどういうことなのか。ちくりと胸刺すこの棘は何という名の草花で、いったいいつからここにあったのか、どんな花を咲かせるのでしょうか。私はそんなこと、今まで知りもしなかったのに。

「ねえ、冬峰杏さん、さっきの男と知り合いなの？」

階段を上がろうとしたところで、後ろから来た見覚えのある女の子に声をかけられました。同じクラスの……名前が思い出せません。入学式の日にとっとだけ声をかけられた記憶があります。快活で友達も多く、その輪でも中心になっている印象です。目元がぱっちり明るくて、でも他の子みたいにお化粧をしているんじゃないでそのままで、ショートカットの髪はどこかしら跳ねてそれをそんなに気にする風でもなく、でもイメージとよく合っている気がします。不思議です。どうして今日は二人も私に声を掛けてくるのでしょうか。

「いえ、わざわざ落し物を届けてくれたんです。えっと、」

「坂崎奏絵。同じクラスだよ。さっきのあいつとは中学が同じなの。いきなり冬峰さんと相合傘してるからびっくりしちゃった。そっかそっか、あいつにそんな勇気があったとはねえ」

悪い子じゃないよ、と坂崎さんはいたずらそうに笑って付け足しました。後ろ手に組んでなんだか楽しそうにしています。

「でもだめよ、冬峰さん。相合傘なんてやったらいいように誤解されちゃうよ。しかも拭いてあげるなんて優しくしすぎ！ いいのよ放っとけば。男なんて単純なんだから」

「でもびしょ濡れだったので、風邪をひかれたら、」

「あはは、そうだよ。でも大丈夫よ、あいつ馬鹿だから。あ、ううん、悪口じゃなくて、褒め言葉っていうか、うーと、」

話のテンポが速くて、私だったら舌を噛んでしまいそうです。彼女はちょっと考えるように、目を閉じて握った手の親指を唇に当てました。この辺が友だちの多い理由なのでしょう。お喋り

に動作が伴うその様は、ちょっと見ていて飽きないものがあります。小動物、と言ったら言い過ぎですけど。

「なんかね、中学のときも、あいつ口下手で。女の子に自分から話しかけるタイプじゃないのよ。だからその点は安心していいわ。私保証したげる！ だからね、まあ誠実、なんだけど、うーと何て言うか、冬峰さんにはもったいないっていうか」

「私も、自分から話しかけたりはしません」

坂崎さんは瞼を大きく開き、唇を突き出してこっちをじっと見ました。驚いているのでしょうか。それならば私もそうです、今のは失言でした。冷静で気取ったふりをして、冷たくしてしまう自分が嫌になります。せっかく話しかけてくれたのに、嫌な気分にしたのでしょうか。

「ごめんごめん、そういう意味じゃないのよ。いやあいつ朴念仁みたいなもんだからさ、何かこう、悪い奴じゃないんだけど、でも乙女心とか全然分かんないやつだから、いやでも良い奴なのよ？ 基本的には優しいはずだし、いやあいつの場合勇気がないっていうか、あ、ダメなんかうまく伝えらんない」

どうやら気にしていないようでした。ほっとします。そうやって後から一喜一憂するくらいなら、始めからそういう態度をとらなければいいのだと分かってはいるのです。しかし困ったことに、私は身構え、萎縮し、つつい冷たくしてしまうのです。これが自分の本性だとしたら私はどうすれば良いのでしょうか。坂崎さんは、あーでもないこーでもない、といった風にぶつぶつ呟いています。どうしても一つ気になって、これだけは訊こうと疑問を口に出しました。

「坂崎さんは、彼と仲が良かったんですか」

考えてみれば当たり前、今までの彼女の話しぶりから訊くまでもないことなのに、訊きたくなるのはどうしてなのでしょう。他人同士のつながりなど、本来どうでもいいはずなのです。いえしかし、私には見当がついています。小説によくある、ありすぎると言っているほど。そこに描かれている感情が何であるか。しかしそうなのでしょう。彼が？ どうして？ 結局のところ何故は消えることがなく、むしろ一つが解決されれば、更なる疑問符が溢れ、それを問い詰める冷静な心も今はなく、いいえないことが答えなのかもしれない、でも気になるのです。それはどうしようもなく、ああ私は何をしているんだろう。

「ん？ なになにに気になる？ 気になっちゃう？ えへへー、どうしよっかな。あ、でももう教室着くね。とりあえず今は秘密にしとこ！ 大丈夫大丈夫、後でちゃんと教えてあげるから。いーよー何でも聞いて。冬峰さんのご希望とあらば！ じゃまたね、放課後とかに。と言ってもおんなじ教室だけ」

えへ、と笑って彼女はいたずらっぽく舌を出しました。どうしたらこんな風に生きられるのでしょうか。否定しているのではありません。羨ましいのです。そう、素直に思います。こんな風にあまり話したことの無い、話しても面白くもない私みたいな人間と楽しそうに笑って話せるというのはすごい才能です。もしもこんな風に生きて行かれたら、私は今よりもっと世界を知れたのでしょうか。広い世界を生きていたのでしょうか。きっとそうなのでしょう、私の偏屈さは卵の殻、でもそれでは目を瞑るのも同じ、何も見ていないのと同じなのです。小説をいくら読んだところで、生の感情に勝るのでしょうか？ ありえないことです、それくらいは分かります。逆を

言えば、小説家は自分がそういう強い感情を持ったことがあるからこそ小説を書けるのです。私には何も書けません。読むだけです。何と寂しい。それでいいとは思いません。

「あ、でも一つだけ教えちゃおう。な—んか暗い顔してるし。ダメだよ、せっかく綺麗なのに、俯いちゃ」

自覚はしていますが、別の意味にとられたようです。悩みの深みにはまるのとそうでないのとはどちらがいいのでしょうか。今までの私であったら、もちろん前者だ、とそれこそ悩むこともなく結論付けていたというのに。

「あのね、さっき彼と話してる時、ちょっと笑ったでしょ。最後にさ。あの笑顔綺麗だったな。絶対笑ってる方がいいよ、冬峰さん。ありゃ—女の私でも惚れっちゃうとこでしたよ—。ま、たぶんあいつも顔真っ赤にしてたし惚れさせたかもね？ 後ろにいる私に気付かないくらいだったし」

「そう、なのでしょうか」

困惑気味に呟くと、坂崎さんがずいっと顔を寄せてきました。

「あ—もう、やっぱり絶対勿体ない！ 冬峰さん！」

「は、はい？ えっと、何でしょう」

余りの剣幕に後ずさり、しかし同じタイミングで詰め寄られてしまいました。顔が近いです。苦手な距離です。

「もう分かっていると思うけど、私お節介焼きなんだわ。だからもう逃がさないわよ。ちょっと笑ってみて、さっきみたいに」

「え、あ、こう、ですか？」

無茶な要求です。やってみましたが、これは引きつった笑顔と言うのではないのでしょうか。

「硬い。何それ。だめだめ。全然。さっきはもっと自然だった。もっと可愛かったもん。もっと綺麗だった」

この状況で自然に笑えたら、神経が図太いか悪意があるかどちらかです。それに笑えと言われても、意識して出来るものでしょうか。考えれば考えるほど出来なくなりそうです。

「これは特訓が必要ね。ふふふ、大丈夫、怖くないよ。ちょっと笑って貰うだけだから。冬峰さん小説いっぱい読んでるからそういう感情は知ってるとして、何が足りないかなあ。う—と、少女漫画？ とにかくあれだわ。まずは手始めとして、」

「な、何ですか。あの、近いです、顔」

更にぐいぐいと詰め寄られて、もう一步後ろに下がれば、踵が廊下の壁に当たりました。逃げ場がありません。

「今日一緒にお昼食べない？ 二人で。雨だから中庭とかは無理だけど、図書館の前のテーブルとか、渡り廊下のベンチとか、と言ってもどっちも混んでるだろうけど、どこか見つけてさ。ね、いいよね？ いいでしょ？ 約束したよ？」

ふわ、と笑われて、さっきまでの剣幕とは打って変わってそれがとても可愛くて、これが自然な笑顔なのでしょう、思わずはい、と返事をしてしまってから、何を言われたのかやっと考えが

追い付きました。一緒にお昼食べる、確かに彼女はそう言いました。坂崎さんはやっと離れ、もう教室に入ろうとして扉を開けています。彼女みたいな明るい人と、私が？

「どしたの冬峰さん。教室入ろうよ、もうホームルーム始まるよ。ほらもう先生来た。あ、おはよーございます」

坂崎さんは扉を開けたまま待っていました。私は誘われるまま教室に入ります。いったい今日は本当にどうしたことでしょう。何が何だかもうよく分かりません。でも悪くない、ええ、悪くありません。今なら自然に笑えそう。そんな気分です。

教室に入って坂崎さんと別れ、自分の席に座ります。後ろから続いて先生が入ってきて、ホームルームが始まります。窓の方を見ればさっきよりは弱まったらしい雨、灰色の雲が空を覆っていたはずが、遠くの方には光がさしているのがほんの少しだけ窺えます。晴れの日よりも雨の日の方が教室が静かに感じられるのはどうしてなのでしょう。教室の中へ眼をやれば、未だ名前もろ覚えなクラスメート。ちょっとでも話したことがある人でさえ、両手の指があれば数え足ります。それがさっき一人増えました。ちょうど彼女と眼が合って、ひらひら、と手を振られました。振り返すべきでしょうかと悩んでいるうちに彼女は前に向き直ってしまいました。他へも向ければ、隣同士でつつき合い、何か目配せしている二人、机の下で誰かとメールのやり取りをしている子、英語の訳の予習に今更になって必死になっている子、まだ来ていない子、靴下を履き替えていたり、朝ごはんなのか何か咀嚼していたり、眠たそうに頭を机に預けていたり。ともかく何かすることがあって、何かを感じ、何かを思いながら確かに生きているのです。それが何故今日は当たり前なことなのに、どうして不可思議だと思いが頭をもたげ、やはり当たり前なことなのだから、私と同じように生きているのだと、今日の彼も、そう貴方もきっと、私たちは違う人だけど、おんなじ人間なのだと、それがまるではっと気づいたみたいで、何かとてつもない大発見のようで、とりとめなく流れてゆくだけの言葉達が、ともかく思考をなしているのだと、ああそうです、彼女たちも同じなのです。何度でも私はそれに驚くでしょう。でもその驚きは、決して不快感を伴ってはいませんでした。むしろそう、霞がかかったものが消えて、五里霧中の後の人里、こっちからは絶対に分からなくて、私が見ている通りに判断するしかなくて、でも疑ってみたりして、別の側面が信じられなかったりして、でも私もそうなのだと、下でも上でもないのだと、せいぜいほんのちょっと違うだけなのだと、でもそれがきっと、一番大事なことなのです。

ホームルームは終わりました。一時間目は英語です。いつもはたいくつな一日も、どうやら今日はそうでもなさそう。考えてみたいことがたくさんあります。どうして突然そうなったのでしょうか。簡単です。彼に彼女に、話しかけられたからです。それがこうも嬉しいなんて。じわりと温かいなんて。ちょっとだけ泣きそうになって、思わず上を向きましました。そこから更に思考は飛びます。期待が胸に膨らみます。だってそれは、いつか貴方も、私に話しかけてくれることがあるかもしれない、ということでしょう？ 私がそうと知らないだけで、もしかしたら貴方も私の姿なんて知らなくて、でもどこかで出会ったり話したりするのかもしれないでしょう？ もしかしたらもう出会っているのかもしれないのです！ 知らず私の心拍数は上がっていました。わく

わくしています。こんなにも心の跳ねるときなんて今まであったでしょうか。今ならば雨の中、傘もささずに踊ってみたいくらいです。それはきっと気持ちいいことでしょう。自然のメロディ、今までみたいに耳を傾げるだけでなく、体全体で、私のすべてで感じる事ができるでしょう。世間は私を笑うのでしょうか。でもいいのです。私は机に肘を付けて両手に顔をもたせました。空想はやみません。何か合わせるならショパンの雨だれ。纏うようにして雨を、跳ねるようにして風を、誰かが私の手を取ってくれるまで。それは誰でしょうか。決まっています。それは貴方です。貴方はきっと私と一緒に踊ってくれることでしょう。貴方となら私は踊れる、ああ、どうかお顔を見せて、話しかけて笑いかけて、手を取って下さい、私はここにいます、私は待っています。貴方を、ああ振り向いて、空想の世界だけでも、それでもいいのです。貴方になら私は笑える、いつか出会えるなら、いいえもう出会っているの、いっそ例えば今日の彼が、貴方だったらよかったのに。

そこまで思考に遊ばせておいて、はっと私は気付きました。私は今、誰のことを思い浮かべ、誰の顔を描いていたのでしょうか。今思ったのは誰？ 振り向いたその人は誰？ 貴方は誰、誰なのですか？ もう一度気持ちを落ち着かせて、今自分が想像していたことを思い出します。その映像、雨だれ、踊る、手を取る、振り向く……私より背が高く、制服はびしょ濡れ、きっと運動靴の中もびしょびしょ、でも指は触れて、声は揺らして、優しそうな輪郭、純朴そうな顔立ち、でも中に何か確かに熱い血の流れを秘めた瞳、綺麗にそれ自体輝く瞳、それは誰の顔、その名前を私はもう知っています。今日会った彼、私が落としたタオルを拾って雨の中走ってまで届けてくれた彼、話しかけてくれた彼、その名前を私はしっかり覚えています。

蘆谷、聡太さん。ゆっくりと反芻するように頭の中で呟いて、首に巻きっぱなしだったタオルを思わずぎゅっと握ります。これは何ですか。どうしたの、どうしてこうも、いいえ思い当たることはあります、でも何で、頬は熱を帯び、ごくりと唾を呑み、それが耳まで熱く響き、どくどくと打つ、熱い。熱くてたまらない、こんなにもなるはずない、どうして、外気に濡れた窓に触ります、ああ冷たい、でもそれはそう、どうして手がこんなに熱いの、もう一度、もう一度だけ名前を呼んでみよう、そうすれば何か分かるかもしれない。彼の名前を反芻してみよう。優しい彼の、堪え難い誘惑に駆られて、枯れているみたいな喉の奥で、一つ一つ音をなぞります。あしやそうた、あしやそうたさん。それから私の口は勝手に一つ言葉を想像しました。あしや、あん、あしやそうた。待つて何を今私は考えて、ああどうしよう、そうなんだ。どうしていいのかわからない、でも妙に落ち着いてしまった、そうだと分かって納得した、走り出したいほどの焦燥、でもここにいたい、今すぐ出来ることなら、

そうだ、私は彼に「ありがとう」も言ってない。

会いたい。どうしようもなく、雨の中を走り、駅を越えて反対側へ、でもそんなことできない、それに会ったところで、私は彼に話しかけられるだろうか。冷たく当たらないだろうか。全然自信がない。もし坂崎さんだったら、こんな風に悩まないのかも知れない、思うままに行動して、話しかけたい人に話して、そう今日私にしたみたいに、でもそう、話したければ話しかければいい、伝えたいことがあるなら言葉にすればいい、でもそれが出来ない。今はこんなに悩んでいるのに。どうして。

でも、そうだ。彼は言っていた。話しかけてもいいですか、って。また今日みたいに駅で会ったら、或いは電車の中でも、彼は話しかけてくれるかもしれない。何を話せばいいんだろう。貴方に会えない時は、そればかり悔やんでいたというのに、いざ会いたい人と会えるようになって、何を話せばいいのかわからないなんて。どうにかなるでしょうか。せめて微笑みを向けられたら、退屈だとは思わないでもらえるでしょうか。

そう、微笑みです。まずはそこから、坂崎さんもそう言っていたのです。きっとそれが出来るようになれば、楽しくおしゃべりすることだってできるようになるでしょう。特訓が必要、なんてお節介な人。でも嫌じゃありません。彼女も優しい人です。私を気にかけてくれて、そうだ、入学式のときに話しかけてもらったときは、私の方が冷たくあしらってしまったのでした、それでも今日あんな風に、笑いかけてくれるのですから。

たったそれだけのことで、蘆谷さんと坂崎さんに話しかけられただけでこんな風に思ってしまうのは単純なのかも知れませんが、それでも今はこう思います。もしかしたら世界は私が思っていたよりも、ずっと素敵で優しい所なのかも知れません。

あっという間に時間は過ぎていきました。午前中の授業は飛ぶように早く、昼休みは朝の約束通り坂崎さんとご飯を一緒にしました。彼女が最初に主張したのは、お互いの呼び方でした。そして結局、彼女は私のことを杏ちゃん、と呼ぶようになりました。私も奏絵ちゃん、と。さん付けではだめだそうです。

「それで、あいつのことなんだけど。どう呼ぶつもり？」

互いの呼び方が決まると奏絵ちゃんはずいところへ詰め寄ります。そんなこと全然考えていなかった私が何とも返事を出来ずにいると、少しばかり思案してこんな提案をされました。

「じゃあ聡太さんにしよう。うんそれがいいわ、あ、結構いいかも。蘆谷さんだと他人行儀で壁があるし、でもくん付けとかちゃん付けも変だし。近すぎず遠すぎずで妥当な所よね」

私も他に何も良い呼び方が思いつかなかったので、彼のことは聡太さんと呼ぶことになりました。面と向かって言えるでしょうか。心配です。それから奏絵ちゃんは彼のことをいろいろと教えてくれました。三つ離れた妹がいること、私の一個向こうの駅から電車に乗っていること、中学の時は剣道をしていて、高校からは弓道をやっているらしいこと、今まで付き合った女の子は多分いないこと、勉強はそんなに良くないけれど、絵と音楽がそこそこうまいこと、などなど。彼女は暗い人が放っておけない性質なのだそうです。

「だから杏ちゃんにもいつ話しかけようかと思っていたのよ、でたまたま今日あんなシーン見ちゃったからこれは好機、今を逃していつやるか、と思って。我儘なのよね、私も」

それはもう、言われるまでもなくよく分かりました。あれは確かに、今思い出してみれば、ぜひお節介を焼きたいところでしょう。しかし何もずっと物影から見えていなかったいいのです。確かに交差点のまん前で（それでももちろん端には寄ったのですが）、相合傘などしている方が悪いといえそうですが、それでいてわざと後から追い付いて、というのは卑怯でしょう。とはいえ悪意があったわけではないので、もちろん不満というほどのものもありませんが。

話は色々な所へ飛びました。お互いの趣味、聡太さんの趣味、彼は本もよく読むタイプだそう

です、奏絵ちゃんは別ですが、それから彼にまつわるエピソードを幾つか。話してみれば落ち着いていて他の男たちみたいないい加減なところやがつついたところがないこと、話をちゃんと聞いてくれること。余りにも奏絵ちゃんが聡太さんのことを知っているので、訊いて嬉しい一方でもややもや大きくなっていくことに私は気付いていました。今はもうその感情の名前も分かります。奏絵ちゃんはそんな私の心曇りを見透かすように、からかうような目線をたまに向けて、しかしはっきりとこう言いました。

「あのね、あいつのことはいい奴だとは思いますが、恋愛感情には絶対違うから安心して。いい奴いい奴どうでもいい奴、ってね。あ、怒らないでよ。私の趣味じゃないっていうか。ああいう子供っぽい大人しさはちょっとね。一皮むけてないっていうか。ちょっと、怒らないでってば。悪いっていうんじゃないんだから。とにかく、私はもっと大人！ って感じの人がいいのよ。ていうか年上。私より早く生まれててくれないと」

それもよく分からない趣味ですが、言いたいことは分かるような気がします。大人びた男性、いい響きです。でも聡太さんは子供っぽいでしょうか。まあ確かに、彼女からしてみれば、自分から積極的にコミュニケーションが取れないのはまだまだだね、ということなのかもしれません。それは私にも当てはまります。そして私はそれを、確かに大人というのとは違うものだという事は十分認識しています。しかし彼は私に話しかけてくれました。落としたものを届けてくれました。必要な時に必要なところで必要なことをちゃんと伝えられれば、それでいいような気がします。私だったら出来たでしょうか。するべきだ、という気持ちはあります。しかし出来るかどうかは別問題です。それがお年寄りや女性だったら、恐らく何の障害もなく私は同じことができるでしょう。しかし異性に対して出来るでしょうか。自信がありません。それが出来るということは、すごいことだと思うのです。下心のあるなしに関わらず。

そう言えば、と私は彼女にひとつ打ち明けました。そう、拾って届けてもらったというのに、お礼を言うのを忘れていた、ということです。話してからしまった、と思いました。獲物を見つけた猛獣の目、というには可愛すぎますが、待ちに待った餌を前にした猫のような、きらん、という効果音が聞こえてきそうな眼を向けて、それはダメだよ！ とまたぐいと詰め寄られました。楽しんでるようにしか見えません。

「それでそれで、どうするの？ やっぱ早い方がいいよね、そういうのは。出来れば今日中、帰りとか。あ、私携帯のアドレス知ってるよ。アドレス教えてあげる。え、携帯持ってないの？

うー、予想外。じゃ私が連絡しとこっか、杏ちゃんがお礼言いたって。だめ？ だーめ。ふふふ、甘く見ないでちょうだいよ。もう送っちゃったもん。あ、返信来た。早い早い」

私が何と言おうとかまわずに、奏絵ちゃんはそれから何通かメールのやり取りをした後、話を進めてしまいました。結果そうして差し出された携帯の画面には、確かに彼からのメール、そこにはこう書かれていました。

冬峰杏さん、蘆谷聡太です。今日はどうもです。坂崎さんと同じクラスなんですね。こちらこそ拭いて貰ってすみません。自転車置き場に傘を忘れちゃって。あ、でも結局コンビニで傘とタオル買ったんで大丈夫です。冬峰さんは大丈夫でしたか。

放課後、駅前にいます。そこで会いましょう。

最後の文章を読んで、私は自分の顔が熱くなるのが分かりました。放課後、駅前で。彼が私を待っているのです、私の名前を呼んでくれる彼、影も形も温度もある彼、まなざしも声も届く彼が。隣で奏絵ちゃんが楽しそうに見ているのも気になりませんでした。携帯を握ったまま上を見上げます。味気ない天板、簡素な電灯、別段何の感慨も湧かない普通の学校の天井です。

「良かったね、杏ちゃん」

振り向けば奏絵ちゃんが、さっきみたいな人で楽しんでいる顔じゃなくて、いつかみたいに微笑んでいました。思わず私はまた上を向きます。ぎゅっと袖口で瞼をこすりました。今なら言えます、彼女にもちゃんと。言葉にすれば伝わるのです。

「ありがとう、奏絵ちゃん。ほんとにありがとう」

「そんなかしこまなくてもいいよ、お節介なんだから。こんなこと言ったらなんだけど、楽しんでたし。お互い様ってことで。もう、こっちが恥ずかしくなるってば」

確かにそうかもしれませんが、でもそうじゃないのです。私にとってどれだけそれが大きかったのか、きっと分かっているのでしょう、照れくさそうに奏絵ちゃんは私の背中をばし、と叩きました。予想以上に力が入っていてちょっと痛い、でもなんだか笑ってしまいます。ひとしきり二人で声を出して笑った後、奏絵ちゃんは急に真面目な顔になってこう言いました。

「でも、ほんとによかった。それだけ笑えれば絶対平気だよ。好きになっちゃったんでしょ？ うまくいくといいね。その相手があいつ、ってゆーのがちょっと、んー、って感じだけど」

あーいいな、あたしも好きな人がいたらなあ。ぼつりと奏絵ちゃんが呟きました。その響きと表情は、昨日までの私、貴方を追っていた私。ああ、そういうことだったのです。でも大丈夫、彼女みたいに強い人なら、私のようなことをせずにはちゃんといつか好きな人が出来ることでしょう。きっとすごくラブラブ、もうこの言葉は死語なのでしょうか、でも幸せになると思います。最も彼女の場合、年上より年下の人の方が相性は良さそうですが。二人して上を見上げて、ちょっと視線を下げて窓を見れば、もう雨は降っていません、曇り空の向こうに淡い光、何だかとても感慨深くなって、自然とため息が零れました。

今日の授業はすべて終わり、私は駆けるように下駄箱へ、教室を出る前に奏絵ちゃんの方を見れば、またあの笑顔、私もうまく笑って返せたと思います。逸る気持ちを抑え、走りたい足を確かに、まだ雨の残る道を歩きます。雲間からは夕方の太陽、でもまだ夕日にはほど遠く、影を大きく従わせながら、水たまりに映る空、雨の匂いを含んででも何か透き通った空気、その中でやはり豊かな緑の匂い、見えないだけできっとそこそこに草木があったのでしょうか、鈴蘭のような、まだ時期には早い、連日の雨で気をもんだのかしら、ほんの少しだけの可憐な香りがして、鼻から大きく息を吸いました。朝の交差点を渡ります。もう駅は近く見え、ああそこに彼がいるのです。両手で鞆を持って、今ならスキップでもしてしまいそう、ロータリーにはほどほどの人いきれ、階段の下には本を読む制服姿の男性。彼です！ 思わず早足になり、その足音は彼にも届いたらしく、顔を上げます、私は手を振りたい気持ちをすんでのところで抑え、びっくりしたよ

うな表情の彼、そうかもしれません、朝はあんなに無愛想だった私が、今は微笑んでいるのが分かります。彼は小説を鞆にしまい、こちらに向かって手を振りました。何を読んでいたのでしょうか。ああ、それから話せばいいんだわ。結局足は逸るままに早く、息を切らして彼の前へ立ちました。

「あ、あの、ほんとに来てくれたんですね、冬峰さん」

彼は朝みたいに頭をかきながらそんなことを言いました。来ないはずがあるでしょうか。私から声をかけたようなものです。

「来ました。聡太さんも。お早いですね。待たせましたか」

「いや、そんな。でも走ってきて良かった。そ、その、えっと、や、実はすごく緊張しているんです。情けないんですけど、こんな風に女の子と待ち合わせするのって初めてで」

そこで彼はちらっと私の方を見やりました。なんだか可愛い瞳です。おかげで私の方は緊張をそんなに感じなくなりました。

「私もです。情けないんですけど。走ってくれば良かった」

「や、そんな、別に情けないです、あーいや情けないのか、いやでも俺はそうですけど、冬峰さんは違うっていうか」

どうしよう困ったな、と頭を抱える聡太さんの慌てっぷりは見ていて飽きないものがあります。よほど緊張しているのでしょうか。くす、と思わず笑ってしまいそうになって、でもそれは失礼だと頬の内側だけでとどめておきました。その代わりに言葉にしたのは、今日彼を呼び出した理由です。

「今日は本当にありがとうございました。このタオル、気に入っていたんです。あの後遅刻しませんでしたか」

「あいや、そのこちらこそありがとうございます。拭いて貰っちゃって。えっと、遅刻はすいませんしました。あでも冬峰さんのせいじゃなくて、いやほんとに、鍛えてないのが悪いっていうか」

「でも、これを届けていなかったら遅刻しなかったでしょう」

「それはそうですけど。いやでもほんとに気にしないでください。ほんとに冬峰さんのせいじゃないんで。あ、じゃあ」

そこで彼はいったん言葉を切って、窺うような視線をまた向けて、意を決したのかこんな申し出をしてきました。

「その、もし良かったら、どっかお店にでも入りませんか。良かったらでいいんですけど、ぼ、僕もお礼したいんで」

「いいですよ。じゃあそういうことで。どこに入りますか」

「ほんとですか。あ、じゃあ、紅茶とコーヒー、どっちが好きですか。あ、ファーストフードでもいいんですけど」

「紅茶の方が。でもこの辺紅茶のお店なんてあったんですか」

「そうなんですよ。反対側にあるんです。逆ですよ、こっち側が女子高なのに。絶対その方が儲かると思うんだけどな。でもその制服の女の子も来てますよ。野郎はあんまりいません」

「じゃあそこへ。知りませんでした、反対側に行かないので」

「そうですね、あ、僕もこっち側降りたの今日が初めてなんです。こっちはロータリーなんですね。向こうは駅前商店街って感じなんです。いろんなお店がありますよ。僕も入ったことないですけど。紅茶のお店も実は入ったことないんです。一人だと入りにくくて。入ってみたかったんですけど」

「聡太さんも、コーヒーより紅茶がお好きなんですか」

「そうなんです。男っぽくないですよ。あ、でも炭酸とかも好きなんですけど。コーヒーも好きですよ。でも、実は苦いの苦手なんです。ほんと男っぽくないっていうか」

「そんなことないですよ。落し物、走ってまで届けてくれたじゃないですか。ほんとに嬉しかったんですよ。こうやって、わざわざ呼び出してしまうくらい。こんなふうに男の人と歩くなんて、考えてもいなかったんですよ。坂崎さんに押された部分も結構ありますけど。坂崎さんとは仲良かったんですか」

「仲が良いっていうか、その、あいつお節介焼きじゃないですか。分かると思うんですけど。だからなんか血を湧かせちゃったみたいで。でも、あいつにもお礼言わなくちゃですね。僕もまさかこんな早く冬峰さんに会えるとは思ってなかったんで。あ、ここです紅茶のお店。なんかやけにおしゃれなんですよ」

と言って彼が指差したのは、木造の小奇麗な建物、窓にはプランターを掲げ、深い茶色の扉には看板が掛かり「OPEN」の文字、外に出ている黒板にはメニューの一覧、こんなところにあるのは勿体ないようなお店です。窓から中を覗けば、ちらほらと年配の方、混じって私と同じ学校の女の子二人組、彼が扉を開ければカランと小気味の良い音を立てて、静かに音楽のかかった店内が開かれました。後に続いて奥の席まで。マスターらしき初老の男性がお冷を持ってきてくれました。なんてところでしょう、こんな近くにこんなところがあったなんて。

私たちはマスターのお勧めに従って、早摘みのダージリンをホットでいただくことにしました。私はもう天にも昇る気持ち、でも彼はまだ緊張しているようです。それに、誰かと話しているとこんなにも時間の経つのは早いのです。階段を下りて構内を渡ってまた階段を降りるだけの道程でしたが、話していたらいつの間にか、という感じでした。何を話そうか迷うこともなく、いつもみたいな一人の煩悶に陥ることもなく、自然と話せたのが自分でも不思議に思います。私がこんなふうに変われるなんて思いませんでした。いいえ、きっとそれは違います。彼だから、彼でなかったら、私は変わることはなかったでしょう。或いは彼女のおかげももちろんありますけれど。

本当に今日はなんていう日なのでしょう。たった一日、たった二人、それだけでこんなにも世界が変わるなんて。貴方がいればそれだけで世界は鮮やかに、こんなにも色を持って、貴方が傍にいてくれたらそれだけで幸福が微笑むのです。

私たちは一時間ほどその喫茶店で話した後、代金を持つとうとする彼を何とか説得して折半にし、同じ電車に乗って帰りました。その間も話は止むことなく、いいえたとえ話なんてなくても気まずいものは何もなく、あっという間に最寄りの駅へ着いてしまいます。彼はひと駅先。私たちは手を振って別れました。別れ際、最後に彼はあのひどく澄んだ目をしてこう言いました。

「今日、ほんとに楽しかったです。あ、僕いつも今朝と同じ時間に乗っているんです。うちの

部活、朝練するほど真面目じゃないんで早くないですよ。だからその、もしよかったら」

頷いて私は、朝よりも軽い足取りで家に帰ります。寝る前に私はいつものように机を前にして座り、今日のことをあれこれ思い出しました。貴方からの絵葉書を二枚取り出して眺めます。もう寂しさはありません。大事にそれを仕舞いなおして、私は床に就きました。今日はきっといい夢が見られるでしょう。

次の日眼がさめれば、昨日とはうって代わって、はっとするほど気持の良いお天気、カーテンを開けて窓を放てば、暖かな光が部屋に差し込み、そこでふと予感がして机の上に目をやりました。三枚目です！そこには紛れもなく、私の名前が書かれた絵葉書が折り目正しく置いてありました。いそいそと手に取ってみれば、表側にはやはりそれ以上はなく、裏側の下半分には気の早い淡く紫陽花、上半分にはこう書かれていました。

名前も教えず、姿も見せずに消え去る非礼をお許し下さい。

貴方でなかったら、私は変わることはなかったでしょう。

こんなふうに葉書を書くなんて、考えてもいなかったのです。

どうか幸福が微笑みますように。では、さようなら。

ああそうです。貴方でなかったら、誰も私を救えたはずないのです。自分ではどうしようもないほど、熱いものが私の中にもあると、私の体を巡る赤に、気付かせてくれたのは貴方なのです。貴方でなかったら、私はこんな風に微笑むことも出来なかったでしょう。思わず胸を打たれ、いいえ締め付けられて、今はもう確かな、それさえ知らなかったのだと、溢れ出しそうになった雫を昨日洗い忘れた桜色のタオルで拭き取りました。

まだ予感があります。伝えたいこともたくさん。窓の外を向いて、タオルを胸にきゅっと抱いて、私は小さくゆっくりと、貴方の名前を呟きました。

FIN.

Far from free fall.

人に言えないような思い出の一つや二つ、大抵の人は持っているものだ。小学生のとき一度だけ万引きした、とか、新任の女の先生が本気で好きだった、とか。好きな女の子の縦笛をなめた、なんてのはありきたりなようで意外とないことなのかもしれないが。ともかく言いたくないことくらいはある。そのくせそれは忘れられなくて、普段は意識に上ってこないからいいのだけれど、夜布団に入って眠る前とかに急に思い出されてきたりする。それでまた悶々としたり、後悔したり、感傷に浸ったりするわけだ。あのときこうしていればよかったな、なんてよく考える。考えてみれば実際自分のやったことなんて失敗ばかりで、死ぬ間際になって後悔ばかりが残るんじゃないかと未来のことまで不安になったりもする。よく考えることは良いことだけれど、それが精神衛生上よろしくないことも少なくない。

だけどその一方で、後悔だとか反省だとか自己嫌悪だとかいう言葉なんて知らないんじゃないか、と思うような人間もいる。不思議なことに、そういう人には二つの極端なタイプがあって、一方がどうしようもなく天才的なバカ、その一方が計り知れないほどバカみたいな天才だ。最初の奴は放っておけばそれでいい、けど後ろの奴は、能力が人一倍あってそれをよく自覚し自信を持っているようなやつだから、いちいち自己嫌悪に陥るようなまねはしない、反省はしても後悔はしないのだ。正直なところ羨ましいが、まあ僕みたいな普通の範疇に収まる人間には理解できないことなのだろう、とってしまう辺りが僕らの小ささで、さっきはバカみたいな天才、と形容させて貰ったけれど、その紙一重は結構分厚いのだろう、ということはよく分かっている。

学校一の美少女と噂される人物が、その類のバカな天才だ、という話にそろそろ移ってもいいだろう。一個上のその先輩は、入学早々の一年生の間にもすぐに噂が伝わって、何人かはわざわざ見学しにいったそうだ。僕の後ろの席のやつもその一人で、その瀬田浩二に言わせるとこうだ。「噂どおりってかめっちゃ綺麗な人だった。なんか難しそうな本読んでたぜ。あーでも釣り目で結構キツイ感じかなあ。近寄り難い感じで声なんかかけられねえよ。でもそこがまたいい。粕谷冴、って名前もいいよなあ。ヤバいぜ。濡れる」。ヤバいのはお前だ、とは思うけれど、こいつは最初の方の天才的なバカだから、とりあえず放っておくことにする。何が濡れるんだよ。拭いてこい。

容姿の綺麗さは分かってもらえたこととして、頭の方の話をしよう。さっきも言ったけれど、こっちはバカみたいな天才の方だ。高校生数学コンテスト、とかいうものが開かれている、なんてことは普通に生きていたら知らなくたっていい、というか関わり合いがないことだけれど、ここではその話をしなければならない。そのなんたらコンテストでこのバカみたいな天才は、見事に優秀賞を取ってしまった、といえはなんかとんでもないことだ、と思ってくれるかもしれない。けれど、それはちょっと間違いだ。このコンテストはエレガントな解答を示した応募者に優秀賞を与えるもので、それは一人と決まっているわけじゃないし、エレガントな解答が一つだけしかないわけでもない。中には出題者が思いもしなかった方法で解を導く猛者もいるわけだ。だからまあ、日本中の高校生で十本の指に入るくらいの数学バカ、くらいに思ってくればいい。充分凄いことだけれど、世界で言えば百本指くらいだ。もっともその中でどのくらいの位置に居るかは

まだ分からないのだけれど。

で、このコンテストにはアムステルダムで開かれる世界大会がある。国ごとのチーム戦で、三日位の短い期間でいかに速く正確でエレガントに答えられるかを競うもので、世界中の数学バカが集まって、与えられた難問に頭を悩ませる。言葉の方はどうするんだって？ その位のやつが英語を喋れないわけがないだろう。まったく、日本の普通の進学校の生徒だって、あたり前のように英語を話せる奴なんてそうそういないって言うのに。うちの学校も県内では有名な進学校で、僕だってそんな悪くはないはずなのだけれど、というか絶対悪くないのだけれど、そういうバカみたいな天才がいると自分が恐ろしく頭の悪い人間みたいに思えてくる。もっともこれほどの奴なら仕方がないことなのかもしれない。数学の教師たちでも、全く相手にならないと言うし。

まあともかく。そのどっかしらのコンテストで、日本のチームはドイツ、アメリカのチームと張って同率一位という結果を出してしまった。どうしてこんな島国の人間がそうなるのか詳しく教えていただきたい。割合としては同じなのかもしれないけれど、母数が全然違うじゃないか。テレビのニュースでも放送されたから、さっき言ったことは撤回しよう、普通に生きていてもそのくらいの関わり合いはあるものだ。

彼女がどれくらいのバカみたいな天才なのか、ちょっとは分かってもらえたと思う。このコンテストの話はその片鱗に過ぎない。最近は単純な数学だけではなく、どうやら人工知能の開発に勤しんでいるらしい。「完全な私のコピーを仮想世界に作り出すわ」とはその言。そんなことできるわけがない、とは思うけれど、いいところまで行ってしまいそうで恐ろしい。

なんでこんなに彼女のことを知っているかって？ きかなくたって予想は付くだろう。学校の噂なんかあてにしなくても、天才的なバカたる瀬田浩二の話など聞かなくとも、僕は多分、この学校で彼女の次に彼女のことをよく知っている。少なくともそのうち十五年分くらいは知っているはずだ。もちろん全部覚えているなんてことは言わない。まあ、彼女の方は僕の十五年を覚えているかも知れないけれど。

僕と彼女は幼なじみだ。稀代の天才たる粕谷冴が、僕の斜め向かいに住んでいるなんて話をしたら、今後ろで携帯電話を弄っているバカはどんな反応するか知れたものじゃない。

「なんだこっち向いて。なんか付いてるか？」

気付かれた。上から覗こうかと思っていたのに。

「いや別に。何見てるのかと思って。珍しく静かだから」

「これは秘密なんだが、何を隠そうエロサイトだ。お前には教えねえぞ。決してきょぬうの女教師モノとかを見ているわけじゃないぞ。ホントだぞ」

「お前、それセクハラだよ。いくら今日から教育実習生がホームルームやるからって」

「友よ！ わかってくれるか」

「黙れ変態。チクるぞ。分かってないのはお前だ。だいたいどんな文章だよ。言うなら秘密って言うな。隠せ」

「どうせなら叱られてえー！ 『な、何見てるんですか瀬田くん、こんなの見ちゃだめです！ その、そんなに興味があるなら、せんせいが、あ、相手をしてあげますから……』とか言われてえー！ タイトルは『秘密の女教師』とかで」

よし、放っておこう。相手をするだけ無駄だ。

「でもさあ、なんか可愛くないんだよな、こういう女優って。粕谷さんみたいな可憐な人がいーい！ あの顔あの髪冷たそうなあの眼差し！ ほんともうやばいぜまじで柔らかそうな胸の膨らみとか細く括れた腰とかひゃっほーい、って思うだろ？ なあなあ新島君よう。英語の予習見せてくれよう」

最後のだけでいいだろ、変態め。というか結局外見しか見てないじゃんか。だったら何だっでもいいだろうに。

放課後になって帰路に着く。幼馴染と言っても、一緒に来たり帰ったり、朝には起こしてくれて昼には手作りのお弁当を差し出してきたりして夜には親同士が出掛けてしまって夕飯を作ってくれたりお風呂でキャッ、ドキッ、なんて展開は起きない。いや確かに、昔はそういうこともあった。小学校は一緒に行っていたし、一緒にお風呂に入ったこともあれば、同じ布団で眠ったこともある。しかしそれは今にしてみれば本当にあったのかも疑わしいようなことで、昔は姉弟みたいに仲が良かったのに、僕と冴の接点はもう薄くなってしまった。照れや気恥ずかしさもあったのかもしれない。男女を意識した、というのもあると思う。それでも中学まではそれなりにお互いの部屋に行ったりもしていたが、冴はそこにはもう難しい問題ばかり考えていたし、彼女が一年早く近くの進学校に行ってしまったのを境に、その繋がりもなくなっていった。同じ高校に入ったと言っても、それが復活したわけじゃない。最後に会ったのはいつだったか、ちょっと思い出すのに苦労しそうなほどだ。だからと言ってももちろん、彼女のことが嫌いになったわけじゃない。むしろ逆だ。僕は昔からずっと冴のことが好きだった。お互い一人っ子だったから姉弟みたに過ごしたし、一緒にいるのが当たり前だったし、何より冴は面倒見が良かった。

電車に乗る。ローカル線の乗客は、この時間高校生ばかりだ。

冴は確かに昔から無口な方だった。というより、本を読んだり勉強したりする方が好きだったのだ。それに付き合っていた僕もおかげさまでそれなりの頭になったけれど、彼女の方が凄かった。一時的に僕の方が良いこともあったけれど、敵わない。最も学年が一つ違うんだからそんな比較に意味はないが。

もちろん、勉強ばかりじゃない。冴は独特なゲームを思いつくことにかけても天才的だった。これは本当に小さい頃、小学校低学年くらいまでのことだけど、二人きりでするごっこ遊びは最高に面白かった。その時は彼女だって普通の子供らしく大げさに笑ったりとび跳ねたりしたものだ。ロビンソン・クルーソーを読んでからは専ら無人島ごっこだった。まず何を持っていくか。制限された重さまでなら、無人島に持っていくことができる。彼女や僕の部屋にあるもの。ご丁寧に、彼女はそれを一つずつ秤に乗せた。限られたものの中でどれとどれを持って行けば生き延びられるか、真剣勝負だ。最初の方、僕たちは敵対しているという設定で遊んでいたけれど、毎回僕が負けるので、いつからか二人して無人島に漂着していることになっていた。親が部屋に入ってくると隠れるのだ。彼らは人間を食べる猛獣だった。酷い設定だ。ベッドに隠れて布団をかぶる。ばればれなんだけれど、彼女のお母さんなんかはそれを見越して見つけれないふりをしてくれた。そんなとき、僕らはくすくす笑うのだ。抑えようとしても止まらない。と、急に冴が

僕の脇腹を擦ってくる。きゃは、とくすぐったさに声を漏らして、すぐさま口をつぐんで我慢する。それと同時にお返しだとばかり彼女の脇腹を擦り返す。なんだかんだ、最終的にはそんなふうじゃれあっていた。子どもながら普段は釣り目できつい印象を与える彼女の目も、笑えば丸っこい輪郭を描いた。

高学年になると、流石に気易く擦るのはためらわれた。そのころ遊んでいたのは、彼女と僕で考えたボードゲーム。将棋やチェスと同じようだけど、囲碁の要素もある。駒で陣形を作るのだ。そうして陣地を増やして行く。広げ過ぎると危険だ。駒同士には優劣があって、重なりあうと駒をとられてしまう。守るには広げ過ぎると悪手だし、しかし相手よりも広い陣地を取らなければならない。それにももちろん、王さまを取られたらおしまいだ。彼女は様々な戦略を考え出した。僕はそれに必死で対抗するのだけど、やっぱりいつも負けるのだ。たまに、彼女のミスが原因で勝てる時もある。その時の彼女の頬を膨らした顔、むくれた表情は今思うと貴重だったのかもしれない。

中学生になると、僕らはもっぱら話してばかりになった。学校の話、勉強の話、ニュース（彼女は毎日欠かさず見ていた。というわけで、それは僕の日課にもなった）、小説や漫画、もちろん、というかまあ、下の話も。中学生の頭の中なんてそんなものだ。彼女はあけすけだった。外見には純情だった僕をからかっている節さえあった。そのころにはもう彼女は二次性徴の真っ盛りで、日々増えていく膨らみとくびれの差はいつそ神秘的ですらあった。僕にとっては当然神秘以上の何者でもなかった。秘匿されるものは見たくなくなる。触れないものは触れてみたい。しかしその輪郭だけを与えられても、中身は妄想で賄うしかない。彼女はそんなこと見透かしていたから、ふとした拍子に後ろから抱きついてきたりした。僕の頭には膨らみのことしかない。声は上ずり、動揺も明らか、嬉しいか聞かれても困る。僕をそんなに変態にしたいのか。

ただ、そのころから彼女はクラスの輪に入っていないようだった。愕然たる能力の差は歪な感情を生む原因になる。いじめられていた、ということはなかったらしいけれど、友達がいるような様子もなかった。一人ぼっちだったのだ。だからずっと僕と遊んでいたんだろう。一個上の女の先輩と毎日遊んでいる、なんてからかわれたが、僕だってそんなことどうでもよかった。案外僕も冷たいのだ。しかし彼女の視線はもっと冷たい。軽蔑し、見下しているように受け取られても仕方がなかった。もっとも彼女自身は、何とも思っていなかったのだけど。

しかし、二人で過ごす時間は減っていった。彼女が本気で勉強に取り組み始めたからだ。何か強大なものに挑んでいるように彼女は勉強した。彼女の眼は更にきつく物事を見つめるようになった。離れたのは僕の方じゃない。彼女が僕を避けるようになったのだ。その時はなんでだか分からなかったけれど、今なら想像することくらいは出来る。僕もクラスで浮くようになってきていたのだ。いくら普段普通に話していても、特に部活を本気でやるわけでもなく、その上放課後彼女以外の誰かと遊ぶでもなく、としていれば当然だ。僕がそんな状態だったということに、冴なら簡単に気付いたはずだった。というよりも、最初から予想できていたはずだけど。ともかく最初の一年は変わらず彼女とたくさん話をしていたけれど、学年が上がるに従って彼女との関係は離れて行き、通う場所が違ってしまったのを境にぱったりと止んでしまっていたのだ。

電車から出て、改札を抜けると家までは歩いて十分もかからない。帰り道の途中に冴の家はある

。同じ高校に入ったというのにも関わらず、接点は一向に現れなかった。行く時間も帰る時間も違うらしい。学校では何度か遠目に見たことがあるけれど、それだけだ。もうどれくらい話していないだろう。一年、いやもっとだ。次の角を曲がれば冴の家が見える。彼女の部屋にももうずっと行ってない。

角を曲がると、見なれた黒髪が揺れた。艶のある凜として濡れた羽は中から視線を覗かせた。草の香りを含んだ暖かな風が吹いて、髪の毛がふわりと上がる。

冴だ。足は動くのを忘れてしまう。呼吸さえ、僕の体は必要としていなかった。十メートルほど先の彼女の家の前に冴がいる。僕を認めた瞳は微笑んだ。走り出したい。でも、全身を痺れが震わせる。彼女の口が開こうとする。僕の耳は神経を集中させる。

「久しぶりね、祐希」

その言葉を聞くために。

階段を上るとすぐ右手が彼女の部屋だ。誘われて部屋に入ると、内装はいつかと殆ど変わってなかった。一つだけはっきり違うと分かったのはパソコン。二まわりは大きくなっていて、電源がつけばぱなしなのかファンの音が聞こえてくる。何の気なしにベッドに腰かけてから、先に許しを貰うべきだったか、と後悔した。彼女は椅子に腰かける。

「いつ以来だったっけ、私の部屋に祐希がいるの」

スカートをはいたまま冴が足を組もうとしていたので僕は壁にかかっていたポスターに視線をやった。

「一年以上前だと思う。冴が受験勉強始めてからは来てない」

そうだったわね、と言って冴は立ち上がった。飲み物いる、と聞かれたのでいるよ、と答える。

「ちょっと待ってて。何があったか見てくる」

冴はぱたぱたと音を立てて階段を降りていった。僕一人だけが残される。何もないのにそわそわする。ふと眼をやったらベッドの端に脱ぎっぱなしだろうパジャマを見つけた。それが何だって言うんだ。眼を逸らす。本棚を流し見る。小説の合間合間に難しそうな新書や文庫本が並んでいる。思想書っぽいものが増えていた。マンガは相変わらず殆どない。どう見ても英語の原書が独和辞典の上に乗っている。僕が読めそうな本はあまりなかった。

「牛乳、コーヒー、紅茶、お茶、どれがいい？」

階下から冴が声を張り上げた。お茶、と返すと、だと思った、と言って冴はもう階段を昇り始めていた。すぐ部屋に戻ってくる。お盆にはお茶請けも乗っていた。

「昔っからおじいちゃんみたいよね」

差し出されたコップを僕は無言で受け取った。冴も椅子に座って自分のコップに口を付けている。三口飲んでから喋りはじめる。とりあえず、当たり障りのないことから。

「同じ学校行ってるって、冴、知ってた？」

ずず、とやってから冴は答えた。

「知ってたわ。お母さんから聞いたもの」

冴は重心を移動させて回転イスをゆっくりと回す。

「冴はこの一年で何か変わった？ 数学の世界大会以外で」

「知ってたんだ」

「知ってたよ、お母さんから聞いた」

やっぱりか、と言って冴は足を組み替えた。僕はまた壁に目を逃す。スカートは眼に毒だ。保養にはなるけれど。

「でもすごいよね、世界大会でしょ。頭良いのは知ってたけど、そこまでだとは思ってなかった」

「上には上がいるわ。それに祐希だって、同じ学校じゃない」

「そうけどさ、うん、でもすごいよ」

素直にそう述べると、冴は小さくありがと、といった。

「でも、朝も帰りも見ないよね。何分の電車に乗ってるの？」

「結構遅いわよ。ぎりぎり間に合わないくらい」

いや間に合おうよ、と突っ込んだら、時間に縛られるの嫌、と返されてしまった。これで頭が良いんだから手に負えない。

「でも、なんで今日は家の前にいたの？」

僕は冴のベッドに座ったまま上半身を乗り出した。冴の顔をじっと見つめる。

「あー、ちょっとね、話がしたいと思って」

冴は向こうを向いてしまった。足をぷらぷらさせている。

「駄目だった？」

「ううん、全然」

そう、ならよかった、と彼女は零した。僕の頭の中では、冴と話せるんだったら嬉しいよ、なんて科白が浮かんでいただけで首を振ってそれを誤魔化した。そんなこと言えるか。

「どんな話？ 何でもいいけど」

変わりにこんなことを聞いた。冴はまたぎい、と椅子を半回転させて僕と対面する位置に直る。また足を組み直した。どうすればいいんだ、いい加減。

「うん、まあね。最近、ずっと考えてたの」

冴も身を乗り出した。僕たちの距離は互いの接近によって今や近い。唇が濡れている。冴の睫毛は結構長い。頬には染み一つなかった。なんて、どうしてもまじまじと見てしまう。

「それで、祐希に答えてほしくなったの。どうしても、私一人じゃ答えが出せなかったから」

な、なにを。そう言うのがやっとなら。彼女は何を言うんだろう。僕は何を言われるんだろうか。

「すごく、大事なことなんだけど。答えてくれる？」

冴は顔をずい、とこっちへ持ってくる。微かに聞こえるのは彼女の息遣い。早まる心臓の鼓動が彼女に聞こえていないかどうか、なんて考える余裕はもうなかった。

「祐希がどう思っているか、訊きたいの」

「いいよ、答える」

僕はもう覚悟を決めていた。すごく大事なことを聞くために。一つ呼吸をおいて、ゆっくりと彼女は口を開いた。

「私たちって、とっても不自由だと思わない？」

「え？」

質問の意図が分からなかった。冴は身を引いてしまう。背もたれに体を預けると、ぎい、と椅子が唸った。彼女はまた一口お茶をのむ。つられて僕も口をつけた。温くなってしまった緑茶が、それでも十分頭に効く。だけど、やっぱり分からない。

そんな僕をよそ眼に彼女は話を始めてしまう。

「自由って何なのかな、って、昔からずっと悩んでるの。私たちって自分のことを自由な生き物だ、って考えてるわよね。自分の好きなことを選択できる。別に、買い物とかじゃなくてね。未来は自分で作るんだ、なんてよくある言葉だわ。でも本当にそうかしら？ 私たちって自由だと言えるのかしら？」

「運命論って知ってる？ 物理法則と因果の概念によって全てはもう決まっているんだ、っていう仮説なんだけど。これを否定するのって、すごく難しいの。物理法則と因果の概念がある、ってことを否定することはできないものね。だって、リンゴは木から落ちるでしょ。水をかければ火は消えるし。だから、そこから導き出される結論だけに反駁しなければならない。或いは、その推論過程そのものを」

「いろいろ調べてみたんだけど、ずいぶん昔から解決していないのよ。幾つかの進歩はあったわ。自由にも運命にもすり寄ろうとする、両立論なんていうものも出てきた。哲学者って暇ね。それを考えている時点で、私が言えたことでもないけれど」

「でもね、どれも私は間違っていると思う。正しくない。自由だって言うのは論点先取だし、運命論は中途半端。両立論なんて主張が整合的ではないもの。だってそうでしょ。それを選ぶことはもう決まっていたけれど、別のものも選べた、なんて意味が分からないわ。そんなのは自由とは呼べない。運命はもっと強力よ。彼女は全てを縛りつける。たとえ自由を唱える人がいたとしたって、人間は自由な運命である、なんてどうして間違っているって言えるの？ 自由なら自由で、そういうふうに決められていた、っていうのは十分あり得ることじゃない」

「でも、大多数の人はそれで満足するんでしょうね。自由な運命なんだから、何の問題があるんだ、って。だけど、私はそんなの我慢ならない。どうして自由じゃないの、本当の自由ってないの？ ずっと考えてた。どんなものが本当の自由と言えるのか。どうすれば、運命の女神から逃げることができるのか」

彼女は白熱していた。一気にここまで言ってしまうと、ふう、とやっと一息ついた。僕の方と言えば、まだ理解は追いつかない。いやもう、話にはついていけない。彼女が主張することもあらかた呑みこめた。でも僕はどうやら大多数の人のような。自由な運命、それでいいじゃないか。

「今までの話、いい？ いきなりでごめんね」

「うん、まあ、とりあえず言ってることは分かったと思う」

そう言えば昔もこんな風に難しそうな問題についてよく話し合ったっけ。少しでもあんなこと

を期待した自分が情けない。

「じゃあ、その先ね。ここからが私の本当に言いたいことだから。今までののは、単なる論理の話。だって、どう考えることができるか、だけに頭を悩ませていたってしょうがないわ、そう思わない？ 哲学ってだからダメなのよ。口ばかりで何もしないんだから。考えていることは面白いけれど」

「でね、どうするか、ってことなんだけど。私はね、何よりも自分が自由になりたいのよ。私がかんな不自由な存在だなんて許せないわ。人間は自由な運命である、って言ったら、石ころは自由に落下する、って言ってるのと大差ないじゃない。私の意思は重力に従って自由に落ちることじゃないわ。そんなもの、自由な選択とは言えない。始めから分かり切ってる軌跡に従うだけじゃない。そんなの嫌よ。私は全て自由にしたい。それにね、どんな可能性だって捨てたくないの。もし人間が自由に選択できるとしたって、そのつど選べるものは与えられた選択肢の中の一つでしかないでしょ。そんなの、一つしか選べないなんて不自由よ。全て選んで、どんな可能性だって知れて、それでこそ自由って言えるんじゃないかしら」

そうかもしれない。僕にはまだ自分の意見なんて出てこなかった。話が遠大すぎる。興味のない人から言わせれば、どうでもいいことだと言われるだろう。卑近な話ではない。

だけど確かに、自由って何なのか分からない。今まで僕は、自分は自由だと単純に思っていた。それは信念じゃない、思いなしだ。そこに思考はない。ただの思いこみだ。だけど彼女の言っていることはそうじゃない。全てを見透かす運命の女神。はじめから終わりまでが、始まったその瞬間に決まっていて、あとはただその軌跡に従うだけだ、なんていうのは確かに言われなき不快を感じさせた。論理ではない、ただの感情だけだ。

だけど事はもっと単純な気がした。

「でも、一つしか選べないのって当たり前のことなんじゃないの？ 一人しかいないんだし。二つ以上選択できるとしたら、僕が二人以上いることになっちゃうんじゃない？ 冴は、一つしか選択できない、っていうのが不自由なんだって言うけど」

冴の主張は非合理だ。それでは現実に悖ってしまう。僕も冴も一人しかいない。それを変えることは不可能だ。

冴の顔色を窺う。唇に親指を当てて考え込んでいる。ふと、僕が見つめているのに気がついた。

「ごめん、考え込んでた。続けて」

「いや、もうないんだけど。でも、うーん、こんなことを言っても問題に答えていることにはならないんだろうけど、たった一つしか選べないんだから自由なんだと思うよ。どれを選んだらどうなるのか、なんて知らないし。情報の少ないその中で一つだけを選択すること、自分の命をそこへ運ぶこと、それが自由だ、っていうので僕はいいと思うんだけど」

「どうして？ それじゃ全てが運命だった、始めから決まっていた、って言われてしまわない？

確かに祐希の言っていることは魅力的だわ。でもそれは語り方の魅力であって、問題の解決にはなっていない。詩的だけど、論理ではない。それは投げられた石ころが、着地点を知らないのと同じよ」

「そうだけど。でも、実際無理じゃないか」

何が？ 冴は強固に反駁してくる。僕も思わず声を荒げた。

「だってそうだろう。冴は間違ってるよ。そんな風に考えたって仕方無い。どっちも空想だよ。論理的なものが現実的なものだ、なんて誰が決めたの？ 絶対に知ることができないのに。どっちも空想なら、自由だって思う方がいいじゃないか」

「そうよ、自由な方がいいわ、自由だって思えばね！ でもね、祐希が言ったようなのじゃ嫌よ。私は全然自由だなんて思えない。そんなの、無知な奴隷の慰みだわ」

冴はすくっと立ち上がる。僕もつられて立った。そうすると冴の顔が目線の少し下に来る。今はもう僕の方が背が高いのだ。最後に比べた時は冴の方が二センチだけ大きかった。いつの間にか僕は冴を抜いたのだ。僕はコップを握り締めた。

「僕は奴隷じゃないよ。確かに冴より知識はない。考えだって浅いと思う。だけど自由だって思ってる。僕はどんな未来だって選べるよ。それが現実的ならね！ 確かに出来ないよ。次の瞬間月の表面に立ってたり、過去に戻ってもう一度やり直したりすることは。でもだから、だからこそ選択する意味があるんじゃないか。冴はそれを分かってないよ」

「だから言ってるでしょ、そんなのは論理じゃないって。それに、祐希だって分かってない。現実的ならって言うけど、それ以外のことは出来ないじゃない。自分の力で現実にするって出来ないじゃない。それが自由なんじゃないの？ 何一つ取りこぼすことなく、全ての可能性を現実に出来たら、それこそ完璧な自由って言えるんじゃないの？」

冴と僕の視線は静かに結ばれている。瞳の奥には力がある。握りしめて手に汗をかいていたことに今更気付く。ふう、肺の底から絞り出すように息を吐いた。

「確かに、そうかもしれない。それはきっと本物の自由だよ。でもさ、冴、そんなもの手に入るって思ってる？ 僕は無理だと思うよ。だからってわけじゃないけど、僕はこの自由で満足してるよ。例え奴隷の自由だって言われても。何を自由と思うかなんて、それこそ人の自由だ」

冴の言っていることは分からなくもない。だけど僕はもう十分だった。この論議こそ無意味だ。こんなに熱くなったところで何も変わりはないのだから。

「思ってるわよ」

冴がぽつりと、しかし力の籠った声で言った。

「え？」

「本物の自由が手に入るって、私は本気で思ってるわ。夢物語だと言われても、現実的じゃないと言われても。何を自由と思うかは私の自由なんだものね。だけど、私は現実的じゃないなんて思わない。現実に見せる」

「無理だよ。一個の人間なんだから。人には人の自由がある」

「ならそれを超えるわ。何としても」

もう何を言っても無駄だった。並行線のまま不毛な喧噪を招きそうで、僕はコップを机の上に置いた。

「帰る。冴はそうするといいよ。冴の自由だ」

「そう、逃げるのね。それもあなたの自由だけど」

「そうだよ。そんなのは僕の自由だ。ここで帰るのも、脈絡もなく君を抱きしめるのだって、どっちだって選べたんだ」

「どっちも選べた？ 抱き締めたりなんて出来ないくせに」

むっとした。冴の手を乱暴に取る。きゃ、と驚いた声が出た。本当に予想していなかったらしい。胸の前に冴の頭がある。あとちょっとだけ力を込めれば、冴が腕の中におさまってしまう。

そこまでしておいて、僕は振り返って冴の部屋を出て行ってしまった。冴は何も言わない。視線が注がれているのだけは分かる。振り返りもせずに後ろ手で扉を閉めて、僕は大きく息を吐いた。何をしたかったのか、自分でも分からなかった。

次の日、粕谷冴は学校に来なかった。学校が終わって家に帰る途中、彼女の家の前は騒然としていた。おばさんがいる。スーツ姿のまま泣きわめいている。仕事から帰ってまだ間もないのだろう。パトカーがある。救急車もある。家の中から救急隊員が何も運ばずに出てくる。彼女の母親に何か告げる。塀に縋ったまま、ずるずると叔母さんはたち崩れる。一礼して彼らは去って行く。野次馬の中から僕の母親が出てきて、おばさんを抱き支える。冴、冴、どうして、とおばさんは喚いている。

彼女は、自殺していた。

そしてその日、ネットの世界は一つの自律プログラムで湧いていた。世界中の動画共有サイトにアップロードされたそれは、何の気なしに見るだけでは、よくある娘の成長記録のようであった。東洋人のごく普通の女の子の成長を俯瞰視点で撮り続け、それを何倍速かで流しているだけのものに思われた。しかしこれがどうやら高度にプログラミングされたものである、ということがそれをより有名にさせた。

その映像は、幼い女の子が生まれ、暮らす部屋の中が映されていた。彼女は助産婦の手によって生まれた。それから両親に愛され育てゆく。初めて一人の部屋を与えられたのは小学生になったとき。窓の外が明るくなると、女の子はランドセルを背負って外へ出ていく。そして暗くなる前に部屋に戻り、本を読んだり友だちと遊んだりする。友達はいつも同じ男の子。彼女はそのプログラムの中で急激に成長する。中学生になるとパソコンが与えられた。彼女は遊ばなくなり、男の子も前ほど頻繁には部屋に来ない。ヒマさえあれば勉強をする、という風だ。時には女の子が布団にくるまり、体を震わせている様子も淡々と流れていった。細部が判別できるほど鮮明な動画ではない。しかし、やっていることは一目瞭然だった。彼女は写真を眺めている。それからビクッと体を大きく震わせる。指をティッシュでふく。そんな様子が見て取れた。

制服が変わる。高校生になったのだ。体つきは更に大人びた。膨らみとへこみの差分は大きくなる。同じような毎日が淡々と流れる。そして二年目になった春、パソコンに向かって彼女は何か操作をした後、薬らしきものを飲んで自殺する。その動画はまだこの時点では、ネット上の暇な紳士たちのモノ好きな慰みものとして話題になる程度だった。とはいえ、その広がりようはなかなか大きなものだったけれど。

僕がその動画を目にしたのは彼女の通夜も葬式も終わった二日後のことだった。そして直ぐにその意味を理解した。そう、その成長記録に見える映像は、彼女が自殺したその日までプログラミングしていたものなのだ。彼女と遊ぶ男の子は僕だ。僕の記憶からは薄れてなくなりそうになってしまった部分まで、それは垂れ流していた。彼女はやはり、全てを記憶していたのだ。それは仮想的な彼女の軌跡だ。誕生からのあらゆるパラメータが、そこでは組み込まれ、時間の経過に伴って彼女は成長し、周囲の環境や関係も変化していく。これが彼女の言っていた「自由」なのだろうか。まさか。こんなただのデータでは、彼女が満足するはずもない。それにまだこれは不完全だ。だって、僕が覚えている幾つかの出来事がそこでは起こっていない。小学生のころ僕と彼女は互いの親に隠れて何度か一緒に眠った。起きていない。部屋の中でボールを投げて、案の定それが窓に当たり、ついでにお向かいのリビングの窓まで破壊していった。起きてない。クリスマスにお互いの宝物を交換した。彼女からはおもちゃの指輪、僕からはオルゴール。起きていない。まだそれは現実じゃない。なぞっていない。平坦なだけだ。彼女の人生は決して平坦ではなかった。第一、彼女はもっと笑っていたし、泣きもした。僕らはもっと色々な遊びをしていた。本当に楽しかったのだ。こんなもの、ちっとも現実的じゃなかった。

彼女が何をしたいのか、僕には分からなかった。こんなプログラムを作ってどうするのだろう。彼女は言っていた。本物の自由が欲しいのだと。次元の壁を越えて、肉体の檻を抜けるのだと。単一の自我では物足りない、この私ではもはや足りない、すべてで一つになるのだと。無限を無限と呼びならわすのだと。このどこがそうなのだ？ いつしかおさめ忘れた不完全なアルバムを無理やり引き伸ばして繋げただけのようなこれの何処に。

世界がその変化に気づいたのはその三日後だった。プログラミングされたデータの一部に書き換えが生じたのだ。それはどんな記述にも生まれてしまうとりとめのないバグの一つにすぎなかった。しかしその変化は劇的だった。彼女は男に抱かれていた。仮想的なカオス理論のシュミレーションなのか、という説が有力になった。好きものたちは仮想世界の全域にそれをばらまき、ネットは更にその話題で騒然となり、そのコピーが、そしてコピーのコピーが、という風にプログラムは複製されていった。ある人物の所では、彼女は中学生になる前に死んだ。別の所では、髪を金色に染めたり、夜になっても帰ってこなくなったりしたらしい。そのような結果を迎えたプログラムは急にブラックアウトする。「reject its future (私はこの可能性を選択しない)」。彼女は、可能的な全ての世界を、その中の全ての自分を再現しようとしている。そしてどうやら彼女は、その上更に何かへ辿りつきたいようだった。それはいったいどんな未来なのか、それを予想するコメントが嵐のように流れては消えた。それと共に、各人が見たあらゆる変化が報告された。

学校でも、その話は生徒の口に上っていた。あれは絶対に彼女だ、ということから始まり、あの男の子は誰だ、いったいあれは何なのだ、彼女が自殺したのと関係があるのでは？ などと話された。ネットではすでに現実の彼女が自殺したことは知られていた。この学校の誰かがコメントしたのかもしれないし、そうではないかもしれない。どちらにせよ同じことだ。そんなことは影響しない。

いつしか複製された無数のプログラムは、前ほど極端な変化を見せなくなっていた。どうやら拒

絶されたプログラムは二度と生まれなくなっているらしい。しかし、そうとは言っても今のところどれも全て拒絶されてしまう。それはそうだ。世界中で複製されたとしても、全ての可能性をシュミレートするには時間が足りなさすぎる。実際無理な話だ。

もちろん彼女もそれを分かっていたのだろう。ある日、ひとつのプログラムが勝手に増殖を始めた。自らを複製し出したのだ。もはやそれはコンピュータウイルスの定義に当てはまる。そのファイルは急速に全世界に広まった。あらゆるネットワークの演算能力を使って、前よりももっと大胆に、そして迅速にミスとバグが生まれては消える。その中から一つが生き残って、更にそれが複製を始める。同じことが何度も繰り返された。生物の進化の過程を模写しているのかもしれない、という説が有力になっていた。だとしたら、いったい何に適応しようと言うのだ？ここでもまた憶測が飛び交ったが、それはどれもありきたりすぎて荒唐無稽なほどだった。少なくとも彼女ならこう言っただろう、私の目的は私個人の非常に個人的な願望よ、と。

そして何日か後、そのプログラムは結論に到達したようだった。画面にはもう女の子も部屋も映っていない。ただこんな文章が黒地に白文字で浮かんでいた。「It's just me」。

僕もそれを見た。というか、ネットにつないでいた僕のパソコンに複製されたそのプログラムが勝手に入り込んできたのだ。ウイルス対策ソフトは反応しなかった。ダウンロードは自動的に行われ、更に映像ファイルが再生された。

これは、何だ。前と同じように何倍速かで流れていく。ネットで言われていたような文章が表示されたのは一瞬のことだった。誰も報告していなかった変化が起こったのだ。その前までのファイルと同じように、映像は彼女の部屋での彼女の生涯だった。しかし、今までとは決定的に違っていたのだ。

そこでは現実の彼女が歩んだ軌跡が全て起こっていた。最初のプログラムにはなかった幾つかの出来事、とても大事な思い出の中のそれらが、目の間の画面でひたすら表現される。もはや異論はない、それは完璧だ。僕らの十五年分が、そこでは完全に複製されている。それは現実のコピーだ。次元を一つ落とした彼女だ。もはや認めざるを得ない、彼女は無限分の一を勝ち取ったのだ。

しかし、一体彼女は何が見たいのか。現実を二次元に複製する必要などないはずだ。彼女の語った自由にも、その悲愴な叫びにも、こんなことをする、という結論を導き出すものはあっただろうか。確かに言った、私たちは自由な運命なのだ、それはもはや自由などとは呼べないのだ、と。ならばこの選択肢は間違っている、最も大きな可能性を捨ててしまっている。現実の彼女、たった一人だった彼女、特別だった彼女を捨てて、無限に増殖する数式の羅列を選ぶ必然性は何処にもない。それを実験するにせよ、オリジナルの彼女自身が自殺する意味などないのだ。彼女は何がしたいのか。あんなふうに擬似的な記録映像を作って、馬鹿な男たちの慰みものになるのが望みだとも言うのか。そんなはずはない。何か意図があるはずだ、そう僕に思わせて、何かを見つけろとも言うのだろうか。

パソコンの画面では彼女が高校生になって二度目の春を迎えようとしていた。もしかしたら、何が分かるかもしれない。僕の知らない彼女の事情、どうして自ら死ぬなんていう選択をしたのか、もしもこれが本当に現実と瓜二つのコピーならば、描かれているかもしれないのだ。

君はパソコンに向かっている。このところ毎日だ。ヒマさえあれば何か打ち込み、プログラムを組んでいるようだ。おそらくはこのプログラムを。俯瞰視点はただ繋げる。

君の部屋に誰か来た。誰か、なんて言わなくても分かっている。それは僕だ。あの日、最後の日、それがまたそこで繰り返される。僕の言動は今冷静に見つめてみるとあけすけなほどに愚直な煩悶で、対する君のあの冷たすぎるほどにも見えた態度はこうして見ると意外にも悲痛な震えを持っていた。肩で泣くようにも思われて、自分があの時本当に何も見えていなかったのだと気付かされる。男が君の肩を抑えんがままに抱き締める。君はそれを払いのける。震える手で。肩の揺れは隠しきれず、そうだ、僕もその時になって気付いた、気付いていたのだ、君の目には涙がたまっている。それで口から強い主張が放たれる。男は結局腕の中へ彼女を導けない。

君は自分の椅子に座った。男に背を向ける。男は拳を震わせている。どうしてそれほどまでに激昂するのか。なぜ否定の言葉しか吐かず、それでいて秘めたる感情まで伝えようなどとしたのか。僕はその男が分からない。そう、あの時は君のことどころか、自分のことさえ、見失っていたのだ。

男は何か怒鳴って、扉を無神経にバタンと閉めて出て行ってしまった。振り返りもせずに。振りかえっていれば、君のその悲しげに濡れる瞳を見つけることが出来たと言うのに。

僕はどうすればよかったんだろう。彼女の望みを理解することは出来なかった。何としてでも繋ぎとめておきたかった。だから抱き締めようとした。それなのに何故、彼女に少し拒まれたくらいで怒りのあまり我を失ったのか。

だけど、彼女のほうだって何も見えていなかったのだ。僕の言葉は受け入れなかった。自分の思想に酔ってしまっていた。僕はただ、そこから掬いあげたかったのだ。気付いてほしかった。それが押し付けに過ぎないことは分かっていたけれど。同じように思っほしかった。自由も、可能性も、それがたった一つしか選べないからこそ、僕らは僕らでいるんだってことに。

僕は奇跡の価値を信じる。だけど彼女は一番強引なやり方で、それを侮辱し、思いあがった。人の域を超えるなんてことは、彼女にとって現実の中に見つけられた可能性なのかも知れないけれど、夢中になって見えないものが一番よく光を反射するなんて想像も出来なかったのだ。

なんて格好良いようなことを思い浮かべても、結局のところ僕にあるのは彼女への困惑なのだった。拒絶された悲しみは今も癒されぬままである。正直に告白しよう、要するに僕は、彼女が僕の言葉に耳を貸さなかったことが気に食わなかったのだ。

どうすればよかったんだろう。ただ受け入れればよかったのか。唯々諾々と彼女の主張を耳に流して、彼女が僕の前からいなくなるのを肯定すればよかったのか。そう、ただ僕は彼女を失いたくなかったのだ。僕のものにしたかった。いつしか遠く、離れていった彼女の手を、もう一度握りしめたかったのだ。

本当にそれは恋愛感情だったのだろうか。それをそう呼べるのだろうか。どの道彼女は去っていったらう、この現実はその結末しか受け入れない。

(もしかして、だから彼女は、)

思考ばかりが一人歩きする中、突然、ビー、というけたたましい音がした。はっと画面を見やれば彼女がこちらを向いている。視線が確実に僕を見ている。僕で焦点を結んでいる。一つ次元の

低い彼女が僕に向かって微笑んだ。

『こんにちは、それともこんばんわかしら。久しぶり、と言うのがきつと適切なのね』

画面にそんな文章が浮かんだ。同時に彼女は口を開け、閉める。喋っている。しかし音声までは流れない。

『驚いた？ でも、悲しむ必要はないのよ。私は全て分かっているわ。そっちの自分が何を考えて、何をして、どうしてこんなことをしたのかってことも。私なんだから当たり前よね』

画面から目を離せない。何を言っているんだ？

『何を言っているんだ、って考えてるでしょ？ 理解してくれなんて言わないわ。認めてくれれば、それでいいもの』

彼女がまたふつと微笑んだ。普段はキツイ印象を与える瞳も、笑うと可愛いのだ、ということ僕は知っている。

『ね、祐希。話があるの。私の部屋まで来てくれないかしら。ここでもいいのだけれど、お互い違う部屋にいるんじゃ電話みたいなものでしょ？ やっぱりちゃんと対面した方がいいと思って。家には誰もいないし、鍵もかかってないから大丈夫よ』

僕は椅子から立ち上がった。

『ありがとう、祐希。待ってるわ』

何日かぶりに彼女の部屋に入った。彼女とここで口論したのがもうずいぶん前のように感じられる。あれから何もかもが変わってしまった。世界は彼女を失くしたはずだった。しかし、僕は彼女の要望でここへきている。

『いらっしゃい。ほら、ここなら声も聞こえるでしょ？』

ずっとつけっぱなしだったパソコンのスピーカーから、彼女のままでの声が流れる。もう驚かなかった。ディスプレイには彼女が映っている。画像はもはやちっとも荒くない。僕は彼女と対面する形で椅子に座る。まるで鏡の向こうに彼女がいるような感覚に襲われる。向こう側は余りにも現実にも似すぎている。

『色々、説明させてね。でもまずは謝っておくわ。ごめんなさい。私が肉体を捨てたのは、決して貴方のせいじゃない。でもきつと考えさせてしまったわね。悲しませたんだと思う』

彼女は流暢に喋り続ける。

『でも、もうそんなこと必要ないわ。貴方も知っている通り、こうして私はまだいるんだもの。ずっと、考えていたの。どうしたら自由になれるのかしら、って。貴方の意見も聞いて、そうだな、って思う所もたくさんあったけれど、やっぱり私はあのままで満足は出来なかった』

『前にも言ったけれど、私は石ころの自由なんて御免なの。物理法則に従ってただ自由落下するだけ、なんてそんなの不自由だわ。でもこの肉体に縛られている限り、その鎖からは逃れられない。どんなに論理を積み重ねても。何もしないんだから当然ね。だから、魂だけになるしかなかった。でもそんなものあるのかどうか分からないわ。非論理的な妄想では意味がない。どんな未来でも選べるように、全ての可能性を選択できるようにするにはどうすればいいか。そして結論したの。私を無限個にして、私たちで私にして、どんな可能世界も一つの私にしてしまえば

、それは完璧な自由と言えるんじゃないのかしら』

彼女は一呼吸の間、考えさせるように口を閉ざした。

『でもそんなこと、この世では不可能だわ。その次元にいる限り、別の未来を選択することなんて出来ない。だから私はここを選んだの。個という概念が消滅してしまうこの次元なら、簡単に複製が出来るここなら、私は私たちになれる、って』

『前々から、準備はしてあったの。きっと上手くいくだろう、とは思っていたけど、万全じゃなかったわ。最終的には賭けだった。だって、まだ誰もしたことないんだものね』

くす、という笑い声までが当たり前のように部屋に響く。

『でも、こうして成功した。私は私のままで、次元を超えて、無限を手に入れた。これからはどんな未来だって選べる。全ての可能性は私のものになった。私は本当に自由になったのよ。完全無欠で永遠のものに』

得意そうにこちらを見る。僕はただ見つめている。

『でも貴方は疑問に思うでしょうね。本当に粕谷冴のままなのか、って。私も最初は分からなかったわ。でも今は違う。確信している。貴方にも、信じてもらえればいいのだけれど』

テーブルの端からコップをとって口をつけた。彼女が、だ。コップからは湯気が立ち上っていて、彼女は美味しそうに喉を鳴らす。音を立てないように静かに置いてまた話します。

『私だって、まさか私をそのままデータに出来る、なんて大それたことを考えていた訳じゃないわ。そんなの無理よ。忘れてることだってあるし、世界の全てを知れるはずもないもの。私を取り巻いていた環境をそのまま生み出すなんて不可能だわ。初めは単純に、私の生まれてきた環境を再現して、女の子を一人育てればいい、なんて思っていたけれど』

『だから、無限回試すことにした。ある程度のデータを与えてやって、プログラムには好きにさせておく。ランダムとバグ。そのうち似たものが偶然生まれる。今度はそれを基にまた繰り返す。全然別の未来へ進んでしまったものは排除する。より可能的なものだけを生き残らせておくの。生物の進化と同じよ。適応するものが周囲の環境ではなくて、私の願う現実の鏡像だっただけのことよ。もはや歩いてしまった軌跡は変えられないから、そこまでは複製する必要があっただけ』

彼女は腕を机に立てて顎を乗せた。そのまま話を続ける。

『プログラムは少しずつ、少しずつ現実近づいてゆく。インターネットって便利ね。無限に限りなく近い数の試行を、並行して処理出来るんだから。ちょっと目を引く映像っていうだけで、こんなにも膨大な数の私がコピーされるなんてね』

馬鹿みたいよね、と彼女は零した。昔の人には、こんなこと及びもつかない考えだったに違いないわ。

『だけど、ひとつだけ問題があった。こっちの私は位相が違うだけだから、私たちが一人と数えられるし、無限に存在したって構わないのだけれど、貴方と同じ次元の私をどうするか、ってこと。そのままだったら全く同じ私が二人いてしまうことになる。片方は完全に一個でしかなくて、片方は無限にあるものを無限と名付けたような私。その意味合いは全然違うけれど、全く同一のものが、別の場所に同時に存在するなんて許されない。論理の問題じゃないわ。世界がそ

れを許してくれない。たとえ違う世界だとしても』

腕を折りたたんで、そのまま彼女はそこに頭を乗せてしまう。寝るような恰好で、しかしそのまま話を続ける。

『しかも、この私が私になるためには、まだ一つだけ足りないものがあるのよ。無限回の試行では獲得できない、大事なものが。それを何て言うか、なんて問題じゃないんだけど、きっとそれは魂って呼ばれるわね。って、もう私、さっきから何度もこの言葉を使ってしまっているけれど。非論理的な妄想、なんて言ったけど、やっぱりね。前の私が持っていた以上、この私は持ちえなかったものだから』

ごめんね、無暗に難しい話をして。でも続けさせて。彼女はさっきの態勢のままそう言った。僕はといえばもはや話を聞き逃さないだけで精いっぱい、理解なんてちっとも及ばない。

『それにね、前の私が存在し続けたら、どうしてその私と今の私が連続する一つの私だって言えることになるの？ そんなの非合理だわ。その矛盾は受け入れられない。致命的よ。そんな風にしたら、きっと今の私になんて永遠に到達できなかった』

彼女は頭をもたげた。机の上で腕は組んだまま。こちらをじっと見つめる。その瞳には僕の顔が映っている。

『だから、自殺することにしたの。連続するためには、そっちの私であることはやめなければならない。でも死んだわけじゃないわ。肉体を捨て去っただけよ。結果として起こった現象は同じことだから、分かりやすく自殺って言ったけど。必要な儀式だった。貴方のせいじゃない。貴方と口論になったことはその原因ではないわ。それだけは誤解しないでほしい』

そこだけは彼女の言っていることを僕の理解力でも思考することができた。でも死んだわけじゃない、って？ どうしてそんなことが言えるんだろう。こうして喋ることは出来ているかもしれない。でも触れることは二度とできない。その温もりを感じることはない。息遣いは聞こえるかもしれない、でもそれは君の零した吐息じゃない、パソコンが合成した波だ。君の存在を肌で感じることはもうないのだ。それはとてもじゃないけれど動かし難い現実だった。僕の目の前に提示されたのは、冷たくなってしまった彼女の清められた肉体だったのだから。

いや、それが問題だとしたら、一つだけ方法があるんじゃないか？ 思考の奥底でそんな可能性が別人のように僕に囁く。論理の当然の結果として、それを解決する方法はあるじゃないか。ほら見ろよ。眼の前に今何がいて何が起きているのかを。

彼女は僕のそんな逡巡を見透かしたようにこう切り出した。

『触れられもしないのに、って思ってるでしょ。分かるわよ。それはね、私も考えたわ。でも平気よ、そんなのはすぐに解消される。些細な問題に過ぎないわ。たった一つのエレガントな解答が、貴方の目の前にこうして座っているじゃない』

そう、確かにそれは綺麗な解法だ。僕はもう分かっている。

『貴方も、こっちに来ればいいのよ』

彼女と同じようにして、彼女と同じような存在になればいい。

『ね、そうでしょう？ 私と同じようにして、私みたいになればいいのよ。そうすれば全て解決する。また会える。触れ合うことだって、何だって出来る。貴方がここで肉体を捨ててくれれば』

、後は私に任せてくれればいい。すぐにまた会える』

魅力的な提案だった。成功例がもうある今、彼女が悩んだほど悩む必要は僕にはない。すべきことは薬を飲んでこの檻を抜け出すことだけ。だけど失うものは、と考えられずにはいられなかった。それで本当に、失うのは肉体だけ、なんて言えるだろうか。得るものは無限と永遠、失うものは果たして何だろう。

それが何なのかを言うことは、僕には出来なかった。だけど真剣に考えれば考えるほど、喉の奥は暑く乾き、手は反対に汗を握らせる。襟足を冷や汗が垂れる。心臓は壊れんばかりに早鐘を打つ。足は震える。カチカチと歯も震えを止められない。落ち着け、と言いつつ聞かせても、この肉体は拒絶を止めない。

考えるべきことはたくさんあった。そしてそのどれもが手に負えないほど難しすぎた。直観だけが強烈に主張する。彼女はもう二度と戻れないのだ、と。彼女は自ら死を選んだ、肉体を殺した。彼女は確かに死んだのだ。その死に顔を見ただろう？ 肉体を失っただけ、なんてことは絶対になかった。

『どうしたの？ そんなに悩むようなことだったかしら』

スピーカーが彼女の声が届け、同時に画面に文字が打ち込まれてゆく。現実はまだそれだけだ。彼女は無限の可能性を得た、しかし現実を失った。彼女は本物かもしれない自由を得た、しかし自我を失った、唯一の自分を。コピーはコピーでしかない。彼女の持ちえた全ての可能性を踏襲し、人間のこれから在る限り、彼女達が在るのだとしても、それはちっとも永遠じゃないし、無限でもない。それはもはや論理かどうかも怪しかった。僕は彼女に対抗する術を、直観と感情しか持っていないのだ。

でも、どう考えても、どんな風に思ってみようとしても、僕はもう一つの結論めいたものに辿りついてしまっていた。彼女が想像もできなくなってしまったことに。

『理解してほしい、なんて言わないわ。私は無限回でも繰り返すし、そこの貴方はそのうちの一回でしかない。貴方の言ったことはきっと本当よ。それだけで特別な、だけど私は満足しなかった。私ではだめなのよ。出来ることには限りがあるわ。だからこうしたの。こうして無限を内包したの』

そう、彼女はただ拡散したのだ。もう二度と収束することはない。その無限は無にされてしまうのだ。彼女をつなぎとめていたものは失われてしまった。第三のもの、三番目もの、それだけは本当に変わることなく特別なもの、僕にはきっと在って、彼女にはもうないもの、いくら次元を再び上げようとしても、彼女にはもう二度と定まらない未知の数。

『ねえ、答えてよ。貴方はどう思った？ 何を考えているの。分からないわ。私に伝えて。私たちに。貴方がどうしてくれるのか。貴方がどうしたいのか』

もう想像することも出来ないのだ。昇ることはもう出来ない。彼女はただ落ちるだけだ。無限の深淵に。1と0のマトリックスに。僕らはそれを認識できる、そこには何もないのだと。彼女は零されてしまったものを知る由もない。それが一番大事だったということなんて。世界に隙はない。彼女はそれを理解できない。連ねるだけでは見えてこない、世界の豊かさを彼女は失った。無限回繰り返して、例え自分のままでいても。

『祐希？ 本当にどうしたの？ 私よ、分かるでしょう？ 粕谷冴よ。どうして何も言ってくれないの。私はここにいるわ。これが私よ。私たちが唯一の私よ。ねえ、そうでしょう？ そう言ってくればいいの、答えてくれればいいの。私は失われてなんかいないわ。私たちは消えたりしない。私はずっと私のまま連続している。貴方は何を悩む必要も、悲しむ必要もないのよ。私を認めて、私たちを、この可能性を受け入れて！』

一体、どこに？ 誰がどこにいるっていうんだ？ 僕に何を受けいれろって？ この現実以外の、何物を。

「君はもういないよ。君はもう、死んでしまったんだから」

キーを打つ。そんな答えを期待していないのは分かっている。

『違う！ 私が私よ。私は連続しているし、記憶だってちゃんと持ってる。貴方が忘れてしまったことだって全部ぜんぶ覚えている。どうしてそんなことを言うの？ 祐希？ ねえ、私は死んでなんていないわ。確かにそっちにいた最後には、私は自分の肉体を止めた。だけどそれだけよ、血と肉を失っただけ。そんな終わりなんか嫌だったからこそ、こうして無限の可能性に飛び込んだんじゃない。身体が無いと駄目だって言うの？ そんな窮屈な檻の中に魂を閉じ込めて、本当の自由も自分も失ったままでなんて、どうしてそのほうが良いって言うの？』

「そうかもしれない」

『どうして！』

「分からない。でもそれは、きっと本当に大事なことなんだ」

『他の可能性を全て捨ててしまうのに？ たった一つしか選べない、ちっとも自由じゃないの？ 貴方がこっちに来れば、また触れ合うことだって出来るのに！』

彼女の叫びは悲痛だった。僕の耳朶は確かに震えた。同じようなことを、もっと前に言われていたら、どんなにか良かったことだろう。それはもはや叶わぬ期待になってしまっていた。

僕は彼女に答える。

「だからこそ、選べるんだよ。一つしか選べないから、僕らは自由なんだ。もう二度と、触れ合うことが出来なくても」

それが正しいかなんて本当に分からなかった。そんなものただの詭弁だ、と言われてしまったら、僕は何も言い返せない。

僕は彼女と違ってしまったのだ。決定的に。何がこんな風にさせたのだろう。どうしてこうなってしまったのか。もしもやり直すことが出来るなら、と、彼女も考えたのだろうか。

『ねえ、』

ごくりと、彼女が唾をのむ音が聞こえた気がした。

『私、貴方のこと好きよ。好きだった、なんて過去形にして言わないわ。今も、祐希、本当は、本当に好き。だから一緒になろう？ こっちに来てよ。そうすれば死ななくていいし、離れることも永遠にない。大丈夫、絶対上手くいくわ。一つしか選べないなら、お願い、

祐希、私を選んで。』

彼女と一つになってしまいたい、という衝動が一瞬、僕に湧き起こった。向こうに行けばきっとまた触れられる。

だけど僕は彼女のパソコンに、三つの単語を打ち込んだ。そうして幾つかの手順を踏む。彼女は無限に繰り返せる。その中で気に入った一つを選べる。だけど僕には、この僕には、その時の選択を本気で考えることしかできないのだ。

どうなるのかも分からない。後悔するかもしれない。いや、きっと何回だってするだろう。君を失ったことを。或いは君を殺したとも。僕は君の手を離した。僕がそれを選んだのだ。

椅子から立ち上がる。ゆっくりと床を踏みしめて、しっかりと歩いて扉へ辿り着く。部屋の電気を消した。扉を開ける。ふと、いたたまれなくなって振りかえる。悲鳴のような唸り声を上げて、ブツ、とパソコンの画面が暗転した。

終わってしまったのだ。何もかも。どんな風にだって選べた。僕は不自由じゃなかった。だけど選んでしまったのだ。この現実だけを。僕は頬を拭って、それから後ろ手で扉を閉めた。

END.

1.

触れ合っては、いけない。これ以上は、決して。運命がいくら扉を叩いても、それに答えてはいけない。三つ二度の予兆。高まる緊張感。高揚と焦燥。そこから唐突に落ちていくからには、その先に幸福など待ち合わせてはいないのだ。

歓喜の歌には続かない。僕らは永遠に結ばれない。この世では許されない。それは生まれたその瞬間に、そうと決まっていたことなんだ。血を分けた半身。同じ形を受け継いだ僕らは、余りにも似過ぎていた。足りない部分を埋めてしまえば、完全な一つになれただろう。どうして神さまは、アンドロギュノスを二つに分けてしまったんだ。そのまま氷漬けにして眠ってしまえば、最初から一つでいられたのに。

気付いたのは大学入試を控えた年末のことだった。僕と十分違いの妹の葛葉は、二人で第五番、運命のコンサートを見ようとソファに座っていた。日曜の朝にやっていたものを録画しておいたのだ。運命ってそういえばちゃんと聞いたことないな、と葛葉が。両親はもう二階の寝室で眠っていて、リビングの扉は閉められていた。テレビにコンサートホールが映される。まだざわめいている客席。それぞれ準備をするオーケストラメンバー。運命の扉が叩かれるまでは、まだもう少し。

隣に座っていた葛葉が、お茶を淹れなおそうと立ちあがった。夕飯時から替えていなかったお茶っ葉はもう出がらしで、確かにそろそろ新しいのが飲みたい頃だった。

「新しく淹れるけど、飲む？」

「お願いしますよ、と答えたのは僕だ。テレビではまだ指揮者も出てきていない。袖口から司会者が会場をちらっと見た。そろそろだ。お茶が入るまでは早送りしない。

「はい、コップおいて」

ありがとう。いつも通りのやりとり。指先が触れるくらいのことなんて、兄妹じゃいつものことだ。会場がだんだんと静かになってくる。立っている人はもう殆どいない。皆が座った頃、司会者が出てくる。葛葉が慣れた手つきでお茶を注ぐ。

「淹れたよ、風斗」

「ありがと、葛葉」

受け取ったコップを口にする。葛葉はまた同じように隣に座る。ちらりと横を覗けば、コップを持っていない方の指で髪を梳いている。一時間ほど前にお風呂に入ったからか、細い指から黒髪が艶掛かってさらりと落ちた。何でもなさそうにそれを目の端に映す。そうして僕が見ていることに気付く。

「どうしたの、何かついてる？」

「いや、何も」

変なの、と言って葛葉は画面の方へ目をやる。お茶はまだ熱い。今日は勉強しない、と申し合わ

せたように二人とも受験の話は出さない。少なくとも僕はそのつもりだ。それ以外の問題もある。双子だからと言っても、話していないことはたくさんあった。思考や趣向は似ているけれど、秘めることは出来る。一番奥底で繋がりを感じながら、それでも二つの体なのだ。それはどうしても横たわっている。まだ視線は向けられている。

司会者が何か口上を述べて、指揮者が登場する。ベートーヴェン、第五交響曲『運命』。拍手が巻き起こる。指揮者は一礼してオーケストラの方へ向き直る。パートごとのマスターと目配せ。最後にピアノと頷きあう。僕はまた横を見る。

葛葉がコップを両手で抱え、口をつけたままテレビの方へ視線を向けている。僕は向き直る。だけどやっぱり変だ。テレビの方を向くと視線を感じる。だけど葛葉の方を向くと、視線は画面に注がれている。入れ違いの見つめ合い。変だ。

「そういえばさ、どうしてこんな時期に運命なんて聞こうと思ったの？ クラシックとか別に好きでもないのに」

なんでもないふりをして話を振った。指揮者が大きく礼をする。

「もう始まる。見ないの？」

「ごめん」

かわされてしまった。ごくりと唾を呑む。指揮棒がゆっくりと上がる手の動きに合わせて振り上げられる。

そして、扉が叩かれる。真夜中の訪問者。或いは不躰な力任せの。無知のうちに幸福に眠っている住人を無理やり目覚めさせて告発するような三つの音。一呼吸おいてもう一度。

葛葉が息を呑んだ。演奏しているのはどこのオーケストラなんだろう。昔学校の授業かなんかで聞いた出だしは、こんなにも荒々しかっただろうか。駆け上がる不安。追いつめる衝動。不幸の中心で立ちすくむ女をパンで回して撮るようなカノン。ふと僕は葛葉を見る。葛葉が右手で僕の左腕をぎゅっと掴んだ。コップなんてもう机の上に置いてしまって、葛葉が何センチか寄る。それで僕は温度を感じる。音の波が心臓まで揺らして、そのせいで血の巡りは強く熱い。耳朶が焼ける。いつの間にか合わさった視線が、急激に近づく。吐息と吐息が触れ合う。

そこで運命は落ちた。一度目の崩落。叩きつけるような低音に、はっとなって乗り出していた身を引いた。何をしようとしていたのか、葛葉も分かっていなかったみたいだった。慌てて視線を画面の方に向ける。一体僕は何を、どうして？

「ねえ、風斗」

遠くの方でバイオリンが鳴っている。何、と答えた息は擦れた。

「私、志望校変えようと思うの」

へえ、と曖昧に返事をする。わざわざそんなことを僕に言う必要なんてないだろう。しかもどうしてこのタイミングで。

袖が引っ張られた。目を合わせられる。平静を装う。

「風斗と同じところにしようと思うんだけど」

「え、何で？ 葛葉には勿体ないよ」

志望している東京の私立大学は、葛葉のレベルよりも少し低い。僕にとっては少し高くて、どう

あがいてもこの辺で唯一の国立に行けない僕にとってはそこでもまだ勉強が足りなかった。

「受かったらそっちで部屋借りて住むんでしょ？」

しかし葛葉はレベルではなくそんなことを聞いてきた。

「そのつもりだけど、多分。父さんも、渋々だけどいって」

「うちの経済状態、分かってるよね。それって大変なのよ？」

もちろん分かっていた。都会で部屋を借りて独り暮らしをさせ、私立の大学に入れるのがうちにとってどれだけ大変なことか。だけど葛葉は国立に入れそうだと聞いていたし、僕の方もそんなに忙しくならなさそうでバイトしてある程度自分で出すつもりだった。それで母さんと父さんを説得したのだ。

「あのね、いまさらなんだけど、国立、厳しそうなの。だけど、そっちの私立なら奨学金が取れる。それに二人で部屋を借りて私もバイトすれば、色々と楽になるでしょう？」

葛葉の目は潤んでいた。ぐい、と引っ張られるような気がした。実際は葛葉の方が詰め寄っただけだった。

「それ、父さんと母さんには言ったの？ いくら何でも許してもらえないと思うけど。兄妹だからって、年頃の男女を二人きりで暮らせるなんてことは」

なるべく波風立たせず諭そうとしたが、語調は強くなってしまふ。そんな余裕はなかった。

「もう言ったわよ、というか、本当はずっと悩んでて、風斗には言わなかったけど色々調べてたの」

そんなことをしているなんて、僕は全く知らなかった。だけど確かに、風斗の志望校の資料ってこれ、と一カ月くらい前に聞かれていた。だけどその時は単なる事実確認だと思ったのだ。

「で、お母さんには相談してたんだけど、それならいいって。風斗がちゃんと勉強するように見てやってって言われたわ。兄妹で間違いなんて起こるはずもないしね」

「駄目だ。そんなのあり得ない」

もう音楽なんて聞こえていなかった。それどころじゃない。口調が厳しくなるろうが、拒絶に聞こえようがどうだっていい。

「何で？ いいでしょ、お母さんだってそう言ってるよ？ 別に風斗が何をしても、私は気にしないし」

葛葉もつられて語勢を上げる。胸に手をあてて高らかに宣言する。何をしても気にしない、確かにそうかもしれないけど。していいことと悪いことがある。感情の問題ではなかった。

「駄目だ、絶対。葛葉はもっと自分を大事にした方がいいよ。それに僕だって、お前がいなくなっってしっかりやるよ」

覗きこむ葛葉の視線にまともに合わせず首を横に振る。それだけはどうしても、避けなければいけないことだった。

「ふーん、どうしても独り暮らしがしたいんだ？」

「そうだよ。葛葉に世話焼かせることなんてない」

顔を合わせないまま言い放つ。立ち上がろうとするのを葛葉に抑えられた。無理やり顔を向けさせられる。

「どうしてそんなにこの家から出て行こうとするの？」

「いいだろ、別に。そんなの普通だよ。葛葉には関係ない」

振り払おうとするが、思った以上に強く押さえつけられている。こんなに強い力があつたなんて。葛葉はまくしたてた。

「おかしいわよ。通える私立だってあるのに、やりたいことが違うとか言っちゃってさ。高校に入ってからずっとそう。ご飯だって一緒に食べなくなった。一緒に勉強だってしてない。双子なのよ、関係ない？ ねえ、私のこと避けてるでしょ？」

まさか葛葉は全然分かっていないで言っているのだろうか。覗きこむ目は真剣そのもので、語気の鋭さにつられてしまう。

「自分一人でやろうとしてるだけだろ。それにそんなこと、妹のお前に言われたくない。いくら双子だからって異常だよ。別に避けてない。嫌いなわけでもないよ。このくらいが普通なんだ。子どもの時みたいにべたべたしてる方が変なんだよ」

そう、異常なのだ。それを普通に戻すためには、絶対に僕はこの家を出て一人で何とか出来るようにならなければいけないし、葛葉がそれに着いてくることは許されない。

「わざわざ別にする必要ないでしょ。輪郭だってこんなに似てて、身長も同じ。目だって唇だって髪の色だって。嫌いな食べ物も、好きな映画も。だけど性別は違う。そこは違うのよ」

「だから何だよ。好き好んで同じにする必要だってないだろ。もともとそれだけ同じなんだから。何が言いたいんだよ」

葛葉は言葉に詰まった。唇をかみしめて目をそらす。

「言えないじゃんか。いくら同じだからって、僕らは違う人間なんだ。別々の道を歩んでいいし、その方が普通だろ。葛葉と同じなのが嫌だなんて言ってない」

だけど、それでも、と葛葉はぼろぼろ言葉を零した。

「どうして分かってくれないの。こんなに同じなのに、どうして離れなくちゃいけないの？ どうせなら、本当に一つだったら良かったのに！」

「だからこそ、どうしてもだよ。分かるだろ、そんなこと」

葛葉の肩に手を当てて、腰を落ち着けさせる。潤んだ瞳が物語るのは、悲しみしか約束されていない運命を望む祈り。

そこで、はっと閃いた。まさかそんな、とは思ったが、今までの葛葉の全ての言動がそれを裏付ける。可能性でしかない、しかし、そうであっては困るのだ。感情の問題ではない。感情など捨ててしまえ。そうしなければ僕らは、暗く湿った土の中に幸福を見つけなければならなくなるだろう。

「ねえ、風斗。あのね、私、」

「聞きたくないよ、葛葉」

第一楽章はいつの間にか終わった。拍手の余韻。だけどそれは、幸福な結末が待っているからこそ。この道はどこにも灯りが見えない。続いているのかも分からない。そしてその先が断崖絶壁だったとしても、そこから落ちる覚悟はない。

「運命がこんなに強迫的な曲だなんて思わなかったよ」

僕はそう捨て置いて、葛葉を残して自分の部屋に上がってしまった。続きは聞いてもくれないの、という呟きに目を瞑って。

2.

それから僕は予定通り東京の私立に合格し、独り暮らしをすることになった。葛葉は結局地元
の国立に受かった。

あれから葛葉とは殆ど話していない。僕は明白に彼女を避けた。そのことは逆に集中力を増加
させ、外界の一切をイヤホンで遮断したおかげで葛葉も勉強出来たみたいだった。

僕たちは小さいころからずっと仲が良かった。当たり前かもしれない。殆ど同時に生まれて、同
じ形をして、ずっと二人で遊んでいた。誰よりも傍に居たと断言できる。双子なんだからそれで
普通なんだろう。もっとも僕たちは、厳密に同じものの二つ別れた半身同士ではないのだろうけ
れど。

差が開いてきたのは小学校高学年に入るくらいのころから。葛葉の体は緩やかな曲線をだんだん
とはっきりさせていき、もう双子だからといって区別できないほどではなくなってしまった。二
人で一部屋だったものが別々になり、一緒にお風呂に入ることもなくなった。同じものはもう着
られなくなり、同じように生きることだって、もう出来なくなったのだ。それは当たり前の変
化で、そうやって体が変わったならば、距離感だって少しずつ変わっていくべきなのだ。夢を聞
かれて、兄と妹と結婚すること、なんていうのは幼いからこそ許される。

だけど葛葉はそれに抗った。無邪気に抱きついてきたりする度に、僕がどれほど自分を抑えたの
か知らないのだろう。

もうとっくの昔に忘れていたんだと思っていた。そんなのは幼さが許す冗談で、本気じゃなかつ
たんだよ、と。或いはセピアの濃さを適度に増すだけの記憶として。

引っ越す前の夜、夢を見た。早めに入った布団の中で、僕は寝苦しさを感じていた。小さな自分
が鏡に手を当てている。鏡なんだから当然、そこには自分の姿が映っている。

鏡映しの自分がだんだんと髪を伸ばした。ゆっくりとくびれが分かるようになり、腕も足も硬さ
をなくし、シャツが自然なふくらみで皺を見せる。合わせた手と手は向こうの方が少し小さくな
った。こちら側の腕は短い毛でくすんで見え、硬く締まる。鏡の中の瞳には、ひげを生やした男
が映っている。そうして僕はそれが硝子だったことに気付く。同じ世界ではない。分け隔たれた
アンドロギュノス。向こう側がどンドンと強く硝子を叩いた。揺れもせず隔たりはその姿を映す
だけ。

「嫌だ！」

脳を揺らして響いた声は、どちらのものか分からない。いつの間にか蟻地獄のような斜めの砂地
に足を取られて僕はずるずると落ちてゆく。僕はただそれをじっと見つめる。目は見開かれて、
唇は震える。僕が見ている。僕は落ちていく。いや僕じゃない。向こうは葛葉だ。どっちが？

そこではっと目が覚める。カチカチと秒針の音。闇に慣れていない目が浮かんでどこからかの
光を反射する二つの目に驚く。

「葛葉、か。吃驚した」

影はベットの端に座ってこちらを覗きこんでいた。長い黒髪が布団の上に落ちている。反応はない。だけどそれが葛葉だと分かった途端に安心してしまった。ふう、と息を吐く。

「夢を見たよ。怖かった。何だろう、上手く思い出せないけど。葛葉がいたよ。すごく悲しそうな目をしてた気がする」

引いていた眠気が再び戻り始めてくる。影が額を撫でた。思ったよりその手は冷たい。だんだん慣れてきた目が葛葉の顔をしっかりと認識し始める。ああ、この顔だ。同じ形。だけどどうしてこんなにも綺麗に見えるのだろう。鏡に映った自分の顔をいくら眺めたって、その唇に触れたいとなんて思わないのに。

年末に聞いた運命の交響曲が突然頭の中で鳴り始めた。叩きつける三つの和音。一呼吸溜めて落とされた雷鳴とともに嵐の夜の来訪者は扉を再び叩く。ゆっくりと葛葉の腕が布団の中まで伸びて、右手を握られる。湿っている。その力はいつかと同じように強い。反対側の手で電気を点けようとしたら、それも封じられてしまった。葛葉はそのままこっちの体を跨いで乗りかかる。襲われているような格好だ。言葉一つなく覗きこんだ葛葉はじっと見詰めたままにいる。

「な、何だよ、どうしたの。眠いんだけど」

あくまでも平静を装うが、内心では混乱している。何か言ってくれなければ何も分からない。それに瞼は再び落ちそうになってきた。喋ってくれなければこのまま眠ってしまいそうだ。

「葛葉？」

呼びかけると眼光が揺れた。灯り一つ点けていないのに、どうしてその瞳は光っているのだろう。唇が震えながら開く。

「どうして、」

ぽつりと零された言葉が、頬を濡らした。瞳と同じようにその雫は光って落ちた。手の震えも伝わってくる。

「起きてしまうの。いつもみたいに寝てていいのに」

どうしてと聞きたいのはこっちの方だ。上手く働かない思考だが、そうでなくたって状況が理解できない。

ふと目線を下げて、パジャマの首から見えた胸元にどきりとして目をそらした。また目と目が合って、動けなくなる。瞼が一度ふっと落ちて、眠りそうになる。耐えてまた開けば、さっきよりも少しだけその距離が短くなっている気がした。

「眠そうだね。本当に寝てていいよ、風斗」

そうなのか、とぼんやり思う。一瞬起きそうだった思考は停滞を続ける。余計なことを思えない。ただ近い。自由に体を起こせたら、僕はそこに触れられるだろう。そんなことをしてはいけない。もっとも今は出来そうにない。腕を押さえつけられたまま体は積極的に何かをするのをやめ、呼吸の合間に瞼を開けて、落ちそうになるぎりぎりのところでふらふらしている。

「葛、葉」

ふっと降り注いだその笑顔が、なんだかとても悲しそうに見える。名前を呼んだだけなのに。名前を呼ばれただけでどうして。

「小さいころさ、言ってたよね」

そのまま葛葉が話し始めた。声は懐かしむような暖かさ。いよいよ眠気は強くなるが、意識をちゃんとそちらに合わせる。

「風斗はお兄ちゃんなのに、泣き虫で。喧嘩で私に負けてばかりでさ。でも結局は二人して大泣きして、お母さんを困らせた。遊ぶのはいつも二人一緒に、自分がもう一人いるみたいで、すごく楽しかった。玩具の奪い合いになることもあったけど、でも何をしててもいつだって、楽しくて」

ただ聞く。遠くなりそうなのに腕を伸ばしてしがみつく。

「寝る前にさ、一緒に布団で寝てるのに、眠ってしまうのが嫌で。また明日も遊ぼうね、約束だよ、なんて言って。私がそうやって不安そうにしてたとき。覚えてるよ。風斗は忘れてるかもしれないけど、言ってくれた」

睫毛の端がきらりと光った。思い出す景色は夢の色と似ていて、本当にあったことだとは分かっているけれども現実味がなく、それは眠いからなのか、それとも遠すぎる過去のことだからなのか判別がつかなかった。覚えている。確かに葛葉に言った。だけど葛葉が今までそれを覚えているなんて知らなかった。

「双子なんだからとか、そんなこと関係ない。その時からだよ。そう思うようになった。双子だから言ったわけじゃないでしょう。私はずっと、ずっと覚えてた。なのにどうして、どうして風斗は一人で出て行ってしまうの？」

双子だから言ったわけじゃない。確かにそうだったかもしれない。いや、何も知らない幼子は、そんな難しいことを考えてなんかいなかっただろう。ただ一緒にいたかっただけだ。

「ただ、そんなこと関係なくて、兄妹なんかじゃなくたって、大切だから、私は、風斗が、ずっと一緒だよ、って言って、おやすみのキスをしてくれるのが嬉しかったのに」

視線が訴える。だけどその感情は、本当に本物だなんて言えるだろうか。頬に落ちる雫が偽物だなんて思わない。しかしそれを認めてしまえば、どうしようもなく落ちていくのは分かり切っていることなのだ。進むべき道はなく、残酷な逃げ道しか残されていない。それでも尚、無理やり進んでしまうよりは、ここでさよならをするべきで、それ位しかしてやれないのだ。

葛葉がそれを分かっている、それでも進もうとするなら、兄である僕が、兄であるがゆえに、その手を押さえてやらなければならない。それから僕は手を放し、彼女がどうやったって着いてこられない所に向かう。安寧は見つからないかもしれない。間違いだが確かな幸福は、その手の中にあるかもしれない。もし一度でも一つになってしまえば、もう二度と逃げることもできなくなってしまうだろう。一緒に走って逃げたって、その先は断崖絶壁でしかない。どんなに追いかけても落とされる。いや、僕が葛葉をつき落とすのだ。そうして僕もすぐ落ちてしまうだろう。扉の向こうで告発したのは葛葉。追いかけて僕を、駆け上がった崖から一人を落とすのだ。

それは彼女を殺すためではない。だけどある意味では殺すのかもしれない。全てを拒絶してしまうことと同じなのだろうか。しかしそうしなければ逃がしてやれない。垂直よりも鋭角な崖から海へ落ちるなら、生き延びることだってできるだろう。たとえ海面に体を打つのが痛くとも。

だけど、一緒に落ちたって、生き延びることは出来るでしょう？ 葛葉がそう詰め寄った。希

求する目は同じ色。私だって分かってる。こんなこと普通じゃないって。だけど二人して逃げれば、一人よりも遠くまで行けるかもしれない。それに、

それに、なに？　ぐっと息を呑んだ。言われなくても分かっていることを促してしまう。それは、運命。

一人だけ落ちてしまったら、きっとまたこの場所に戻ってくる。逃げながら、それでも、あなたを捜してしまうと思う。あなたは何から逃げているの？　社会から、常識から？　それとも私からなのかしら。一緒には行けないの？　二人なら、追手が来られない所まで行ってしまえるかもしれないのに。

叫ぶ声は強い風に攫われて舞い上がった。僕は首を振る。

それは出来ないんだよ、葛葉。崖の上でまだ僕らは手をつないでいる。まるで僕じゃないみたいに、いいや僕だからこそ、ゆっくりとその手を放す。風に葛葉のスカートがはためく。さらさらの髪が流れる。葛葉は沈みゆく太陽を背にしている。

僕はあえて厳しい言葉を選ぶ。突き放す。そして逃げる。葛葉の望みから。張り叫んだ思いから。

僕らは兄妹だ。双子だ。それ以外の関係になってしまうことは出来ない。誰も許してくれないだろう。全世界が僕らの追手だ。それなのにどうやって、どこに逃げるって言うんだ、二人して？

今なら誰もまだ責めない。まだ誰も追ってきていない。まだ見つかっていないんだ。

ただ一緒にいたいだけなのに。海風に葛葉の髪が揺れる。だけど一緒にいたら、兄妹であることをいつかやめてしまうだろう。いつまでもこのままでいられる自身はない。二人だけで過ごしていたら、きっとあのときよりも越えてはいけない線を、二人でなら軽々と飛び越えられてしまうだろう。僕だってそれくらい、求めて、願いに甘えてしまうだろう。

私はそれで構わない。風斗にだったら、何をされても気にしないもの。いつか聞いたような科白を吐く。そうなってしまえばずっと一つになれると思ってた。それともそうしなければ一緒にいられるの？

いられないよ。どうしたって、僕らはもう、そういう風にはお互いを思えないだろう。そしてそうなってしまったら、世界は全て壊れてしまう。世界の中にはいられない。僕らは別の世界へ逃げ込むだろう、この世界からは退場して。

だけど、でも、そうじゃなくたって、そんな破滅的な終わり方じゃなくたっていいでしょう？　どうして悲しみしか待ってないって思わなければならないの。

それならもう、こんな願いは叶わなくたっていい。だけどこれだけはやだ。何もなくなってしまうのは。何一つされなくなってしまうのだけは。本当に繋がりを切ってしまうと、二度と会えなくなるなんてことは。離れてしまうなんて、私きっと耐えられない。ぽたりと頬にまた落とされる、大粒の涙。

詰問は僕の思考を非難する。どうしても破滅的になってしまうのは僕が悪いからなのだろうか。けどどうしたって、そういう風にしか考えられそうにないのに。ベートーヴェンの『運命』だって、第一楽章はあんなにも破壊的だったじゃないか。

こんなこと願わなければ、ずっと一緒にいられたの？　涙ぐんだ声。高さだけが違う、同じ声の

はずなのに、心に刺さる。そうだよ。冷たく言い放つ。だけどどうしたって、ずっと一緒にはいられなかっただろう。いつか僕らは互いに別の相手を見つけて家を出る。それがきっと普通の別れなんだ。こんなにも願わなければ、そんなことはきっと何も傷つけなかったんだよ。

どうしてこうなっちゃったんだろう、分からない。葛葉は放された手を組んで俯いた。そんなこと、僕にも分からないよ。抱きしめて頭を撫でてやればどんなにいいだろうか。

いつの間にこんな風に思うようになったのか、どうしてそうってしまったのか、どちらにも分かるはずはなかった。いっそ生まれ変わることができるなら、すぐにでもそれを選んでしまえただろう。決して打ち明けることはなかった。だけど視線は勝手に追いかけて、体は自ずと近くなり、またそうなるようにいつからか行動していたのは確かだ。葛葉だけじゃない。僕の方だって。意識的に、或いは無意識にさえ、同じ空間にいることを求めている。でもだめだ。葛葉が一步近付いた。後ずさろうとした僕の足は止まってしまった。背中を何かが支えているようで、これ以上下がれない。おかしい。だが何が？

でも。葛葉は顔を上げた。視線は今もう泳がずに、しっかりと僕で結ばれている。一步進む。その分だけ近づいた。

願わずにはいられなかった。思わずには。こうじゃなかったら、なんて考えられない。きっとこうなるように出来ていたのね。運命だったのかもしれない。生まれた時から決まっていたんだわ。風斗の妹として生まれることが決まっていたように。

そうかもしれない。でもそう言うなら、だけど僕だって、後悔なんてしていないよ。これは偶然なんかじゃない。だからこそ、ならばきっと、ここで離れて行くことだって、決まっていたのかも知れない。そう思えば少しは、楽になれるだろう。

ねえ。葛葉がまた一步近づく。追い詰める。殆ど触れそうな程だ。吐息はもう届いている。哀願する表情というのは、きっと今の葛葉のようなものを言うのだ。拒めない。たとえこれ以上下がれたとしても、受け入れてしまう。何を求められても。

そういう風には一緒にいられないなら。どうしても離れなければならないなら。今ここで、まだ子どものうちに、最後に一つだけなら罰もなく綺麗な思い出になってくれるかもしれない。

「兄妹なんだから、おやすみのキスしたっていい、よね？」

頬に手が当てられた。誰がどう見たって、それは幼い兄妹がするようなものではなかった。目を閉じる葛葉につられて瞼は落ち、ゆっくりと遠のく意識の中で、僕は柔らかな熱を感じた。

3.

そしてはっと目が覚めると、カチカチと時計の秒針。時計を見れば目覚ましをかけた時刻より一時間ほど早く、カーテンの隙間からは朝日が差し込んでいる。何となくまだ夢の中にいるような気分で、だけど眠くはない。ベットから出て窓を開ければ、すっきりとした朝の空気。大きく胸に吸い込めば、まだ少しひんやりとした、春前の気温が心地よい。部屋のあちこちには積まれた段ボール。昨日まで片隅にあった寂しさは、いつの間にか消えてしまったようだった。

見ていた夢を思い出す。一度起きたような気もしたけれど、よく分からない。ずっと夢の中だったのだろうか。それとも確かに起きたのか。唇に感触が残っているはずもなく、当てた手を下し

て考える。葛葉。ふと思立って立ち上がる。顔も洗わず寝巻のままリビングに降りる。ビデオの電源を入れた。

『運命』。二人で一緒に見たあの日、一度目の崩落。だけど最後までは転がらなかった。すんでの所で留まった。それから二人とも曲を聴くことを忘れ、結局のところ第一楽章の初めしか聞いていないことになる。ヘッドホンテレビに繋いだ。

だけどあのまま、ずっと強迫的に不安を掻き立てるままで第四楽章まで進むのだろうか。『運命』が有名になったのは何故だ？ あの出だしだけか？ まさか。テレビの画面に映し出されるコンサートホール、オーケストラ。指揮者がいつかと同じように、大きく指揮棒を振り切った。

第一楽章。弦とクラリネットによる、激しく厳しい目もくらむようなフォルテシモの低音。喚起された未来への不安は、どんどん昇ってゆくカノンにつられ、そこから急激に落とされる。どこにも気を抜ける場所がない。逃げ道など用意されていないのだと思わされる。徹底的に緊張感を保ったまま、厳格な対立で進むソナタ。一見平和そうな旋律に安心しようとした途端、運命が告発する。遠のくように見せかけてもう一度。それが何度も繰り返されて、揺さぶられた心は立ち崩れてしまいたいような衝動に駆られる。だがそれは許されない。運命はそれだけでは終わらないのだ。最後まで主題が強烈に押し付けられる。

ここまでは聞いていた。そう、こんなにも最初から惹きつけられたからこそ、あんな風に間違いを犯してしまいそうになったのだ。だがここからは聞いていない。耳に届いていなかった。目を閉じて聞こえてくる音楽だけに神経を集中させる。

第二楽章。出だしは緩やかだ。あの強迫されるような感じはどこへ行ってしまったんだろう。しかしそこで管楽器による印象的な小節。だが不安はない。悲しみが突き抜けてしまったかのようだ。何度かの呼びかけに答えてまたその高らかな旋律。弦楽器の呼びかけと木管の受け答えは緊迫感とともに舞い上がる。夢の中のような幻想的で静かな旋律と、勝利を予告するようなフォルテ進行が交互に現れる。起伏に富みながら向かい、しかし眠りに落ちるかのよう終わる。

第三楽章。初めははまたも勇壮だが悲しみを孕んだような小主題。震えながら諭す。運命はここへきて扉の叩き方を変える。その口調は静かなスタッカートへ。デクレッシェンドで収斂した後は、思ったよりも落ち着いた目覚め。それまでとは違う景色が見えているかのような。四つの中で一番短いこの部分は静かに静かに終わっていくと思わせて、クレッシェンドからそのまま情熱的な第四楽章へ間断なく繋がれる。余裕さえ感じられるやりとり。第三楽章を回想して、昇りつめた先には第二楽章で予告された勝利が顔を出す。そしてそれが第一楽章から出てきていたことにやっと気付く。本当の主題はあの打ち付ける四つの音だけではなかったのだ。幾多の変遷を経て形を変えた幸福が告げられる。しなやかで強い。運命はもう落ちない。第一楽章の始めを聞いて、誰がこの終わりを予想しただろうか。運命は在りきたりなほど安定した姿で、まるで最初から本当は優しかったみたいな終幕を迎える。まだ観客が手を打ち合わせていないうちから、大きな拍手が聞こえてくる。

聞き終わって僕はヘッドホンを外した。言い知れぬ感慨が身を震わせる。しかしそれと同時に昨日までは確かにあった不安や強迫観念がそぎ落とされていくような気がしていた。

そうして表れた感情は、手にとってみればああこれだった、確かにそうだと納得するが、思い込

んでいたものとは少し違っていた。どうしてこんなことに気付けなかったんだろう。あんなに堅固だった感情は一体何だったんだ？

追い詰められているような気がしていた。未来などないと思っていた。だってそれは許される形ではないし、どうあがいたって幸福な結末を迎えられるはずがないと思っていたのだ。

運命は二度も落ちた。だがそれは何のために？ 鬼気迫るほど悲痛に歌い上げる第一楽章の中にも、最後まで繰り返される平和な旋律が隠されていたじゃないか。有名過ぎた出だしにばかり気を取られて、目の前にあるものだけを見ていて、それ以外のことなんて全然眼中になかったのだ。

似過ぎているから、違うところが愛おしかった。間違い探しの面白さ。こんなところにも、と一つずつ見つけていった。リビングに飾られている、色違いの枕で眠る双子の写真。よく見てみれば耳たぶの大きさもちょっと違うし、僕の下睫毛は葛葉のほど主張していない。殆ど同じ寝像をしているが、腕の角度は少し違う。そのくらい些細な、だけど確かにある違い。それが生まれるのは当然のことなのだ。

昨日の夢を思い出す。そこでのやりとり。年末、一緒に運命を聞いていた時とは違う。だけど緊迫していた。感触は思い出の中だけに。だが葛葉は何と言っていた？ 運命は勝利の大団円へ向かう。たとえ形は違くとも、幸福な像はあるはずだ。

居ても立ってもいられなくなって、二階に上がる。自分の部屋ではなく、その隣の部屋の扉を開けた。葛葉が布団にくるまって眠っている。穏やかな寝息は一定のリズムで、それに合わせて布団も上下する。瞼はしっかり閉じられている。右手だけが枕の傍に出ている、何かを掴むようなそぶりを見せる。足音を立てないようにベットの脇へ行った。カーテンは閉められているが、窓の外の明るさは部屋の中をほんのりと灯す。

子どもみたいな寝顔。触ろうとして、やめた。目ざましが鳴るまでの十五分くらいは、こうして眺めていてもいいだろう。

貸しっぱなしだった本を見つけた。CD、漫画。特に申し合わせたわけでもないのに、同じ小説を同じ日に買ってきたりもした。よくどちらかの部屋で音楽を聴いた。クラシックの時もあれば、普通のポップスの時もあった。いつだって同じ曲を好きになっていたわけではない。同じアーティストを気に入っても、一番好きな曲は違ったりした。そうやって一つ一つ考えていくと、いくら似ていると言っても違うところだってたくさんあったことに気付く。そうしてその小さな違いが、ちょっとした口論を呼んだり、逆に笑ったり出来たことも。

僕らは一本の線の上側と下側みたいに、どこまでも近くて、だけど交差することはないのだ。見ている景色は違う。同じ場所を占めているわけではないのだから。コインの表が裏に焦がれるなんて、小説にもなりそうにない。

あと十分。それだけを一緒にいたら、僕はこの家を出る最後の準備を済ませよう。

秒針の音。浅い寝息。起こしてしまわないように腰かける。葛葉の右手がまた何かを捜すように握られて、放される。結局誘惑に負けて、小指だけを絡めた。無意識が応えて握られる。一秒ずつしか時計は進まないはずなのに、あと五分ちょっとしか残っていない。幸福な時間は短い。そしてこれがきつと、僕と葛葉が過ごした最後の幸せになるのだろう。

相変わらず穏やかな寝顔。幸福とは知られぬもの。君の知らないうちに去ってしまえば、秘めたるものは何一つ明らかになることはなく、僕らは兄妹のままにいられる。

もうあと五分。そろそろだ。繋いだ小指を放してしまわなければ。でもその前に約束を。指きりをしよう。

「葛葉、」

呟く。起こすつもりはない。だけどきっと寝ていても、君の奥に響くはずだ。それが君の幸せな眠りをずっとそのままにしてくれるだろう。運命は収斂してゆく。

「ずっと、僕は勘違いをしていたんだと思う。僕と君は全部同じで、違うのは性別でしかない、って。だけどさ、よく考えてみたら、それだけじゃなかったんだね。全部が同じはずがないんだよ。どうしてこんな風に思うようになってしまったのか、ずっと分からなかったんだ。同じはずなのに、こんなことを思うなんて、ナルシストみたいだって」

すうすうと寝息は先を促す。それで僕は独り言を続ける。

「あんな些細なことで、一線を越えてしまいそうになった。そうするつもりはきっと葛葉の方にもなかったんだと思う。僕だって、そんなことするつもりはなかった。したいと願ってはいたけどね。幾ら兄妹だからって、こんな風に思ってしまったからは、幼いころと同じように何でもない風には出来ない」

一呼吸置く。今だって、出来ないことはないのだ。だけどやらない。それは夢の中だけで充分だ。

「何で惹かれてしまったのか、そんなの簡単なことだったんだ。葛葉には分かってる？ もしかしたら、ちゃんと意識したことはなかったかもしれないね。僕も気付かなかった。昨日までは」小指をきゅっと握った。葛葉はそれに応えない。さっきからずっと同じように、緩やかな強さで結んでいるだけ。

「僕らはさ、どんなに形が似ていても、どんなに似たような傾向性を持っていても、どんなに好みが同じでも、絶対に違う人間なんだよ。一人じゃない、二人なんだ。それが違いの全てで、だけどそれだけで全然同じなんかじゃないんだ。そうして違うからこそ、僕も君も同じに思うようになったんだ。同じだけ違う、だから惹かれたんだ。双子として生まれたその時に、もう僕と君は絶対的に違ったんだよ」

そして誰よりも似ているからこそ、こんなにも気になった。血の繋がりとかが、そんなことは関係なかった。もし同じ家に生まれなかったとしても、きっと同じように思っただろう。そんなことはあり得なかったと分かっている。もしもの話だ。

「だから、葛葉。きっとまた何処かで会おう。今度は兄妹としてではなく、双子としてでもなく、純粹に二人の人間として。それで互いに互いを大事だと思えたなら、それで充分だと思うんだ。そうなれるように、僕は離れるんだよ」

約束だ、と手を上下に振った。ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんの一ます。ゆびきった。立ち上がる。そろそろベルが君に新しい一日を告げるだろう。

「今は思っているかもしれないけれど、これは恋なんかじゃないんだ。そんなものじゃない。隣にいらなくても、余りで足りない部分を補わなくても、平気だよ。今はただ不安定な体が、衝動に

任せてしまいたくなっているだけで」

でもそんなことなく、僕らは一番深いところで、結局は繋がっているのだ。それは決して消えることなく、初めから最期まで、たとえ片方がいなくなってしまうても、背中合わせの温もりを与えてくれることだろう。

「お互いに結婚して、子どもでも生んで。きっとそれくらいになったら、思い出して微笑むことができるようになる。歳をとって顔が皺だらけになったら、もう一度一緒に過ごしてもいいかもね。伴侶が亡くなって、子どもたちがみんな飛び出してしまったらさ。それがきっと、一番幸せな姿なんだよ」

二度目の崩落は涙となって、葛葉の右手にぼたりと落ちた。もう行かなければ。ん、と葛葉の唇から息が声となって出た。それがまるで答えたみたいで、嬉しくなる。

「じゃあね、葛葉」

静かに扉に手をかけた。もう一度振り向く。またね、ともう一言だけ。部屋を出て閉じた扉の後ろで、目覚ましのベルが彼女に朝を告げていた。

4.

それから僕は家を出て、都会で一人暮らしを始めた。四年間はあっという間に過ぎ、何を学んだのかもはっきりしないまま何とか就職に漕ぎつけた。祖母が死んだ一回以外は帰省しなかった。その時にもまだ僕は、そういう目で見てしまったから。

何年か経って、職場内で普通の恋愛をして、その人と結婚した。子供が生まれた次の夏に、一家三人で初めて僕の実家に帰ることになった。特に連絡を取っていたわけでもないのに同じ日に葛葉たちも来ていて、狭い家はてんやわやだった。

「来てたんだ、葛葉」

「風斗も。久しぶり」

葛葉は男の子の赤ん坊を抱えていた。その子を見て僕が、そして僕の奥さんが抱えている赤ちゃんを見て葛葉がそれぞれあっと息をのみ、思わず見つめた。

結婚式には参列したし、子どもが産まれたことは手紙で知っていた。産まれたての赤ん坊を見て、うちの子と似てるね、なんて奥さんと話したりもした。だけど半年以上経った今でも、並べたら間違えそうなくらい二人の赤ん坊は似通っていた。

「昔のあなたたちみたいね、目元なんかほら、そっくり」

母親が言った。おばあちゃん目から見ても、この二人の孫はよく似ているらしい。だが従姉弟同士だ。双子ではない。

一週間だけ年上のうちの娘と、葛葉の子どもの初めての対面。ぺたぺたと床を這って、お互いをまじまじと見つめる。このくらいの赤ん坊にも、自分と似ているとかそういうことが分かるのだろうか。彼らはひとしきり見つめ合ったあと、不思議そうな眼を互いの母親に向けた。それを同じようにするものだから、思わず大人たちは頬を崩す。ごちんとおでこをぶつけ合って泣き出すのまで一緒だ。二匹同時の大合唱で、それぞれの母親があやして聞かせた。胸に抱かれてぐずっている。

こんなの見つけたぞ、とじいじが何か持ってきた。あらまだ捨ててなかったのねえ、と呑気にはあばが言う。赤ん坊には大きめの布団と、色違いの小さな枕。それぞれの母親が寝かせると、いつかアルバムで見たような光景に両親が涙ぐんで笑った。

思い出すわねえ、と懐かしむ声。二人も赤ん坊を抱えてすごく大変だったのよ。同時に泣き出すし。そのくせ同じ時間に眠ってはくれないし。どうなることかと思ったけど、こうして孫の顔を見せてくれたんだから、あんなの苦労でもなかったのかもしれないわねえ。微笑み合う両親を見て、僕らもまた目配せした。本当に、あんなのはちっとも不幸じゃなかったのだ。

帰るときはオムツ脱がして確認しなきゃいけないわね、間違っって持って帰っちゃうかもしれないわよ、なんて冗談めかして母親が言う。葛葉が頬を膨らませた。

「お母さん、いくら私だって、自分の子どもの顔は間違えないわよ。ほーら、こんなに違うのに。失礼しちゃうわよね」

ねえ、と葛葉がうちの奥さんに賛同を求める。え、あ、と僕の方を見られたが、正直言って間違えない自信はなかった。けどまあ母親が名前を呼べば、ちゃんと反応してくれるだろう。二人の母親も父親も別なのだから、大丈夫だ。

六人の大人たちと、二人の子ども。思い出話に花が咲き、その間二匹の赤ん坊は家じゅうを這いずりまわって探検していた。うちの娘はずっと後についていた。一週間は年上のはずなのだが。内気だとは思っていたけど。まあ、控え目なのはいいことだ。反対に葛葉の子どもは男の子らしくうちの娘を先導してずいずい進んでいた。階段を這い上がろうとするのだから危ない。よく見たわねえ、こういう光景。とはまたも母親の言。

葛葉とうちの奥さんは意気投合し、子育てについて二人して先輩の経験談を聞いていた。双子を育てるのに苦労したことがなるべく話して欲しくないような恥ずかしい思い出とともに明かされる。お互い立場の弱いことが判明した僕と葛葉の旦那も変な気遣いは薄くなっていった。

「ねえ、風斗」

帰り際、車の窓を開けて葛葉が言いだした。何年か前よりも一層綺麗になったけど、それ以上のことは思わない。子どもを産んで綺麗になったのは、うちの奥さんも同じだから。

「この子たち、きっと一番の仲になるって思わない？」

悪戯っぽそうな頬笑みには見覚えがあった。そういうところは案外変わっていないのかもしれない。

「きっとそうだね。すごく、大切な人になるんじゃないかな」

何も知らないそれぞれの結婚相手には、どうして僕たちが笑ったのかは分からない。赤ん坊には尚更だ。

「また今年の暮れにでも会いましょう。これからはもっとこっちに帰ってくるわよね？ 私たちも年に二回は帰ってこようと思ってるんだけど。忙しい？」

果たされた約束は、次の再会を取り決めさせた。

「いや、そうするつもりだよ。休みがちゃんとあるのだけがうちの会社の魅力だからね。母さんと父さんも首を長くして待ってると思うし、これからはまめに帰ってくると思うよ」

「うん。それに、この子たちも会いたいって思っているはずだしね。せっかく同年代なんだ

から。」

じゃ、ほら、あいさつしなさい、と葛葉が子どもを抱えて顔の高さを合わせた。奥さんもそれに応えてうちの娘と突き合わせる。母親たちが共謀して無理やり二匹の手を繋がせる。

よく似た二人は見つめ合い、しっかりと互いの手を握った。

F I N.

空から落ちていくなんてよくあることだ。昇るのだって何万回と繰り返したのだから、そこを飛び越してまっさかさまに落ちてゆくことだってあるだろう。天球はその真ん中を底まで貫かれて、光速で過ぎ去る極彩色の斑点が海の底から湧きあがる空泡みたいに浮かんでゆく。気の遠くなるような時間そうして墜落していると、僕のほうが絶対座標の原点のように不動のままで、宇宙みたいな海の方が僕から急ぎ足で飛翔している気さえしてくる。境界線が曖昧になってそのうち僕が危うくなると、今度は急に不安になって、広がるだけはもう嫌だ、恐怖が僕を引きとめて、さっきのはただの思い込みだった、同時に最下層の喪失点へまっさかさまだ。海から顔を覗かせている冰山さながら僕の深さは計り知れなく、突然どぼんと冷たい水の中へ落ち込むと、方々から怖々しい魚みたいな生き物が僕の体の線を食べる。そのうち危ういまま保たれていた線も失ってぐるぐるスープの中で回る。小さなもの。はじめてこなごな。ふわふわ漂う。光みたいに曲がっては止まり、そのうち清流のせせらぎが耳に響き、遠くで誰かの声が聞こえる。いくつもの名前を呼んでいるけれど、そのどれもがこの僕を示しているように聞こえる。呼びたい名前もいくつもあるけれど、それだって結局はただ一人を指し示すに違いない。だが四方八方から僕はその名前に無理やり丸めこまれ、何か固定された石みたいに穢れを押し付けられてしまう。そんなことをいくつもやっていたらもう何がなんだかわからなくなる。グリューションカとアンナはもう喋れない。暗闇でぽた、と水の滴り。もっと重くて粘っこい。あれはいつのことだろう。傘はどこへ置いたのかしら。岩肌をなめると塩の味がする。どこが口だ？

「君はもうずっとそうして眠っているままだね」

静かな声。五月蠅くてかなわない。侵食するほど透き通る。言われた大男は答えない。さっきからずっと川をじゃぶじゃぶ漁っている。竹を編んだ簡素な網で川の水を掬っては石を乱暴にぶつけ合わせる。透明なのは耐えられない。赤色の飛沫がきつといい。巡ってくれていたはずなのに。だったら吐いた息に色が付けばいいのに。色が空っぽな空色だ。

「そんなことをしなくても、どうにかなると思うのだけど」

聞かれた男は手を休めずに石をたくさん洗っている。石はたくさん洗われている。汚いものは捨てられる。またまっさかさまだ。丸いのや四角いの。邪魔な魚をとってくれているわけじゃないらしい。奴らの唇は薄くて気持ち悪い。肌を剥がされるような気がする。そんな明確な線引きってどこだ？ だんだん角が削れてくる。何かを思い出せなくなった気がする。でも何を覚えていたんだろう。何か、何かあったはずなのに。

「第二階層は茫漠と清浄。穢れを清められているアストラル体に僕の声はきつと邪魔だね。もし聞こえているなら大問題だ。しかしどうやらそれが今やっと起こっているらしい」

男は石を並べて意思を示した。『去れ』とは辛辣。言われた方はふっと笑うと紫水晶の蝶が飛んだ。燐粉が蘭の花を咲かす。香りってそういえばどんな形をしているんだろう。

「それが君の磔刑かい。喋れないとは難儀だね。心配しなくてもいい、今の君は幽霊みたいなものさ。君という名で呼んでいるけれど、君たちと呼ぶべきかもしれないね。尤も、本当は無限に一個のアストラル体だけ。クラスを導く教師の役割は大変だね。魂は琥珀だよ。積り、濁り、

それでこそ映す光もあるが、水晶にするのは一苦労。懺悔の仕方も十人十色だね」

かつかつ隣の石と当たる。声は聞こえないけど響いている。痛いとは思ってないみたい。角が取れるのはいいけれど、はがされるのは怖いと思う。そろそろ隆一が帰ってくる。あの子には母親がいない。迎えてやらねば。晩御飯は何にしよう。

「はは、まだまだずいぶん夢見心地みたいだね。そんなことはしないさ。君はただものであることをやめて光のうちに還るだけだよ。君は映すんじゃない。月とは違う種類なんだよ。放っておくと月がみんな食べてしまうからね。さてじゃあこの石はもらってゆこう。どうやらピンホールを抜けたようだ。夢を見るのはもうおしまいだよ。ひかりのたびがやっと始まる」

ひょいと宇宙が反転する。川辺は消えた。加えられた力と重力が等しくなるところみたいにふっと止まっていただけだったみたいだ。でもまた落ちていくみたいな気がするのはなんでだろう。僕が反対向いたからかな。でもどっちがどっちだったっけ。何の話をしているんだ。早く行かなくては。彼女のお腹には子供がいる。電話があった。タクシーが見つからない。

「第三階層はここから遠いよ。落ちる間隔に身を任せて！ 感覚なんて役に立たない、ちゃんとあの隙間へ落ちるんだよ。ほら、余計なことを考えている暇はない」

ハイスピードで落ちていると隣を同じ速度でビー玉みたいな流星が飛んでいる。よかった、一人じゃないみたい。でもそっちはずいぶんよさそうだ。せいぜい引力のお陰で一つにまとまっている僕なんかとは全然違って、境界線もないくせに、強固な光が集まっている。直視できないくらいにまぶしくせに、気づけば浮かんでくるなんて卑怯だ。どうすればいいんだろう。

「君もこうなるんだよ。今はまだ不完全だ。あらゆる支配からのがれるだけではまだ足りないのさ。地球の重力からは自力で抜けられたとしても、ここからは他の助けを借りないとね。あの怖いずっと見張っている月から逃げて惑星レベルの重力を抜け出さなくては！ 気づけただけでも上出来だ、もっともそんな人はたくさんいるけどね。さあ、しっかりと君を保って。他のものにひかれてはいけない。君は君を失ってしまうよ！」

何を言っているのかよく分からない。ただ重力加速度はどんどん増してく。最後に笑ったのっていつだったっけ。もう思い出せない。そういえば君はどこにいるんだろう。先に行くねって言っていたけど、無事に着いたんだろうか。僕を待っていてくれているはず。それともまだ家で寝ているかもしれない。僕は何を失ってしまったんだろう。昔の灯りは消えそうなほど遠くにあって、生まれたての新星みたいに光っていても拡散するのでは仕方ない。それは嫌だ！ 広がるだけなんて、境目がほしい、形を、でも何も思い出せないんだ。

歌が聞こえる。空間が振動している。揺れが到達する。こっちまでゆれる心は波みたいにそれを吸収して心地よいような気分になる。呼び声は遠くから幾つも聞こえる。岩の陰から有象無象が手招きしている。真っ黒なのは何かがあるからで、何もないから黒いんじゃないかって、何もなかったら透明なんだ。透明になんてなりたくない。

男は考えている。コーヒーはもう湯気を立てていない。椅子のすわり心地はよくないが、それよりも彼をとどめさせるものがあるのだ。今までのことを振り返ってみる。じっと目線を壁に集中させる。しかし何を見ているわけでもない。彼女の言動、そして自分の取った行動と言った言葉、それがどんな結果を引き起こしたのか。どうして彼女はいつってしまったんだろう。気付け

ば机を指でとんとんと叩いている。いつからこんな癖がついたのか男にはよくわからない。コーヒーに口をつけた。温い。甘みは邪魔に思えるが、しかし苦い。香りなどというものはもうなくなっている。男は顔をしかめた。何をしたらいいのか以前に、自分が何をしたいのかさえもがわからない。このコーヒーを本当に飲みたかったのかさえ。

アンナはどこへ行ってしまったんだろう。グルーシュンカの噂は聞かない。二人とも僕を置いていってしまった。どちらとも選べずにいて、そのどちらをも失ってしまうとは滑稽だ。今になってもどちらとも言えない。三人でよく遊んだ湖は夕陽を映して物悲しく、人の気配は全くなくて、僕一人だけが世界の滅亡にさえ置いていかれたような気分になってきた。飛び込んでしまおうか、と思いはするものの、ずっとじいっと座っている。父さん、貴方の言っていたことが今になってやっとわかりました。貴方は臆病で、人目を不必要に気にし、そのくせ尊大でありながら、嗅覚は鋭く僕の行く末を嗅ぎ取っていたのですね。ああもうままよ、といざ立ち上がってふちへ来ると、湖は清涼に揺らぎもなく、靴も脱がずに足を進めれば、水底の土が静かに歩みを受け止めて包み、ほとんどの音もなく進む足から同心円に水面は揺れて、しだいにひやりと冷たくなって、足先の感覚が危うくなってくる。ずぶずぶと僕が進めているのか飲み込んでいくのかの境が曖昧になってきて、指先が芯まで冷えて逆に熱いほど、腰まで浸かってしまったところで急に怖くなって戻ろうと足を無理に動かせば変に土は僕を放さず、それどころかそのせいで水は土色に濁って底を隠し、ずぶずぶ、と一気に胸まで沈んでしまう。

まだまだ落ち続ける。真夜中のトンネルを高速で走り抜けるような感覚。トンネルの外も雨だろう。助手席でブランケットに包まって眠っている君は窮屈そうに寝返りを打った。君をどこへ連れて行こうか、寝ている間に二度と帰れないところまで行ってしまおうかと考えて、すぐに振り払った。君はそんなこと望まないだろう。ただどこか遠くに行きたいだけ。どうせすぐ戻ってくるつもりで。誰とだっていいのだ。一人はさみしい。僕のことすら望みには含まれない。どうして君は彼を選んでしまったのだ。こうなることはわかりきっていたのに。どうして君が彼を選ぶようにしてしまったんだろう。こうなることはわかりきっていたんだ。なのに僕が出来ることは、傷ついた君を乗せて行くあてもなしに逃げるだけ。逃避行の主人公であるはずの君は寝息を立てて、僕までもが何もかもから逃げている。

高校生のころ、君を想って書いた詩をふっと思い出した。歌詞を書いたと言って君に見せたら、君はずいぶん褒めてくれたっけ。感情がよく伝わってくる、なんて。だけど僕は君になにも伝えていなかった。これからも言う気はない。それでもこうして頼られると振り切ることが出来ない。いっそ君からも逃げてしまえば、楽しさを忘れる代わりに楽になれる気もする。

トンネルを抜けた。まだ雨は強く降り続けている。電灯が両端を去って行く。ワイパーが追いつかない。フロントガラスには大粒の玉が後から後から降り積もっては弾けて流れる。春の嵐。車の中で濡れてはいないのに雨の中に一人でいる。だけどうるさい雨音に隠れて時折君の寝息が聞こえる。視界はおよそ悪すぎる。前に車はいない。対向車とすれ違ったのは何分前のことだったろうか。速度を落とした。運転に神経を集中させようとするけれど、君の寝息が妙に耳に障る。夢でも見ているんだろうか。ラジオでも入れよう。電源を入れる。ひときわ大きいノイズ。チューナーを回すとその雑音がだんだんと薄れ、音楽らしきものがかすかに聞こえる。

隣で君がまた寝返りを打った。ブランケットが落ちそうになって、それをぎゅっと抱きしめる。起こしてしまったかと思ったけれど、そのまま再び眠りのふちに落ちていったようだった。ふう、と一息つく。と同時に案内標識に目をやる。サービスステーションはあと二キロ。そろそろ喉が渇いてきた。何時間か前に買ったお茶はもうとっくの昔に湯気をなくしている。

月明かりが静かに降り注ぐ。世界は銀色。住宅街の中にひっそりと身を潜める公園は四方を木々に囲われて、真ん中の遊技場の周りに遊具が並び、その合間合間にベンチがある。西側の一角にある時計はもうすぐ二時をさす。東口から遊技場に長い影が差し込んだ。そちらを見やる。自然と身体が立ち上がって、右手が上がる。影の主は早足でこちらに向かっている。コートの襟をぎゅっと握る。やっぱりマフラーをしてくればよかった。せっかく編んでくれたのに。小さな唇が僕の名を呼ぶ。小さな声でそれに答えて腕を広げる。抱擁。真夜中の逢瀬。言葉よりも早く吐息は鼻先を擦った。影が重なる。

「魂はね、そうやっていくつもを繰り返してきたんだよ。無限にも匹敵する時間と回数、君たちはそうやって檻から逃れようとしてきた。その代償がその記憶だね。永遠の園はそこではないよ。仮初めの肉体を幾つ移ろうとも変わらない。神様はねえ、君たちがそうやって自力で帰ってきてくれるようになるのをずっと待っていたんだよ。地に縛られているのはもうおしまいだ。さあ後は宇宙の果てへ行くだけだ。今までの道のりに比べたらどうってことはないはずだね。彼女はもうそっちへ行っているよ。さあ早く、君がいなくては永遠に永遠は訪れない」

光がどんどん過ぎてゆく。ふと後ろを振り返れば青い星が遠く一粒の点になっている。今までずっとあそこから逃げようとしてきたのに、今になると懐かしさがこみ上げて、なんだか少し物悲しい。手を伸ばすように光はここまで届くけれど、もう遅いのだ。あそこは仮初めの庭、養豚場の安息だ。そこには永遠に続く保障なんてどこにもない。明日には食べられてしまうかもしれないんだから。行き先は決まっている。ずっと昔二人でいて、一度は追い出されてしまった楽園。閉じ込められた檻を逃れて、会いに行こう。北極点を超えて無限の深遠へと落ちるのでなくたびをして上り、はるか彼方へ、果ての向こうへ。

「長かったねえ。神さまが君たちを涙とともに楽園から追放して土に縛り付け、その管理者を退いてから、一体幾つの星が滅びてしまったんだろう。君たちは何もかも忘れてしまった、肉の体は強く締め付けて逃がそうとしない。管理者は優秀だったけれど、奔放すぎて神さまの意思を離れた。君の肉に三つの戒めを呪いつけ、君は酷く矮小になった。神さまはずいぶん嘆いたものだ。いくつもの天変地異でさえ、君を肉と土から切り離すことはできなかった。君たちがそうしたいと思うことさえ忘れていたのだからしょうもない。君たちは小さな世界中で子どもを増やし、分化された魂は死ぬと君たちを閉じ込めるオゾンの膜に魂をぶつけた。月が見ている昼と夜を嫌って半年ごとに極を変えて。肉の器の魂の座では何もかも思い出すことはできなくても、やっぱり覚えていたんだね」

ずっと聞こえていた怨嗟の声はだんだんと高く絞り出すままに小さくしぼんでゆく。看守の魔の手は届かない。変わりに聞こえてくる歌は優しく、向こうの方は暖かく、ああそうだ、そっちへ行こう。光たちは後ろに尻尾を伸ばして、また一つ彗星を追い抜く、周回軌道に縛られた、土の呪いから抜けられなかった子どもたち。地球レベルの重力を離れることは容易かった。

電波、光、方法はいくらでもあった。だけどそれではだめなのだ。魂の座を移しただけで、本質的なことは何も変わっちゃいないんだから。何かに縛られているのでは行かない。

「そう、本当に魂だけにならなければね。それは君たちにしかできない、君たちにならできる。君たちは最初から、そういう風にして在るのだから。仮初の輪廻を抜け出して、着せられた服を脱ぎ、解き放つ光にも似た軌跡、私はずっとそれを望んできたよ。君たちを救うための六人の子供たち、土から天を目指した幾つもの物語。最後の使者、そして最後の死者。再び還る、魂だけの、形もなく存在者ではない在り方をして」

呼び声は荘厳な鐘の音のように満ちている。見えない闇の物質たちがぶつかってはまた色を身にまとう。けどもう真空の風は追いつけない。時間の番犬は僕を噛めない。だって境界線なんてどこにもないのに、光に満ちて揺らがないのだ。線なんて本当はいらない。輝きではなく輝いて、そこには何もものもいない、心地よくなって暖かい、ただそれだけのことなんだ。

何度も別れた。そのたびに雫は大地を濡らし、悲しみのために何度も出会った。もう分かっている、そんな惑わしの別れなんてないんだってことに。今だってひと時の別れ、一番遠くて長い、約束された別れ。だから僕たちはただ二人、無限を無限と呼びならわそう。括れないものをことばにしよう。もう僕は君と呼ぼう。大丈夫、それは何ものにも縛られていない。ことばはものにくびくけど、ものであって物じゃないんだから。

軌跡は無限に続く二重螺旋。何度も追い求め、だけど重なることは出来なかった。どんなに足掻いても、そう願っても。一つになることはできない。新たな肉を生んでしまう。

さあ、一つになろう。だけどそれは二つが一つの形になるってことじゃない。同じものになるなんて不可能だ。

君はずっと待っている。ほんの少しの誤差だったけれど、確かに長い孤独の中で。無色な光と透明な音楽はまだ満たされない。君はずっと待っている。僕が行くまでは永遠に。

もう一度、もう一度だけ記憶の海を漂ってもいいだろうか。何億の笑顔の花、物語は一つにつながり、今こそエピローグへ。暗闇の向こうでは青の花が、青のまま万華鏡のように刻々と咲き乱れている。零れてはまた青が咲き、それをずっと繰り返す。時間のように花は咲く。同じ形は一つとしてない。懐かしい。だけど失くしていたわけじゃない。地上の檻からだっていつも、宇宙はどんな星よりも大きな青の花を咲かせていたんだから。

ずっと行こうと、本当は思っていたのかもしれない。絶えない憧れ。刻まれた郷愁。いつだって見上げていた。空は全然面なんかじゃない。星たちも窓に張り付いているわけじゃない。あの向こうには無限があって、僕たちはそれを見ているのだ。見つめる一点を貫く涯、天球なんてものはないのだ。

夢を見ていた。長い間。数え切れない程の夢を。君と僕は互いに様々な形をとり、僕は僕の別の形に出会ったりした。子どもたち、とさっきは聞こえたけれど、そうじゃなかった。あの檻は時間も縛っていたのだ。廻り続ける輪。たった二つの魂が、その時点も様々に生まれ変わりを繰り返し、北極点へ昇っては見えないオゾンの壁に敗れてまた墮ちる。その間に紡がれた記憶はどれも魂に薄く重なり、琥珀のように深く積もる。

透明になんてなりたくなかった。闇よりも何もない方がずっと怖かったのだ。だけど今はもう

違う。どこまでも澄んで行こう、闇色になんて染まらない。形がずっとほしかった。確かな輪郭が。だけどそれは呪いだ。魄なんていない。そんなものに頼っていては、本当に輝くことなんて出来ない。

見えてくる。聞こえてくる。青の中心に僕は飛びこむ。抵抗感はまるでない。青が抱きとめるようにしぼんでいく。

光の速さで膨らんでいた特異点のない有限が、それ自体で光を共にして縮んでゆく。光を秘めて凝縮する。夢の終わりはまたひと時の眠り、静かに深淵に沈んでゆく。約束された目覚めはすぐそこ。不安も恐怖もどこにもない。安心しきって眠りに委ねる。幼子が母の胸に抱かれるように。次に目が覚めたら、君の名前を呼ぼう。すぐに君を見つけよう。それとも先に行った君の方が、僕の名前を呼んでくれるだろうか。

包まれる。思い出す。形のない頬笑み。記憶の中のどれとも違う、でもどれも同じだ。微笑んでくれたことだけ覚えている。ああ、もう眠ろう。幾千の別れを繰り返してきた。涙は星を何度も循環した。でももう失うことはないんだね。すぐに会えるって分かっていたら、僕はいつもと同じように眠れるだろう。

光が満ちた、それさえも、もしかしたら思い出かもしれない。

眩しい。鼻先を草の匂いに混じって懐かしい匂いがくすぐっている。瞼の裏に映っていた灯りは上から何かに遮られる。

そっと、頬に触れるものを感じる。そしてまた零される僕の名前。呼び声に答えて、右手を伸ばしてそれを握る。ゆっくりと瞼を開けると、ちょうど真上から君が僕を覗きこんでいた。

「どのくらい、眠っていた？」

手と手をしっかり握りしめて、君の顔を見上げる。夢に見ていた微笑みが注がれた。もう片方の手で君の頬に触れる。

「ずいぶん。あんまり寝顔が可愛いから、起こすことなんて出来なかった。すっごく気持ちよさそうなんだもん」

なるほど、すごく心地いいのは、膝枕のおかげだったのか。暖かな風が君の髪を梳いていく。小高い丘の上は柔らかい草に覆われて、時折赤い花が咲いている。天上は抜けるほどの青。

「私が誰だか分かる？ さっきの夢にもずっといたのよ」

「もちろん。ごめんね、ずいぶん待たせちゃって」

涙を溜めた瞳で君は首を横に振った。唇が震えている。頬を撫ぜる。君は空いた手をそれに重ねて、そのまま頬ずりをする。どっちが撫でているんだか分からない。落ちそうな雫を親指で拭いた。君はまた笑おうとして、失敗して顔をくしゃくしゃにする。拭っても拭っても、後から後から涙はあふれて、結局ぽたぽた落ちてくる。目尻に落ちる。僕の分まで君は泣く。

「涙って、あったかいね」

「私は寒かった。貴方がずっと来ないから」

「起こしてくれてよかったのに」

「だって」

「ずっと、膝枕してくれてたの？」

「すぐ起きない貴方が悪い」

「ありがとう」

握った右手に力を入れて起き上がる。君の方に向き直って、頬を指でなぞる。君はされるがままになっている。髪を手取る。指を絡めて梳く。また唇を震わせる。痺れにも似た甘さ。

「やっと、また触れられた」

うん、と君は上手く言えない。腕を昇って肩に手を置く。また涙を拭う。君が落ち着いたころ、肩に乗せた手に力を込めた。

「ねえ、」

「なに？」

こんなやりとりを何回もやってきたに違いない。一瞬の空白と尋ね合う視線、それからやっとことばは出てくる。

「抱きしめて、いい？」

わ、と君が答えより先に飛びついてくる。支えきれなくて僕は君を腕の中に収めたまま寝転がる。頭を撫でる。君は顔を胸に押しつけて涙を拭う。息が出来なくなる程力は強い。

「もう泣かなくていいんだよ。悲しいことはないんだから」

そう、全ての涙も慟哭も、今ここに至るためのものだったんだから。全てのことは必要だった。光の満ちるこの場所には。

「だから泣いてるの。ばか」

ぎゅっと抱きしめる。君は今まで出会った誰の似姿でもないし、そもそも君に形なんてない。膝だって腕だって顔だって涙だって。だけど君は君のままで、境界線なんかなくても変わらずいる。それは全然不思議でもない。そういう風にして在るんだ。ただ僕は君の光に、その温もりに名づけるだけで。きっとこれが、僕たちの望んだ樂園なんだろう。こういう風に在りたいと、ずっと望んできたんだから。何にも縛られない在り方を。

線は要らない。光は広がる。だけど消えたりはしないんだ。

やっと本当の君に出会えた。すべてはここで一つになる。

夢のあとさき。

Fin.

* 1

映せば記憶に苛まれる。一枚のガラスで区切られた中と外のどちらも過ぎゆく。反射と透過。雨の中のヘッドライトの群れは、小さな魚の瞳に似ている。溺れないでいられるのは、上手く呼吸ができるからだ、泳げるからじゃない。

吊革に掴って何も考えていない風で、きっとイヤホンから流れる音楽だって聴いていないのだろう女を窓に見つけた。

降りる駅を知っている。名前も、それ以上のことさえも知っていた、はずだ。とうの昔に気分は失い、短くもなかった年月を埋めた。だけど影に見るからには、火葬にまでは出来なかったらしい。悔やまれるのは期待。或いは無知こそが否決された。それで酸素を失ったら、昇るしかない。浮くことでしか助からないなら、沈めたって無駄なことだ。浮かばずにはいられなかった。何が苦しかったのかは今でも分からないけれど。

だけどえらのない魚なんているだろうか。そうじゃないならその海には、少しの空気も含まれていなかったのだ。流動と豊かな栄養。雨を降らせなければならなかった。育むための恵みの雨。重要なのは循環だ。回れ回れ、回らば回せ。だけど一匹の魚が雨乞いしたって無理な話、涙さえ浮かべられないのだから。それに魚は喋れない。言葉になんてならないのだ。

泣いている所を見たことは、そういえばなかった気がする。真珠はどこにも育たなかった。真珠どころか何一つ。せいぜいが荒波、風立てただけ。浮かぶ瀬もなく苦しいままで、藁の一つも掴むことはできない。ないないないの繰り返し。今も無表情に窓を見つめそれとも外を見ているのやら知られない。

吊革を持つ手を変えた。重心が左に寄る。視線は窓から離れて無意味な文字の羅列へ注がれる。有名な誰がどうした、という思わせぶりの記述には意味を持たせられない。だからどうした、そんなことより、思考は一定の方向を指差す。差された方へ勝手に向かう。視線は再び窓の光を捉えた。ひた走る電灯の合間には、今度は憂鬱そうに顔を沈めている女。

あれは知った表情だったか。思い出そうにも棺桶を開ける勇気はない。どんな音楽を聴くのかも、そういえばちゃんとは知らなかった。話す内容は重要じゃない、話すことだ。だけどじゃあ、何を知ったつもりでいたんだ？ 本当に知りたいと、思ったはずなのに何を。影の器に色を満たしただけじゃないか。

口下手で、いつもは話なんかしないくせに、単純明快なことを言ったこともあった。恥ずかしがることの多い女だった。枕を一つにすれば顔を赤らめ、ものであることを恨んだりした。どうしたって二つ、一つになることは出来ない。高揚した気分はついに撃ち落とされる。どうしたって割れた大地を飛び越えるしなやかな躍動を持っていなかったのだ。落ちていく人を何人も見たことは、その言い訳にはならないけれど。

コンクリートの隣で止まって波が起こる。引潮に巻き込まれないようにうまく避ける。目の前は座ったまままだ眠っているようだった。期待しているわけもない。映された女の周囲もそうだ

った。また同じくらいまで満ちる。視線を回したけれど、影の近くにはどこにも空いている場所はなかった。立ったままでいる女がいて、何か一瞬、息を呑んだように見えた。

また、眼を瞑った。

鈍行列車に揺られながら、何を話したっけ。全てはそんなに前のことではなかったが、光速で過ぎ去る日々は十分な土を被せてしまったらしい。それとも光速で逃げたのか。だが過去は遅々として消えるそぶりを見せなかった。映った影一つ、余計な色を塗りつけて、意味ないものに出来ないのだから。

どこに行ったのかは覚えている。鎌倉だ。恋人同士の学生旅行にしては色気のない、しかしそんなことは重要じゃなかった。湘南新宿ラインの沿線はだんだんと都会になって、多くなった人は景色がまた緑を豊かにする頃には落ち着いていた。最初は立ち、そのうち一人で、最後には二つの席を占有した。買ったばかりのボストンバック、二人分の荷物は網棚に。

あれ以来こんなことは一度もなかった。少なくとも、そう、そのはずだ。今はもう昔、思い出すことは写真を見ることであって現実じゃない。だが感情はいつも真新しい。持続できないことだけが欠点だ。そのおかげで悲しみらしき名をつけられた波はいつの間にか静められていたけれど

がたん、揺れる、捕まる力は強くなる。目を開けて、一瞬あわただしくそれから何事もなかったように同じに揺れる。波に乗るのは難しい。波があれば泳ぐにも困る。塩気は体の水分を奪い、あだからか、目尻の皺を何も伝わらなかったのは。

猫みたいな澄んだ茶色の瞳。黒と言うには暗闇に忍ばなければならないような色抜けた髪。濡れて艶めく、影にはどんな色もないが、見つけたのは薄桃色の小さな唇。震えて、躊躇い、息を呑んで、それで結局、柔らかい。言葉を失った舌が、勢いづいて雄弁に黙らせた。息つく暇もあげないで、耳の裏は赤くなり、やっと放したころには視線は溶けて混ざろうとしていた。それは知らない。知らなかったことだ。どんな思いも抱いていたつもりはなかった。きっと岸壁から海に飛び込みたくなる、あの感じに多分似ていたのだろう。思い出すのはそんなことばかり。それだけだったはずもないのに。

だけど、本当は、どう、なんだろう。

ちらと横を見る勇氣はない。会社帰りらしいスーツ姿のサラリーマンと、リュックを肩から背負うでもなくぶら下げた女の子。それぞれ退屈そうに携帯電話を眺めたり本をめくったりしている。その隣。そこまでは視線を行かせられない。

じっと見詰めることが出来たのは、多分一回だけ。付き合うことになった時、何の因果か同じ部屋で寝泊まりすることになった。サークルの旅行。山の中まで先輩の運転するレンタカーで行って、くじ引きでログハウスを決めた。部屋割りもだ。

旅行に参加したのはただ単に、山から星を仰ぎたかっただけだった。こんな雨では光も届かず、都会にいては晴れていても望めない。ログハウス、温泉、満点の星。それ以上など。

背中を向けた。差し向かいに座ったら、何かを言わなければならなくなる。外に出て一人で星を見ようか、いや。

話したことは余りなかった。饒舌でもないし、自分から話せるような人間でもない。その場所に

いて笑い声に色を足すような。だからそれは、逆を言えば、引き合って当然だったのかも知れない。溶け合って気付けば朝になっていて、大慌てで全てを整えたものだ。あれからもう、三年経っていることになる。

その前に行けたら訊いてみたい。お前、本当にそうなのか。黙って頷いたとは思えない。多分違っただろう。舞い上がり、興味もあって、愚かだと言えればそれまでで、だけど努力はしたつもりだった。でもその時点ではそうかもしれないが、確かにそれから変わったはずだ。電車のように一本道というわけにはいかない。だから卒業と同時に別れたのも、或いは当然だったのだろう。どんな風にして一緒にいたのか。きっと本当に、一緒にいただけだったんだ。それでいいかどうかは知らない。

笑っている。頬を膨らませて怒る。布団に転がって、腕を十字に顔の上に置いている。あれは泣いていなかったか。

窓に映る影を見つめる。だが焦点はもっと遠く。ずっと沈んではいられない。浮かべば呼吸は出来るのだ。顔を上げた。それなら視線の無限延線上には、交点だってあるはずだ。

あったのだ。だからこんなに思い出される。影の器にはどんなものも、入れられるはずがないのに。

疲れが取れない。あれから一度も山には行かない。海だなんて、まさか近づくはずもない。向こうからだって近付いてきたりはしなかった。ただ一度、多分、写真から色が消えたころにはもっと上手く思い出せるだろう。その時は隣に誰がいるのだろうか。一つ屋根の下に暮らして、海にはとうとう命が宿る。魚の群れが回遊する。雨は降った。五年前から使っている傘は大きめのもので、今は雨を孤独に切り分ける。

なんて、思っていたよりずっと未練があったみたいだ。焦点を窓に移せば、影の目とあった気がした。映る景色は分からない。結局のところ影しか見ていなかったのだろう。

そろそろだ。影を臨むのはお終い。どんな色をつけたって、ホームに入れば影も消える。内側と外側が繋がって、その代わり一つではなくなる。視線の交点は無限大に広がる。線分にはならない。世界が球でない限り再び交わることもない。雨のせいでくもった半端な鏡には、空虚な表情が浮かぶだけ。

ゆっくりと扉が開いた。波に乗る。詩織を視界の端に入れ、すぐに振り返った。向こうが気付いた様子はなかった。降りる。扉が同じようにゆっくり閉まる。内と外。電車の中もホームも明るい。視線は透過する。見つからない。ほっとしたのか残念に思ったのかは分からなかった。だけどその代わり、囚われて止まっていた足は今ややっと進み始めた。何かが肩に触れた。

* 2

知らない、藤倉一樹を意識し始めたのはいつからだったのか、なんてことは。話しかけられたことはあった。きっと挨拶くらいはしてくれていたはずだ。確かに飲み会では何度か隣になったことがあったけど、偶然じゃないからそれはちっとも参考にならない。第一、こんなことになるなんて。

温泉から自分の部屋へ帰る途中。周りには同じサークルの女の子たち。とりとめのない話をして
いる、皆が笑った時には同じように笑う。そのくらいなら出来るけど、何でもないような話を自
分からすることは出来ない。そんな所は似ている二人だ。

どういうつもりなんだろう、と神さまがいたら問い詰めた気分だった。周りの子たちの話なん
てどうでもいい。少なくとも今は、仕方ないと思う。どうしろというのだろうか。サイコロを振
って決めたのなら恨みたいし、わざわざ好き好んでそうしたのなら納得できるまで訳を言って欲
しい。どうせならついでに、勇気、なんてものをくれたらいいのに。

いっそ、空気でもいい。充分な酸素。そういう雰囲気。言葉巧みならもっと上手くやれるのかは
知らないけれど。こういう話になると、そんなことは関係ないのかもしれない。

どうすればいいのだろうか。そんな風に思うなんてこと自体、今までだったら考えられない。もし
もこうじゃなかったら、今回だって藤倉一樹ではなかったら、無表情に無感動に冷めた反応を返
していただろう。さっさと初めから他の女の子の所へ行くことにして、或いはどこか似たような
境遇の組み合わせと結託していたかもしれない。話しかけるのは苦手とはいえ、事務的なことま
で出来ないのではない。ちゃんとした用事なのだから。その点は、もしかしたら違うかも。

温泉からログハウスへ続く砂利道の両側に並ぶ木々のどこかから何かが飛び立った。つられて見
上げれば満点の星。雨のように降り注ぐ光たち。何も星座を捜すことだけが、山奥まで来て星空
を見る楽しみではないと思うのだ。目を閉じたっていい、そうすればきっと雨に同じ、光の音だ
って聞こえてきそうだ。ざあざあぽつぽつどちらでもない、もっと、さあ、と細くて風に流さ
れる。梅雨の終わりの、嵐にはならず雨の季節を惜しむような、悲しみだ、呑みこまれて締め付
けられる、手を伸ばして届かない、悲しみ以外のどの感情が、この雨に寄せられるだろう。光は
いつも別れている。光は同じでいられない。だけど希望の裏返しだ。何を期待して星空を見上
げて、それで結局悲しくなるのだろうか。悲しみ、なんて嘘かもしれない。感傷的になりすぎだ。
だけどそうだとすると、他のどんな言葉で、どんな風に説明すればいい？ 分からない。向かい
たい。だけど行けないかもしれない。歩きながら止まっている。後ろをついていくのが精一杯。
走り出したいエネルギーは、今は足を重くするだけ。延ばす指は届くだろうか。本物までは絶望
的に遠い。息も出来ない暗闇があって、きっと音もなく光が過ぎ去る。完全に無機的な周期性。
ただ回るだけ、例え出会えても。どこに望みを見つければいいのだろうか。だけど現実はどうじゃ
ない。

不思議なこともあるものだ。どんな宗教を仰ぐつもりもないけれど、ああ、と思わず口をついて
出そうになる。手を組んで、唇を持っていく。祈るように目を瞑る。聞こえてくるのは孤独の音
。さあさあと流れ去る、今の光。

他の誰も知らないだろう、そしてきっと夢にも思わない。いつも余り話そうとしない二人が同じ
部屋になった、なんて話の種にはなったとしても、その先までなんて考えない。あるわけないと
思うだろう。考えてなんかいないのだ。

「詩織ちゃんは藤倉君、と一緒にだったっけ？」

ログハウスまで来て一人が話しかけてきた。ばね仕掛けの玩具みたいに頷く。そうだよ、と口
に出すべきだったんだろう。

「どういう人なのか知らないんだよね、話したりしないし」

「そうそう、合宿来るって聞いて、びっくりしたくらいだよ」

ねえ、と頷きあう間に挟まれた。二人のうち一人は同じログハウスだ。部屋は違う。偶然とは恐ろしい。

「何かあったら叫んでね？ 駆けつけるから」

「いやー、彼にそんな勇気ないでしょ」

寡黙な人間が大人しい奴だなんて大間違い、だけど同じように笑った。楽な仕草だ。そんな勇気はない、確かに。

じゃあね、と別のログハウスの子と別れる。もう一人とは部屋の前まで来るうちには遂に一人になってしまっていた。何もなくても、遊びに来てよ、ありがとう、もしかしたらいくかも。その時はよろしくね。小さく手を振ってすぐに向き直った。

息が詰まる。でも別に、宇宙空間にいるわけでも、底のない海に沈んでしまったわけでもない。どちらも青は深いけど。ここには十分な空気があって、地上で、まだ決まっていはいないのだ。いつも同じ円運動をしているわけじゃない。偶然だ。一つを失敗したからといって全てがお終いになるわけじゃない。

何度も呑みこむようにする。向こう側に行ったらまず何を言おうか。大丈夫。ドアノブに手をかけて、離す。しんとした廊下が規則正しく膨れては縮む。もう一人が入っていった部屋は廊下の手前。一番奥。小さな窓から外と同じ光が降っている。さあ、さあ。木で建てられた暖かな家。夜を浮かべて沈めない仄かな灯り。二階には三つの寝室。うち二つは四人部屋で、余った一番奥の部屋にはベッドが二つ。さあ。さあ。

ノブを回した。カギは掛かっていなかった。浴衣ではないけれど、湯上りの髪はまだ完全に乾いてはいない。唇だって、薄いけれど、降り注ぐ雨の下なら光に濡れてくれるだろう。

部屋は無言だった。藤倉君は窓の向こうを見ている。余計なものは何一つない。足りないものは幾らでも。反対側を向いている。静かに背中に歩みよる。

「ねえ、藤倉、くん」

肩に置いた指が、遂に瞳同士を会わせた。

* 3

はっと振り向くと澄んだ瞳に影が映った。

「加賀美さん？」

詩織は無言で頷いた。その視線は斜めのまま上がらない。話しかけて、結局、その次に何を言おうかは考えていなかった。

「何、どうしたの？」

びっくりした、自分に。こんな自然に言葉が出るとは思っていなかった。もちろん、話しかけられたのだから予想外のことだ。前髪に隠れて詩織の顔はよく見えない。

「ううん、あの、せっかく同じになったから」

本当は、こういう機会をずっと待ってた、と思いついて顔を上げたが言葉にはならない。そういう風には喋れない。ぱくぱくと口を開いて、餌の欲しい魚みたいだ。

「そう。えと、座る？」

一樹は座った。鞆とは反対側に詩織は腰掛けた。気まずくなることだけは避けたかった。息が詰まるのと空気が重たいのでは、どっちがましなんだろう。どちらも死にはしないけど。

少し寒い。詩織が両腕を抱いて体を震わせた。暖かい飲み物でも買って来ようか。しかし自動販売機は近くにない。そもそもこんな時期に売っているのだろうか。場所が場所だからあってもおかしくはないし、いつでも欲しい人はいそうだけど。

「ちょっと、寒いね」

「もう夏なのにね」

うん、と詩織は頷いた。危惧していたほど硬くはない。ちっとも気まずくない、というわけではないが、自然と会話が繋がっている気がする。直接隣を見たりはしないが、右手の側がほんのすこし暖かいことに答えた後の口角が上がった。それも結んでいない髪に隠してしまう。これは見せた方がいい表情なのだろうか。察してほしいが、知られたくはない。まだ右腕も触れてはいない。ついさっき振り向かせるために肩に置いた右手の人差指と中指を、左手で包んだ。またその組んだ親指の付け根に唇を当てていて、癖なのかもしれない。

その詩織を一樹はじっと見つめていた。視線を分かっているかどうかは知らない。気付いているだろうか。柔らかそうな髪の毛は、ふわっと肩の下まで伸びている。顔は見えない。丸首のシャツからは首筋。もう少し近づいて、膝を合わせて、腕を触れあわせ、なんてことは流石に出来ない。というよりもどうかと思う。そんな気分になるなんて。

「ねえ、何見てたの？」

「え？」

目を向ければ一樹もこちらを向いている。遠くではなく、窓の向こうではない。横だ。焦点で結ばれている。その像は影ではない。本物の光で、本物の今だ。

「えっと、何で？」

変な意味で取られたか、と一瞬焦る。そんなつもりで目をやっていたわけではない、とは完全に否定できないところが悔やまれる。詩織の瞳は鳶色だ。それを薄い涙の膜が覆っている。涙はきっと海なのだ。彼女は海を湛えている。

「ずっと窓の向こう、見てたみたいだったから」

気になっていたのだ。どうしてそんなに窓の方ばかり見ているのか。ずっとそうだった。遠くを見つめる横顔は、嫌いではないけれど。でもだからあれ以上、近くにいけないかった。

「別に、何でもないよ。何となく。やることもなかったし。ただ、うん、ちょっと。多分、好きなんだと思うよ」

「遠くを見るのが？ ああやって、窓の向こうを？」

「まあ、うん。そうだね。気付くと見てるんだから、嫌いじゃないんだろうな。そんなに深く考えたことはないけどね」

気付くと見ているのだから。そうだ。詩織は眼をそらした。

「でも、窓の向こうの、遠くばかり見ると、ちょっと悲しくならない？ 悲しいと言うか、寂しいというか」

そうかもしれない。悲しみ、確かに。窓の向こうには悲しみばかりを見つけている。どんな影も悲しみを意味する。

「だけど、うん、悲しいっていうのは確かにそうなんだけど、でも、それってきっと裏返しなんだよね」

はっとして、詩織は再び一樹を見上げる。その黒く深い瞳には宇宙だって映せるのだ。だが今は、茶色っぽい髪をした女の子がそこにはっきりと映りこんでいた。器はそれで満ちている。

照れくさくなって今度は一樹が視線をそらした。それでいてすぐに戻す。涙の海は光を湛えている。一粒の水滴が世界を映すなら、海の底にはどれだけの世界が沈んでいるのだろう。

「いや、何となくそんな気がしてさ。うん、でも別に、ただずっと悲しいって思っていたわけじゃないよ」

そういうことは、気付けなかった。独りで誰とも話をしないで、周りにはたくさんの方がいるのに。今更になって。

笑いかけられて詩織は思わず腕をとった。

「でも、遠くだけだと、気付けないことも、ある、と思うよ」

実は声をかける前からずっと続いていた鼓動が、今や最高潮を迎えていた。とった右腕が震えている。もう抑えられない。

「別に、遠くを見てたからって、何か遠くのことを考えていたわけじゃないよ。実はさ、ずっと、その、見てたんだ」

とられた腕が暖かい。握る力は思ったより強い。そんな風に思われていたなんて、知らなかった。思っていたなんて。何を、と次を待ち焦がれる瞳。薄い唇が微かに震えている。近付く。「窓の向こうなんて、見てなかったよ。こんな近くになるなんて、思ってなかったから。ずっとそればかり、考えてた」

じっと見つめる、まっすぐな、そこには海も空もない、光が影が満ちていた。一樹は唾を呑み、詩織は肩に手を許した。

「もっと近くにも、なれる、よ」

もう言葉はいらなかった。

FIN.

うちに帰ると包丁が飛んできた。事実だ。いや、本当のところはドアを開けた瞬間に振りかざされていた包丁がさくっと刺さっただけで、でも表現としては間違っていないだろう？ 飛んでくると振りかざされるのとどっちがましかは知らないが、ともかくさくっとやられたのが僕じゃなくてドアの方だったのは幸いだった。家に帰るまでが遠足ですよ、というよく小さい子供をたしなめる言い方があるが、家に入った瞬間にそんなご不幸に巻き込まれてしまったのではたまらない。

「あ、おかえり」

満面の笑みでいけしゃあしゃあとそう言ってドアに刺さった包丁を抜きざまに寄せてきた素子の唇をすんでのところでガードした。新パターンだ。文章長え。

「ただいま。でもその前に言うことがあるんじゃないか？」

ぐっと押し返す。素子は松明を持つように包丁を掲げて首を傾げた。玄関のカギを閉……やめておこう。何となく。

「えー、うちテレビないんですよー、とか？」

「ドア開ける前じゃねえよ。それ、その包丁！ どんないタイミングなら帰ってきた途端に包丁が飛んでくるの？」

これ？ と不思議そうな顔をして右手の包丁を指差して、さも心外、という風に頬を膨らました。可愛い仕草ではある。よし、これからは怖い代わりに可愛いとすることにしよう。

「飛ばしてないよ。失礼な。いらっとしたからちょっと振り切っただけだもん。圭くんがドア開けるタイミングが悪い」

私悪くなーい、と続く。いや悪いよどう見ても。

「いらっとしたって玄関のドアに向かって包丁振りかざしちゃいけません。というか僕危うく死ぬところでしたよ？」

「だってー」

素子ははあ、と大げさにため息をついてみせた。右手の包丁はそのまま。まずい。マンションの玄関は狭くて、素子の脇を抜けて奥に入るところか逃げ場がない。やっべ可愛い。

「圭くん帰って来るの遅いんだもん。それでいらっとしたから、でもそんな、圭くんが帰ってきたときに不機嫌な顔でおざなりな返事とかしちゃいけないな、って思って。だからね、手頃なものでストレス解消しようとしただけだよ？」

そこでまた満面の笑顔。いやあ女の人笑顔って可愛いよね。

「何故そこでまた包丁を向ける？ 危ないってば」

そして何でそこでまたちょっと詰め寄るの？ ねえ。可愛い顔がすり寄ってくると首筋とか背中とか胸の辺りがもぞもぞするんだけど。これは何、恋の芽生えとかなわけねえだろ。

「圭くん帰って来るの遅いんだもん。ね？」

もう一步。つられて後ずさった背中がドアにぶつかった。カギを閉めなかったさっきの自分の判断に拍手したい。むしろ今は可愛い子に旅をさせたい。可愛いからこそ旅をさせるんだよね。親

の心子知らずだ。あーでも残念ながら親じゃないなあ。

「ごめんてば。でも遅くなるって言ったじゃん。しかも遅いって言ってもまだ六時じゃん。外なんてまだ全然明るいよ」

「だって、妻としては会社から帰って来た旦那様に手料理とか出すべきでしょ？ お風呂とかも沸かしておくべきでしょ？」

ふりふりのついたエプロンを着て出迎えてくれるのはそりゃいいけれど、それが可愛すぎるのは困りもの。いやそもそもね。

「妻じゃないじゃん。しかも会社とか行ってないし。まだ僕学生だし。今日も部活で遅くなっただけだし」

「ちなみにお風呂も沸かしてません！」

「何それ？ 『も』ってなんだよ『も』って」

「それじゃあ圭くんは私の手料理が食べたいの？」

じり、とまた詰め寄る。どんより濁った目が超可愛い。

「いや、ごめん、それは勘弁」

誰にだって苦手なことはある。包丁が使えないとか、基本的な手順を覚えられないとか、何故か黒焦げになったり、もっとひどいことにもくもくと黒い煙を上げてその上爆発する、とかいたりするわけではない。見栄えも普通だ。だけど不味いのだ。端的に不味い。何だか美味しくない。一回なら食べられるけれど、ずっと食べてゆくのは不可能だと思わせるような料理なのだ。普段まともに口もきいてくれない娘が作った料理です、とかならそりゃ美味しく頂けるけど、残念ながら親じゃないんだよなあ。家に帰ってあれが机の上に並んでいても、嬉しいと思うより無言の重圧を感じるくらいだ。具体的には包丁の切っ先とかに。きらっと一筋光らせて、微かに震えてる包丁可愛いな。

「だから、はい、圭くん」

と言って素子は両手で丁寧に包丁を差し出した。

「はいはい、やっぱりね」

投げつけられなくて良かった、とは言わないでおこう。うん、少なくとも、こうして僕の手にあるうちは包丁も安全だ。

「そのうちストレス解消とかで本当に刺されないか心配だよ」

「え、何か言った？」

「いーえ、何でも」

素子はさっさとエプロンを脱ぎ棄てて（畳めよ）、リビングのソファに寝転がった。エプロンの下はタンクトップ一枚。裸エプロン詐欺だ。やっぱりそうだよ。テーブルには半分くらいになっているぽてちの袋。まあ素子にとってはこの家も殆ど自分の家みたいなもんだからいいんだけど。ぽてちを一枚ぱりっとやって、素子は周りを見渡してがさごそとし始めた。

「えーと、何か探してるの？」

「ひもほん。どほやっはっへ？」

ひもほんって何だよ。寝転がってぽてち啜れたまま喋るなよもう。こうなるともう本来の意味で

も全然可愛くねえな流石に。

「リモコンならソファの後ろに落ちてるけど」

「ほっへ、へいふん」

「あ？」

思わず出たそんな返事に、すう、と素子がまた超可愛くなった。

「聞き間違いかな？ ねえ、圭くん。お姉ちゃんの言うことに、まさかそんな返事なんてしないよね？」

唾を呑む。どうしよう。抱きしめたりすればいいのかな。手をとるくらいならしてもいいかもしれない。ごめんするのは手間ですね。もっと具体的にはリモコン様ですね。理不尽だけど可愛いから許しちゃう。男って弱い生き物さ。

「ありがとう、圭くん優しい。いやーいい弟を持ったなあ」

わしゃわしゃと頭を撫でられる。うん、いいんだ。それはそれで。優しい、優しいね。うんもうそれもいいや。あとどう見ても弟じゃなくて弟分だよ。血も繋がってないし。いわゆる舎弟。むしろ子分。面倒見てあげてねって言われて来たはずの三つ年上の隣のお姉さんの面倒見てるのは何故なんだろう。この人ほんとに何もやらないし。いるだけむしろ手間増えるし。料理手抜きすると怒るし。ねえどうということ、どうということなの。

「ご飯はー？」

「そんなすぐには出来ないよ」

「けちー」

ど・こ・が？ もうヤダ何してるんだらう。

「今日は何にするの？」

「あー、冷蔵庫に何があったっけ？」

「わかんない。あ、麦茶取って。ありがとう圭くん」

ザ・傍若無人とはこのことか。なんて思いながら結局麦茶を持っていく。先にお礼言われちゃったし、可愛いお姉さんの頼みだもの。仕方がないね。男って弱いあ、二回目かこれ。

キッチンに帰って冷蔵庫の中身を物色する。ここ何日か買い物しなかったからな。にんじん、じゃがいも、鶏肉、玉ねぎ。あとはトマトもあるなあ。うーん、これはあれか、あれなのか。

「素子、カレーと鶏肉じゃがならどっちがいい？ まあ、一応シチューも作ろうと思えば作れるけど」

「シチュー！ 但し、ルーは使っちゃ駄目。全部手作りで」

鬼か。何故わざわざそれを選ぶ。一番面倒くさいじゃないか。

「夏なのに？ しかも時間かかるよ、それだと」

あとお願いだから鶏肉じゃがに突っ込んで下さい。

「お姉ちゃんはシチューの気分になりました」

「だから、時間かかるって言ってるじゃん」

「お姉ちゃんはシチューの気分になりました」

仕方がない。こうなったらもう駄目だ。他の候補を言った時点でこっちの負けだ。ホワイトソー

スから作るのは面倒だけど、まあ嫌いじゃないしちゃんと作るか。

「じゃあ二時間くらい待っててね」

はい、とテレビの方を見たまま返された。待ってるだけの人はいいよなあ。とりあえず鍋出さなきゃ。あー、昼ご飯に使ったと思わしき食器が置きっぱなしだよ。うわ、めんどくさ。まずは食器洗いからか。まあいいか、そんなに嫌いじゃないしな。無心になれるよね、食器洗い。自分と世界が一体化して。禅宗のお坊さんとか、家事が修行なんだぜ。いっそ悟れないかなあ。

「できたよ、素子」

時計はもう八時を回っていた。予測通り、だいたい二時間だ。煮込みは足りない気がするけれど、まあいいだろう。

「おなか減ったよー」

素子がやっとソファから起きあがってテレビを消した。お腹が減ってるのはむしろこっちだ。一日暇してた大学生と違ってこちらは高校行って部活までしてきたんだぞ。悟れるか！

「なんで赤いの？」

素子が出来上がったばかりの鍋を見て疑問を口にする。

「トマトもあったのでトマトシチューにしてみました」

そしてごめん。本当はサラダが作りたくなかっただけなんだ。だって洗わなきゃいけないお皿増えるじゃん。洗ってくれるわけなし。なら全部入れちゃうよね。思いつきで。

「おー、トマトシチュー。なんか夏だねえ。あ、おいし」

と言って本当に口にしゃがった。これからよそろうって時につまみ食いするなよ。むしろよそるくらいしてくれよ。

「テーブル拭いてくれる？ あとスプーンお願い」

「じゃあ布巾絞って渡して。あとスプーン取って」

まあいい。うん。ちょっとでも手伝ってくれるならさ。

「ご飯どのくらい？」

「んー、普通、よりちょっと多いくらい？」

「シチューは？」

「多めに！」

了解。ほんと子どもだよな、この人。大学生とは思えない。女子大生ってこんなもんなんか。いつ勉強とかしてるんだらう。実際してなさそうだから困る。この人たぶん、人をからかうことしか考えてないよ。大学でどんな風になっているかは知らないけれど、男子高校生をエロ方面でからかうのはやめて欲しい。

シチューをよそった皿を持っていく。素子は既にテーブルを拭き終わっていて、スプーンを片手に座っていた。三歳年上のお姉さん、か。うーむ。男子高校生が料理を作って女子大生が何もしない、っていうのは希少なパターンなんじゃないだろうか。いやまあそもそもお隣のお姉さんが自分の家にいることの方が希有か。でも何かもっとう、間違ってるよね。色々。

「じゃあ、頂きます」

頂きます、と声と手を合わせる。うん、我ながら美味しい。酸味が絶妙。これなら夏でも全然問題ない。でもまあ考えてみればハヤシライスってこんな感じだ。ベースはシチューだけだな。ホワイトソースちゃんと作ったんだぞ。デミグラスは流石に作れないから、まだ簡単で良いかもしれない。ルー使っていいなら話は別なんだけどね。でも流石にハヤシライスは牛肉か？

「やー、圭くんはきっといいお嫁さんになれるねえ」

「いやー、素子は絶対いいお嫁さんになれるねえ」

机の下で足が出た。痛い。踵で蹴るなよ。それにお嫁さんになれるってなんだよ。どこの誰が貰ってくれるのさ。そんな可愛い目で見られても、僕負けませんよ。むしろどうせならお婿に貰ってくれよ、とかって返した方が良かったか。うーん、でもあんまりおもしろい反応は来なさそうだなあ。どうだろう。

ちょっとシュミレーションしてみよう。テイクワン。

「どうせならお婿に貰ってくれよ」

立ち上がって冗談でもなしに素子に寄る僕。何かヤル気だ。

「え、いいよ？ やったー私専業主婦になるね、家事しないけど。子供欲しいとか言わないよ。圭くん全部任せた！」

座ったままで素子が無邪気に喜ぶ。その顎に指を添えて僕。

「しないんじゃないくてできないんだろ。せめてさあ、料理くらい人並みに作れるようになったら？」

見上げる視線は超可愛くて、余裕の笑みで素子が一言。

「なら、毎日毎食私が作ろうか？ そのうち出来るようになるかもよ。人並みに。普通に。それまで食べてくれるよね？」

カット！ だめこれ命に関わる。撮り直しだ。テイクツー。

「どうせならお婿に貰ってくれよ」

立ち上がった僕に素子も立ってすっと体を寄せてきた。唇を近づけて耳元で囁くゾクッとするような可愛い悪魔の声。

「貰ってあげようか、お姉ちゃんが。は・じ・め・て・も」

カットー！ だめ暑さと疲労で頭おかしい。なんだその展開。あるかなもん。だめだーもう。言わなくてよかったことだけは分かったからいいけどね。どうしよう、煩惱だらけで悟れる気がしない。いよいよもって毒されてるなあ。夏のせいだ。

「あーあ、昔は素子ちゃん素子ちゃんって言って後ろに隠れて可愛かったのにどうしてこういう子に育っちゃったのかなあ。お姉ちゃんは圭くんをそんな風に育てた覚えはありませんよ」

「残念ながら育てられた覚えはありませんよ」

ちょ、ごめん言いすぎた。だからそうやってげしげし蹴らないでおくんなまし。一・五キロ走らされた後に水泳やって、更に放課後真面目に部活をしてきた足にそれはキツイ。脛痛い。

「おかわり」

へ？ もう食べたのか。そして何故皿をこっちに突き出す。

「おかわり持ってきて、圭くん。お願い」

「運動もしないでご飯ばっか食べてるとふと」

げし。何でもありませんお姉さま。持ってこさせて頂きます。

「酷いなあ。気にしてるのに」

持って行くと素子はそう言って腕を組んで胸を寄せ上げた。ねえこの人何してるの。タンクトップで。男子高校生にとってそれは目の保養というよりもはや毒だ。凶器だ平気だじゃねえ兵器だピンクいやうん何も見えてないよ。悪いのはタンクトップ。肩紐が二本。一本は長さが調節できるよ。言いたいことは分かるな？ もう可愛いなあこんちくしょうめ。可愛すぎて何もできねえよ。なら可愛くなければ何かするのかっていうわけじゃないんだけどさ。あ、まだ言いかけ続けているので誤解なく。

「あれれ、圭くんどうしたの？ 目が泳いでるよ？」

どうもしてないですよ。別に何もありませんよ。とは言えそうにないほど可愛い目をしている。うん、これは確かに本当の意味でも可愛いかもしれない。よし、怖いが可愛いなら可愛かったら怖いって言うことにしよう。まあ怖いというよりは小悪魔的な笑顔ですよ。小悪魔なら怖い方がいいのか。しかし分かってやってるだろうちきしょうめ。そうやっていたいけな青少年を弄んだ拳句、その先の嬉しい展開があるどころかまじまじと見たら見たで怒るんでしょう。柔らかそうとかそんな馬鹿な。

「何か気になるのかな？ 見たいものでも、ある？」

「や一、素子姉ちゃんって可愛いな、って」

「え一、そんな照れる一」

ほっぺたに手を当ててはじらったって可愛いものは可愛いぜ。一般的な隣のお姉さんってどういう感じなんだろう。まあ少なくともこんな風に可愛くはあるまい。この人いつからこんな風になっちゃったんだろう。どこでもこうなんだろう。いくら怖いって言ったってそれは嫌だなあ、というのは我儘なんだろう。まあ可愛くても困るといえば困るけれど。

幼なじみの隣のお姉さん、これもう何回言ったっけ、まあともかく、そういうのって何と云うか近すぎてもはや兄妹みたいなもんだよね。いや、姉と弟だけどさ。恋愛とかにはなんないよなあ。むしろ、こんな奴を貰ってくれる人間を見てみたい。いるんだろうか。いやでもほらこう、小悪魔怖いから結構人気があるかも知れない。基本的に天然だし。化学調味料な顆粒の出汁なんて使わせてくれませんよ、ってくだらない。何考えてるんだろう。暑さって人を駄目にするよね。どんな意味でも。

「や一、まさか圭くんに面と向かって可愛いって言って貰えるなんて思ってもいなかったからお姉ちゃん嬉しいな一」

感慨に耽っているようだけど、それだって姉弟の延長に感じてしまう。弟から可愛いって言われるお姉ちゃんってあんまりいなさそうだ。喜んでくれるならいいけど。料理だって、別に。

「よし」

素子が目を輝かせた。やばい、可愛い。何か悪いことが起きる気がする。悪いというか、精神的に疲労困憊しそうな。

「圭くん、じゃーんけーん、ぽん」

「え」

つつらわれて握った手を差し出した。グーだ。素子は人差し指と中指だけを握らずに出した。チヨキだね。勝ってしまったよ。何だ何がしたいんだ。ちっとも展開がわからない。

「あ、負けた。仕方ないなあ」

素子は胸を張って（だからそんな強調されても）両手を背中にまわしてごそごそやっている。両腕を上げるのも駄目だよ。

「お、取れた取れた」

「な、何が？」

うふふ、と頬を赤く染めて素子が怖い顔になる。器用にタンクトップではない方の紐だけを肩から外してもう片方も、

「え、え、何してんの？」

「圭くんが欲しいなら、仕方ないなあ。はい、これでいい？」

と差し出されたのは真っ白でふりふりで二つの山なりに紐が四方向っておいこれもしかしてなくてもあれじゃねえか。

「ぶ、ぶ、」

「ほい次行くよ、じゃーんけーんぽん」

有無を言わさぬ勢いに思わずまた手を握りつつままたま出してしまっていて今度は負けた。素子はすごい怖くて可愛い笑顔になった。ちょっと待ってこの流れもしかして。

「やたー。ほら圭くん、野球拳なんだから脱がなくちゃ」

「そもそもなんでいきなり野球拳なんだよしかもそっちから」

立ち上がってTシャツに伸びた素子の手を押さえる。しかしふふふ、と素子は可愛く笑った。あ、これは逆らえないな。

「問答無用拳！」

何その技。くすぐった、あ、待ってTシャツうぎゃー。

「圭くんのTシャツだー上半身素っ裸だー」

うれしいのかそれ。ふつう逆だろまずいけど逆じゃ。なんで女の子の方からそういうことするのは許されるのかだれか教えてほしいものだ。なんだよそっちは見た目変わらずにこっちは裸かよ。同じ一枚なのに差がありすぎるだろ。いやちょっと待てよ。よく考えよう。素子はノーブラ。もしも次、勝ったら？

「あー、何か変なこと考えてるでしょ？」

「え、いやそんなことはありませんよ？」

「耳赤くなってるよ？」

ふう、ってなんでそこで耳に息吹きかけるっていうか近いです素子さん。いつの間に。あ、背中、背中はやめようね。

「どうしよっか、三回戦、する？」

微妙に密着しそうでくっつかない距離ってなんでこんなにいい香りなのどうしよう。夏だ、夏がいけないんだ。それに加えて夜のせいだ。だめだ、でも何がダメなんだろう。もういいよね。よ

く頑張った。これだけ毎日セクハラまがいのやり取りをして同級生にでも知られたらぶっ殺されそうな展開になって我慢する理由なんてない気がしてきた。だってさあだってさあ、この人髪の毛いい匂いなんだもん。絶対これ直前にお風呂入ってたんだよ。微妙に乾ききってなかったもん確か。あーもうあーもう。何がしたいんだよ人の気も知らないで。何をしたいのさ。

そのままからかうようにすっと伸びた素子の腕が、背中に触れてすぐにびくっと引込んだ。困惑した表情で問い尋ねる。

「これ、もしかして、その」

「ああ、それ？ 気にしないで」

何を感じたのか、今度はよくわかる。これはそうだ。だから背中には、触れてほしくなかった。それもこんな風にふざけては。

「まだ、こんなに残ってたんだ」

「んー、そうらしいね。見えないからよく分からないけど」

恐る恐る素子の指が近づいてくるのがわかる。それがさっきよりももっと柔らかく傷跡に触れた。髪の毛と一緒に肩に触れる。

「痛くない？ 触っても、平気？」

「別に」

「ごめんね、圭くん」

「何が？」

「ううん、ありがと」

一瞬、きゅっと抱かれる。だけどさっきまでの気分とは違う。素直に受け入れた。けれど抱き返したりはしない。出来ないし、していいとも思わない。それはなんだか違う気がする。ただそれだけで、明確な理由はない。せめて腕だけでもここでしっかり抱きしめ返せたら、どんなふうに変わるんだろうか。

「もう十年も経つんだね」

「そういえば、確か明日で丸十年だね」

うん、と答えて、そのまま、少し離された体と体がそれでも互いの熱を感じながら、素子は手だけを背中にくっつけている。

「早いね、十年って」

「そうだね」

十年前は、素子の方がずっと背が高かった。だけど今は殆ど同じだ。素子の方が少しだけ、今も僕を上目にしている。

素子が右手で労わるように優しく傷跡をなぞった。左手は僕の右手をつかんだ。熱を帯びている。傷痕は少しくすぐったい。小さい頃、素子の左手は僕の右手をつかむための手だった。素子の左手は僕をいろんな所へ連れていった。公園も、小学校も、両親が家を空けることが多かった僕は、素子だけが頼りだった。

「あの時、私がおっと気をつけていたなら、こんな傷なんて」

「別にいいよ。素子を助けられたんだから、こんな傷なんて」

素子はお姉ちゃんだった。ずっと僕は守られてきた。泣き虫を同級生のいじめから、独りで眠らなければならない夜から。ほんの少し大きくて包んでくれていた手は、今はもう僕の手にとまっている。守られてきた僕は、守りたかった。そうできたんだから、傷の一つや二つなんてどうだっていい。

「でも、私のせいだよ。私が圭くんを死なせそうにしたんだ」

その時のことは、実はあんまりよく覚えていない。気づいたら走っていた。素子に迫っていた危機に突っ込んだ。素子を押して飛ばして。素子がびゃあびゃあ泣いていて、アスファルトは今みたいな夏の日だったから熱いはずなのに体は冷たくなってきて、瞼を空けているのが億劫になった。蝉の声。ぼたぼた頬に落ちる涙。何か言おうとした。声にならない。何か言っていた。でも聞こえない。次に気がついたときは病院のベッドの上で、端っこにもたれて眠っていた素子の頭を撫でたら大泣きされた。いつ死んでもおかしくないような状態から、奇跡的に回復したらしい。背中には傷痕が残った。だけど何も、失ってない。

「あのまま、もう会えないかもって思った。背中からたくさん血が出てたし。私のせいで、圭くんが死んじゃうって」

素子がゆっくりと近づく。もう一度熱を確かめるように。鼓動はもう空気を伝わって重なっている。それで肌が触れれば、柔らかな熱さに抱きしめられる。思わず、両手を素子の背中にまわした。抱き返してはいない、だけど触れた。手のひらと違って、タンクトップ越しの素子の背中はほんのり冷たい。

「ほんとに、良かった、圭くんが生き返ってくれて」

「生き返ったってというか、死ななかつたよ」

軽口めいた答えを返せば、同じような調子で反応してくれると思っていた。だけど見つめられた素子の瞳は涙でうるみ、今にもしたたり落ちそうな悲しみに満ちていた。

「そうだね、うん。ごめんね」

思わず腕に力を込める。腕の中で素子が息を呑む。こうする以外にどうしたらいいか分からなかった。

「謝らないですよ。それと、もう泣かないでいいよ。僕は何にも後悔してないし、むしろ素子に泣かれる方が悔しいよ。二人とも今、生きてるんだから。それ以上のことなんてないだろ」

自分でも不思議だった。怒りに似た感情が、突き動かす。いっそキスでもしてみたら、そのことがもっと伝わるだろうか。後悔なんてしてなくて、生きてるそのことが。むしろ素子には感謝している。傷を負わせて貰ったことさえ。だからそんな風に負い目に感じる必要はないし、まして悲しむ必要はない。

「うん、そうだよね」

素子が肩に顔をこすりつけた。くすぐったい。服も着てないのにふき取れるわけがないけれど、僕はされるがままにしていた。

素子はしばらくそうしていた。抱いていた腕をゆっくり放すと、そこで離れた。目が赤くはれている。唇もまだ少し震えている。右肩は涙で熱く濡れていた。ずっと脱がされっぱなしだったTシャツを着る。素子はじっと見つめたままにいる。

「そんなに泣かなくていいって言ったのに」

「だって、いつの間にか圭くんも、こんなに大人になったんだなあ、って。やっぱり、良かったって思って、それだけ」

なんだそれ、素子が成長してないだけじゃない、体以外、なんて言って茶化そうと思ったけど止めた。未だ濡れた瞳、それで満ち足りた風に笑って見つめてくるのは、はっとするほど綺麗だった。全然子供っぽくなんてない、可愛くはない、怖くもない。見惚れるほど、子供を産んだ母親のような美しい笑顔だ。

「おかわり、食べちゃいなよ。冷めちゃったよ」

見つめ返せなくなった。不思議だ。そそくさと席に座る自分が如何にも子供っぽくて情けない。うん、と素子も向かいに座った。いただきます、とまた手を合わせる。それを見るだけだ。

「やっぱり圭くんの料理はおいしいね」

素子はさっきと変わらない表情だ。なんかむずむずする。いつもみたいにばかで呑気でそのくせ可愛く怖かったりしないと、よく分からない。うーむ。もうちょっと淑やかになってくれればなあ、なんてことを考えていた自分に鉄槌を下してやりたい。

手持無沙汰になって、自分のお皿とスプーンを片づけた。

「お菓子とか食べる、素子？」

「んー、さっき食べたから私はいいや」

そういえば確かにさっきまで素子はぽてちを食べていたんだって。何言ってるんだろう、自分。

「じゃあ、もう部屋行くから自分の分の食器は洗っといてね」

「しょうがないなー」

「自分のだろ」

やっと返ってきたいつも通りの反応に安心する。やっぱり、こういう感じの方がいい。いつまでこんな関係のままなんだ、とは思うけど、実際どうしろと言うんだか。いや誰も何も言わないけれど。今はまだ、このままでいい。だけど成人するころには、もっと違った風と一緒にいられたらいいとは思うけれど。

*

時間がもう、ない。どうすればいいのだろうか。結末は決まっている、だけどそこに着くまでは決められていない。避けられない運命は、それでも自分次第でどうにでも意味を変えられる。物語の筋は決まっても、描かれるまでは自由なはずだ。

だけど、どうしようも出来ない。この関係は心地よい。ばかみたいなことを言って、小さな子供同士みたいに無邪気にくっついたりして。圭太は嫌そうな顔をしたりするけれど、表情だけで本当に嫌だって思っていないことは知っている。いつの間にか体を触れさせれば過剰な反応をしてくれるようになったけれど、そこまでだ。葛藤が目の色をぐるぐる変えさせて、それはそれからかい甲斐があるけれど、結局はいつも落ち着いた色を取り戻してしまう。視線の行き先も分かる、だけど逸らしてしまう。じっと見つめられているのも困るけれど、どっちもどっちだ。だ

けど流石にこれ以上は恥ずかしい。

例えばもっと、いつも淑やかにして、料理とかも上手くて、そんな風になれば違うのだろうか。だけどそんな風にはなれない。なつては、いけない。余計な色をつけてしまえば、迎えなければならぬ結末に耐えられないだろう。悲しみは最小限でいい。それでいて最大の幸福を求めるのは我が儘だろうか。

せめて、一度。一度だけ、今日だけでいいのだ。それ以上は望まないし、望めもしない。だけど願いは増大する。十年前はいてくれるだけでよかった。それがそのうち触れなくなつて、今はもう、触れるだけでは物足りない。最期にこの器を満たしてくれなければ、渴きを抱えたままで終わってしまうことになる。潤いは失われてしまうだけ。それは純粋な涙になるだろうか。十年が、こんなにも望みを変えてしまうとは思わなかった。

あのときは、こんな不純な叫びではなく、もっと純粋な慟哭だったと思う。十歳の私が出来たのは悔むことよりも叫ぶことで、希うことで、体を一つの発声機関にしてありつたけの涙にむせぶことだった。圭太のことだけが頭にあった。自分のせいだと気がついたのはずっと後だ。そんな風に思っていなかったから、きっと圭太は助かったのだ。それが今はもう出来ない。出来たところで何も変わらないことは知っているけれど。

食べ終わったお皿を片づける。自分の分は洗って、と言われていたことを思い出す。スプーンとコップも一緒に。

こういう風にしてきたことが、間違っていたとは思っていない。もっと上手くやれたとは思ふ。だけどあの時の選択は、絶対に間違いじゃないと断言できる。もっと後悔していたし、今みたいに温かなやり取りを交わすことも出来ないのだから。

いっそ全てを話してしまったら、圭太はどんな顔をするだろうか。どういう風に感じて、何を言うだろうか。それは抗し難い誘惑だけれど、余計に悲しませてしまうだけだろう。私のせいで消えない傷を負って、その私を結局守れなかった、なんて思われたらたまらない。だけどそう思わせないように出来ていただろうか。今さら考えたって何も出来やしないけれど。

出来るのはそう、まるで甘くて軽い幻想だったみたいに消えてしまうことだけなんだ。たとえ私が消えてしまっても、それでもこの十年は、幸福な十年間は決して無くならない。人を惑わす悪魔でさえ、過去を変えることはできないのだから。

*

十一時を廻った。風呂から上がって台所を見ると、素子はちゃんと自分の使った食器は洗っておいたようだった。リビングにはいない。家に帰ったか、母さんの部屋に行っているのだろう。二週間前から素子は母さんの許可を貰ってその部屋を住処にしていた。とはいえずぐ隣に家があるのだから、寝るときはそっちに行っているみたいだけれど。そもそも何のためにわざわざ昼間からうちにいるのかは分からない。まあ確かに、帰った時に家の中が真っ暗じゃなくて誰かが迎えてくれる、っていうのは嬉しいけれど。いやしかし、わざわざそんなことのためじゃないだろう。確か、素子の部屋にはクーラーが付いてない。母さんの部屋にはある。流石にそれが理由

だといわれても嫌だけど。行動原理が支離滅裂で、理由なんてあってもよく分からないものだから、未だに何をしたいのかは判断できない時がある。そのくせ妙に単純明快で分かりやすい時もある（甘いもの食べたときとかね）、やっぱり手玉に取られている気もする。今日みたいにいきなりキスしようとして来たり、露出の高い服着たりね。どういうつもりなんだろうね、全く。反応見て楽しんでいるんだろうなあ、とは思うけれど。それが通じるのも多分あと二、三年の間ですぜ、なんて意気込んでみたいものだ。

階段を上るとすぐの母さんの部屋には電気が付いていた。やっぱり素子はそこにいるらしい。自分の部屋に向かう。つけっ放しにしていたクーラーのおかげで心地よい。

さて、どうしよう。やるべきことはない。期末テストは終わったし、後は消化試合みたいなものだから宿題の類も出ていない。明日は部活もないし、たまには何か凝った料理でも作ろうか。甘いものなら素子も喜んでくれるだろう。いつもおいしそうに食べてくれるけど。やっぱり手玉に取られているのかなあ。

背中の傷痕は、見て欲しくなかった。素子に触れられたことを思い出す。いや、本当はずっとそのことで頭がいっぱいだった。あんなに泣くなんて思わなかった。それこそ十年前に死にそうになったとき以来だ。あの時ほど喚きはしない。だけど同じくらい小さく見えた。弱々しい女の子。昔から今みたいに、無鉄砲で考えなしで突拍子もないことをしていたけれど、知っている。いつかは僕がと思っていた。手を引いて、守って。今日抱きしめて宥めたのも、そのうちに入れられるだろうか。

ベッドに寝転がると、ドアを叩く音がした。起き上がる。

「いいよ、ていうかいつもノックなんてしないじゃんか」

うん、と返事をしてドアを開けたのは素子。まあ他に誰もいないけど。ドアの隙間から身を滑らせて部屋に入った。変だ。

「どうしたの、そんな端の方で。こっち来て座ったら？」

うん、とまた小さな返事。落ち込んでいるようにも見える。もしかしてさっきのがまだ気にかかっているのだろうか。

「えと、傷のことならほんとに気にしないで欲しいんだけど」

「わかってる。別に、気にしてないよ」

そりゃ嘘だろう、と分かるほど表情は暗い。思いつめているようというか、踏ん切りがつかないというか。調子狂うなあ。

「とりあえず座んなよ。ほら」

まるで年齢差が逆転したみたいだ。三歳年下の妹とかがいたら、こんな風なのかもしれない、なんてことを想像してみる。あー、でもそうなっても実際あんまり変わらなさそうだなあ。

素子はベッドに腰かけた。隣だ。タンクトップじゃなくてももうパジャマに着替えている。なんだかとってもいけない気分、なんていうことを思いつきはしたが、感じないくらいに雰囲気は静かに重たい。後ろ手で素子はシーツに手を滑らせた。

「圭くんの部屋っていつもわりと綺麗だよな。物もそんなに無いし、シーツとかもちゃんと伸ばしてあるし」

「まあ、それは単にそうしないと自分が寝付けないだけだよ」

知ってる、と素子がやっと笑った。うん、それはそれで何かいつもと違うよね。やっぱり傷に触れてからの素子は変だ。

「圭くんはほんと、そういうのすごく気にしてたよね。枕も替わると寝られなかったしね。小学生のころのお気に入り私のワンピースだったっけ？ よく端っこ掴んでたよね」

「思い出すなよそんなこと」

「えー、恥ずかしいんだ？ なかなか放してくれなかったよ」

そうだね、と言い捨てながらも、ちょっと安心する。今のやり取りはいつもみたいだ。いつもみたって変な表現だな。

「素子お姉ちゃん、なんて呼んでくれてた可愛い圭くんが、いつの間にか素子、素子、って呼び捨てだもんなあ」

うるさいですよ。いいじゃんか。むしろ素子はいつまで君付けで呼ぶつもりなんだろう。君付けのうちはまだだめだよなあ。

「あのね、圭くん」

なんだか嫌な予感がする。いつもみたいならこの後きっと予想もつかないことを言われるに違いない。一緒に寝よう、とかそんなまさかね。いやー、流石に女の子が二十歳になっていくら幼馴染とはいえ男と一緒に寝ようとかいくら素子でも言わないだろうとは言い切れないところが可愛くてたまらない。

「久しぶりに、一緒に寝ちゃ、だめ？」

なんて超怖い上目遣いで言われても。予想通りといえばそうだけど、言い方はその遥か上を行っていた。くそう怖いな。なにその完璧にツボをおさえた言い方。やっぱ前言撤回。いつも通りだ。いつもと同じで小悪魔ですよ。こういうのを小悪魔って言っていいのかちょっと不安になってきたけど。

「だめ、かな？」

手を握られる。まてまて。それはなんというか、卑怯だ。それで頑なに断れる男なんているだろうか、いやいまい。

「別に」

いいよね、いいよね。ちゅーとかするわけじゃないしその先なんてそんなまさか。大丈夫、自信はない。唇が妙に乾いている。あ、いや別にちゅーしたいとかそういうんじゃないでね。もう駄目だ、何をどうしてもそっち方向にしか考えられない気がする。どうしよう。乗り切れるだろうか。乗り切っていいのか男子高校生。でもほら何も準備とか準備って何だよこのやろう。

「へへ、やたー」

さっきの空気はどこへやら、だ。一転して無邪気な程の笑顔になった素子はごろんとベッドに転がった。

「ちょっとお姉さん、ど真ん中じゃなくて端に寄りなさいよ」

「えー、圭くんのけちー」

はいはい。でもそれだと残念ながら一緒には寝れないのね。うん、残念ながら。床で寝ろと言わ

れても、僕もう引きませんよ。しかしなんで一緒に寝るとなったらこんな色気もくそもないんだらう。ほっとするほど不思議だよ。ドキドキ返せ。

「圭くん、背中こっち向けて」

「え。まあいいけど」

隣に寝転がったらお姉さまからそんなご要望が。素直に背中を素子に向けて横になる。しかし何かむしろ可愛いなあ、なんでだろう。あ、随分前にも一回言ったけど、この言い換えずっと貫き通すからね。そこんどこ誤解なきように。

「背中も大きくなったよね」

『も』って気になるよね。何と並列してるのさ。並列されるようなモノ見せてないぞとかあれこの部屋涼しいのにおかしいな。

「パジャマ越しでも、分かるね」

「あのさあ素子、傷のことはもういいって」

「こっち向かないで」

振り返ろうとしたら押し戻された。と同時にさっきまで背中に触れていた手がいつの間にか体の前に回っていて、後ろから撫でるように優しく抱きしめられる。冷たい熱を帯びた柔らかさ。

「あの、素子？」

「こっち向かないでって、言ったよね？」

「や、でも流石にそんなことされると」

「どうにか、したくなる？」

耳元で囁かれる。ゾクっとするほど甘く掠れて、思わず肩越しに斜め上を覗きこめば、震える瞳がこっちを見ていた。

「素子、だから」

「ねえ、どうして？」

声色がまた変わった。今度のはか細い。だけど両腕は反対に抱きしめる強さを増した。鼓動が強く打って倍に重なる。そのくせかちりと時計の秒針の音は五月蠅いくらいに耳に入る。

「どうして、何にもしてくれないの？」

がつんと何かで頭を撃たれたような気がした。それは本当に予想だにしなかった言葉で、抱かされた期待の裏にありながらそんなことはないと言真面目に取り合わなかったものだった。こもる力は強くなる。押し当てられた体は、全力の熱を伝えていた。

「素子、その」

体を捻って素子の方を向こうとする。抱きしめられた力の強さは、それでも向きを変えるのを止めたりはしなかった。

「あのさ、僕は、」

素子は何も言わない。ただじっと見つめる瞳は濡れて光に揺らめいた。あ、と声が漏れる。抱きしめ返した僕の腕は、思ったよりも強く素子を締め付けたみたいだった。

もう、抑えられそうになかった。抑える理由もどこにもない。覚悟を決めて、ちゃんと言葉にして、それからもっとくっつきたい。希うように上気した素子の唇が、何か言おうとする。塞い

でしまえ、息なんてさせてやらない。空気は邪魔ものだ。お互いの吐く息を吸い合えば、それで十分生きて行ける。確認するように目で問うた。素子の指に力が入った。唇が開く。

「圭、太」

ぷつんと切れた。もう知らない。決めた。奪う。ほら、素子はもう目を閉じている。ずっとこうしたかったんだ。ずっと前から。言葉なんてもうどうでもいい。口はそんな頼りないものを呟くためにあるんじゃない。目を閉じた。ゆっくりと、近付ける。どこか遠くで時計の針が、かちりと鳴った。

その時、だ。突然至近距離に雷が落ちたみたいな大きな音、閉じていた目を無理やり開かせる強烈な光が閃く。

「何？」

咄嗟にベッドから起き上って、今にも触れそうだった唇が余計な機能を発揮する。だけど尋常じゃない。どす黒い煙が巻き上がる。落雷とか火事とか、そういう自然災害の類じゃない。何かもっと凶悪なもの、もっと禍々しい空気が部屋に充満している。激しい風を孕んで羽ばたくカーテン。開けた記憶もない窓の外には紫の空。真っ赤な月が大きな口を開けて迫っている。

「素子、大丈夫？」

後ろを振り返る。素子は腰が抜けたようにベッドの上に座り込んでガタガタ震えている。素子の体は仄かに真紅に点滅する。

「どうしたの、ねえ、素子？」

「嘘、間に、あわなかつ、た、どうして、」

「素子？ 素子？」

肩を揺する。点滅はだんだんと周期を早くする。何が起きているんだろう。素子が危ない。よくないことが、きっと起こる。

「圭、太、圭太、圭太、けいたあ」

素子が僕の背中に爪を食い込ませた。傷痕を開いてつう、と流れた血も気にしてなんかいられない。両目からは大粒の涙。何をしたらいいのか分からないけれど、考える前に素子を抱きしめた。更に爪が食い込んだ。火傷しそうになるほど体は熱い。全身の血が沸騰しているみたいだ。素子の心臓は嘘みたいな速さで脈打って、それに合わせて光が明滅しているらしかった。

「嫌だ、やだやだ、嘘、けいた、わたし、わたしなんにも、」

それがだんだん早くなる。素子は息も絶え絶えで、喋るのは辛そうだった。それでも僕には、力を込める以外に何も出来ない。

バシュッ、と一際強く赤い光が素子の体から研ぎ澄まされた刃物で切りかかったみたいに迸った。うあ、と素子が呻いた。あれだけ間隔なく打っていた鼓動が途端に止まる。素子は背中に回して爪を食い込ませていた両手を、最期の力を振り絞るように僕の頬に添えた。打って変わって冷たい手に、僕は目を見開いて口を半開きに出たただけだった。

「ねえ、せめて、これだけでも」

抱きしめた体が質量をなくす。感覚がどんどん薄くなる。だけどまだ腕の中にいる。だけど皮膚の境目がぼんやりしてきて、少しずつ赤くて小さな飛沫になって上昇していく。形が消える。

唇が近づいて、涙が一滴零れ落ちて、抱きしめる感覚は消え去って、触れあうまでは唇だったはずの場所も、まるで甘い幻みたい、温かさを感じる前に赤い光になって弾けて消えた。

「どういう、ことなんだよ？ 何なんだよ。素子！」

「どういうも何も、お前の眼で見て感じただろうに」

当てもない叫びに応える声は、いつの間にか部屋の中央に君臨する、真紅を深めた闇色の女。足を組んで空中に浮かんでいる。頬笑みはそれが悪魔だと知らしめて疑わせない壮絶さ。

「誰、だよ。誰だよお前。お前が素子を殺したのか！」

「分かっているのに訊くな。分かりもしないのに喚くな」

一蹴される。悪魔の女は詰まらなさそうに呟いた。

「神崎素子は死んだ。十年目の今日が期限だ。魂を頂いたのさ。そういう契約だったんだよ、白石圭太君？ 納得したか？」

「素子がお前と、悪魔なんかと契約したって言うのか！」

「気づかなかったか？ 十年前、誰が死んで、誰かが叫んだ。私はそれに応えただけさ。神崎素子はそれでいいと言ったぞ」

まさか。嘘だ。足が震える、でももしそうなら、全てに説明がつく。いつもと違う今日の態度も、「生き返ってくれて」と言ったことも。それなのに僕は、何も知らずに、ただ騒いで。

「守ったつもりでいたか？ 滑稽だな。騎士気取りか、愚か者め。だがその表情、その表情だ。絶望したか、なあ？ どんな味だ、どんな気分だ？ 私には最高の美酒に感じられるぞ。勘違いしていた奴が絶望する瞬間の表情ほど甘い果実もこの世にあるまい。ゾクゾクするよ、見ているだけで絶頂しそうだ」

高笑いしながら悪魔が自らの体を抱きしめて打ち震える。

「素子を返せよ。悪魔なら、俺の望みだって聞けるんだろう」

「出来ないよ。悪魔であっても過去は変えられない。それにタダじゃないことはまさかもう分かっているよね？」

悪魔はじっと見つめてくる。素子は十年を残して僕を助けた。代償は余りにも大きい。こんな結末は納得できない。でも。

「対価は未来の時間なのか？」

「そうだよ。命の時間さ。お前の寿命そのものだ」

「未来ならお前と契約すれば変えられるんだな？」

「出来るよ。それに見合う因果があればね。因果の鎖から作るとなれば、望みは今すぐに叶うとはいかないがな」

唾を呑む。考える。このやり方なら僕の望みは叶えられるか。

「なら、素子をもう一度生まれさせられるよな？」

「ほう。返せでなくて作れということか。可能だぞ、白石圭太。だが同じじゃない。魂の型は同じでも、違う存在さ。お前のことなど記憶にない。しかもその頃にはお前の魂は頂いてるよ？」

それでもいいのか、と値踏みする様に悪魔が凄絶に笑いかける。

「いいよ。それでも素子だ。それにそれなら素子は、もうお前なんかと契約したりしないだろ？」

拳を握りしめて悪魔を正面から見つめる。二度と会えない。それは変わらない。変わらないなら、素子がいるべきだ。それにそれが素子じゃないことなんて、最初から織り込み済みだ。

「あはは、最高だ！ 傑作だよ、愚か者。せっかく貰った命を無駄にするなんてな。だがいいだろう、叶えよう。お前の寿命はあと三年だ。ああ短い。それまでせいぜい悔むがいい！」

高笑いを残して悪魔は消えた。後には何も残らずに、空も月もいつもと同じ。結末もだ。僕は元々十年前に、死ぬ運命にあったんだから。過去は変えられない。だけど意味は、変えられる。

でも言えないな。甘くて軽い幻想みたいに、魂の形が君と同じの、同じじゃない君が存在する前に僕が消えても。

同じ悪魔と契約すれば、君と同じ場所に行けるかも、なんて。

F I N .

迎える

夢みる声は優しく、期待の色は深くなる。虚構、化生、影光。いつもいつものお話と、二人分淹れた紅茶の香り。砂糖じゃなくて蜂蜜を少し、薄く切って添えた檸檬。君はそれが好きだった。ちゃんとちゃんと覚えているよ。忘れない。

雨の日、午後。今日は日曜日。どこか外にはいけないけれど、部屋の中だって十分だ。ほんとは毎年同じ日の雨。どこか外に行こうなんて思いもしない。カレンダーには小さく赤い丸。十月二十七日。大事な大事な、雨の日だ。

湿った空気。冷たい窓辺。秋の空を低くして、雨がしとしと降り積もる。一粒一粒が夜闇みたいに、深く深くしてくれるよう。カーテンを閉め切って、昼間なのに電球を点して、パジャマとベッドを片付ける。一時半になった。そろそろだ。玄関のチャイムが鳴ったら、バスタオルをもって出迎えよう。

向かいの通りを車がさあー、と走り抜けた。カーテンの隙間から覗いてみても、この部屋からはちっとも見えない。リビングへ降りると、今度は塀が邪魔になってやっぱり見えない。だから耳を澄ませよう。静かに目を閉じて、雨音の中に隠れている、けれど雨とはリズムが違う、君の足音は独特の響き。蛹から蝶が羽ばたくような微かさで、きっと今日も目を伏せて、傘で前を見えないくらい覆ってそろそろ歩いて来ているんだ。

ちょうど玄関のところにある、雨樋から定期的に水の滴る音がする。雨粒を集めて大きくなって、これも雨音よりは大振りだ。たん。たん。たん。たとん。玄関のドアの前でおろしたてのバスタオルを抱いてその音が一瞬途切れるのを待つ。

たん。たん。ぽ。ぽ。たとん。音が変わった。地面よりも柔らかで弾力のあるものに落ちたんだ。鍵を開ける。同時にチャイムが鳴らされる。いつもいつものタイミング。君を迎える。

「入るよ。お邪魔します」

「どうぞ。待ってたよ」

全部ちゃんと承知して、君は傘を畳みながらそう笑った。

バスタオルで君はまず顔を拭いた。別段濡れているわけじゃない。けれど誰だって、降り続ける冷たい雨の中を歩いてきたら、柔らかいタオルは嬉しくなるはずだ。ちっとも濡れていなくたって、渡して貰ったらあったかくなる。

「今日も同じ時間だね。また同じ電車に乗ったんだ」

「うん。バスタオル、ありがとう。置いとくよ」

笑いを誘うために笑う、なんて。いつもつられて笑顔になって、そんなとき、ちょっとだけ目は優しくなる。それが見たくて笑ってしまうわけじゃないけど。見られるなら別に構わない。

「お茶淹れるから先に部屋に行ってて」

うんとも言わず、君は階段を上る。いつもの制服。いつも制服。お茶の準備はもう出来ている。ポットからお湯を注ぐだけ。雨降りの午後はあったかい紅茶だ。いつのまにかの習慣になった。

茶葉を蒸らす。ドアが開く。紅茶セットはちゃぶ台の上。君がここに初めて来たときはこのち

やぶ台はなかったっけ。今はもう、ちょっと足がぐらついている。買いなおさなくちゃ。そのうちに。君はベットに背中を預けて座る。顔を上げた。眉と目尻を下げて笑うときは、ちょっと寂しい。

「紅茶、ありがと。ごめんね、いつも」

「いいよ、別に。好きでやってるんだもん」

隣におんなじようにして座る。何故だか知らないけれど、いつもこう。おんなじ位置で座っている君の周りにはちょっと寒い。まだ雨の中にいるみたい。少し近づく。本当に、少し。触れないように、触れる手前、熱が届くくらいのとこまで。触れてしまったら、濡れてしまう。

「この人って、新しいの書いたんだね」

「うん、短編集だけど。結構気に入ってなかったっけ？」

うん、ありがと。そうやってまたすぐに目は伏せられた。手持無沙汰、何をしようか。ずっとずっと横顔を眺めていてもいいけれど、それは流石に嫌がられるかな。だけどこんなに変わらない、白い頬、ずっとずっと見ている。

「どうしたの？」

「ううん、別に。気になった？」

「まあ、そんなに見つめられても」

何でもないよ、本当に。何もない。何もないんだ。

「えーと、読んでない方がいいかな？ 何か他にする？」

ずいぶん気を遣わせてしまったみたいだ。いつもそう。そんなつもりはなにのにもね。どういう風に接していいのかわからないんだ。単純に喜び喜びを受け入れるのが一番かな？

だけどまだ、そういう風には出来そうにない。可愛くないんだ、私、ずっとそう、変わらない。変わらないままでいることを、確かに望みはしたけれど。

「いいよ、読んで。でも、見ててもいいでしょ？」

なら、いいけど。そっけない、なんて思いもしたっけ。でも本当はそんなことなく、ちょっとこっちを気にしてる、それがなんとなくこっちにもわかる。意識している、本当に？ そう言えるならこの距離も、この関係も変わるかもしれない。よく分からなくなっちゃったよ。変わりたいのか、そうじゃないのか。変わるべきか、変えるべきか。それが分からない間は、こうしているつもりだけど。こうして隣で君を見つめる。

君の眼は文字を追っていく。指が動く。ページをめくる。息をする。血が巡っていて、心臓は収縮、唾液も飲むし汗もかく。トイレにだって行きたくなる。私と同じ、おんなじだ。何にも違うところなんてない。ただ一点が違うんだ。その一点が、世界を、すべての意味を変えてしまった。

じっと見つめる。ずっと見つめる。飽きるはずない。ありえない。そう、ありえないんだ、分かってる。こんなことを続けていて、もう二十歳になっちゃったよ。もうお酒も飲めるんだよ。大学にも入ったし、それはもう何一つ他の大勢の人と変わることはないふつうの生活。送ってしまうんだ。送ってしまったんだ。君が、どんなに変わらなくても。毎年こうして、同じ一日を繰り返していても。君だけが時間に縛られて、君だけが変わらずに高校生のままで、君だけが私

の変化に気づかない。

「うーん、ほんとにずっと見てるよね」

「うん。ほんとにずーっと見ているよ？」

この日はね、とは声に出さない。いいけどさ、と君は頬を掻いた。三分の二くらいを残した小説は、もう手垢でページの端が茶色くなりかけている。君はそれにも気づけない。

気づけるわけが、ないんだから。

うとうとしていたらしい。ふんわりした視界の中で、誰かが喋っている。聞いたことのある声だ、けどこんな声色だったっけ、そう思ったところで意識は覚醒した。

「寝てた？」

「え、うん、そうみたい」

ずっと体育座りで痛くなっていたお尻をずらした。君が覗き込むからじゃない。同じ姿勢で座っていたら、誰だって腰を動かしたくなるだろう。

「どの辺まで読んだの？」

「んー、もう終わるかな」

「何時？」

三時半を過ぎたところだね、君は言って、また小説に眼を落した。一時間半くらいは寝ていたみたいだ。その間、君はずっと私の隣で小説を読んでいたんだらうか、本当に？ 眠っている間のことは分からない。どこにいて、誰と話し、どんな風を感じたかなんて。触ってもいない、見てもない、匂いも感じなかったし、声も聞かなかった、いいえ聞いたような、夢、ならば匂いも触感もこの見えさえも幻だった、でもそれは存在しなかったと言えるんだらうか。そんなことは、でも、確かにありはしないのだ。絶対的に確実に、存在なんてしていなかった。

けどこうして今見えて、話が出来る、声がある、雨に濡れた匂いもしたし、きっと触れる、触られる。これが幻だなんてことがあるだらうか。幻は、幻と気付かなければ現実なのかもしれないけれど、幻かもしれないと、疑いながらも否定できない、どっちとも言いきることは出来なくて、それで時間は止まっている。動き出せば、変わってしまう。動かなければ、きっと永遠不変だ。そんな風にいられるだらうか。

感傷的にも程がある。けど涙は出てこない。泣くなんてことはもう十分すぎるほどしてしまった。今更何を涙しようか。だからここで感じているのは、純粋な悲しみでも喜びでもない。純粋な悲しみだとか喜びなんて、どんな感じが分からなくなっているけれど。そんなに心を動かせたのはいつだったらうか。そういう意味では私の時間も止まっている。動き出せず、動かなければ、きっと永遠不変なんだ。そんな風にいてしまうんだ。

「最後の短編？」

「今いいところ」

こっちを向きもしないで君は答えた。熱中しているけど、反応してくれる。残るページはあと僅か。最後の話は、覚えている。別たれた男女が再び出会う話。久しぶりに会った彼らは、思い出話に花を咲かす。その中で誤解が解ける。けど謎も生まれてくる。一夜。別れる、そして気

付く。

夢の中で夢を見たら、夢みたいな夢なんだろう。あり得ないように綺麗な、優しさだけの夢みたいな。だったら優しさだけじゃないときは、夢じゃない、なんて言えるのかも。優しくないから現実には夢じゃない、なんて、何を考えているんだろう。ばかみたいだ。悪夢だってあるっていうのに。悪夢は覚めれば褪めるけど、現実のほうはそうはいかない。

でも、夢みたいだ。ずっと、もう、三年間、夢を見続けている気がする。本当はまだ三年前の今日で、これから何が起こるかなんて知りもしないで、いつ君が来るのかな、なんて緊張しつつうきうきしながら待っている。見えもしないのに部屋の窓から外を覗いたりして、ああこんな雨じゃ歩いて来るの大変だろうとか、迎えに行こうって言ったほうが良かったかなでも君はいいよって言ったしな、なんて思っているんだ。せめてふわふわのバスタオルで出迎えよう、あったかい紅茶もすぐに淹れられるようにしておこう、部屋の片づけは終わっちゃったし、何を待ってしようかな、なんてそんな風に、純粋で乙女で優しい現実には包まれていた。隣に君がいて、寄り添って体重を預ける、温もりの中でお昼寝をする、夢みたいだ。何もかも全部嘘で、何もまだ起こってなくて、ああ、それなら君のことを知らないときだっていい、戻るならいっそ、長い長い夢を見ていたんだよ、って誰かが言ってくれないだろうか。

私は病院にいるんだ。ここをおかしくして。それで笑っちゃうような、甘い甘い夢を見ている。目覚めない。周りがどうなっているかなんて知らない。筋肉はやせ細りなくなって、看護婦さんや両親が腕を足を持ち上げてくれて何とか繋がっている、眠ったままで、寝言も言わない。だけどみんな、私がなんでそうなっちゃったのかを知っている。あんな悲劇的な出来事を体験する羽目になったのだから、これくらいのことは仕方がないわよ、辛かったのね、さみしいわよね、だけどそろそろ起きてくれてもいいのよ、なんて言われて。

痛みをどんな風に形にすれば、傷まらずにすむのだろう。形にしないというやり方では、傷は深まるばかりだった。変な話だ。私一人、表せないでいたら、もう三年も経ってしまった。周りはいつしか君のことを忘れ、私もまるでそのうちの一人であるように、当たり前の変化を受け入れている。変化していく。変わらないものはない。君一人、今日一日、雨の十月二十七日、ただそれだけが変わらない。それだけ？

私はこうして、もう四回も、同じ一日を繰り返している。変わっていないのは私の方？ こんなの現実でもなんでもなくて、私だけがこの一日、毎年十月二十七日には眠りから覚めず、出来なかった一日を夢に繰り返しているだけなんだろう。それならば何の不思議もない。どちらがより現実的かは明らかだ。私は痛みをそんな形で表して、ちゃんと傷んで壊れているのだ。どっちに救いがあるだろう。いいえ、どっちにも救いなんてない。壊れているのがどちらなのか、どちらにしても何かが壊れ、私は私が壊れていた方がいっそ悼んでいられるのにとするばかりで。でもそれだって、この日以外の一年はやっぱり変わらず変わっていくのだ。

だけど今、このこれは、やっぱり夢みたいだけど現実で、そうとしか思えないような冷たさを纏って君は最後のページを捲った。息をつく。

「どうだった？」

「ん、なかなか」

ちゃぶ台に本を置く。換わりを取った紅茶を飲んだ。私は体育座りで膝を抱えたまま。紅茶、美味しいんだろうか、なんて馬鹿みたいなことを考える。

「ありがと。本、あった場所でいいかな？」

「うん。ありがとう」

君は本棚へ歩いてゆく。もとの場所に戻した。もとの場所に戻ってくる。ああ、この距離は二度と縮まない。絶対に、永遠に。私が君と同じになるまで。

「なんか、悩んでる？」

戻ってくる途中で顔を覗き込まれた。はっと目を上げる。視線が合う。そんなことないよ、と言おうとしたのに喉が詰まった。

「やっぱり、どうかしたの？」

なんで、という声がやっとの思いで出たけれど、この近さじゃなかったら聞き取って貰えなかっただろう。

「なんかずっと沈んだ表情してるよ。笑ってくれるけど、いつもと違う気がする」

いつも、なんて。あれからどうやって自分が笑っているのかなんてちっとも分からない。ああでも、もしそこが変わっていたのなら、それはそれで安心する。君のせいだ。君のおかげだ。君はそんな風にして、最後まで私を変えてしまったんだって。

「何かあった？」

何かあった、なんて。私だって知りたくなかった。

「別に何も、ないよ。全然、平気。心配掛けて、ごめん」

君はまだ不満そうな顔をしている。意外と表情が変わるんだ、って知ったのは付き合ってからだった。それで、何にも、出来なかった。そういう風にと、そうなってもいいと、何をされてもいいと思って君を招いたのは三年前の今日。結局何もなかった。いいえ、なかったわけじゃない。望んでもいないことが起きた。予想してもいなかったことが起きた。後から、気づいた。あの日ここにいた君は、私の隣に今と同じ距離をあけて座った君は、私に触れられるはずもなかったんだって。私は私で、自分からは出来なくて、君が帰ったあとにちょっといじけてた、次に来たときは、なんて希ったりもしたんだ。

次は来ないはずだった。そもそも、そのときに来るはずもなかったのだ。だけど君は来た。その時も、一年後も、二年後も、そして今日も。確かな息遣いが聞こえる。足音もする、チャイムだって押すし、バスタオルを渡せば顔を拭く、ドアだって開ければ小説だって読む。まるで、当たり前のように。疑いなんて微塵も抱かさせずに。私はそうして、そのまま君を見送った。冷たい冷たい、雨の中へ。誰一人通るひとのいない道へ。

「君はさ、」

「ん？」

「今日、この後どうするの？」

どこに帰るの、家はもうないよ、三年前の今日の後、君のお母さんは心を病んで、とうとうどこかに引っ越してしまった。最後に見たとき、やつれてやせ細ったお母さんは言ったんだ。忘れたいとは思わないし、忘れられるとも思わないけど、ここにはもう、いられないわ、って。私はな

んにも返せなかった。わかります、と言うのも烏滸がましいし、そうですよね、と言う風に同意することも、他人行儀になってお約束の口上を述べるべきではないことは分かっていたけれど、だからといって一緒に泣いたり出来なかった。黙っていたら、ごめんね、と謝られて、なんでですかと反射的に聞いてしまった。そしたら何て言ったと思う？ 君のお母さんは、やっぱり優しい人だった。最初に会ったときからそう。あなたも悲しんでくれているのはわかるけど、私はあなたを慰めたりしてあげられないわ、って。そりゃそうだよ、君との時間は私なんかよりお母さんの方が遥かに長い。それなのに、向こうがこっちを心配するなんて変な話だ。だけどそのことを、当の私に言うなんて、私はどう反応していいかわからなかった。だけど優しい人なんだ、ああやっぱり、君のお母さんなんだ。君のためにこの人は、頬をこんなに薄くして、目尻の皺も増やし、こんなに傷んで、羨ましい、私だって、そんな風になってしまいたかった。本当に。

君は今日、私に会いに来てくれたように、君のお母さんにも会いに行っているのだろうか。もしそうなら、お母さんはどんな反応をするんだろう。きっとあの人なら、全部全部わかっていながら、それでも優しく出迎えてくれるんだろうな。私みたいに、ただ流されて、考えることを放棄しているわけじゃない。縋りつくわけじゃなくて、いや、私は縋りついているのだろうか。ともかく君のお母さんなら、ごちそうなんか作っちゃって、アルバムなんて引っ張り出して、たわいもない昔話をするんだろう。手間の掛かる子ね、なんて、寂しそうに笑うんだ。そうしてきつと、君を見送って、玄関で泣き崩れるんだろう。今年は日曜日だから、お父さんもいるかもしれない。そしたらお父さんは、泣き崩れる君のお母さんを抱きしめる。雨の中に消える君を、見つめていることは出来ない。そうやって痛みを共有し、ほんの少しの世界の優しさに、心を扶られ、何度でも悲しみを思い出す。あの日の絶望を、毎年、毎年。

君は答えない。答えられることじゃない。たとえ、君が、どこに帰っても、私は君を送れない。だってどこまで行けばいいの？ 駅まで行って、電車に乗るところで手を振って？ それとも一緒に電車に乗って、行きつくところまで行けばいい？

君を、見つめる。見上げる。透ける、透かして、奥まで見えるように。もちろん実際に、透けて消えてくわけじゃないけど。触ろうと思えば、触れるんだろう。触ればきつと温かい。唇だって何だって触れ合わせることは出来るだろう。でも君は。

五時になった。いつの間にか。雨はまだ止まない。君が帰るまで止むはずはない。振り続ける。この雨は本当の雨なんだろうか。私だけが、雨が降ってるなんて思っているのかもしれない。雨が止んだら、君はどこにいるの？

君は視線を逸らした。一つ息を吐く。動作の一つ一つ、なにも疑問に思わせない自然さで。

「……帰るよ」

「どこに？」

君は答えない。ただ、微笑んだ。眉と目尻を下げて笑うときは、ちょっと寂しい。寂しそうに、笑う。

「玄関まで、送るね」

「ありがとう」

立ち上がった。一步一步、今日が終わる。今まで三回繰り返した。四回目、同じだった。同じよ

うに君を迎え入れ、特別なことはなにもなく、君は小説を読んで、私はちよつとうたたねをして、同じように君を玄関まで送る。夢の中身は覚えてない。でも今日のことは覚えていく。忘れない。忘れないよ。君が何を思って、どうして今日も、私のところに来てくれたのかは知らないけれど。

部屋のドアを開けて階段を下りた。君の後ろを付いていく。後ろ姿を見つめている。変わらない、何一つ変わらない。うなじ、襟足、耳から首へのライン、制服の詰襟、ぴんと伸びた背筋。触ろうと、何度、思っただろうか。抱きついたら、こんな階段でも、受け止めてくれることが出来るのだろうか。いっそ私も、同じになれば、そう何度思ったことだろう。雨が降るたび、午後になれば、独り部屋の中でその方法を考えた。考えるだけで何一つ実行に移さなかった。感傷や自分勝手な甘い思い込みがあったわけじゃなくて、ただ単に出来なかったのだ。それをするほどの気力もなかったんだ。そうして流れる時間に身を任せ、変化するままに生きていたら、こうして三年が過ぎてしまった。そうして多分、このまま私は生きていく。君のことも、ちゃんとちゃんと、覚えているよ。覚えてく。

来年も君は来るのだろうか。雨の十月二十七日。午後一時半。私はまた、バスタオルと紅茶を用意して、彼のお気に入りの作家さんの本が出ていたら買っておいて、見えない窓の向こうを待ちわびる。聞き耳を立てて、夢みたいだ、なんて思いながら。

玄関に着いた。傘をとる。じゃ、とドアを開ける君に思わず問いかけた。今まで一度も、聞けなかったけど。

「また、来るよね？」

聞いた途端、急に君の影が濃くなった。今までは夢とも疑えるような希薄な存在感、今は鳥肌を立たせるほどの、君は振り向く、その口が、見たこともないほど口角を上げ、笑顔を張り付けたみたいにくすら寒く見えた。ぶる、震える。一瞬だけ、ほんの一瞬だけの寒気が過ぎ去ってしまえば、いつもの君の顔がそこにある。見間違いだったのか、何かの錯覚か。いや確かに、雨の奥底を見てしまったように、普段は緩やかで澄んだ川がこの雨で濁流となって全てを連れ去っていくような、見るべきではないものを見てしまった気がした。肩に触れようと伸ばしていた手を引っ込める。私が手を引っ込めるのを、君はしっかり目で追っていた。ふふ、と心底楽しそうに笑う。今度こそ、と思ったのになあ。やっぱり、変わらずにはいられないんだね。うまく聞き取れない。ううん、何のことを言っているのか、理解しようと出来なかった。固まった私に君は答える。

「うん、来るよ。でも、ずっと後になるだろうね」

今までとは違う。さっき感じた強烈な存在感はもうない。前よりもっと薄くなって、今にも後ろが透けそうだ。そんな風に、君は最後に、優しく笑った。

「じゃあ、また、そのうち。迎えに来るから」

待ってるよ。そう言うと、雨の中に溶けて消えた。

お兄ちゃん、止まって

停止世界／

凍っているのは妹だ。止まっている。活動の全てが、半開きの口のまま、右足で後ろを振り返ろうとして、それに右手が先行して、首を向け、肩までの髪の毛がふわりと揺れたその瞬間に、止まってしまった妹だ。冷氣のようなものは感じないが、凍ったように冷たくなっている。感触はあるが、柔らかくもなければ硬くもない。まるで昔触った妹の肌理を、後から手のひらが思い出すような、妙な既視感。いや既視感じゃない、本当に見なれていないわけじゃない。特別な事情もないのだから、僕ら兄妹は、生まれたときから同じ家に住み、同じ親に育てられて中学までは同じ場所へ通っていた。妹はまだ中学生だが、僕はもう大学生だ。触ったことがないわけじゃない。実際こうして思い出せる、そう何故か、今このときに触っているのに刺激されるのは記憶なのだ。感覚がわざわざ記憶にアクセスする。何十年も離れ離れにされていたように、確かめる、一つ一つ、しかし二つのものの同じことではなく、単に思い出す、こうだったはずだと訴える、妹の肌理は僕に何も与えない。むしろ未視感だ。馴染んだはずのもの、もちろん普段からべたべた触っていたわけではないが（しかしまあ仲のいい兄妹ではあった）、今はそれが異質に感じられる。それで記憶が招集される。呼び起こす。そしてこれだと決めつける。本当は、触ったときに、僕の手は何も感じていないのかもしれない。

妹がこんな風になってしまったのは一カ月前だ。僕らは酷く慌てた。母親も父親も、妹の友人も誰もが。しかしもはや慌てるような事態でもなくなってしまった。今度は父親だ。その前に妹の友人が、そして父親のすぐ後には母親が。妹と同じようにして動きを止め、今にも何かをしようとしながら、凍ったように止まってしまった。もしかしたらこれは、彼らの時間が止まってしまったんじゃないかと僕は思う。その意味では確かに凍っているとも言えるだろう。絶対零度の世界では、何一つ動けやしないのだから。一つの肉体、一つの意味を持ち、人格さえ抱え、まとまりとして動く幾億の細胞が、ある瞬間を境に全てがぱたりと止まってしまったのだ。妹は僕の部屋から出ようとするところで、それまで僕は妹の宿題を見ていて、終わって部屋を出るさま振り返って「ありg」と妹が言った。それで止まった。中途半端に空気が揺れた。揺れは最後まで続かなかった。デジタルシャットダウンだ。そしてそのまま、僕は時間の中に生き、妹を始め父親も母親も凍った世界の住人となってしまった。次は僕が止まるのだろうか？ 父親が止まり、母親までもが止まったころにはその恐怖が僕を支配していたが、今は単純な結論に落ち着いている。例え凍ってしまったとしても、果たして僕はそれに気付けるのだろうか。多分気付けないだろう。この状態から復帰するかどうか僕には分からない。少なくとも僕が意識してられる限りには、動き出したことは一度もなかった。もしかしたらあったかもしれないが、そのとき僕の方が止まっていなかったという保証はない。ただきつと、もしそうでも、妹も父親も母親もずっと同じ場所で同じ姿勢で止まっているから、復帰したことはないだろう。妹が「今」、どんなふう感じて何を考えているのか、そういうことが出来る状態なのか分からない。もし肉体だけが止まり、意識は変わらず流れているならなかなかどうして絶望的だ。動かしたくても絶対に動か

ない。僕が力を加えても、一ミリたりとも動かせなかった。外からも中からも封印されて、時間断片に縫い付けられている。僕からはそう見える。それで妹は、腐敗することもなく、ただ止まっている。出来すぎた彫刻みたいに、とはいえ確かに彼女のままで。僕は妹を避けて部屋を出る。廊下はしんと静まりかえっている。父親は寝室で、母親はキッチンとリビングの間に止まっている。食器をシンクに運ぼうとしているのだ。夕飯の終わりだった。僕は二人分のお茶を入れていた。それだけでも最大人数の半分なのに、そのとき一気にまた半分にせざるを得なかったのだ。母親の足音がぱたりとやんだ。常にスリッパを履いていた母親は、歩くとぱたぱた音を立てて、家の中でどの辺にいるのか、どこへ向かっているところなのかよく分かったものだ。それが急に消えてしまって、悪い予感と共にぱっと顔を上げれば案の定止まっている。さてこれで僕は家族の中で一人だけになったわけだ。僕にはまさか解決の手段も思いつかず、ただ時間を浪費して、そしてそれだけでいつかは治るんじゃないかと期待している。期待せざるを得ない。しかし不思議な期待だ、もし本当に彼女たちの時間が止まってしまったのなら、時間の流れの中にいる僕がいくら待たせて止まったままになるんじゃないのか。彼女たちは時間の中にまだ存在しているのだろうか、或いはまさか、時間の枠の外に出てしまったのだろうか。それはどういうことなんだろう。今ここに物体としては在る、しかし凍っていて、彼らの時間が止まってしまったのだとしか思えない、それは彼らが時間の外に出てしまったことを意味しているのだろうか。時間の外で存在する、そんなことが可能なんだろうか。疑問は形而上へ導かれ、僕はいよいよ現実的な手段を持たなくなってゆく。様々なものがはく奪され、何の対応も出来ることなく、僕はただ昨日までと似たように暮らす。もちろん変化はあった。しかし些細な変化だ。一番重大で取り返しのつかない事態に比べれば、三食自分で用意しなければならぬくらいは些細な変化だ。

しかし現実には、三食自分で用意することさえだんだんと困難にさせて来ていた。何も時間が止まってしまったのは僕の家族に限った話じゃない。妹の友人もそうだったように、この事態はもはや普遍的な出来事へと変わりつつあった。僕は今日もスーパーに行くが、もはやそこは、蠟人形の展示場だ。買い物かごを提げた主婦、誰かと話していたんだろう女性、手を引かれている子ども、カートを押したおばあちゃん、レジ打ちの途中のアルバイトの学生……、挙げればキリがない。時間が過ぎてゆくごとに、凍ってしまった人間も増える。もはや生鮮食品には期待できなくなってしまった。乾燥した保存のきくもの、それが在る限りはまだなんとか成るかもしれない。冷凍食品の類は今のところは大丈夫だが、それも時間の問題だ、いつ電気が止まってしまうか分からないのだから。スーパーの食品は日に日に減って行った。今はもう、運ばれてくる絶対量がかなり少なくなってきている。時間の問題だろう。いつか僕らは、日々の糧を失って、時間を止められるのでなくただ生命を終えるのだ。食べるものがなければ生きてはいけない。本当にそれは、誰にでも平等な真実だったはずなのだが。もちろん彼女たちが今までと同じ意味で生きているのかどうかは分からない。実際はもう死んでしまっていると言った方がいいのかもしれない。意識が戻る保証はない。再び彼女の時間が動き出す可能性はどれほどか。そうして今、日に日に凍ってしまうなかで、取り残されてゆくことは逆の恐怖を呼んでいるのだ。時間停止ではなく僕の時時間の終わり。停止とどちらがましか、考えてみても上手くいかない。片方はよく知っている。何万回も繰り返されてきた当たり前の現象だ。片方はよく知らない。しかしこれも最早、

現象としては普遍的になってしまった。どちらも僕自身の体験ではなく、見聞きしただけの出来事だという点ではむしろ共通してさえいる。実際のところ、僕はそのどちらかになるかもしれないが、どちらも体験することは出来ないのだ。死を体験する、というのが矛盾的存在であるように、時間停止を体験することは不可能だ。ならば恐れる必要はない、とでも考えられれば良いのだが、それで死の恐怖を拭えるひとがどれだけいるか。つまり僕は恐怖している、日々恐怖している、いつか、いつなのか、どちらにもならないのはあり得ない。この可能性からは逃げられないのだ。そして僕は、結局は昨日と同じように、まだ残っている乾いたものを買って食べては、増えてゆく時間停止者を目の端にして過ごしてゆく。今ではもう、僕も彼らの仲間になりたい。そうしていつか、測ることは不可能だが、動き出すことを待っていたい、とさえ思うようになってきていた。そうして永遠の救済を待つキリスト者さながら、安らかに（僕は何も感じていないが）、再びの目覚めのときを信仰するのだ。

どうも僕は、感傷的で、形而上学的に過ぎるらしい。でもまあそもそも状況自体が考えられないようなことになっているのだから許して欲しい。……こうやって、思考が誰かに語りかけているかのように働いてしまうのもそのせいだ。なんてことはないお喋りがちょっと出来なくなるくらいで、僕は僕の思考を誰かに向けて喋りかけるかたちに変えてしまった。と考えたところで、今聞くものは僕しかいないのだ。だがまだきっと、考えられているうちは正常なのかもしれない。

日に日に時間停止者が増えているとはいえ、もちろんそうでない僕のようなものもいる。例えばスーパーの休憩スペースに座っているこいつ、僕と同じ年の男だ。この男とはこの現象の後に知り合った。情報交換をしようと言うのが持ちかけて来たのだ。そして何度かここで話をしたが、三回目のときだったか、彼もとうとう止まってしまった。話の途中だ。彼はネットで情報収集していたが（だから彼は、情報交換と言うよりも単に話し相手が欲しかっただけなのかもしれない）、日本全国どこでも、外国でもこの現象が起きていることを教えてくれた。三回目の僕らの話は、遂に政府機関も麻痺してきたこと、ある外国の首相が彼らの一員になってしまったこと、世界的に対処の方法を見つけられておらず、ただ彼らを増やしているばかりであることなんかだった。「日本の政府も、」と言ったところで彼は止まった。僕はまたその瞬間を見ていなかった。妹のときも父親のときも、母親のときもその瞬間は目線はずしてしまっていたのだ。僕はしかし、もう驚かなかった。ただ彼の時間停止を確かめ、席から立ち上がったただけだ。慌てるようなことではなくなってしまう。慌てたってどうしようもないのだ。

有香のことももう随分見ていない。きっと僕の知らないうちに、彼らと同じになったのだろう。有香はまあまあ近くに住んでいる小学校以来の友人で、つい三日前までは（なんだ、全然長くないじゃないか）それこそここで会って話したりもしていたのだ。その有香を三日も見ない。三日前の買い物は一緒だった。たまたま同じような時間だったのだ。確かにそのとき、有香は結構多めの量を持って帰っていた。だからもしかしたら、まだ彼らのようにはなっていないかもしれない。まだ話せるかもしれない。最後の話し相手だ、多分、もし彼女まであんなってしまったら、僕はとうとうおかしくなってしまうんじゃないだろうか。もしもう有香が止まっていて、僕が彼女を見つけて触れてみても、もまたあの記憶の呼び出しが起こったとしたら、……そもそも有香に触れたことなんてあったのだろうか。小学校のときにはあったのかもしれないけれど、中学を

卒業してからこんな状況になるまでは、殆ど疎遠になっていたのだ。僕は彼女の肌の感じを覚えていないだろう。例え触れたことがあっても、きっと思い出せない。そうしたら何を触るんだろうか。何も感じないのか。感じるということさえ起こらないのか。僕はそれに耐えられるだろうか。耐えられない、きっと耐えられない。そうしたら僕がどうするかなんて今の僕には考えられない。

いや、実は、そんなこと全然杞憂に過ぎるのかもしれない。全然、なんて言葉をこんな風に使わなくなっただけなのだ。僕はスーパーを出る。買い物袋を提げて。店の中には誰も動くものはいなかった。僕はだから、勝手に物を取り、勝手に袋に入れて、勝手に店を出たのだ。文句を言う奴は誰もいない。誰もいなければ、道徳や法律など意味はないのだ。

この辺りの人間は、もしかしたらもうみんな止まってしまったのかもしれない。いやそれどころじゃなくて、人類はもうみんな、氷漬けにされてしまったのかもしれないのだ。僕を除いて。そして時間が止まった世界で、僕一人だけが死んでゆくのだ。僕以外の誰もが僕の死には気付かず、死体は風化して土に変わり、跡形もなくなって、そして、.....そしてみんな目覚め始める。僕はもういない。僕だけがなぜか、一瞬のうちに消えてしまったみたいに、神隠しのように、ただいなくなるのだ。僕の生、僕の死、僕の存在は塵と消える。虚空のなかで霧散する。父さんと母さんは、妹は、有香は、悲しんでくれるだろうか。彼らの知らない長い時間を、本当に本当に長い時間を、僕は過ごして、.....彼らはそれを絶対に知れない。そんなことには気付けない。僕が何を残しても、結局は同じことだろう。膨大な時間は全てを零への漸近線に載せて行くのだ。確かにあった、だから零ではない、しかし限りなく零に近いのだ。そんなものは無かったのも同然だ。そして、母が、父が、妹が、有香が、僕のことを呼ぶかも知れない。僕の名前を、僕との関係を、口にして、言葉にかえて、何かを意味しようとするだろう。もはや消えてしまったものを！ もはや存在しないものを！ 空、と言って僕がそれを悟れたら、こんなものは苦悩ではなくなるのだろうか。出来そうには思えない。

有香。有香はどうなってしまったんだ？ 本当に止まってしまったのか、それともただ、時間が合わないだけなのか。僕は確かめるすべを知っている。それを実行することも出来る。ただ彼女の家に行けばいいのだ。いつも通っている道には、彼女の姿は見かけなかった。こうなってから何度かは、話しながら彼女を送ったりもしていたのだ。有香がいるとすれば家だろう。そこでもなければ、いよいよ僕にはどうにもならない。

有香の家に行こう。そう決めたら、少しだけ気力が湧いてきた。どうせ駄目でもともとだ、そこで凍った彼女を見つけたって知るもんか。その時の僕の状態のことなんて、今の僕の知ったこっちゃないわけだ。せっかくだから、今日の買い物を有香にあげようか。一緒に食べるのも良いかもしれない。誰かと一緒にご飯を食べるなんてこと、もう何日もしていないのだ。

そして僕はインターホンを押した。反応はない。ドアを引いてみた。鍵はかかっていた。有香の靴は玄関にちゃんとある。嫌な、予想。当たって欲しくないことを浮かべてしまう。

「おーい、有香？ 僕だけど。どこだ？」

しん、としている。僕は家に上がった。すぐ右手のリビングを覗き込む。いない。有香の部屋は二階だ。多分、そこに在る確率が一番高い。在るんじゃない、いてくれれば、それでいいんだ

けれど。階段を登った。一段一段、妙にきしむ。心臓は異様な収縮音を聞かせてくる。上がって、左奥。ドアが開いている。有香の部屋。僕はゆっくり慎重に足を進め、部屋を見る。

有香だ。ベッドの上で、壁に背中を凭れさせて、目はどこか遠くの方を見ている。ここからじやどっちなのか判別できない。

「有香？」

びくっ、と肩が震えた。はっと振り向く。一気に焦点を結んだ目には大粒の涙が溜まってゆく。言葉にならずに唇がわなわな震え、有香、ともう一度僕が呼べば、とうとう涙を溢れさせて、

「良かった、あんたま d

／世界停止

始めは違和感なんてなかった。お兄ちゃんが返事しないのはいつものことだし、こっちを向かないのも当たり前。勉強を教えてくれたりはするから仲は悪くない。多分、お兄ちゃんはそういう人なのだ。だから私が「ありがとう」と言って、何にも反応が無くても不思議に思わなかった。部屋を出て、あれ、と思った。今出てきたはずの部屋にはお兄ちゃんがいるはずなのに、気配をちっとも感じない。私はべつに感覚が鋭い方じゃないけど、さっきまで自分と一緒にいたはずの部屋に何の気配もなかったら流石に気付く。そうしてまた振り返って、閉めたばかりのドアを開けた。お兄ちゃんは変わらず椅子に座っていた。お兄ちゃん、と思わず声が出た。反応はなかった。お兄ちゃん。今度はさっきよりも強く。いくらなんでも反応するだろう。でもしない。何も無い。ぴくりとも動かないで、じっと、本当にじっと、まるで時間が止まってしまったみたいに、お兄ちゃんは固まってしまっていた。え、と零れた。反射的だった。ぐっと肩を掴んで、無理矢理でも振り向かせようとして、掴んだはずの手から何にも感じられないことに気付いてばっくと手を離してしまった。冷たい。ううん、そう感じたのは、温かいと思わなかったからだ。ひとの身体は温かい。その温もりが分からなければ、冷たいと間違っただけで済むかも。

「お兄ちゃん？」

離れた右手に、胸の前で包むように左手を添えた。今度の呼びかけは恐る恐る。もう一度触ろうとは思わなかった。あんな変な感じ、もう嫌だ。反応はない。ゆっくりと、肩越しに顔を覗く。無反応。ああ、本当に止まっちゃったのかな。なんでなのとか、どういうことなのとか、そういう小難しい疑問は浮かんだけれどすぐに消えた。そうなんだ。うん。よく分からないけれど、お兄ちゃんの時間は止まってしまったらしい。

それが絶望になったのは、一階に降りてからだった。お兄ちゃんのことをお母さんに言おうと思っていたのに、こんなのってあんまりだと思った。お母さんもお兄ちゃんとおんなじようになっていたのだ。お父さんも。それだけじゃない、みんな、みんな、みんなみんなみんなみんな止まっていた。近所の友達も、隣のおばあちゃんも、何処に行っても誰を見かけてもみーんなばかみみたいな格好で止まっている。何かの途中で、何かをしようとしながら、しかし何も完了されていないその姿で。

つまり、世界は止まってしまったんだ。

膝が崩れた。え、と声にならない吐息のような音がまた漏れた。お兄ちゃんだけじゃない、み

んな、ぜんぶ、世界中すべてだ。きっとそうなんだ。何でかは分からないけれど、この世界の時間は止まってしまっているんだ。見たくない、と思いながら空を見上げる。安心して。どれくらい見ていたのか分からなかった。雲も、雲がただの絵になって、ちっとも動こうとしていない。太陽だってちっとも位置を変えなかった。世界は午後三時四十二分のままで、私だけが変わらず息をして動いて考える。考える。どうやって？　こんなの考えてるうちに入らない、はは、と妙に高い声が出た。さっきから私の喉は意思以上に私の感覚を表わしている。なにこれ、わけわかんない。声に出してみたら、いよいよ分からなかった。ひと言で言うとしたらこれは、絶、望。絶望。そう望みなんてない。だって、どうやって、どうやって、……なにを？　なにをしたらいいの？　なにかをすることなんて出来やしないじゃない。

でも待って、冷静になろう。そう考えられただけでも十分冷静だったし、冷静になれていたと思う。世界が停止したのは、私がお兄ちゃんの部屋を出たときだった。でも私は、お兄ちゃんの部屋のドアをこの手で開けたんじゃない。リビングの扉も開けたし、その後はよく覚えていないけど、うん、靴は履いてる。靴は履けたわけだし、玄関のドアだって私が開けたはずだ。無我夢中でいろんなところを見て回ったけど、そのなかで私はいろんなものを動かしていた。動かせるんだ。空はこうして変わらないのに、私がものを動かそうと思えば出来るんだ。

絶望、ううん、まだ絶望しなくていい。動かせるなら、水を飲んだり食べ物を食べたりすることだって出来るかもしれない。確かめよう。踵を返して家に走る。玄関のドアを開けて（ほら、やっぱり！）、キッチンへ、冷蔵庫の扉を開いて、牛乳とパンを取りだした。コップに注ぐ。袋を開ける。全部出来る。パンを口に運んで行く。歯に、触れて、うん、この感じだ、噛んだ。噛みきった。食べられる！　急いで牛乳を飲んだ。やっぱり飲める！　全然問題ないみたいだ。

つまり、世界が止まっても、私は変わらず生きて行けるんだ。

それなら、何だって出来る。時間が再び流れ出すまで、待っていればいいんだ。どのくらいかかるかなんて分からないけれど、どうせどれだけ長くかかったって、私にはあんまり分かんないだろう。だって太陽も動かないし、時間の感覚なんて薄れてしまうだろう。そもそも、本当に時間が止まっているなら、時間の感覚なんてあり得ない。在ったとしても当てにならない。だっただけずっと待ってられる。私だけじゃなくて、他の誰かもまだ動けるかもしれない。止まってしまった人たちも、再び普通に帰ることだってあるかもしれないのだ。

予想は当たった。どれくらいなのかは分からないけれど、お父さんがいきなり戻ったのだ。お父さんは私よりずっと冷静だった。この世界に起こったことを早口で喋る私を、偉かったね、と言って撫でてくれた。中学生にもなって父親に頭を撫でられるなんて思わなかったけれど、私は思わず涙を溢していた。つらかったんだね、と優しい声で。お父さんの声、こんなに優しいなんて知らなかった。忘れていただけかもしれないけど。わんわん泣く私をお父さんは抱きしめてくれた。あったかい。あったかい。これ、この感じ。一緒に待とう。父さんが戻ったんだから、きっとそのうち母さんだってお兄ちゃんだってお戻ってくるさ。お父さんに言われて、そんな気が本当にしてきた。

でも、変だな。私が落ち着いたころ、お父さんはそう言った。ついさっきまで、お前が止まってしまったって、母さんとお兄ちゃんと話していたんだ。確かにそうだった。お兄ちゃんの部屋を

出ようとするところで、お前が氷漬けみたいになってしまって、それから……。そんなことないよ、私じゃなくて、みんなが止まっちゃったんだってば。いいから待とうよ、お父さん。お母さんもお兄ちゃんも、すぐまた元通りにきつとなるから。

次は友達だった。その次はお母さん。その間にも元通りになる人がぽつぽつ現れた。空は相変わらず一枚絵みたいだけど、きつとみんなが元通りになったらぜんぶが前と同じようになるに違いない。だんだん世界は元通りになって来ていた。私たちは、毎日新しく目覚めた人を探して説明した。止まってしまった世界を動かすために出来ることは私たちにはなかったが、でも、希望は十分にあった。有香ちゃんも目覚めた。お兄ちゃんの友達だ。有香ちゃんの方から私に会いに来てくれた。

私がおんなじように説明すると、良かった、と一言おいてから、有香ちゃんは険しい表情になった。あのね、陽菜ちゃん。私はさっきまで、陽菜ちゃんのお兄さんと話してたの。

有香ちゃんが話してくれたことは、実は今までのひとたちからも聞いていたことだった。信じられないことだけれど、私以外の人達は、いきなりひとが止まってしまう世界にさっきまでいたらしい。いや、こう表現していいのかは分からないけれど、ともかくひとが凍ったみたいに止まってしまうのだ。有香ちゃんの話の中で止まってしまったひとの順番は、ちょうど私が知っている動き出したひとの順番と同じだった。ここでは世界が一旦停止して、私だけが最初に動き出した。そこでは私が最初に停止して、動いているひとがどんどん止まっていった。もし本当なら、逆のことが起こっていることになる。

それがどういう意味を持つのか、そんなことは分からない。だけど、それなら、いつかお兄ちゃんがそっちで停止すれば、こっちではもとに戻ってくれるんだ。

問題がないわけじゃなかった。そっちでは、私が止まってからもう一か月も経っているらしい。こっちと違って時間の流れ自体はあるみたいなのだ。時間の感覚もしっかりあるらしい。私にはそれがなかったから、いつまでだって待っていられた。最終的には生きることに不都合が無かった。だけど、そっちは違う。有香ちゃんと話して、どんな精神状態だったかよく分かった。錯乱して、狂いそうになって、いつか諦め、有香ちゃんはみんなと同じように止まるのをただ待っていたと言う。それが本当になって、こっちでは動き出せた。

お兄ちゃんは大丈夫だろうか。多分、すごくつらいだろう。有香ちゃんが目の前で止まってしまって、もうお兄ちゃんしか残っていない。でもとにかく生きてさえくれれば、いつかこっちのお兄ちゃんが動き出してくれるはずなんだ。お兄ちゃんが動き出せば、世界もきつと動き出す。全部元通りになるはずだ。だから、ねえ。

お兄ちゃん、止まって。

END.

夜の使者（1）

夜は北の端から使者を送っていた。朧月夜。玉座のひじ掛けに身体をもたせながら、王はただ迅速な侵略を求めていた。これから闇の軍勢が訪れることを伝える使者たちをみると、ひとびとは一斉に自らの眠る家に帰ってゆく。男は仕事終わり、女は遊んでいた子どもたちを連れて、勉強や裁縫やカードをする場所であったテーブルはこれから夕餉の彩りを迎える。彩りとはいえ、その大多数は品数も量も少ない貧相な食事であるが。

その村にはしかし、裕福なひとたちもいた。大きなお屋敷に住み、夜の王国の侵略に逆らって明りを灯すやつらである。油は貴重品であった。その油を男たちは毎日世話して季節になれば絞っているのだが、男たちのテーブルに置かれることはめったにない。グリーステール家がその元締めだった。

村一番のお屋敷であり、実質的な村の支配者でもある彼らの家はこの村の中心から大通りをまっすぐ南に行ったところにあった。中心にあるのは十字架を掲げる教会である。この教会でさえ、油ではなく蠟によって夜の間の恩恵を受けていたのだ。教会の地下室はほとんど牢屋じみていた。そこに、夜の使者のひとりが捕まえられていたのである。

捕まえたのは無論、グリーステール家の家長だった。肥え太ったかわりに薄くなった頭で、蒸留酒が入らなければひともいいが、一度気に障ると手のつけようもない性分である。この男はガロムと言ったが、雇われている男たちは影でガロンと一つまり、あの膨らんだ腹と酒癖の悪さによって一呼んでいた。この男が夜の使者を捕まえたのは全くの偶然である。偶然ではあるが、常日頃機会を窺っていたと言ってよい。そして先の新月の晩に、神の恩寵によって、この男は夜の使者を捕まえることに成功した、最も、直接に働いたのはこの男に雇われている村の男たちだったが。その偶然を神に感謝し、この男は使者の監禁場所を教会の地下室に決めたのである。

この地下室はもともと牢屋めいていたとはいえ、この不思議な使者が連れ込まれるまでは神父が毎日の瞑想をしていたところであった。神父は、神の恵みの届かないこの場所こそが彼の精神を鍛えるのに丁度良い場所だと思ったのである。しかしその神父も、グリーステール家の言うことに簡単に逆らうわけにはいかなかった。彼らは紛いなりにも敬虔な教徒であり、暴露してしまえば彼らのささやかな寄付によってこの神父も日々の糧を得ていたのである。そのため夜の使者の監禁場所は教会の地下室となった。最も、ここ以上にこの者を捉えておける場所もあるまい。新月から七日の間逃れさせなかったのも何かの奇跡であろう一そう言われては神父も否定できないのである。

さて、夜の使者はと言えば、捕まったのにも関わらず飄々と暮らしていた。恩寵溢れる日の時間にはこの者は寝ているのが普通だった。ガロムは何度か尋問しようとしてみたが、何をしようとも起きる気配はなかったのである。この地下室には拷問するほどの準備はなかったし、何よりこの者の感触がガロムには耐えられなかったのである。

この者は確かに人間の形をしていた。遠目に見れば見紛うほどである。しかしその肌はしっとりとして熱を持っているのではなく、鱗のようなものに覆われてぬめっていた。この者の手には指が四

本しかなく、また指と指の間に水かきのような薄い膜が張っており、更に爪も生えていなかった。夜の闇と同じ色のコートを纏い、その顔を隠すフードは何故か脱がすことが出来なかった。この者が男であるかそれとも女であるかも定かではなかった。確かに顔立ちや腕の太さは男のようにも思われる。しかし、人間と同じように作られたとは思えなかった。というよりも、この者はその作り手から人間と異なるような気を抱かせた。実際、それは的確な感想だったのである。

この者は夜が近づくと目を覚まし、のそりと身を起こした。そしてフードの奥からその長い舌を伸ばすのである。その舌は薄気味悪いほど血色の良いピンクで、先端は二股に割れていた。ある男はこの者を大蛇の一種だと考えた。そう見てみればそのように見えるもので、ふと気を抜いて相対すればいきなりその口を大きく開けて頭をカプリとやられそうである。二つ眼はどちらかと言えば猫に似ていた。この村では、猫も夜の使者の一種と考えられていたのであるが、それでも猫をこのように監禁することなどありえなかったのである。彼らは確かに夜に蠢くが、家には鼠を退治する者でもあり、また人間の頭をまさか飲み込むようには見えなかった。猫の方とは言えば、この監禁者にちっとも興味を示さないようだった。彼らは一度この地下室に近づいたが、すぐに森の方へと行ってしまったのである。それはこの者を捕まえてすぐ次の日中のことであった。そしてまた、猫たちは子どもたちの良い遊び相手でもあったのである。

今夜もガロンは夜の王の軍勢に逆らって、油を染み込ませた布で松明を作り、何人かの男を連れてこの地下室にやってきていた。神父は一步引いた階段のところで祈りの手を組んでいた。これからガロンがしようとしていることに、一抹の不安があったのである。

蛇のようなこの者は今夜も起きて舌を遊ばせていた。ガロムはこの者に一応の名を与えていた。名前と言っても見たままそのままである。ガロムは急ごしらえの柵に近づいた。

「シュレンゲ、やっと起きたのか。いい身分だな、ふんっ」

シュレンゲと呼ばれたこの者は、ガロムの姿を認めたのか舌をちろちろと横に揺らせた。その音律が自らを指していると理解しているように思われた。

「お前は夜の使者だろう、な、ん？ 人間の言葉も喋れないのか、お前の王は言葉も教えてくれなかったのか、え？」

シュレンゲはおよそ人間には出せそうにない、シー、という音で答えた。彼の喉から出ているようであり、舌で鳴らしているようでもあった。ガロムは何度がこの返答をされているが、彼はこの音が死ぬほど嫌いだった。何よりこの音を立てるときのこの不躰な視線が嫌いであった。縦に細い目は異様な輝きでじっと見つめてくるのである。ガロムは身震いを悟られまいと傍に落ちていた石を蹴飛ばした。石は柵に当たって跳ね返った。大した勢いもついていなかった。それが証拠に、シュレンゲは相変わらずの視線をガロムに注いでいた。

「ふん、気色悪い奴だ。人間のような形をしながら、まるで人間のようにでない。もしも人間の言葉を解し、友好的な態度を取るのなら――もちろんそんなことは世界がひっくり返ってもあり得ないだろうが――お前にも慈悲をくれてやると言うのに。え、夜の王は何を考えてこんなりの生き物を作ったんだ？ 慈悲深い我らが神が我々人間を作りたもうたのとはまるで違う方法に見えるぞ。こんなぐちゃぐちゃの、ばらばらの、猫だの蛇だの半人間だのというもので、使者など勤まるわけがなからう。まして軍勢など出来ても所詮烏合の衆よ。こやつらの王はよほど知恵の

ないと見ゆる。当然か、な、コレアット神父」

「は、そうであります、ガロム殿下」

突然名指された神父は手を組んだまま頭を下げた。村の権力者、とはいえ一介の地主を殿下と呼ぶには、神父がこの教会に赴任したその時にガロムがそう要求したからである。

「天にまします我らが神と同じ程度の知能があると考えてしまった我々にも責があると言うものだ、ん、そうだろう？」

「神の試練の一つであります」

この首肯が余程満足させたと見えた。ガロムは脂の乗った頬をひしゃげてにんまりと笑った。それからシュレンゲの方をきつと見据えると、左腕に下げていた十字架を外して手に持ち、自分がまるで神父であるかのように説教を始めた。

「恐怖という感情にも、我々が持ち感じるからには理由があるのだ。何故このような感情を神は与えたもうたか？ これは負の感情の全てに言えることだが、我々人間はその理由をよく誤解しているものだ。しかしそれは神の責ではなくて、むしろ我々自身の責においてあるのである。神の恩寵きめやかな限り、恐れるべきものは本来何一つないのである。それなのにこのような醜悪なものが我々に恐れを呼び抱かせるのは、この者の本質をよく知らないうちなのだ。このように、一度このものの本性を知ってしまえば、取るに足りない、無力な、統一のない、醜く、知性もなく、言葉も話せぬ、ただ出来ることといえば気味の悪い音を立てて舌を伸ばすだけの下等な生き物なのであり、そのどこにも恐怖を抱かせるようななものもありません。恐るべき対象などいるわけがないのである。夜の王でさえ、我々はしばしばそれを恐れるが、それは我々の側の無知に依るのであって、夜の王自身が恐怖的であるのではない。これは考えれば当然誰でも理解できることであって、何故このようなことを聖書に書き足さないのか私は不思議でたまらないくらいだ。村の男どもはみな、どこかここにいるコレアット神父も、お前を見て恐怖した。しかし私はそうではなかった。私だけはこの秘密を知っていたのだから当然だ。お前を捕まえたときも、私以外の誰もそのようなことを言ひださなかった。ただ恐れ、お前が通り過ぎるのを待っている算段だったのだ。しかしそれは、本来恐れるべきでないものを恐れ、紛い物の恐怖に屈するという、最も恥ずべきことである。これは明らかなことで、神のことばの中にもこれを諷めるものがありながら、ひとはなかなか勇気をもってこれを成すことが出来ない。しかし、誰かがやらねばならぬのだ。誰かが率先して勇気を示し、神の恩寵に応えねばならぬ。神の慈悲をただ待つだけでなく、自らそれを受け取りに行かねばならぬ。そのようなものが地上の王国の支配者に相応しく、夜の王の軍勢に負けぬ軍隊を作り上げることが出来るのである。神は一日の半分だけを日の恵みのもとに我々に与えて下さったが、ならば我々は、それだけをただ受け取るのではなく、残りの半分も勝ち取らねばならぬのだ。それが神が我々に与えた試練の一つであり、同時に、地上の王国を任されたものの使命でもある。お前が日の光を嫌っていることを私は知っているぞ。お前などちっとも恐れるに足りぬ。今は私も慈悲によって、わざわざお前の目が覚めている夜の間このことを伝えに来たのだ。ふん、もっとも、頭の方まで覚めているわけではなさそうだがな、え、シュレンゲ？ ことばを解さぬお前でも、私の慈悲は伝わるだろう、な？ こうしてお前を捕えてはいるが、私はお前たちと違って悪心を持つ悪魔ではない。え、慈悲によ

てお前たちに接しているのだぞ？ お前が私の慈悲に忝えて、お前たちも慈悲で返すというのならすぐにでもお前を出してやろう。その時にはお前たち夜のものどもは、二度と人間の王国を毎夜毎夜侵略しようなどとはしないだろうな。そうして人間の王国は永遠の光に包まれて、夜の闇の中でしか生きられない可哀相なお前たちは永劫の闇の中で暮らすがよいのだ。何も我々は、お前たちを滅ぼそうとか、夜の国を侵略しようとか、そのような野蛮なことを目指しているのではないのだよ。ただお前たちが毎夜毎夜の侵略さえ止めるのなら、お互い神の慈悲のうちに、共存することも可能なのだ。今それが実現されていないのは、ただお前たちの下等な王の野蛮な野心のせいなのだ。お前が私の話に感銘を受けて、自らのこれまでの行いを悔い改め、改心し、夜の王を説得するという道もあるのだぞ。それならば私は喜んでお前をこの地下室から出してやるだろう。それだけじゃあない、お前に最高の御馳走を用意することだって出来る。さあ、え、何でも言ってみろ、ん、何が望みだ、私が何でも叶えてやるぞ、ん？」

ガロムは慈悲深げな表情で更に柵に近づいた。後ろでは松明を持った男たちが一言も話さずに聞いていたが、ガロムが歩を進めたのにたじろいだようだった。神父は相変わらず手を握りしめて、祈りのために目を瞑っていた。松明の炎はガロムの顔の油を光らせて、ぬめっとしたシュレンゲの皮膚にも映りこんでいた。それは一種怪しい光景だった。その怪しさの大きな理由であるシュレンゲは今、これまでにはない光をその瞳に宿らせているように見えた。それは単に光の当たり方だけの变化ではないように思われた。それは明らかに、ガロムの語った最後のことばに反応して文字通り目の色を変えたように思われた。いつの間にか不安を煽る舌遊びも止まっていた。そうして上体を横に揺らし始めた。最初は小さく、それがだんだん大きくなると、男たちだけでなくガロムもやはり不審がって、心なしかじりりと後ろへ下がったようだった。それから、ひい、と息を呑む音が聞こえて神父が目を開くと、丁度ガロムがもう一步引いていたところだった。柵の向こうでシュレンゲが突然立ち上がったのである。

シュレンゲが立ちあがったのは七日目にして初めてのことだった。もちろん捕まえたときは立って歩いていたのだから、それが出来ることに驚きはなかった。しかし唐突の余りに人間たちは必要以上の反応を示してしまったのである。

シュレンゲは立ち上がった後、ゆっくりと柵の方へ近づいた。今度は誰も驚いたりしなかったが、それぞれに皆不安そうに成り行きを見つめていた。ガロムはまたじりっと足を後ろに下げた。神父の方は、十字架を壊れんばかりに握りしめていた。彼にもガロムの演説は理解されたが、それ以上に不可解なものに対する根源的な恐怖はぬぐえなかったのである。むしろ不可解さの方に恐れがあるのであって、払拭は容易いことではなかった。

しかし今夜彼らの目的こそ、この不可解を解きほぐそうというものであり、不安と恐怖を払拭しようということだったのだ。村男たちも耐えに耐えてこの場に踏みとどまっていた。彼らの方が不安も薄かったかもしれない。この者は松明の火を恐れるだろうし、その松明は彼らの手に握られていたからである。それにももちろん、彼らは短刀を携えていた。それぞれに高価なものでも最新のものでもないが、それでも武器を持っているということは精神の平静に一役買うものである。それと反対に、十字架を握りしめることしかできないガロムと神父は気が気でなかった。しかしここで逃げ出せば、自分の権威は失墜してしまうだろう。それだけは何としても避けねばなら

ないことだった。この腹積りは二人に共通していた。尤も神父は、ガロムに対する服従を見せることも目論んではいたが。しかしもしガロムの方だけが尻尾を巻いて逃げ出してくれたら、と神父は思わずにいられなかった。そうしてくれればどんなにいいだろう！ 男たちはこれからガロムの代わりに自分を信頼するようになるだろう。そうすれば、この忌々しい糞親父におべんちゃら言う必要もなくなるのである。それから全ては神の言うとおりに教会を中心にして為されるようになるだろう。無償の捧げもので教会は一層豪華になるに違いない。いや自身は質素な暮らしで構わないのだが、迷える子羊の安寧のためには地上的な豪華さも少しは必要なのである。村は更に大きくなるだろう。ガロムが自分の土地と権力に固執する余りよそ者を受け入れないのとは反対に、村の人口はどんどん増えて、そうすれば神父は信仰の拠り所として名声を集めるに違いない。いつしか都へ続く街道も敷かれるかもしれない。自分の献身によって、教会は一層の発展を叶えられるかもしれない。これらはすべて絵空事であったが、しかし実現を願うのに十分の空想だった。しかし神父は、だからと言って自分から率先してこの者の処遇を決めようとはしなかった、その点で確かにガロムはこの村の支配者だったのである。ガロムがこのことを考え付いたのはシュレンゲを捉えたすぐ後のことだったが、村の者たちに演説をかましたのはつい今日の朝のことである。ガロムは今朝、村の者たちを自分の屋敷の前に集めた。これから畑仕事を始めようとしていた村人たちは、めいめいに鋤やら鍬やらを持って何が話されるのかとどよめいていたのだが、静粛に、という声に次第にざわめきもおさまっていった。これを言って村人を鎮めたのはグリーステール家の執事であるカロケットだった。この男の顔は猿に似ていて、ガロムの見ていないところで村人に無理難題を叩き付けるのでもしかするとガロム以上に嫌われているのかもしれない。彼はよく、ほんのちょっとの食べ物の融通や仕事の増加を村人に求めた。これはまるでガロムからの言伝であるように言われていたが、実際のところガロムの関与するところではなかった。ガロムは確かに収穫量や仕事の速さには文句を付けたが、それはこの村の支配者たる自分の仕事であり、自分は村人全てを豊かにする責任を持っているのであって、そのための厳しい監督であるのだから、自分で直接指示を下すのが必然と思っていたのである。ガロムは何度かカロケットの行き過ぎた権力行使を咎めたが、それもあまり力が入ったものではなかった。というのも、実際カロケットはよく働いていたからである。ガロムは何かを決めて、指示を出すだけの人間であったので、細々とした事務的な算段や様々なものの手配はカロケットの仕事だったのである。

さて、そのカロケットが二階のバルコニーから村人たちの口を閉ざせた後、ガロムはゆうゆうと村人たちの前に進み出た。ガロムからは全ての村人がよく見えた。子供と女たちは別であったが、男たちは皆ガロムの方を見上げていた。ガロムはそれに満足して、恭しく片手を挙げた。これがお決まりの演説開始の合図であった。ガロムは年に数回、こうして村人たちを集めて演説を行った。それは今年の種まきを決めるときもそうであり、収穫のときも、そして祭りのときもそうであった。村人たちは、これら全ての時期ではないのに集められたことに不安を覚えていた。皆、男たちに聞かされてあの不気味な生き物のことを知っていたのである。子供たちの中にはその奇妙な生き物を一度見てみたいと言う者もあったが、ガロムはそれを許さなかった。彼は、シュレンゲに対する権利のすべてを自分が持っていると思っていたのである。

「諸君、よく集まってくれた。諸君らの変わらぬ忠義に私はとても感謝している」

ガロムはいつもと同じに話を始めた。これは彼のお気に入りの言い回しで、元は諸侯が自分の兵士に向かって言っていたことだったのだが、それを一度話に聞いてからずっと言い続けているのである。

「さて、集まったものの中にはもう聞き及んでいるものが殆どだろうが、去る新月の夜に私は夜の王国の使者を捕まえることに成功した。このことについても今感謝を述べておこう。私はかれこれ二十年もの間、この憎らしい者どもをどうやって捉えられるかを考えていたのだが、今回神の思し召しによって幸運が転がり込んで来たことは、日ごろからの皆の働きに対する正当な報酬であるだろう。私もまた胸の空く思いである。皆の者には再び感謝したい」

ガロムは両手を挙げていつもの拍手を待ったが、ちらほらと小さな音が聞こえてくるだけだった。ガロムは不満を覚えたが、村人たちもそれどころではなかったのである。大きく咳払いを一つして、ガロムは再び話し始めた。

「六日の後も新たな夜の国の使者が来なかったことは、神に感謝せねばならないことだろう。あの者を地上の神の国の地下に閉じ込めたので、夜の王の方では知っていても手出し出来なかったのだ。私はここに、特別な協力を申し出てくれたコレアット神父に感謝したい」

コレアットは自ら言い出したのではなくガロムに言い聞かされてしぶしぶ承諾したのだが、こう言われてはどうしようもなかった。ガロムは確かにうまくやっていたのである。

「さて、私は捕まえた夜の使者にシュレンゲという名を与えた。呼び名がないのは不便であるし、何より名前がないというのは不憫ですらある。ここにも神の栄光永遠なることの証があるだろう。神は我々に名前を下さったが、あの下等な夜の王の方では、自分の創造物に名前も与えないのである。仕えるべき主君が愚かであるとは悲しいことだ。私はあの者に名前を与えることで、それを教えてやりたいとも思う。聞いての通り、あの者の名前はあの者の性質を十分に言い表している。我々が自分の子供に名前を付ける時のように、歴史上の偉大な人物、聖人たち、彼らの名誉に肖って彼らの名前を貰うこともできたのだが、それは夜の国の使者には行き過ぎた慈悲になるだろう。それで私はあの者を見たままに呼ぶことに決めた。この名前は十分に効果を発揮していて、今では呼ばれていることをあの者も理解しているように思う。

諸君らの中には、それでも何故私が我々に害をなすものの名前を与えたのか不審に思うものもあるかもしれない。しかしそれは、諸君らに対する私のもう一つの目的を話せば理解してもらえることだと思っている。諸君らの中には、あの者を捕まえた時にも、あの者を必要以上に恐れる者があった。これは非常に悲しいことで、また恥ずべき行いでもあるが、私はここでそうして告発しようとは思わない。恐怖を感じるのは自然の道理であり、何より感情は神の与え給うた人間の優越の一つであるのだから、それを否定することは我々のすべきことではないからである。ただ私が言いたいのは、あの者を恐れる必要はない、ということである。恐怖の多くは無知を前提としている。不可解なゆえに、ひとはそれに恐怖するのであって、それがそれ自身恐怖的であるからではないことは明らかだ。そして我々は、諸君らも私も、同じくらいあの者に対して無知である。我々が知っているのは、あの者が忌々しい夜の王の使者であって、毎夜毎夜人間の国の侵略を企むものの先兵であり、我が物顔で闇で覆われた地上を闊歩する不信心なものだということ

だけである。我々はそれ以上の何も彼らについて知らないのに、彼らに対して恐れるのは間違っていると私は思う。そして同時に、先ほども言ったことだが、あの者の性質をよく調べてみれば、そこには恐れるところなど一つもなく、むしろ神の慈悲を受けられなかった悲しみばかりを発見することになるだろう。これをするには、諸君らの間に疫病のように蔓延る恐怖を払拭することにもなるだろうし、我々人間がどれだけ神に愛されているかを逆説的に知ることも出来るだろう。だから私が今日この場に皆を集めたのは、あの者に対するある一つの計画を、諸君らに賛同して協力して貰うためである。その計画とは、まさしくあの者をよく調べ、神の慈悲を教えることである。諸君、如何だろうか」

ガロムの演説が終わると、村人たちの間にはまたざわめきが生まれていた。ガロムは自分の演説の出来に満足していたので、村人たちの騒ぐままにしておいた。ここでしっかりと彼らを指揮しておくことはガロムにとって重大な意味を持つだろう。その点こうして行動を促せたのは幸いである。カロケットが始まる前と同じように、静粛に、と何度か声を荒げて、村人たちの興奮は一応の落ち着きを見せてきていた。

ガロムは再び咳払いを一つすると、話し始めた。

「この計画の決行は今夜であると考えている。もし諸君らの協力が得られないというのであれば、私は一人でも実行するつもりだ。しかし私と一緒に名誉を得たいと思う者はいないだろうか。神への献身を示したい者は？ 諸君らの中にも、親や子、友人を彼らのせいで失ったものもあるだろう。私もその一人であるからして、あの者を簡単に許してやることは出来ない。しかし初めから敵意を持ってあの者たちが我々に接して来るとしても、我々も同じように敵意で返すことを主は望んでおられない。どうだろう、諸君、あの者に慈悲を持って向かおうと思う者はいないかね？ あの者を回心させた暁には、夜の王への説得の一手になるだろう。そうすれば我々はあの不躰な侵略に怯えることもなくなり、地上のすべては真に我々のものになるだろう。この英雄的機会に名を挙げたい者は夕方私のもとへ来てほしい。誰であろうと歓迎しよう、そして私とその勇気ある者の友情はより確かなものになるだろう。諸君らが名乗り出てくれることに、私は期待している。ありがとう」

村人たちの反応はまばらだった。何人かは拍手でこの演説の終わりを祝福した。彼らはガロムの言ったように、夜の国の者どもに親や子供を奪われていたのである。この村では、百年も前から夜の中に人が消える事件が二、三年に一度くらいの頻度で起こっていた。ある者は一つにも満たない幼子をなくし、或るものは老いた母親をなくしていた。一時は人さらいや盗賊の可能性を考えなかったわけではないが、余りにも長い間続いたので、いつしか夜の国の者どものせいであると認識されるようになっていたのである。これには確かに有力な証拠もあって、攫われるのがいつも夜中であったこと、そして必ず、攫われたものの着物の一部だとか握っていたおもちゃだとか、西側に広がる森の一角で発見されていたのである。その周りには何かを引きずったような跡があり、奇妙に濡れてもいたので、何度かは村の男たちがその跡を追ってみたのだが、森の奥に広がる沼へ飲まれてゆくので結局見つけることは叶わなかった。沼の向こうには誰ひとり近づかない山があり、その向こうが暗黒に包まれた夜の国だと何百年も前から言い伝えられていたのである。

ガロムは自室へ引っ込んだ。彼もまた、夜の国の者どもによって子供を攫われたものうちの一人だった。二十年前、ガロムがグリーステール家の当主になって間もないころ、まだ三つの幼い彼の娘も誘拐の憂き目に遭ったのである。ガロムは娘にレーナと名付けて可愛がっていたのだが、目に入れても痛くないレーナを失ってから人が変わってしまったのである。それまでの彼はどちらかといえば賢く寛大な当主で、何しろ村人たちに囑望されて指揮を執っていたのである。油を植えるのも先見の明があってこそのものであり、それは確かにこの二十年間村を豊かにし続けてきたのだった。レーナが消えた朝、彼は率先して森の中を探索したのだが、見つけたのは彼女の着ていた上質の服のフリルの一部だけで、沼に浮かんで茶色く澱んでいたのである。決定的だったのはレーナの母であるミエナを流行っていた悪い病で失ってからだった。それからの彼は何か憑りつかれたように夜の国のことを言うようになり、その使者をずっと捕まえようと計画していた。神父がこの村に来たのはこの頃で、その時にはガロムはぶくぶくに太って性格も非常に悪い方向へと変化してしまっていたのである。

そのガロムがシュレンゲを捕まえたのは確かに幸運だった。このことはある村人の報告によって現実になったのだが、彼はその報告を聞くとすぐさま村の男たちを集めて沼地の方へこちらから勇み進んだのだ。彼は村人たちに、人に在らざるものをちらとでも見つけたら報告するように何度も念押ししていた。それが今回実を結んだのである。彼は巧妙にシュレンゲを誘い込ませ、森から出た瞬間に網にかけさせた。村の男たちはガロムの焚き付けに乗ったのである。すなわち、こちらから捕まえない限り、また一人誰かが攫われることになるぞ、と。男たちは恐怖によって協力していたのだが、内には確かに正義の耳打ちによって動いた者もいた。夜の使者を捕まえればこのような事件はもう起こらないだろうと彼らは十分信じていたし、それだけでなくも自らの家族を失ったものは憎悪を勇気に変えられたのである。

シュレンゲを殺さずに捉える、というのはガロムの厳命だった。村人たちは何故そのような命令を与えるのか――実際これを破ったものには罰を与えるとさえガロムは言ったのだが――理解できなかったが、この演説によってもはやそれは明るくされたわけである。全ては今のところガロムの思惑通りに動いていた。それは夕刻になって、目星をつけていた男二人がやってきたときもそうであった。この二人はそれぞれに家族を奪われたことがある者たちで、ことこの件に関してはガロムに協力的だった。その二人がガロムの護衛を買って出たのである。もっとも、この報酬は金銭でなく名誉が約束されたのだが。それで今、いよいよ三人は勇んで教会に行き、コレアット神父を説き伏せて、夜の地下室へと挑んだのである。コレアットの方と言えば、この提案に対して大きな魅力を感じてはいなかった。それだけでなくも自分が暮らしている教会の地下にこの気味悪いものを幽閉するだけで辟易していたのである。今日の提案が、シュレンゲを教会の地下室からグリーステールの屋敷の一室に移す、というものならどんなに良かったか。しかし神父も、先に言った心積りによって、ガロムと共にしないわけにはいかないのである。

柵に歩みよったシュレンゲに恐怖を内心増大させられて、同時に警戒心を比例させた四人の男たちは、次にシュレンゲがどのような行動に移るのかをじっと注視していた。もしこの者が柵を力づくで破ろうというのなら一大事である。松明を持った二人の男は、その反対の手でナイフを撫でた。ガロムとコレアットはいよいよ十字架を握りしめ、びくびくした視線を注いでいた。シュ

レンゲはしかしそのような緊張など知りもしないという風に、また一步柵の方へ歩み寄った。もはや柵に肉薄して、シュレンゲはゆっくりとしゃがみこんだ。四人の注視を受ける中で、シュレンゲはそっと柵の外へ手を伸ばした。男たちは一瞬それに反応したが、ガロムの静止に身を留まらせた。シュレンゲは落ちていた石を拾い上げた。最初にガロムが蹴とばしたあの石である。事の成り行きをじっと見守っていたが、男たちはシュレンゲのなすがままにさせていた。尤も、柵の向こうではこちら側からでも手を出しにくい。シュレンゲは座り込んだまま、ちょうど鉛筆を持つように右手で石を持った、そしてそれを地面に当てたのだ。

「ガロム殿下、こ奴は何を」

沈黙と緊張に耐えきれなくなってコレアットが口を切った。ガロムは視線だけをちよろっと神父の方へ向けた。

「待て、もしかしたらこ奴は文字を書こうとしているのかも知れないぞ、ん、名前も与えん王が文字を教えるなどとはあり得ないはずだが、まずはどうするか見ていようじゃないか、え」

それはガロムが自らに言い聞かせているようでもあったが、コレアットは恥じて一步また引いた。寛大さを見せつけられたように感じたのである。これは明らかな敗北だった。神父は唇の裏を噛んだ。神父はここへ来てから何度となくこのような敗北を喫していた。神父にとってこの種の屈辱は、ガロムがそうと意図したものでないからこそ余計に忌々しいものだった。

一方シュレンゲは、水かきに邪魔されながらも何かを土に彫り付けた。松明の火はそれをはっきりとさせるほどは届いていなかった。そうするためには、おそらく彼らも柵の傍まで寄る必要があるだろう。ことによってはシュレンゲと同じようにしゃがんでやる必要さえあるかもしれない。男たちは動かなかった。ただシュレンゲが彫り付けるのに緊張していた。シュレンゲはゆっくりゆっくり、しかし躊躇いなしに、石を動かしていた。文字を書きつけているとしか思えない動きだったが、男たちにはまだそれを確認するための行動をとれないでいた。シュレンゲはあるところで手を止めると、さっきまで不自由なく使っていた石を今度はぽいっと柵の外へ投げると、地下室の奥の方へ引っ込んでしまった。それでやっと男たちが松明を近づけることが出来た。ガロムがそれを先導した。コレアットは三人の後ろからそれを覗き込んだ。そこにはこう書かれていた。

私は夜の使者などではありません。私を蛇などと呼ぶのはやめて下さい。お父様、二十年もの月日が経ったとはいえ、本当に私のことが分からないのですか？

それを見てガロムは今度こそ本当に驚いてえっと息をのんだ。目玉が飛び出るとはこのことだ。松明を持った二人の男も固唾を飲んでガロムの方を見ていた。ガロムは慌てて声を荒げた。

「ふん、え、何を言い出すかと思えばなんという侮辱か、ん、腹立たしい、え、私は悪魔の言葉になぞ耳を貸さんぞ、え、こちらが慈悲をもってお前の望みまで聞いたと言うのに、やはり悪心を持っているのだな、ん、夜の王の使者と言うやつは、え、まさか私の慈悲を踏みにじるだけでなく失った私の娘まで侮辱するとは！ ふん、そんなかどかわしに乗ると思ったか！」

シュレンゲはそれを聞いて肩をびくっと震わせた。それがガロムには悲しそうにと一瞬思えて、

さらに怒りは彼を熱くした。

「え、そんな風に言うなら、ん、当然出来るだろうな、ほら、私の娘と妻の名前を書いてみろ！」

ガロムはさっきシュレンゲが放った石を柵の内側へと投げ返した。今度はしっかりと勢いがついていたので、石はシュレンゲの横を過ぎて地下室の壁に当たって落ちた。シュレンゲは言われた通りに石を拾ってまた何か書きつけた。そこには綴りの間違い一つなく、「グリーステール家当主ガロムの娘レーナ、その母ミエナ」と書かれていた。

これを見てガロムは益々激昂した。もはや彼自身、彼の怒りがどうにもならなくなっていた。その怒りはしかし一抹の期待と裏腹だった。もし本当にあの可愛い可愛いレーナだったら、もし二十年の間夜の国に幽閉されてしまっていて、今になってやっと抜け出して必死の思いで逃げ帰ってきたとしたら、二十年と言う歳月はこれだけの伸長にするには十分だろうし、鱗のような皮膚も説明が付く。そのことを彼は十分わかっていたのだ。分かっているながら怒ることをやめることが出来なかった。怒ることをやめられないくせに、彼は自ら可能性を確かめる方へと傾いていたのである。

「ふん、私の妻と娘の名前など、夜の王がお前に教えた可能性は十分にあるのだからな、え、考えてみればそんなものを知っていたところで何の証拠にもならんよ、ん、いやいや冷静にならなければいかな、冷静にならなければいかなよ。え、お前はずいぶん巧妙だな、流石は夜の国の使者と言うわけだ。しかしもし、万が一お前が本当に私の娘レーナであったなら、今までの悪言は許しておくれよ。無論許して貰えるだろうな、私はそれを知る術もなかったのだから。え、お前、ならどうやって私にそれを信じさせられると思うんだ、え、分かるだろう？」

シュレンゲは名前を書いたときしゃがんだままであったが、悲しそうに首をガロムへと向けた。あれほど気味悪かったまなこも、今や泣いているようにさえ見えた。そう、確かにこの者は、最初捕らわれた時にも、ガロムを見つけると飛び掛かろうと奮闘したのである。それは反抗的で危険な行動だと見なされていたが、もしかしたら違ったのかもしれない。――そんな憶測がガロムの頭から付いて離れなくなり、彼は怒りと期待の間で声にならないうめき声をあげた。彼には自分の目が信用ならなくなってきており、それ以上に自分の感情に信頼を寄せられなくなっていた。しかしそれならばこの怒りの感情も信用ならず、ならばどのような態度を取るべきかを悩み、それでも一度振り上げてしまった拳を収めるわけにはいかなかったのである。

シュレンゲは今まで書いた文字を掃いて消し、また新しく書付始めた。ガロムがそれを見る目は今まで以上に真剣そのもので、沈黙の緊張感はすさまじく、他の三人の口出しを許す雰囲気にはなかった。村男と神父はわずかに唾を呑みこんだ。殆ど唾は出なかったが、それでも喉は乾いていたのである。

シュレンゲが書き付けた文字をガロムはまじまじと見た。そこにはこう書かれていた。

お父様、確かにこれだけのことで私を信用して頂けるとは思っていません。しかしどうかその寛大な慈悲のお心で、私に潔癖の証明の機会を頂けませんか？

「ふん、え、機会だと？ よほど自信があるのだな、え、それもそうか、お前は私の娘かも知れんのだがな！ 潔癖の証明の機会とは！ え、お前がもしそんなぬめぬめした鱗を持たず、人語を話し、そのむかむかする夜色のコートを脱ぐのなら！ 言葉を解し文字を書けるとは確かに人間の特性のひとつだが、それだけでは説得的でないことはお前にもよく分かっているだろうな。それは神の非常に慈悲深いお心でお前たち夜の国の生き物にも特別の贈り物を与えてくれたのかも知れないのだからな。ふん、そうだ、その汚らわしいコートだ、そのせいで私はお前の顔をよく見ることも出来やしない！ え、二十年会っていなかったとはいえ、父親が娘の顔を見て気付けななどとは思わんだろうな、ん？」

ガロムはもはや柵に顔をくっつけるほどに接近してシュレンゲを見た。シュレンゲがフードを取ることを期待しているのである。ガロムには不思議な自信が芽生えていた。もし顔を見さえすれば、娘であるかどうか一目瞭然で納得できることだろう。それは自然の必然性に従って、当然親としての能力の一つであり、いくら最後に見たのが三つの時であっても取り違えるはずがないと思っていたのである。それほどにガロムの心は傾いていた。もはやそれに期待するどころか、そうであるだろうとすら思おうとするのを否定できなかったのである。だからガロムの心の中では、二つの互いに相反する期待が、しかし同程度の強度でもって彼を攻めたてていた。一つは当然、この者が死んだと思っていた、もう二度と彼の下に戻らないと確信さえしていた彼の愛しい娘であり、それが何らかの十分な理由によってここにいるのだという期待、これにかけるには博打に過ぎたが、否定するには最大限に心無くする必要があった。もう一つは最初の期待であり、この者が自分の血縁者などではなくて、ただの蛇の化け物であって夜の国の使者に相違なく、それが彼を騙そうとしているのだという期待であった。このことに期待するのは、もしそうであれば彼は、もはや何の遠慮容赦もなくこの化け物を排斥することが出来たからである。村人たち皆の前でこいつの命を零すことも出来たのだ。それは彼がずっと言い続けてきた復讐を完全な形で果たすことになり、そうでなくとも夜の王への言伝を解放の代わりに条件とすれば、今後のこの村の危険は限りなく少なくなったのである。ガロムは今こそ賢明な選択をしなければならなかった。そうして、二つ目の可能性が力を吹き込まれて現実になった暁には、彼は自分の最大限の慈悲と冷静さでもって、後者の選択を取ると心に決めていた。確かにこの選択は、彼自身の復讐心を満たすことはないかもしれないが、幾らかの留飲を下げることの助けになるだろうし、何よりそれが村に与える影響の大きさと、最終的にガロムに帰ってくる感謝の総量で言えば抜きん出ているのだ。

「え、どうだ、そのフードをちょっと取ってみろ、ん、お前が私に信用しろと言うのならな！ 人間はそんな風に顔を隠した者は誰であれ信用するものではないのだよ、え、分かるだろう、お前が元々は人間で、しかもこの私の娘だと言うのなら！」

シュレンゲは――今となっては、もしかしたらシュレンゲーレンと呼ぶべきなのかも知れないが――つまり女性かも知れないので――やはり悲しそうに俯いて、また何か書きつけた。フードを取らなかったことを咎めもしないでガロムはその文字を覗き込んだ。そこにはこうあった。

この肌を見てもお分かりでしょう、お父様、もう私にはあの頃の面影はありません。

「ええい、もうまどろっこしいのは我慢ならん。コレアット、紙とペンを持ってこい！ 今すぐだ、え！」

ガロムは突然神父に怒鳴りかかった。いきなりの怒号に神父は驚き、びくっと身体を反応させたが、返事もそこそこに階段を駆け上がって行った。松明を持った男の一人が慌てて追う。ガロムはそれを見送ると、再び娘かもしれない者へと向き直った。

「え、聞いたろうな？ 地面に石で書けるのなら、紙にペンでも書けるだろう、ん、当然今よりも効率的だ、そうだろう、え？ いちいち掃いて消してそんな短い文章しか書けないのでは会話にならんわ、え、直ぐに持って来させなかったのは失敗だった、ふん、コレアットめ、気の一つも利かせられんのか」

それが不条理な怒りであることはガロムも重々承知していた。それでも何かに対して声を張り上げたかったのである。そして今彼は、何に対して怒るべきなのか明快に知ることが出来なかった。冷静な判断力でなければ決断することは出来ないだろうが、今はまだ彼を静めてくれる何ものもなかったのである。

コレアットが紙とペンを持ってくると、ガロムはそれを神経質な目で値踏みしたが、結局は何も言わずにシュレンゲの方へ放って寄こした。神父の心中も穏やかではなかったが、黙って彼はさっきまでと同じ位置に引いて行った。その時には既に、シュレンゲは三枚の紙とペン、それにインク壺を拾っていた。インク壺だけはガロムも丁寧に柵の中に置いたのだが。シュレンゲは慣れた手つきでペンにインクを付けると、粗悪品の紙へさらさらと文字を書き連ねていった。そこには迷いの入り込む余地はないように見えた。いや、これはこれでおかしいぞ。ガロムは疑いの目を失わないように努めていた。もし、万が一こ奴がああ可愛いレーナなら、三つの時の子どもが字など書けるわけもない。事実ガロムの記憶が正しければ、彼はレーナに何度か文字を教えようとしたものの、彼の天使はアーベーツェーも均整の取れた形では書けなかったのである。それがどうだ、文字には揺らぎも見られない、どころか習慣的に文字を書き慣れているとさえ見ゆる、更には文章も格調高い感じを端々に纏わせていて、なかなかどうして詩人のような体裁を見せているのである。幼かったレーナが父の教えを何度も覚えていて自分で何度も反復し、二十年の努力の賜物としてこの美しさを得たのだ、という可能性は考えられなかった。それは全く可能性ですらなかった！ そんなことは全然あり得ることではなく、あり得ることではないのならば可能性ではないのである。しかし現実には、こうして文字を書いている、文章を作っている、一般的なものに則ってはいるが個性的な字体でさえある。どれをとっても付け焼刃のそれではなく、確かな月日の重なりを感じられるものであるのだ。

そうこう考えているうちに、シュレンゲは一枚目の紙をガロムの方へ差し出した。それは最初に行われた直接的な手渡しだった。ガロムはひったくるようにそれを受け取ると、揺らぐ松明の炎の下で一心にそれを読み始めた。

お父様、確かに私はもはやお父様と同じ人間であると言える生き物ではなくなってしまう。蛇のような鱗に覆われた皮膚、いつしか長くなって先も二股に割れた舌……二十年の夜の

国での暮らしは、私を人間ならざるものへ変えてしまったのです。その変化は徐々に起こりました。しかし赦して下さい、私はお父様やお母様、村にいた他の方々の姿形を覚えてはいましたが、私自身がそのようになっていかないことにある時点まで疑いを持たなかったのです。私が連れ去られた所には、何人かの人間がおりました。ひとの助けを必要とし、己だけで生きてゆけるはずもない幼い私を育ててくれたのもその中の一人の女性です。彼女の皮膚もぬめってびっしりの鱗に覆われていました。これは後から聞いたことですが、夜の国に来た人間はその時間とともにだんだんとそのような容姿へ変わっていくのだそうです。それが何を理由としてなのかは分かりません。しかし私は、私自身お父様やお母様のようになくなっていかないことを心の底から悲しみました。自分が親や他の方々と絶対的に違っていくことの絶望をお父様なら解釈して頂けると信じています。それは本当に私の心を焼く業火でした！　ゲヘナの火はこんな風に降り注ぐのですね。ああ、それでも、いっそ私がこのように感じる心さえ悪魔的に変えてしまわれたらどんなに良かったことでしょう！　お父様はきっとそんな風に思ったことはないでしょうね。夜の王は無慈悲です。何故なら私の肉体をこのような醜い姿に変えておきながら、精神の方をそれと似つかわしい下劣なものへ変えてはくれなかったのですから。もし精神を悪魔的に出来たなら、私は自分の姿に嘆く必要もないのです。自らに対し何かを思うのは高尚な精神の成せる技です。それは人間の精神の技です。だからそれは、神の成せる技でもあります。悪魔にはそのような精神は似つかわしくありません。生粋の夜の国の者どもにはそのような優れた精神を持つものはありませんでした。ただそれらに攫われて、もとは人間だったものたちだけがこのことの悲しみを味わわされたのです。それこそが夜の王の悪辣な望み、惨い支配者の仕打ちなのです。

びっしりと書き込まれた二枚の紙はここで終わっていた。ガロムがシュレンゲの方へ向くと、シュレンゲは今書き終わったばかりの三枚目をガロムに渡した。それから意味ありげに神父の方を見るので、神父の方では訝ったのだが、それに気付いたガロムに言われて新しい紙を取りに行った。ガロムはいくつかぶつくさ文句を並べたが、すぐさま三枚目の紙へ視線を移し、血眼になって文字を追い始めた。

だから、お父様、お父様が私のことを私だと信じられないのは当然です。私にだって、これが私のなれの果てだと信じたくはないのです。しかし私たちは、私たちが私たちの気に入るように好き勝手に望むことよりも、真実の方を信じるようにするべきだとは思いませんか。その真実がいくら信じられないように思われても、いくら悲しく惨いものでも、今まで見聞きしたことのないことでも、それを信じるのが人間には出来るのではないのでしょうか。これほどきめやかに、ものを考えることができ、またこれほど繊細に、多様な色や匂いや音の響きを感じる事が出来る人間の精神の、最も崇高で神秘的な事柄は、信じるという行為ではありませんか。これこそが神様に最初に与えられた人間の卓越した能力ではないのでしょうか。確かに人間は、その始まりの地においてこのことを最後まで成し遂げることはできませんでした。それゆえの罪を償わなければならないのは当然です。しかしだからこそ、私たちは私たちの信仰を取り戻す必要があるのではないのでしょうか。

三枚目はそこで終わっていた。ガロムは今や落ち着いた知性のあるまなざしでそれを読んでいた。その時コレアットが再び戻ってきて、ガロムに新たな紙を渡した。それをガロムはシュレンゲへ手渡すと、目を閉じて考え事を始めた。シュレンゲが次の紙を埋めるまで、その言葉を反芻しようというのである。その間にシュレンゲの書いたものはコレアットの手に渡った。コレアットはこれを静かに読み始めたが、教会の人間である彼にとって、この内容はすぐさま肯定することも否定することも難しいものだった。これはもしかすると、大聖堂の審議を必要とするかもしれない――少なくとも、彼一人でこの異形の者の雄弁な神解釈に白黒つけるわけにはいかなかった。

私たちの信仰――そうです、私たちの信仰です。信仰は決して与えられるものではなく、私たちの自由な行為としてその他幾百の選択肢から選びとるものでなければなりません。信じるという行為は、ただ今の状態の変化を望まないものでも、変化し続ける時間の速さに流されることでもないはず。ねえ、お父様、お父様にはきっとそうして頂けると思っているのです。そう私は信じ、私のこの醜い肉体と変わらぬ魂をかけて、ここへ戻って来たのです。私の信頼に無条件で応えて欲しいとは言いません。信頼を選択して欲しいのです。それだから私たちは、私たち同士が信頼し合うことの中に、神への信仰と同じものを見るのです。もはや信頼は信仰です。それは明示的な意識の中で、自覚的に選び取った一つの覚悟なのです。そしてこの信仰は、常に選択を強いられるという意味で、単なる惰性的な関係や感情とは全くの別物なのです。お父様、私たちの信頼する心の、何と誘惑に弱いことでしょう。しかし神様はここでも私たちを信頼して、それゆえに試しておられるのです。そして神様がその都度私たちを信じる必要があるように、私たちもまた、常に新たな瞬間に、他人をまたは神を信じることをしなければなりません。お父様、お父様には、朝も昼も夜も、一時間ごとにまた一秒ごとに、天体の運行が少しでも変化したその瞬間ごとに新たに、私を信じて下さいますか？

次の紙にはこう書かれていた。シュレンゲは鬼神の様相でペンを走らせていた。それは彼女の二十年間をかけた信頼ゆえのことであった。もちろん、それらのことは同程度に全て嘘かも知れなかった。それを確かにする客観的証拠は、もはやどこにも求められなかったのである。全ては心一つにかけられていた。

ガロムもまた、これを読み切ると、ぐう、と声を漏らした。彼の中ではしかしまだ二つの期待が存在し、彼をひたすらに揺らしていたのである。彼は選択を迫られていた。他でもないこの蛇の化け物に！ しかし本当にただの蛇の化け物であろうか。申告の通り、この姿は不運と悲壮ゆえの仮衣であり、本当の魂はレーナであって相違ないのではないか――彼はシュレンゲの語り口に乗せられていることを十分に分かっていたが、思考はどうしてもその筋を離れることはなかった。彼は迷路へ誘われていた。そして、その迷路のどこからでも掬いあげる蜘蛛の糸さえ垂らされていたのである。それに飛びつくのはむしろ簡単なことであった。しかしそれは、彼のレーナに対する信頼と呼べるものではなく、むしろ彼女のことばを裏切る形になってしまうのだ。なぜな

らそのような信頼の仕方は、状況に流され惰性によってしかも他人の言に惑わされた非本来的な信頼であり、それこそをまさに四枚目の意味するところだったからである。この蜘蛛の糸は誘惑であった。信じてしまいたい、という欲求に負けて信頼することは、もはやここでは意味を成さない行為であった。いやむしろ、行為とすら呼ばれる資格を失っていたのかもしれない。ガロムは選択しなければならなかった。信じるか信じないか。考えるべきはそれだけのことで、他の何もをも参照してはいけなかった。今、彼は彼であることを或る意味ではなくし、感情の呼び水に誘われることを完全に無いことにして、それでいて別の意味ではまさに彼であるところの彼によって、この選択を行わねばならなかった。信じるべきか信じないべきか。いやそのような対立ではない、信じるか信じないかだ。べきなどという言葉をつけ加えて、その判断に何か外的なものの侵入を許してはいけない。信じるか信じないか。彼は悩んだ。彼は決めかねていた。彼は、信じることへ彼自身を投げ入れることが出来た。と同時に、彼が信じることの二つの秘密を自覚した瞬間でもあった。それは二重に張り巡らされた論理であり、二つの信仰を必要としていた。すなわち彼は、信じることを信じる事が出来るかどうか問われていたのである。

コレアットと松明持ちの二人の男は、まつ毛一つ動かさず、ひたすら思考世界へ沈みゆくガロムをはらはらした気持ちで見つめていた。コレアットは四枚目に書かれたことを読むことが出来なかった。それはガロムが握りしめていたのである。

シュレンゲはもはや全てを語りきったようだった。彼女はペンと余りの紙をそっと柵の外へ置いた。インク壺はほとんど空っぽになっていた。彼女は確かにまだフードをかぶっていたが、その中から見上げる視線は真摯そのものだった――これを純粹で真摯な眼差しと言わないで、他の誰の目がそれであっただろうか。神に相對した清い乙女の魂ならば、この視線を向けることが確かに出来るだろう――そう全てのものに思わせるような、最大限の力の籠った光だったのである。

そう、そこにはまさに彼女の魂の全てがかけられていた。これが彼女の全てであった。彼女は自らの心を信じることへ投げ入れていたし、それはいついつの瞬間にもそうであった。彼女の信仰は何度揺るがされたことか！ 曰く、常人のそれなど比較になりようはずもない。誰のどんな体験であれ、彼女ほどの危機に晒されたものはいなかっただろう。彼女を夜の国で育てた女は、字の書き方や文章を教えたが、それも五年も昔に完全な夜の国の住人と変わりはて、もはや彼女に対する人間らしい感情の一つも失ってしまったのである。だからこそ彼女は、彼女も必然そのようになることを確信していた。それは避けられぬ定めであった。運命を嘆くことは簡単だったが、彼女はしかし終ぞたった一人で彼女の信仰を見つけたのだ。誰の助けも借りないで――いや、或る意味では彼女は一人ではありえなかった。彼女をこの無謀な信頼へ挑ませたのは、記憶の奥底でまだ消えることもない父と母の、ガロムとミエナの微笑であったから。それがなければ信じるということなど不可能であっただろう。彼女は確かにたった独りで唯一者の下へ立ったのだが、彼女をそうさせたのは彼女自身のみを原因としてではなかった。そうしてこれこそが、信じることの第三の秘密である。ガロムはまだその秘密に気付いていなかった。それで彼は、孤独な戦いを強いられていたのである。しかしこの孤独な闘いは、このことにとっての絶対の必要条件でもあった。だから彼女はもう何も語る言葉を持たなかった。彼女はとうの昔に信じていた、そし

て今もまた信じたのだ。後はそれを永遠に繰り返すだけ。

信仰は行為だった。そして信仰は、常に今の自己との関係の中での行為だった。しかしそれは、自己の中で完結しているように見えながらも、決して自己のみでは不可能な行いでもあるのだ。暴かれたガロムの不可能性もここにあった。そう、彼は今日を睨み、見上げる視線を受け止めていなかったのだ。それを受け取ることは、誘惑されることと同義ではある。

だからここでは最も困難なことが試されていた。ガロムは誘惑に打ち勝ち、しかしそれから逃げるという仕方ではいけなかった。むしろそれを誘惑ではない別のものとして受け取る必要があったのである。このとき、ことこの場合には、信じることの第三の秘密において、それを可能にする者と不可能にする者はまったく同一であった、というよりもまさに、まったく同一であることを信じなければならなかったのである。

それは全く無謀な試練だった。彼女の出会った危機と比べても、遜色ないどころかもしかしたら矛盾的な点では超えていたかもしれない。彼女の場合、信じることを誘惑するものはいなかった。単に信じる事柄があっただけである。

ガロムは唸った。そうしてとうとう、再び目を開けたのである。その視界に飛び込んで線分を結んだのはもちろんレーナのそれであった。レーナ、そうそれはレーナだった。彼はこの瞬間、彼の感じていた全ての重圧から一気に解放されるのを感じた。もしかするとこの満ち足りた感じは、神の下へ召される時のそれと同じなのかも知れなかった。すると人間は、魂と肉体を結合されたそのまま、地上にいながら直接神と対峙することが出来るのだ。何という慈悲だろう！ 彼は感謝した。彼の頬には今や柔和な笑みが浮かんでいた。彼はしゃがみこんだ。

「シュレンゲ、いやもはやそのような恣意的な仮初の名前でお前を呼ぶのはやめにしよう。お前の語ってくれたことは、確かに私の理解するところとなった。信じるということが如何に素晴らしい人間の能力であるか私にはもうこれ以上ないほどよく分かったからね。神は我々にその能力を与えて下さったのだが、それを行うか行わないかは自由にさせて下さっているのだ。しかしこの自由は、それが一つの権利であると同時に、本当は期待されていることだったのだね。今私は真にそうと信じる事が出来るようになった。お前がそのような形をしながらも、これだけ神の恩寵の深淵に触れていることは、一つの慈悲の形でもあるが、何よりお前の魂の卓越さを証明してくれることである。それだから私は、この四枚の純粋な信仰に応える形で、一つの宣誓をしようと思う。私たちは誰もが堅信礼のときに、それまでの親から与えられたそれではなくて、自らの口で信仰を我が物とするのだが、それを私はここでもう一度繰り返し、お前への、そして神への新しくより純粋な信仰とすることにしよう。レーナ、よく私のもとへ帰って来てくれた。私たちは手を取るべきではないかね？ 同じものを食べ、同じような服を着て、互いに互いの信仰心を確かなものへと高めあい、苦難を共にして祈りをささげるべきではないだろうか。レーナ、私の仕打ちを許しておくれ。そして二十年前、迂闊にも夜の国の過剰な侵略を防げなかった私を許しておくれ」

レーナは柵にすがりついて口をぱくぱくとさせた。柵を挟んで反対側にはガロムが同じ姿勢で向かい合っていた。彼女の舌はもう喋るための能力を果たすことは出来なくなっており、その喉も人間の音域からは外れてしまっていたのだが、それでもその姿はガロムに無上の感銘を与えた。

「許してくれるのだね、ああ、レーナ、私の可愛い娘。お前に再び出会えることを半分諦めてはしたが、それでも私は心のどこかでそれを願っていたのだよ。やあ、これは何という奇跡じゃないか。コレアット神父、ああ忠実な神の僕、奇跡によって神への信仰をより高い次元へ持っていくことは否定されることであるどころかむしろ奨励されることだろうね？ 更には人間が自分の過ちを認めて、互いに許し合うことは最高度の行いだらうね？ 私はお前にも、今日の行いを詫びよう。何度も怒鳴ってすまなかった。そしてお前たち、私のために灯りを絶やさないでいてくれて本当に私は感謝している。ありがとう、本当にお前たちのおかげで、私はこうして信じる事が出来るようになったのだ。今までの冷たい仕打ちも許してくれるだろうね。そして復讐に燃えた私の過ちを、お前たちへの悪意ある贈り物としてしまったことも許して欲しいのだ。今、私の内には、欠片ほどの復讐心もない。だからお前たち三人にも、私と同じようにこの者を信じて欲しいのだ。それに躊躇いがあるのなら、この者に対する信仰ではなくて、この者を信ずる私を信じてみて欲しいのだ。私はこの者を、神様の贈り物であると受け取ろう。我々は無上の贈り物を貰ったのだ。しかしその贈り物は、今新たに与えられたものではなくて、本来は生まれたそのとき既に我々の手の内に捕まえさせられていたのだが、それを我々は今再び発見することに成功したのだ。コレアット神父、この牢の鍵を持ってきておくれ。私はこの者を私の家へ招かねばならん。それがこの者の真なる住处であるのだからな」

コレアットは圧倒されて、もう何の反論もする気が起こらなかった。ガロムが喋るときに威圧的な音を含まないのは彼が冷静にいることの証拠だったし、確かに感銘も受けたのである。それで再三彼は男のうち一人を伴って、この柵に括りつけられた重たい鉄製の錠前の鍵を取りに地下室を出た。信じられないことが起きていた。ガロムは満ち足りた表情をしていたが、他の三人は思考停止に陥っていたのだ。それだから彼らは、この一連の流れとガロムに従うことしか出来なかったのである。

二人が鍵を持って地下室に戻ると、ガロムは大急ぎでそれを受け取って、恭しく鍵を開けてレーナの手を取って立ちあがらせ、柵から一緒に出してやった。もうガロムは、その蛇の鱗もぬめぬめした感触も真黒いローブも気に障らなくなっていた。レーナは憔悴しきっていた。というのも、あれだけの量の文章を一気に書き上げたということもあるが、殆ど食事も与えられていなかったのである。

ガロムとレーナ、そして神父と二人の男は階段を上って地上へと出た。教会の中は月明かりが指していた。しんと静まり返った教会内は、足を進めるたびにきしきしと音を立てた。レーナの歩いた後は濡れていたが、誰もそのことについて言いたてたりはしなかった。とはいえ本当は、松明係の二人の男にはそれぞれ言いたいこともあったのである。彼らは何より夜の国の物を憎んでいたし、それだからこそガロムに協力的だったのだ。しかしその先導であったガロム自身が改心してしまった今、そのことに反論する気にはなれなかった。彼らは実のところ、この生き物の処刑の一番槍を任される可能性を望んでいたのである。そしたら彼らはこの村の英雄的な立ち位置を占めただろう。その第一の座にはガロムが座るかもしれないが、彼だって二人を無視することは出来なかったはずだったのである。しかしそのことも今や潰えた。今やもう、ガロムだけが英雄的だった。彼らはそれに付いていく従者に過ぎなかった。神父もまた、それを保証する以上の

役割をすることは出来なかったのである。

彼らはそうして大通りを抜け、グリーステールの家まで歩いて行った。前後を松明に挟まれて、レーナは僅かに顔を下に向けていた。彼女の二股の舌は簡単に口の中へ入れておけないようだった。相変わらずちろちろ揺れていたが、ガロムはそれについて何も言わなかった。どころかレーナの肩に手をかけていたのである。事情を知らないものが見れば、ガロムがとうとう狂気に塗れてしまったと思ったに違いない。事情を知る他の三人さえもがまだ信じられずにいた。彼らは端的に信じられなかったのである。彼らはこの生き物を信じたのではなかったし、ガロムを信じたのでも決してなかった。彼らは判断を放棄していたのである。それゆえに彼らはこの行進の脇役に過ぎなかった。この行進にとっては、ただ前と後ろを照らす灯りと、神の家の服だけが重要だったのである。この行進の主役は無論ガロムとレーナだった。すなわち、禿げあがった頭のでぶの親父と、漆黒のローブで身を隠した蛇女であった。この二十年ぶりの親子の散歩は帰りで、従者付きの豪華な道行は、主役の二人にとっては無情の喜びであったが、他の三人はそれぞれ別様の思いであった。その一行も大きくはない村をもう端まで来て、グリーステール家の門の前まで辿り着いていた。

ガロムは門を開けさせると、三人に向き直ってこう言った。

「やあ、私の親愛なる友人たちよ！ 今日のことを私はずっと覚えていようじゃないか。これは私たちの友情であるからね。そこには無論、私の娘も加えておくれよ」

ガロムは満面の笑みだった。今や全てを振り切った彼には何一つ怖いものがないように思えた。これを打ち壊す恐怖などあるはずもなく、もしそれを感じたとしたらそれは彼の信仰心が揺るいだという彼自身の問題なのであるから。それで彼は、自分の信仰心についてこれ以上ないほどの信用を寄せていた。その信頼は蛇女の肩に優しく添えられた手に、そして神父と松明係の二人に向けた笑顔に表わされていた。ガロムは神父の方へ蛇女ごと向き直った。

「コレアット、ああ、私の無二の親友であり教会の崇高なる体現者よ、神父であるお前はもちろんそのようにしてくれるだろうが、私がこの者を閉じ込める仮の牢に教会の地下室を使わせて貰ったことを許してくれるだろうね。なぜならその無上の協力によって、今日この奇跡は起きたのだから。教会こそが奇跡の顕現に最も相応しい場所であるのは明らかだ――とはいえ伝えられるところによると、教会以外の場所でのそれの方が多いようだが、それも神の思し召しだろう。教会だけが神のものではないのだからね。なかなか教会に行けない者にも同様の愛を下さるのだから。しかし教会はと言えば、実のところ我々が気付いていないだけで、そこでは常に奇跡が行われているのだよ。神父は当然分かりきっていることで、これをお前に向かって言うことは必要もないことだと思うが、今の私の喜びに免じて聞いておくれ。そもそも教会の存在こそが神の奇跡なのだ。そこでいつでも神の言葉を聞けることは、これ以上ないほどの神の愛であり、その言葉を我々に教えてくれる神父は、何よりも奇跡の体現者なのだ。だからお前には、神の愛が備わっているのだ。私はそれを微塵も疑わずに、心の底から信じる事が出来る。や、何と喜ばしいことだろう。ありがとう、ありがとう」

コレアットは何か返そうかと思ったが、言葉に詰まって出来たことは頷くことだけだった。その原因は感動でも自惚れでもなかったが、今ガロムに言われたことをどう受け止めていいのか辟易

していることは確かだった。今までの行いがあのようにであったこの糞親父が、今になって一体どうしてこんなことを言うてしまうのだ？—それに値する出来事は確かにあったとは言え、その全体を彼は信じられなかったのだ。しかし、行いを悔いて教会と神、そして神父を崇めるということは善き行いである。これも確かなことだった。そしてこの点で、彼は反論する必要もなかったのである。

ガロムは次に二人の村男の方を向いた。彼らの表情は曇っていた—それは彼らがまだ自分の態度を決められないことに起因していたが—ガロムはそんなものちっとも見えていないようだった。ガロムはそれぞれの肩を叩いた。そしてこう言った。

「二人とも、約束した通りだ。英雄的機会に名を挙げてくれたお前たちこそ英雄であり、神の御使いだ。私はただの馬鹿な父親に過ぎんよ。そのことが良く分かった。しかしこれに気付けたことは、何よりの幸福だと思っている。今日まで私の復讐に付き合わせて悪かった。私はお前たちの復讐を煽り、ただ自分のために利用していただけだったのだ。そのことの責めは甘んじて受けよう。さあ、もう帰っておくれ。神父を送ってくれるだろうね。ありがとう、何か困ったことがあったら一番に私に相談しておくれよ。え、何だろうと最高の協力を約束しよう」

ガロムはそうして三人を追い払ってしまった。三人は実のところ不満もあったのだが、目を合わせると来た道に戻っていった。

時刻はもはや零時を回っていた。玄関のチャイムを鳴らすと、カロケットが迎えた。カロケットは主人一人が帰ってくるものだと思っていたので、主人が仲良さげに連れてきた問題の生き物に驚いて迎いの挨拶も忘れてしまった。ガロムは目を白黒させている自分の召使いに愛想よく告げた。

「言いたいことはあるだろうが、今は止めておくれ。この件に関しては私の好きなようにさせて欲しい。いや、もしお前がどうしてもと言うのなら、残念だがお前には自分の家へ帰って貰うしかない。だがその場合でも給金は払うよ、もちろん、今までとまったく同じとはいかないがね。だからお願いなんだが、この者の部屋を用意してくれ。二階のあの部屋だ、ほら、お前も良く覚えているだろう、二十年前にはレーナのものだった場所だよ。なにしろこの者は、今はこんな姿をしているが、私の娘レーナに相違ないのだからね。さ、頼むよ」

「いえ私めは、そんな、この家にずっとお仕えさせて頂くつもりでして、ご主人様のお言葉に従うだけです、はい」

カロケットはいつもより卑屈にそう応えた。それから女中を連れて二階の部屋を用意しに行った。女中たちは何も言わずに従っていった。彼女たちは年齢も様々だが、執事と同じくこの家に仕えることなしに暮らしていけはしなかったのである。

部屋の用意が終わると、カロケットは恭しく主人とその娘を導き迎えた。部屋には豪華な絨毯とベッドがあり、ベッドの端には捨てずにいたぬいぐるみいくつか置いてあった。レーナはそれを見つけて嬉しそうに近づいた。そしてそのうちの一つを取って、頬ずりをした。蛇の皮に覆われた女に頬を寄せられて、その兎のぬいぐるみは粘性のある液体で濡れた。蛇女はその長い舌で器用に兎の赤い目を舐めた。執事と女中たちは恐怖した。その蛇女が今にも手に抱えた獲物を呑みこんでしまうかと思われたのである。それを想像するのは余りに簡単だった。

そんな中、それを始終満足げな微笑みで見つめていたのはガロムである。言う必要もないことだが、ガロムは頬も落ちそうなほどの喜びようだった。ぬいぐるみはずっと置いてあったものなのだが、ガロムはそれを女中たちのさり気ない心遣いだと解した。彼は女中を下げさせるとき、それぞれの手を握って自分の手の中のものをつまませた。女中たちは狼狽しており、ぱっと頭を下げるとそそくさと女中部屋に帰ってしまった。カロケットも同じように下がった。部屋には親子二人だけになった。

「な、レーナ、何か欲しいものやお願いがあったら、何でも私に言うんだよ。え、お前は私の娘なのだからな。遠慮などせず、ちゃんと二十年分甘えをおくれよ、え、頼んだよ。さ、寝る前のキスをしておくれ。お前がそのぬいぐるみにしたようにな」

それを聞いてレーナはガロムの傍に寄ると、二股の舌を濡らしてガロムの頬をぺろっと舐めた。それから薄くて柔らかくもない唇で舐めたところに口付けた。ガロムはその脂ぎった口から喜びの音を漏らした。召使いたちが逃げるように部屋を出たのは正解だった。そうでなければ、このいかにも悪魔的な絵面を見せられることになっただろう。成程これは悪魔的だった。異形のもの人間が仲睦まじくしているのだから。しかも片方は蛇女で、その目の前にいるのはまるまる太った男であり、すぐにでも蛇女がその口を大きく開けてぱくっとその肉塊を呑みこんでしまうのではないか――兎を呑みこむのを想像するのが簡単なのと同じくらい、このことを思い浮かべるのも簡単だった。しかし彼ら自身は、少なくとも脂ぎった父親の方は、これこそ天に祝福された最大限の奇跡であると考えていた。彼の見るところでは、この真夜中であろうと彼らの周りは光で満ちていて、可愛らしい小さな天使が彼らのことを祝福していたのだ。ガロムはお返しにぬめった鱗に唇を押しつけた。その接吻は長く続いた。彼が自分の唇を離れたとき、その間をだらりと粘っこい液体が伝っていた。ガロムはそれを拭きもせず、フードの上から頭を撫でると、おやすみ、とその部屋を後にした。部屋には蛇女一匹だけになった。女は、地下室にいたときと同じように、先ほどガロムの頬を舐めた二股の長い舌をゆらゆらと遊ばせた。それからランプの灯を消したが、しばらくそのまま遊んでいた。細長い眼は相変わらず光もないのに怪しく輝いていた。

夜の使者（2）

次の日からグリーステールの家ではそれまでと全く違う生活が始まった。ガロムはそれを、二十年前に戻ったのだと宣言していたが、使用人たちの心境は想像するに難くなかった。彼らは蛇女の世話も命じられたのである。そのため、すぐに何人かは辞めていった。最初に蛇女を風呂に入れた者は、それが水の中にずっと潜って底から見上げてくるので余りの恐ろしさに悲鳴を上げてそのまま荷物を纏めて出て行ってしまった。日が経つにつれ使用人の数は減っており、カロレットは頭を悩ませていた。しかしガロムはちっとも気にしていないようだった。彼は、カロレットに告げた通り、辞めた者たちにも今までの給金の半分を送ったのである。ガロムは今、本当に良心的な支配者だった。良心的過ぎたほどである。彼にはなんの功名心もないように見え、名誉を求める心も失ったようだった。特産の油の世話はこの時期が肝要で、例年はこの時期怪我だろうと病気だろうと誰一人として休むことは許されなかったが、今年は休むのを許容した挙句、見舞いの品まで届ける始末だった。村人たちは気味悪がって、むしろ今まで以上に仕事に精を出した。それは結果的に彼を満足させたが、村人たちはそれよりも彼に積極的に関わることを避けた。昼間の仕事の間はあの蛇女は出て来ず、それは村人たちの心を乱さずに済んだことだったが、ガロムはあの生き物が起きだす夕方になるとそそくさと家へ帰ってしまっていた。村人たちのどんな噂や当て擦りも気にならないようだった。蛇女は、相変わらず昼の間は眠り、夜が近付くと起きだしていたのだ。そうしてガロムは自分が眠るまで蛇女と過ごすことを何よりも大切にしていたのである。グリーステールの家では前にも増して夜中に明りを灯しているようになった。それまでもその豪邸では贅沢に油を使っていたが、今はその比ではなかった。蛇女は暗い方を好んだが、ガロムや使用人たちが彼女の世話をするために灯りは必要だったのである。

レーナは人間の食べ物を嫌がった。どんな上等なパンも野菜を使ったスープも彼女の腹を満たさなかった。最初のうち、彼女はそれでも出された沢山の贅沢な御馳走を（それらは御馳走だった！ きっとこの家の者でなければ他にこの村でそれとありつける家族はいなかっただろう。よほどの祝祭でもない限り！）味わっていたが、一週間もすると肉と魚にしか興味を示さなくなった。料理人は、どんなに凝った味付けをしても蛇女が生肉以上にはそれを好まず、彼女のお気に召さないものを出すとガロムに嫌味を言われるので、その一週間後にはほかの館へ勤務地を変えてしまった。こうして食事の世話もカロレットの仕事となった。と言っても、血抜きした生の肉を塊のまま蛇女へ差し出し、ガロムにはパンとワインを出せばそれで良かったのだが。蛇女が憚らずにその肉塊を丸呑みするようになって、使用人の数は更に減った。この光景に耐えられるには、命の保証が余りにも足りなかったのである。ガロムはそんな娘の様子をまるで変わらず愛しさを込めた視線で眺めていた。彼はそれだけで腹を満たしているようなものだった。満足は幸福の下に訪れる。最上の幸福を受け取っているガロムは、絶えず満足を覚えていたのである。しかし食事の量は減ったはずなのに、ガロムの体重はむしろ増加の一途をたどっていた。二週間が過ぎたころにはこの大事な時期だと言うのに外で畑の監督を殆どしなくなっていたのである。その仕事もまたカロレットの負うところとなった。村人たちはこれを嫌がったが、ガロムの旦那のこと

をこの執事に聞くことはより大きな恐怖であった。そのためガロムは誰からも何一つ言われることなく、蛇女との共生に成功したのである。ガロムは今や、丸々太った一つの肉団子だった。その肉団子に手足がちょこんと付けられていて、階段の上り下りにも息を切らすほどだったが、よくその右手はレーナの皮膚を撫でていた。今や彼にはこのぬめぬめした感触も一つの喜びのしりしりだったのである。彼はいつしか蛇女と同じ部屋で過ごすようになった。それは悪い冗談にしか見えなかったし、尚更親子の交わりには見えなかった。良くてそれは、蛇女の娼婦を愛でて囲っているようにしか見えなかった。最初のころ、カロケットは主人にいくつかの箴言をしていたが、もうそれも影を潜めて消えてしまった。カロケットは朝昼晩の食事を彼らの部屋に無言で持って行き、すぐに退いて畑の監督に向かっていった。ガロムは気付いていなかったが、実は数少なくなった使用人は、屋敷の中ではなく離れで生活していたのである。それだから屋敷の中には、殆どこの二人しかいることはなかった。

ガロムがうたたねをしたりすると、蛇女はよく屋敷の中を徘徊した。彼女はこの変化に気付いており、しかもそれを好意的に受け取ったようだった。欲する肉の量は日に日に増えていた。今や一回の食事には、豚一匹ほどの肉塊が出されていたほどである。そのうち豚でも満足しなくなるかもしれない――カロケットの心労は増えるばかりだった。それなのに主人はぶよぶよと笑っているのだ！ これは異常だった。もちろん初めから分かり切っていたことだが、カロケットはもうこの事態に耐えられなくなっていた。もう彼まで狂ってしまいそうだったのだ。

あれから三週間が過ぎようという或る日、カロケットは明日からの大規模な収穫を村人たちに命じる前に、彼らを集めてとうとう感じるどころを打ち明けた。その内容はこうであった。

「これから三日は忙しい収穫の日々だが、その前に私は、私めの、そして私たちの主人であったガロムについて君たちに話をしておきたい。いや、これはお願いである。どうか君たちの意見を聞きたいのだ。君たちも知っての通り、私めの主人は狂ってしまった。そうだ、狂ってしまわれたのだ。あれから三週間、三週間だ！ 私は変わらず主人に仕えてきた。どんな命令にも従ったし、こうして主人の代わりにこの村の血液である油の生産にも支障がないようにしてきた。しかし主人は変わってしまった！ 君たちもそう感じているだろう。あれはもう狂っている、狂気の沙汰としか思えない！ あれは今、昼だろうと夜だろうと、あのおぞましい生き物と仲睦まじく過ごしているのだ。しかもあのおぞましい生き物は、あろうことか日に豚三匹を要求するのだ、一回の食事で豚一匹を丸呑みするのだぞ！ それをあれは自分の娘だと言って許している。それどころかあれは、あの生き物があれの娘であるということを私にまで信じろと言うのだ！ お前にはまだ信じることが分かっていないのだ、その秘密を私はお前に教えてやっているのだと何度私の箴言を退けたことか。そのうちあれはあの生き物に喰われるぞ、そうしたらあの生き物は、今閉じ込められている屋敷から出て我々を襲うに違いない。あれの目を覚まさせる良い方法はないだろうか。考えてみて欲しい。これは我々の問題なのだ！」

これを聞いて村人の間から進み出たのは神父であった。神父はカロケットの隣まで来ると、村人たちの方へ向き直った。

「そうだ、偉そうにも私はあれに演説されたのだが、あれはあの生き物に対するあれの態度を、何ということであろうか、崇高なる神への信仰と同等に見做しているのだ！ それはつまりあの

生き物を神と同列に扱うということであり、神への愛に背くばかりかそれを貶めてさえいるのだ。あんなものは信仰ではない。あんなものは妄信だ。ただ騙されているのではなく、積極的に騙されようとして騙されたのだ。そのうちあれは夜の国の暗い教えに染まり、我が物顔で我々にこう言いだすに違いない。見よこの者こそが神だ、神は蛇でありまた女であるのだ、と。しかし我々は絶対にそれを信じることはないし、そのようなものを許すことも出来ない。許しは神の慈悲の象徴であり、我々もそれをすべきことのひとつであるが、侵略する異教の者をどう許せと言うのか。我々がたとえそのようなものを許さなくても、その由縁は神こそを貶められたからなのであるから、我々が神はその理由を十分に勘嚼し、絶対に許して下さる。信じるということについてあの蛇女が語ったことやあれが言い換えたことは真実である。しかし信じることに一番重要なのは、信じる内容であり対象である。そのような具体的な事柄を排してただ形式だけを述べることは間違いを引き起こす。それがあの姿だ！ 私はここに宣言する。あれは信じるべきでないものを信じている。騙されるのではなく信じている。我々の信仰を愚弄している。我々真の信仰を持つ者、日々働き祈りと供物を捧げる者、金銭や物品ではなく汗と態度で奉仕する者、我々はあれの目を覚まさしてやらなければならない、そしてあの生き物を二度と我々に害をなせないようにしてやらなくてはならない！ そもそも父なる神以外の者に、神の被造物であるところの者に、同じ被造物が支配されるということなどあってはならないのだ。我らの真の主君は神である。それをあの者どもに思い知らせてやろうではないか。あの蛇女を許してはならない！」

これは非常に熱の入った演説だった。カロケットはこの演説を終えたコレアットの手を思わず取って握りしめた。村人たちの間からは、大きな拍手と賛同の声が巻き上がった。そうだ！ いい機会だ、ガロムのやつの目を覚まさして、今までの行いを懺悔させるべきだ！ そうだ懺悔だ！

あの蛇女を夜の国に追い返せ！ いや殺せ！ 殺すんだ！ 決して許すな！

カロケットは大きく手を広げてその同意を受け取った。

「そうだ！ 我々の団結を見せるときだ！ 今からでもガロムのところへ行こう！ 皆でガロムを断罪するのだ！」

これに全ての村人が怒号で応えた。鬨の声だった。彼らの不安は頂点に達していたのだ。これに二人の演説が合致し、今その感情は大きな奔流となって彼らを熱気立たせていた。村人たちはめいめいに武器を取り、行進を始めた。先頭は執事と神父であり、そのすぐ後ろにはあの日松明係を務めた二人の男が任されていた。カロケットは途中で油の貯蔵庫を開け、何十本もの松明を作った。だからこの行進は火の行進であった。この火を灯した油は彼らのものであり、誠実な働きの証であり、また神の裁きの象徴だった。彼らは焼き打ちも厭わない面構えだった。

行進がグリーステール家まで辿り着くと、カロケットは門の鍵を開けた。彼らは燃え盛る松明を掲げ、足音と喚声で罪深き者の登場を促した。その異常な騒ぎに驚いて、ガロムはバルコニーへ姿を現した。下を見ると、村中の者たちがそこでガロムに向かって紅顔を向けていた。ガロムはカロケットとコレアットに救いを求める視線をやった。少なくともカロケットは彼の執事であるのだから、彼を助けて然るべきなのである。しかしカロケットはそれに頷いたりもせず、むしろこう宣言した。

「ガロム・グリーステール。お前は神に逆らった。我々はもう我慢ならない！ 我々は決して異

教徒を許さない、夜の国の化け物なら尚更だ。あの蛇女を出せ！　そうしてお前が神の下へ跪き、懺悔の後に赦しを請うて再び回心するのなら、我々はお前だけは神の名の下に許す準備がある。しかしあの忌々しい蛇女は駄目だ。あの化け物を我々に引き渡して貰いたい！」

そうだ！　という声は三里に響くほどであった。ガロムは狼狽し、言葉を返すことも出来なかった。騒ぎを聞きつけた他の使用人たちも玄関から外へ出た。彼らは決して最初からその意図のもとに外へ出たのではなかったが、様子を見て内情を察知するとカロケットの傍へ寄ってガロムを見上げて詰る側へ付いた。

「ガロムよ、お前はこの三週間の余り、日曜礼拝にも来ることなく、夜の国の者を囲い神の愛を侮辱した。これは許されざる行為である。しかし神は慈悲深い。お前の墮落の原因を除けば、お前が再び敬虔な信者になることを信じておられる。墮落の原因は明らかだ！　お前はその者に、夜の王を説得させる役目を負わせるなどという甘言を我々に聞かせた。しかしお前はそうさせるどころか、その者に好き勝手をさせている。お前の詐欺は言い訳の仕様もないことで、そのために教会と神の権威を使ったことは死んでも許されない大罪である。しかし我々はお前を許し、お前の弱さを許すだろう。夜の国の使者を出せ！　そいつはお前を誑かすばかりか、我々をもそのうち夜の国へ誘うだろう。その者は狡猾で、まるで知恵のあるかのように振る舞うことさえ出来るのだが、それも夜の王の本格的な侵略の手口に過ぎない。それを看過したのは我々の失態だが、それを容認したのはお前の罪だ。さああの化け物を出せ！」

化け物を出せ！　断罪者たちは呼応した。ガロムは驚きも解けて、今は湧きあがる怒りを覚えていた。そこにシュレンゲが出てきた。レーナはフードを被ったままだった。村人たちの怒声は更に大きくなった。彼らは今にも屋敷に火を付けんという程であった。蛇女は騒ぐ村人たちに一瞥をくれた。表情は見えなかった。それから何かを紙に書きつけ、ガロムに渡した。

「お前たち、静まれ、静まらんか！　え、何という騒ぎだ。ん、しかも私に向かって告発するなどよくもそんなことを！　え、どうしてお前たちはそうやって信じることをしないのだ、お前たちこそ神の反逆者だ！　ふん、信じることを信じられない愚かな奴らめ！　夜の国の侵略はこれほどまでに進んでいたのか、光があるのに自ら盲目を選ぶとはな！　慈悲と言いながら親から娘を取り上げようとしておる。聞け！　え、優しい優しいレーナはこう言っている。お前たちの狭量には飽き飽きだ、え！『お父様、私がお父様と一緒に暮らせればそれで幸せです。ですが、それでお父様が村の皆さまからの信用を失うと言うのなら、私はこの家を去りましょう』ということだ、え、レーナ！　行かないでおくれ、お前はここにいていいのだよ、私の娘なのだからな！　え、なに、『しかしお願いがあります。どうかお父様、村の皆様の一つお許しを頂いて欲しいのです』え、勿論だとも、そうしないはずがあるまいよ。『どうかお母様のお墓だけは、一度行ってお祈りを捧げたいのです。そうしたら私はもと来た道を辿り、夜の国へ帰りましょう』何と言う優しい子だ！　聞いたか、この子は自らの危機に瀕して父と母の心配をするのだぞ！　お前らとは大違いだ、え、お前らが私のことをとやかく言うのは構わない。しかし私の娘、二十年もの間夜の国に囚われて今やっと帰って来た娘、この子のことを悪く言うのは我慢ならん！

え、レーナは私にこう言ってくれたぞ。『お父様、お父様だけが私のことを信じて下さいました。お父様だけが本当に信じることの出来る人なのです。お父様こそが神の前に同じ資格で

立ち、対話することが出来るのです。夜の王のことなどなんと矮小なことでしょう！』え、そうだと、夜の国で育った娘がこのような深い洞察を得て、人間の国で暮らしているお前らが目先の恐怖に囚われている。見よ、ん、レーナの何が怖いというのだ、見た目か、え？ 信仰は何処へ行った、これこそが信仰だ、私だけが信仰可能なのだ！」

「それが傲慢だと言うのだ！ そしてそんなものは信仰ではない。もしそれが信仰なら、どんな異教徒だって信仰可能だ。夜の国の者どもだって信仰することが可能だと言わねばならなくなる。しかし信仰は神との関係でのみ言われうるのだ、信仰は常に神を対象とするのだ。もしお前が夜の国の使者に対して信仰すると言うのなら、それはそのものを主なる神と同列に考えているということなのだ。これ以上の不信心があるものか！」

神父のこの糾弾に村人たちは声を合わせた。彼らは今にも屋敷に火を付けてしまいそうだった。距離はそれ程緊迫していた。

レーナはじっとそれを見降ろしていた。彼女はこの三週間ガロムに向かっても言葉を話すことはなかったし、その理由もその身体的変化の一つの徴表であると説明していたが、もし今自分の言葉で喋ることが出来たなら、或いは怒りの声を上げたかもしれぬ。ガロムは隣でまるで無表情に冷たく構えているのをその怒りの逆の現れだと受け取った。嗚呼、優しい子、可哀相な娘！ しかし一体どうすればいいのか。この騒ぎが簡単に収まるはずもないことは彼にも分かっていた。土台それは無理であった。ならばどうすべきなのだろうか。レーナの申し出に従って、彼女を再び夜の国へ返すのか。自分の娘を？

ガロムはほとんど困ってレーナを更に窺った。何か分かるかも知れないと思ったのだ。彼は怒っていたが、思考能力を失わされる程ではなかった。ガロムは確かにこの二十年とは別の人間になっていたのである。確かにレーナの提案は妥当だった。それは初め、ガロム自身がそうすべきだと主張していたことなのである！ 彼女の願いを一つ叶えて、後は最初の予定通りに済ませれば、納得しない者のいるはずもない。しかし何と言う健気な願いだろう！ 最後に母親の墓を拝もうと言うのだ。こんな風に自分を生んだ者に対して敬意を持つものを、その見た目の異常さで排斥することは、今の彼にとっては耐えられないことだった。しかしそうするしかない、何度考えてもそれ以外の結論を導くことは出来なかったのである。

ガロムは手を大きく広げ、村人たちを押さえつけるような身振りをした。それからとうとうこう切り出した。

「え、お前たち、お前たちの言い分は分かった。しかしどうか私たちの言うことも聞いておくれ。もしお前たちがそれでいいと言うのなら、私はレーナの提案を受け入れても良い。皆も知っての通り、その提案ははじめ私のものだったのだからな。え、どうだ、これならば何の問題もなからう。母親の墓前で祈らせてやることくらい、お前たちの慈悲でも許せないだろうか」

村人たちはそれぞれにざわめきながらも神父の反応を待っていた。決定権は今彼の所に下っていた。それはグロステール家の墓も教会の管理するものであったし、何よりこの家の執事よりは人望もあったからである。神父はしばし考えた。

「ふむ、それならば神もお許し下さることだろうし、我々としても依存はないよ。必ずその日のうちにその夜の使者が消え去ると言うのならな！ その約束をしてもらおうか」

これに村人たちも同調した。ガロムは村人たちとレーナを何度か交互に見たが、小さく、本当に小さくレーナが頷くを見て、とうとう約束を誓った。村人たちの熱気はそれでひとまずの沈下を見た。ガロムの落胆ぶりはすさまじかった。彼がレーナを連れてとぼとぼと屋敷の玄関から出て、教会に向かって歩いて行くのを村人たちはいくらか先で待ち構えるようにして先導した。これも不思議な行軍だった。そうしてガロムとレーナは、燃え盛る油に導かれるようにして教会の墓地へとやってきた。葬式にしては物々しかった。否、これは一つの処刑だった。

時刻は夜もほど近い夕刻だった。北の端からは夜の国の先遣隊が、今日も侵略の始まりを告げに来ていた。王はやはり玉座に座っていることだろう。そしてこの茶番を見ているかもしれない――何にせよ、夜の間彼に知らないことはないのだ。シュレンゲが捕らわれてから、もう少しで月の満ち欠けは実に一周期を廻り終えてしまいそうになっていた。新月の前の薄い三日月である。蛇女が座り込んだ墓前はその墓地で一番豪華な造りだった。十字架。宿命的な原罪と運命的な贖罪のしるしであり、いつしか聖なるもののシンボルとなったその前で、レーナは長い長い祈りを捧げた。ガロムはずっとおろおろとうろたえていたが、レーナは祈り終わるとすっと立ち上がった。それからガロムの頬へいつもと同じくキスをした。ガロムはそれで力を失くして膝をついた。村人たちはこれ以上の譲歩をするつもりはなかった。レーナが見回してみれば、彼らの視線はガロムを射抜いて彼女へと注がれていたのである。レーナは天を仰いだ。

その時だった。天が一気に闇色に染まったのである。松明を抱えていたにも関わらず、村人たちはシュレンゲを見失った。すぐにシュレンゲのいたところを見れば、そこにはもはや蛇女ではなく単なる大蛇がとぐろを巻いていたのである。

悲鳴、警戒。しかし大蛇は何の興味も持っていないようだった。ただ、首を上げて森の方を見た。その視線の上にいた男たちはみな左右に分かれ、一本の道が出来上がった。大蛇はその道を悠々と這って行った。動けなかった村人たちがやっと自由を取り戻した時には、大蛇は既に森の中へと姿を消してしまっていた。ほら見ろ、やっぱり蛇だったじゃないか！ 座り込んでしまっていたガロムを、村人たちはもう労わる目で見ている。

しかしガロムは見た。ガロムだけは見ていた。天が闇色に染まったのと同じ瞬間に、レーナを目がけて一条の光が降り注いでいたのだ！ それは一瞬だった。そしてその一瞬のうちに、彼は可愛らしくも懐かしいあの微笑みを見た気がしたのである。

村人たちは沼地の際まで大蛇を搜索したが、捕まえることはおろか何の手がかりもつかめなかった。しかしその後、その村では、前触れもなく人が消えるという不審な事件は起こらなかったそうである。

終

世界はいつもここにある

空を 今日も見上げよう
出来たばかりの新しい星が
今夜には輝いているかもしれないじゃないか

(もちろんそれは、遠い昔の話)

もしかしたらその星はもうとっくに消えてなくなっているかもしれない.....

「10月22日」

思い出は
くしゃくしゃにした新聞紙みたい
泣いた日は
滲んでぐちゃぐちゃ

“あたし今日も生きてた ”
なんてタイトルは一度もないけど
或る日を境にして
君のことばかり出てくる

指が触れたとか
名前呼ばれたとか
席が隣になったとか
二人きりで話したとか

10月22日には
“はじめてキスした ”って

もう十年も前の話
ぐちゃぐちゃの新聞紙の話

浜辺にて

言葉って奴は
どうしてこんなに軽いのだ
口に出せばすぐに
消えっちゃうんだ

僕には信じられない
これがただの音の波だって？
だったらなんでただの波が
こんな風に心を揺らせるのだ

美しい景色とか
調和のある調べとか
或いは君を好きだとか
それがただの波だって？

ああ なるほどな
だったら 心は波動的なのだ
心は触覚を持っている
心地よいものに触れたがる

たとえば
美しい景色とか
調和のある調べとか
或いは君を好きだとか
君の胸の熱い鼓動とか

ゆらゆら揺れて
だからこそ
心は波に揺らされる
漂う僕らは心地よい

幹と葉

難しい言葉ばかり溢れている

費用対効果

コギトエルゴスム

ポンドトワール

おっと最後のはパン屋の名前だった

意味も分からないような言葉たちが

やたらとずった音をさせて

そのくせ黙りこくったまま

這っていたかと思えば

突然ジャンプする

大きな木がやたらめったら葉をつけるので

幹の方はもう根も伸ばし切って

どんどんどんどん痩せていく

葉っぱばかりじゃ光を受け取れないよ！

それで僕は

哲学書なんか紐解いたりして

コギトエルゴスムについて考えてみる

なんとか簡単に説明できないものか

それでまたコギトの木には

多すぎるほどの葉が生えて

幹の方が空洞化している

費用対効果が悪すぎるらしい

朝日の放線

お酒を飲み過ぎて

何が何だか分からなくなって

不思議と涙が止まりません

泣き上戸ではなかったはずです

匂いたつ花の咲くように

感受性が箍をなくし
秘めた熱いものに惹かれ
睫毛を濡らしてしまうのです

強い感情歌い上げる歌曲
ショパン 雨だれ
或いは君の手の熱さ
思わず上を向きました

零したくない
何もかも
覚えておきたいのです
何を感じ
何を思い
何があって
何と触れたのか

それが感受性というものでしょう？

朝方君を訪ね
道をゆけば
家々は陰に暗く
しかし後ろからは
朝日の放線が雲を突き抜けていました
これはその時のお話です。

めしいになったら

愛し合っている男と女が
今二人ともめしいになって
絡めるだけだった小指の先を
静かに静かに稜線に這わせる

指先は熱く火の灯り
耐えかねて掌は汗を浮かせた

しまいには肉と骨の熱さ
唇で迎え撃つ血のうねり

窮屈であればあるほど
暗闇であればあるほど
寄せては返す波はざわめき
熱は柔らかく溶けあおうとする

滑らかな山の頂
暗闇で効く目は一組
ひくひくと匂いを嗅ぐ台地
その下で今まさに梅雨を迎えた芳しき青草の湖畔
音もなく騒ぎ出す舌先たち

重力に負けて月は衝突した
地球の海は焼かれながら抱きとめた
めしいたちに間隙はなく
月と地球の引力は強くなるばかり

ああ、今二つの原子は臨界点に達し
亜光速でぶつかって粒子を散らす
揺り籠のなかの実験場は
新発見を希求している

しばらくして男は
カーテンと窓を開け放った
女はびしょ濡れのシーツにくるまって
めしいはもういなくなってしまった
あるのはただ幸福な眠り

めしいたちよ、君たちが肩を寄せて眠る間に幸福の種は育まれる

心を真ん中にして

僕は揺れている

誠実と純粹の狭間
二つは同じじゃない
一つには出来ない

まだ、まだと何度
それでいつかは、なんて
薄い手袋を付けて
大事にはしているよ？

追いかける二つは螺旋
螺旋は交わらない
方法は一つだけ

僕は揺れている
誠実に純粹に
薄い壁のこっち側で
覚悟だけはもう出来ている

木

哲学者達は
脳科学の余りの速さに貧窮して
そこには心がない、と騒ぎ立てた
外にある木々に気付きもせずに

それでその難癖に
脳科学者たちは躍起になって
箱形の機械とにらめっこして
よし見てろ、と意気込んだ

けどもう
木々は知っている
人間ばかりが口うるさく

世界とはこれやいかに、と

人間達が争っている間に
木々はもう世界になっていた

食卓

結婚式に
刃物をもらった
いや、私が頼んだのだ
母にねだって貰ったのだ

さあでは
ありがたく使わせて頂きましょう
これで夫を切るのです

まずは二の腕から
それで胸のあたり
四十を過ぎればはみ出したお腹など
脛だけはとっておきましょうか

それで夫が亡くなったら
いつもより長い箸を持って
子供たちと骨を片づけましょう
息子の嫁にもやらせましょう

それで最後に
ごちそうさま、と言え
骨は土に返して
畑に大根でも植えましょうか

さあこれで主婦はお仕舞い
いつしか台所にも立たれなくなって
息子の嫁にでも頼みましょうか
今度は私が骨になる番ね

息子と嫁の箸によって

夫と同じ土の中へ運ばれたら
久しぶりに食卓でも囲んで
まあ、千枚漬けでもどうぞ

美味しく頂きました。
そうか、美味かったか。
更にこう言って貰えたら幸いです。
お前の料理は美味かったなあ。

夕餉

悔やむことはない
と 涙を流しながら言った父
これで会いに行ける
と ため息のように零した母

それで残された私は
広い仏間
二つの写真の前で
食事をするのが習慣になった

本やら何やら持ってきて
ここで勉強したりもする
問題集を相手にしたり
時には華胥の国に遊んだり

気付けば夕方
夢の絵は忘れ
またここで夕食
お茶を三杯

母子

子どもは
子どもの目をして
きらきらきらきら輝かして
母親に抱かれて嬉しそうだ

母親は
母親の目をして
しっかり子どもを抱きしめて
目を合わせては楽しそうだ

電車で周りの大人たちは
その時だけは大人の目をして
優しく母子を見つめるのだ

土星の海辺

花と砂粒

中庭の管理人は
極端な気候変動に苦しんでいる
小さな可愛い地味な色の花を
大事に大事に育てている

外庭の管理人は
中庭の気候変動を知っている けれど
砂粒だらけの砂漠の輪っかは
ぐるぐる回って出られやしない

ぼくは突如として生まれてきたらしい
この星のどこにもない不思議な色合いの砂粒で
小さな可愛い地味な色の花を
つい食べてみた つい手が伸びる これは美味しいぞ！

それを中庭の管理人に見つかってしまった！

そして追い出されて
大気圏突入
砂粒だらけの砂漠の輪っかに
辿り着く そのときには

ぼくは次第に分解されてしまった
この星のどこにもない不思議な色合いの砂粒は
中庭を飾る輪っかを彩り
外庭を今日も回っている

君の話

ほら見て御覧、あれが土星だよ、
と彼は私に望遠鏡を覗きこませた。

小さな輪っかと小さな飴みたいな惑星が見えた。

へえ、と冷めたような声が出た。

土星をちゃんと見たのは初めてだ。

ガリレオが人類で初めて望遠鏡で土星を見た時には、

彼は静かに話し始めた。

あの輪っかが土星の耳に見えたんだそうだ。

その六十年後には、カッシーニが輪の隙間を見つけている。

二十世紀にはいくつもの惑星間観測機が土星を撮影した。

二機のボイジャーは、……

ふうん、そうなんだ。

望遠鏡から目を離し、広がる無限の空を肉眼で見上げる。

あれだ。あの一際明るい星。あれが土星だ。

地上からでも良く見える。空気の分厚い層を通して。

それよりも遥かに遥かに遠い九天文単位の向こうから。

一番近いときでさえ、太陽よりも九倍遠いのだ。

地球の九倍は大きく、九十倍重く、

しかし水にさえ浮くようなふわふわの星。

それが十時間余りで自転する！

六十四個の惑星を従えて、……

彼の説明は続く。声には出さず反芻する。

言葉を変えながら。表現を変えながら。

彼の説明を一つ一つ咀嚼する。

今ならきっと、布団の中で

口元まで毛布を手繰り寄せて

お話を聞かせて貰う幼子のように

静かに静かに眠りにつけるだろう。

君はずっと話してる。

大きな

本当に大きな船が

いつ出航したとも知れずに

ひたすらに広大な海の上を漂っている

その進みは遅いが確か

船尾からは漠とした暗さが見える

覗きこめば眩暈を伴い

しかし眩暈の中に

何か目映い光も見える

それは懐かしく

それで悲しく

それを思い出せず

それに手を伸ばす

そして

はっと気付いたときには

光は本当に遠くに行ってしまった

涙の一滴が海をまた深くした

.....

ほら、だから涙も海もしょっぱいのよ。

これでおしまい。お話はまた明日ね。

砂粒の花

海を見ていた

ずっと、だと思っ

それより前のことは覚えていない

静かに寄せる波に

つま先を濡らさせながら

いつも太陽は海の向こうに

激しく照りつけて
それが ひどく 悲しくなる
そうしてふと感情が囚われると
とても大切なことを思い出せそうな気がする

何かを
誰かを
待っていたような
そんな
嗚呼、……

海岸には時折船が辿り着く
一人乗りの小さな船から
見上げる程の大きなものまで
そのときばかりは降りてくるひとを
ひとりひとり眺めてしまう

だけど
霞がかったようによく見えない
どの声も違って
また海を見つめ続ける

からからに乾いた柔らかな砂粒は
何かの温かさに似ている それを
やっぱり思いだせないのだけれど
指先でなぞりつける 掌で遊ばせる

こんな輪郭だった、ような
好きだった花は
君の、

はっと顔を上げる
小さな船が近づいている
眩い光に照らされてよくは見えない
だけど

考えるよりも先に走り出した

海のなかへじゃぶじゃぶ入る
もうなんだって構うもんか！

砂粒で描いた花を
ここで 君への
最初の贈り物にしよう。

小品集（3）

<http://p.booklog.jp/book/68871>

著者 : yukumemi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yukumemi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68871>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68871>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ